

福井県埋蔵文化財調査報告 第117集

中角遺跡 4

— II・III区下層編 —

— 九頭竜川等河川改修事業に伴う調査 —

2 0 1 1

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、平成7年度から16年度にかけて実施した、九頭竜川等河川改修事業に伴う、中角遺跡発掘調査の成果のうち、調査Ⅱ・Ⅲ区の下層調査成果をまとめたものです。

中角遺跡は、福井市中角町を中心とした九頭竜川北岸一帯に所在し、奈良・平安時代および中世（上層）と、弥生・古墳時代（下層）の二つの遺構面を持つ遺跡です。この地域では古くから土器などの遺物が採集され、特に同町字多知地籍は、中世城館である「中角館」の跡地とされるなど、その存在は以前から広く知られています。

本書で注目されるのは、総数41基におよぶ大小様々な周溝墓で構成された墓群です。これは集落の中でも高い地位にあった有力者たちの墓域であったと考えられ、前方後方形や円形といった特徴的な形の墓も見つかっています。特に前方後方形、いわゆる前方後方墳は本県を含め、近隣でも数少ない貴重な事例ですが、中角のような平地でこれほど大規模な墓群が見つかった例もまたまれで、その意味でも重要な意義を持つ成果と言えるでしょう。

今後、本書の調査成果が広く公開・活用され、埋蔵文化財に対するご理解と、郷土の歴史に対する興味をより一層深める端緒となれば、誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、地元の方々など多くの皆様方から、あたたかいご支援とご協力を賜りましたことに対して、心より感謝申し上げます。

平成23年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 南 洋 一 郎

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、埋理文）が、国土交通省九頭竜川等河川改修事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所の依頼を受けて、平成7年度から16年度にかけて実施した中角遺跡（福井県福井市中角町字社地・新畑ほか所在）発掘調査報告書のうち、Ⅱ・Ⅲ区下層遺構調査成果をまとめた、「中角遺跡4 - Ⅱ・Ⅲ区下層編 -」である。
- 2 Ⅱ・Ⅲ区下層遺構調査は、文化財調査員 中森敏晴（平成10～16年度、14年度から主査）、同 白川綾（平成10～15年度）、同 野路昌嗣（平成16年度）が担当した（職名はいずれも担当時、以下同様）。出土遺物整理作業は、平成12年4月1日から平成23年3月31日まで、中角遺跡現場事務所整理棟（平成15年9月30日まで）および埋理文において実施した。
- 3 本書の編集は主任 中森があたり、同 富山正明、主査 山本孝一、同 白川、同 田中勝之、文化財調査員 杉山拓己と分担して執筆した。なお、執筆の分担は以下のとおりである。
中森敏晴 第1～4章、第5章第4・5節、第6章第1・2節 白川綾 第6章第3節
杉山拓己 第5章第1節（弥生・古墳時代土器） 山本孝一 第5章第1節（縄文土器）
田中勝之 第5章第2節 富山正明 第5章第3節
- 4 中角遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合には、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 5 遺構全体図は、国際航業株式会社（平成12年度）と中央測量設計株式会社（平成14～16年度）に委託して作成したものを一部改変して使用した。上空からの写真は各航空測量時に撮影したものである。
- 6 第1～3章の各挿図は中森、主査 野路、嘱託職員 水谷圭吾が作成した。遺構および土器・土製品各挿図については、遺構デジタル図化および挿図作成を株式会社アーキジオに、土器・土製品デジタル図化および挿図作成を国際航業株式会社にそれぞれ委託し、各執筆者が編集・再構成した。石器挿図は田中が、玉作り関連遺物およびガラス小玉（上層遺物）挿図は富山が、第6章第3節の挿図は白川と嘱託職員 堀口悟史が作成した。
- 7 検出遺構の写真は中森、白川、野路が撮影し、写真図版は中森が作成した。出土遺物の写真は、土器および馬形土製品（上層遺物）を中森が、石器を田中が、玉作り関連遺物およびガラス小玉（上層遺物）を富山が撮影し、写真図版は土器を中森が、石器を田中が、上層遺物を富山が作成した。
- 8 遺物実測図と写真図版などの遺物番号は符合する。写真の縮尺は不同である。
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第Ⅵ系（日本測地系）に基づく。
- 10 本書の挿図のうち、第1・4図は国土地理院2万5千分1地形図「越前森田」（平成12年6月1日発行）を、第5図は前掲の「越前森田」と「福井」（平成元年6月1日発行）を、それぞれ一部改変して作成した。
- 11 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して埋理文に保管してある。
- 12 発掘調査に際しては、次の方々のご協力を得た（順不同・敬称略）。
中野拓郎、森山佳、岡田幸
- 13 発掘調査ならびに本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご教示を頂いた（五十音順・敬称略）。
楠正勝、笹澤正史、中司照世、久田正弘、藤田英博
- 14 発掘調査には、地元の方々への参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、埋理文の整理作業員があたった。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3章 遺跡の概要	11
第1節 II区の概要	11
第2節 III区の概要	13
第4章 遺構	23
第1節 II区：平成10～12年度調査	23
第2節 II区：平成13～16年度調査	30
第3節 III区	82
第5章 遺物	85
第1節 II区：土器	85
第2節 II区：石器	131
第3節 II区：玉作り関連遺物	139
第4節 III区	145
第5節 II区：上層遺物 -補遺-	148
第6章 まとめ	165
第1節 各調査区のまとめ	165
第2節 弥生・古墳時代の様相	168
第3節 周溝墓の時間的位置および幅	170

写真図版目次

- 図版第1 遺跡 (1) 遺跡遠景 (2) 遺跡遠景
- 図版第2 遺跡 (1) II区-①・②全景
(2) II区-③全景
- 図版第3 遺跡 (1) II区-④全景
(2) II区-⑤全景
- 図版第4 遺跡 (1) II区-⑥全景 (2) III区全景
- 図版第5 遺構 (II区 平成10~12年度)
(1) 建物1 (2) 建物2
(3) 井戸1
(4) 井戸1 板出土状況
(5) 方形区画
- 図版第6 遺構 (II区 平成10~12年度)
(1) 住居1・2 (2) 住居3
- 図版第7 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 1 (2) S X 2
(3) S X 3
- 図版第8 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 4 (2) S X 5
(3) S X 6
(4) S X 6 土器出土状況
(5) S X 7
(6) 土坑175土器出土状況
- 図版第9 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 8
(2) S X 6・8土器出土状況
(3) S X 8土器出土状況
(4) S X 9 (5) S X 11
(6) S X 13土器出土状況
- 図版第10 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 12 (2) S X 12出土土器
(3) S X 14
(4) S X 14土器出土状況
(5) S X 15 (6) S X 15出土土器
- 図版第11 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 16 (2) S X 17
(3) 土坑125土器出土状況
(4) S X 16土器出土状況
(5) S X 16出土土器
- 図版第12 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 16出土土器
(2) S X 16土器出土状況
(3) S X 16出土土器
(4) S X 19 (5) S X 18
- 図版第13 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 20
(2) S X 20土器出土状況
(3) S X 20出土土器
(4) 土坑126土器出土状況
(5) S X 21 (6) S X 22出土土器
(7) S X 22
- 図版第14 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 23
(2) S X 23土器出土状況
(3) S X 23土器出土状況
(4) 溝100出土土器
(5) 溝100土器出土状況
(6) 溝100土器出土状況
(7) 溝100出土土器
- 図版第15 遺構 (II区 平成13~16年度)
(1) S X 24
(2) S X 24土器出土状況
(3) S X 24出土土器
(4) S X 24土器出土状況
(5) S X 24出土土器
(6) S X 24土器出土状況
(7) S X 24出土土器
(8) S X 25 (9) S X 26

- 図版第16 遺構（Ⅱ区 平成13～16年度）
 (1) S X 27 (2) S X 28
 (3) S X 29
 (4) S X 29 土器出土状況
 (5) S X 32
 (6) S X 29 出土土器
 (7) S X 32 土器出土状況
 (8) S X 32 出土土器
- 図版第17 遺構（Ⅱ区 平成13～16年度）
 (1) S X 30 (2) S X 31
 (3) S X 34 (4) S X 33
 (5) S X 33 土器出土状況
 (6) S X 33 土器出土状況・出土土器
- 図版第18 遺構（Ⅱ区 平成13～16年度）
 (1) S X 35
 (2) S X 38・土坑151
 (3) 土坑174 (4) S X 36
 (5) S X 36 土器出土状況・出土土器
- 図版第19 遺構（Ⅱ区 平成13～16年度）
 (1) S X 37
 (2) S X 40・溝133
 (3) S X 39 (4) S X 41
- 図版第20 遺構（Ⅱ区 平成13～16年度）
 (1) 建物4 (2) 建物5
 (3) 建物6 (4) 建物7
 (5) 建物8 (6) 土坑162
- 図版第21 遺構（Ⅲ区）
 (1) 住居1 (2) Ⅲ区完掘状況
- 図版第22 遺物（Ⅱ区 土器）
 (1) 住居1・2出土土器
 (2) S X 1・6・8・9出土土器
- 図版第23 遺物（Ⅱ区 土器）
 S X 11～15・22出土土器
- 図版第24 遺物（Ⅱ区 土器） S X 16出土土器
- 図版第25 遺物（Ⅱ区 土器）
 S X 20・23・24・38（土坑151）
 出土土器
- 図版第26 遺物（Ⅱ区 土器）
 S X 29・32・33・35・36出土土器
- 図版第27 遺物（Ⅱ区 土器） 溝100出土土器
- 図版第28 遺物（Ⅱ区 土器）
 溝・土坑・ピット出土土器
- 図版第29 遺物（Ⅱ区 土器） 包含層出土土器
- 図版第30 遺物（Ⅱ区 土器） 包含層出土土器
- 図版第31 遺物（Ⅱ区 土器） 包含層出土土器
- 図版第32 遺物（Ⅱ・Ⅲ区 土器）
 (1) Ⅱ区出土縄文土器
 (2) Ⅲ区出土土器
- 図版第33 遺物 石器
- 図版第34 遺物 石器
- 図版第35 遺物 石器
- 図版第36 遺物 石器
- 図版第37 遺物 玉作り関連遺物
 (1) 翡翠原石・緑色凝灰岩石核
 (2) 管玉未製品（荒削品・形削品）
 (3) 管玉未製品（角柱状品）
 (4) 管玉・管玉未製品（穿孔中品）
 (5) 包含層出土白玉 (6) 勾玉
 (7) 土坑139出土玉類
 (8) 玉製作工具（施溝具・石製穿孔具）
- 図版第38 遺物 上層遺物
 (1) ガラス小玉 (2) 馬形土製品

挿 図 目 次

第1図 中角遺跡位置図・試掘実施箇所図 …… 1	第33図 S X 19 実測図 …… 47
第2図 調査Ⅱ・Ⅲ区区割図 …… 3	第34図 S X 20・土坑 126 実測図 …… 48
第3図 調査風景 …… 6	第35図 土坑 130 実測図 …… 49
第4図 中角遺跡周辺地形図 …… 7	第36図 S X 21 実測図 …… 50
第5図 中角遺跡と周辺の 弥生・古墳時代遺跡分布図 …… 9	第37図 S X 22 実測図 …… 51
第6図 調査Ⅱ区土層柱状模式図 …… 12	第38図 S X 23 実測図 …… 52
第7図 調査Ⅱ・Ⅲ区下層遺構全体図 …… 15・16	第39図 S X 23・溝 100 実測図 …… 53
第8図 調査Ⅲ区下層遺構図 …… 17	第40図 土坑 111・112 実測図 …… 54
第9図 調査Ⅱ区下層遺構図 (1) 平成 10～12 年度 …… 18	第41図 S X 24 実測図(1) …… 55
第10図 調査Ⅱ区下層遺構図 (2) 平成 13・14 年度 …… 19・20	第42図 S X 24 実測図(2) …… 56
第11図 調査Ⅱ区下層遺構図 (3) 平成 15・16 年度 …… 21・22	第43図 S X 25・26 実測図 …… 57
第12図 建物 1～3 実測図 …… 24	第44図 S X 27・28・土坑 177 実測図 …… 58
第13図 住居 1・2 実測図 …… 25	第45図 S X 29 実測図 …… 60
第14図 住居 3 実測図 …… 26	第46図 S X 30 実測図 …… 61
第15図 井戸 1・2 実測図 …… 28	第47図 S X 31 実測図 …… 62
第16図 方形区画実測図 …… 29	第48図 土坑 144・S X 32 実測図 …… 63
第17図 S X 1 実測図 …… 31	第49図 S X 32・33 実測図 …… 64
第18図 S X 2・4・5 実測図 …… 32	第50図 S X 34 実測図 …… 65
第19図 S X 3 実測図 …… 33	第51図 S X 35・38 実測図(1) …… 66
第20図 S X 6 実測図 …… 34	第52図 S X 35・38 実測図(2) …… 67
第21図 S X 7・土坑 172・175 実測図 …… 35	第53図 土坑 174 実測図 …… 68
第22図 S X 8 実測図 …… 36	第54図 S X 36 実測図 …… 69
第23図 S X 9 実測図 …… 37	第55図 S X 37 実測図 …… 70
第24図 S X 10・11 実測図 …… 38	第56図 土坑 148・163・167 実測図 …… 71
第25図 S X 12 実測図(1) …… 39	第57図 S X 40・溝 133 実測図 …… 72
第26図 S X 12 実測図(2) …… 40	第58図 S X 39・41 実測図 …… 73
第27図 S X 13・14 実測図 …… 41	第59図 建物 4・5 実測図 …… 77
第28図 S X 15 実測図(1) …… 42	第60図 建物 6・7 実測図 …… 78
第29図 S X 15 実測図(2) …… 43	第61図 建物 8 実測図 …… 79
第30図 S X 16・17・土坑 125 実測図(1) …… 44	第62図 土坑 162・154 実測図 …… 80
第31図 S X 16・17・土坑 125 実測図(2) …… 45	第63図 土坑 157・173 実測図 …… 81
第32図 S X 18 実測図 …… 46	第64図 住居 1・溝 1・2・ 土坑 8・10 実測図 …… 83
	第65図 S X 1 出土土器実測図 …… 86
	第66図 S X 3 出土土器実測図 …… 87
	第67図 S X 4・6 出土土器実測図 …… 88

第68図	S X 8・9・11~15 出土土器実測図	89	第89図	包含層出土土器実測図(10)	112
第69図	S X 16・18~20 出土土器実測図	90	第90図	包含層出土土器実測図(11)	113
第70図	S X 22・23 出土土器実測図	91	第91図	包含層出土土器実測図(12)	114
第71図	S X 24・29・ 32~35 出土土器実測図	92	第92図	石器実測図(1)	132
第72図	S X 36・38・41 出土土器実測図	93	第93図	石器実測図(2)	133
第73図	住居 1・2 出土土器実測図	94	第94図	石器実測図(3)	134
第74図	溝 100 出土土器実測図	95	第95図	石器実測図(4)	135
第75図	溝 71・87・111 出土土器実測図	96	第96図	石器実測図(5)	136
第76図	土坑 24・34・38・45・64・ 72・73・175 出土土器実測図	97	第97図	玉作り関連遺物実測図(1)	141
第77図	土坑 93・100・113・114・125・ 126・175・177 出土土器実測図	98	第98図	玉作り関連遺物実測図(2)	142
第78図	p172・201・204・206・213・272・ 324・459・484 出土土器実測図	99	第99図	Ⅲ区出土土器実測図	146
第79図	p483 出土土器実測図	100	第100図	上層遺物実測図(1)	149
第80図	包含層出土土器実測図(1)	102	第101図	上層遺物実測図(2)	150
第81図	包含層出土土器実測図(2)	103	第102図	上層遺物実測図(3)	151
第82図	包含層出土土器実測図(3)	105	第103図	上層遺物実測図(4)	152
第83図	包含層出土土器実測図(4)	106	第104図	上層遺物実測図(5)	153
第84図	包含層出土土器実測図(5)	107	第105図	上層遺物実測図(6)	154
第85図	包含層出土土器実測図(6)	108	第106図	周溝墓の相対的時間位置模式図	171
第86図	包含層出土土器実測図(7)	109	第107図	主要周溝墓変遷図(1)	172
第87図	包含層出土土器実測図(8)	110	第108図	主要周溝墓変遷図(2)	173
第88図	包含層出土土器実測図(9)	111	第109図	周溝内遺物出土位置図	174
			第110図	周溝内遺物 出土位置別個体数グラフ	175
			付 図	中角遺跡下層遺構全体図	巻末

表 目 次

第1表	掘立柱建物一覧表(1)	24
第2表	井戸一覧表	28
第3表	周溝墓一覧表	74
第4表	土坑一覧表(1)	76
第5表	掘立柱建物一覧表(2)	79
第6表	土坑一覧表(2)	81
第7表	Ⅲ区遺構一覧表	84
第8表	Ⅱ区出土土器観察表	117
第9表	石器組成表	131
第10表	石器観察表	137
第11表	管玉関連遺物計測表	143
第12表	勾玉計測表	144
第13表	白玉・小玉計測表	144
第14表	Ⅲ区出土土器観察表	147
第15表	Ⅱ区出土土層土器・土製品観察表	155
第16表	Ⅱ区出土ガラス玉計測表	164

第1章 調査の経緯

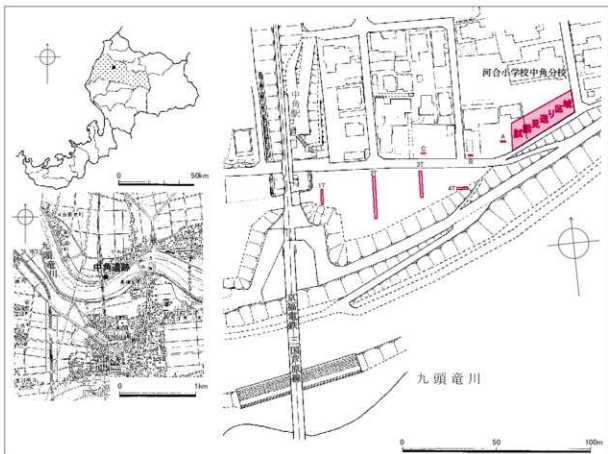
第1節 調査に至る経緯 [図版第1、第1図]

福井県最大の河川である九頭竜川は、福井平野のほぼ中央、福井市北部を西へ流れ、支流の日野川を合わせて北西へ向かい、坂井市三国町で日本海に注ぐ。その福井市から三国町までを結ぶ京福電鉄（現、えちぜん鉄道）三国芦原線の九頭竜川橋梁付近は、川が曲流している上、川幅が極端に狭くなっており、九頭竜川治水事業における最大の難所とされてきた。

昭和54年、建設省近畿地方建設局福井工事事務所（現、国土交通省近畿地方整備局福井河川国道事務所。以下、福井工事事務所）は、九頭竜川等河川改修事業の一環として、洪水時における九頭竜川および日野川の水位低下を図るとともに、福井市街地の河川水位を低下させ、治水安全度を向上させるために、九頭竜川の河道拡幅を実施する引堤工事を計画した。河道拡幅は京福電鉄九頭竜川橋梁改築（昭和57～63年度に実施）ともあわせて、北岸側に約20,160㎡の用地を取得した上で、延長約640mにわたって、堤防を堤内地側に引いて新築することとなった。

一方、事業予定地となった福井市中角町一帯では、土器などの遺物の散布が古くから知られ、特に字多知地籍は中世城館「中角館」の跡地に比定されるなど、遺跡の存在はすでに周知されていた。

以上のような経緯を経て、平成4年（1992）8月26日、福井工事事務所は事業予定地の一部について、埋蔵文化財試掘調査を福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文）に依頼、同年8月31日から9月1日にかけて試掘調査が実施された（第1図）。



第1図 中角遺跡位置図（左上：縮尺1/250,000 左下：縮尺1/50,000）・試掘実施箇所図（右：縮尺1/2,000）

調査の結果、第1～4トレンチとCグリッドでは、現地表50～100cm下に存在する茶褐色土層（上層）と、100～150cm下に存在する黒褐色土層（下層）を確認した。これら2層は上層が中世（南北朝期）遺物を、下層が弥生・古墳時代遺物をそれぞれ包含し、遺構も遺物同様、層位を異にして検出された。

また、A・Bグリッドでは、現地表40～80cm下に後世の埋め戻しと見られる玉石の堆積を、その80～110cm下に中世および弥生・古墳時代の遺物が混在する黒褐色土層をそれぞれ確認した。玉石の埋め戻し層は、かつて周辺が低湿地であった事実を示すとともに、当地が中角館跡比定地の外縁部にも近いことから、館の環濠跡に相当する可能性も想定された。

結論として、本遺跡は2時期の異なる層位を有する複合遺跡であり、その範囲は事業区域全域におよび、遺存状況はきわめて良好、出土遺物も多量という、非常に濃密な内容であることが判明した。

以上の調査結果に基づき、工事実施前には記録保存のための本格的調査が必要となる旨を福井工事事務所に回答したが、この時点では調査対応について具体的な協議はされなかった。ただ、すでに事業は開始されて久しく、さらに事業には堤防上を走る市道の改修、具体的には三国芦原線の踏切を廃して、市道を線路の高架下に通す立体交差化事業も含まれていたため、事業進捗を求める地元の声は日々高まりつつあった。その後、平成6年（1994）に入ると、福井工事事務所は調査対応を県理文に要請、福井県教育庁文化課を加えた三者で協議の結果、九頭竜川等河川改修事業の一環として当時実施中であった、菅谷烏帽子遺跡発掘調査を平成6年度末でいったん中止し、平成7年度より中角遺跡・中角館跡発掘調査へ調査体制を振り替えることで合意に達した。

なお、工事計画区域の一部が、中角館跡比定地にきわめて近接していたため、本発掘調査事業における遺跡名は「中角遺跡・中角館跡」とされた。しかし、結果として、館本体もしくはそれに関連すると断定し得る遺構や遺物は検出されなかったため、本書での遺跡名は「中角遺跡」のみとした。

第2節 調査の経過 [図版第2～4、第2・3図]

1 全体の経過

中角遺跡発掘調査は、平成7年（1995）5月23日より開始し、平成16年（2004）12月8日に終了した。調査区の総延べ面積は21,148 m²（10,574 m²×上下2面）を測る。調査区は京福電鉄三国芦原線を挟んで、上流側（東方）の調査区をⅠ区、下流側（西方）の調査区をⅡ区とし、Ⅱ区のさらに下流側の送電線鉄塔移設予定地をⅢ区とした。Ⅰ～Ⅲ区の各延べ面積および調査期間は以下のとおりである。

Ⅰ区 5,380m²（2,690m²×上下2面）：平成7年5月23日～平成11年3月12日

Ⅱ区 15,480m²（7,740m²×上下2面）：平成8年7月15日～平成16年11月26日

Ⅲ区 288m²（144m²×上下2面）：平成16年8月18日～12月8日

当初はⅠ区調査完了後にⅡ区調査へ移行する予定であったが、Ⅰ区には住宅地・市道・学校敷地などが含まれ、それらの立ち退き完了時期が区割ごとに異なっていたため、断続的な調査対応を余儀なくされた。一方、Ⅱ区はその大半がすでに立ち退き済みの工場跡地で、即時かつ連続的調査が可能であったことから、事業全体として進捗を図るために、Ⅰ区で時期を待ちながら各個調査をおこないつつ、Ⅱ区でも併行して調査に着手することにした。

その後、平成11年（1999）には吉田郡永平寺町鳴鹿大堰建設に関わる、東古市地区暫定盛土工事に伴う東古市縄手遺跡発掘調査に対応するため、同年6月23日から11月1日まで調査を一時中断した。また、平成16年（2004）に着手したⅢ区は非常に小規模であったため、Ⅱ区と併行して調査を進めた。

以上、途中4ヶ月弱の中断を挟んだものの、本調査は開始から終了まで9年5ヶ月にわたる長期かつ大規模なものとなった。その成果も膨大であるため、調査報告書の構成は、Ⅰ区とⅡ・Ⅲ区の調査区別で二分し、各々を上・下層でさらに二分する、計4分冊構成とした。

報告書名と内容は以下のとおりである。

1. 中角遺跡1 - Ⅰ区上層編 - (福井県埋蔵文化財調査報告 第100集、平成19年度刊行)
2. 中角遺跡2 - Ⅰ区下層編 - (福井県埋蔵文化財調査報告 第105集、平成20年度刊行)
3. 中角遺跡3 - Ⅱ・Ⅲ区上層編 - (福井県埋蔵文化財調査報告 第110集、平成21年度刊行)
4. 中角遺跡4 - Ⅱ・Ⅲ区下層編 -

本書は、Ⅱ・Ⅲ区下層調査成果をまとめた「中角遺跡4 - Ⅱ・Ⅲ区下層編-」であり、中角遺跡調査報告は本書をもって完了する。

2 Ⅱ・Ⅲ区下層調査の経過

Ⅱ区の区割とⅢ区の各面積、および下層調査期間は以下のとおりである⁽¹⁾ (第2図)。

Ⅱ区 ① 1,500㎡ : 平成11年3月17日～平成12年7月27日

② 600㎡ : 同上

③ 3,000㎡ : 平成13年7月30日～平成14年9月12日

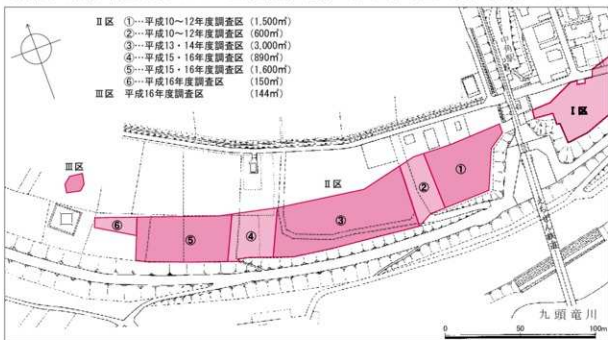
④ 890㎡ : 平成15年10月20日～平成16年4月13日

⑤ 1,600㎡ : 平成16年2月20日～8月9日

⑥ 150㎡ : 平成16年8月10日～11月26日

Ⅲ区 144㎡ : 平成16年8月26日～12月8日

グリッド割りは一辺を5mとし、南北にアルファベット(Ⅱ区:Y～Z・A～O、Ⅲ区:S～V)、東西にアラビア数字(36～93)を付してグリッド名とした。なお、事業予定地はⅡ区-⑥の南西側をはじめ、西側(下流側)にも相当の面積を残していたが、過去の試掘調査・現地調査の実績や周辺地形などを勘案した結果、調査を要するほどの埋蔵文化財は遺存せず、以後の調査は不要と判断した⁽²⁾。



第2図 調査Ⅱ・Ⅲ区区分図(縮尺1/2,500)

以下、Ⅱ・Ⅲ区下層調査の調査日誌を抄録する。

Ⅱ区

①・② (平成10～12年度)

平成11年

- 3月17日 調査開始。測量杭打ち。
 3月24日 包含層掘削開始。
 6月23日 東古市縄手遺跡発掘調査のため、調査中断
 (～11月1日)。
 11月2日 調査再開。草刈り・清掃。
 11月9日 遺構清查開始。
 11月17日 遺構掘削開始。
 12月16日 冬期休止。

平成12年

- 2月21日 調査再開。
 2月25日 A～C85～87区、方形区画掘削。

平成12年

- 3月2日 F92区、井戸1検出・掘削。
 4月20日 井戸1底部に木板6枚検出。
 5月11日 環状周溝を伴う遺構(住居1・2)検出。
 6月5日 井戸1木板出土状況写真撮影。平面図作成・取り上げ。
 6月6日 井戸1完掘状況写真撮影。
 6月23日 市立河合小学校児童遺跡見学。
 7月10～13日 調査区清掃。
 7月21日 空中測量。
 7月24日 掘立柱建物写真撮影。
 7月27日 全景写真撮影。調査終了。

③ (平成13・14年度)

平成13年

- 7月30日 調査開始。包含層掘削開始。
 10月11日 包含層掘削と併行し、遺構精査・掘削開始。
 10月23日 SX7掘削開始。
 10月31日 SX6掘削開始。
 12月12日 冬期休止。

平成14年

- 3月1日 調査再開
 3月4日 SX12・18掘削開始。
 3月8日 SX16・17掘削開始。
 4月24日 SX1～7遺物取り上げ。
 SX6供献土器実測。
 4月26日 SX8～10掘削開始。
 5月13日 SX8周溝内土器写真撮影。
 5月15日 SX6写真撮影。
 6月12日 SX12周溝内土器写真撮影・実測・取り上げ。
 6月19日 SX20・21掘削開始。
 7月8日 SX13周溝内土器写真撮影。

平成14年

- 7月12日 SX1完掘。SX15～19遺物取り上げ。
 7月19日 SX16周溝内土器実測。
 7月24日 SX16完掘。
 7月26日 SX20完掘。
 8月1日 SX4・5・7写真撮影。
 8月2日 SX3写真撮影。
 8月8日 空撮。全景・SX1・8・9・12・18・19
 写真撮影。
 8月9日 SX2・14・16・17・20・22～24写真撮影。
 8月19日 SX14・17写真撮影。
 8月20日 SX1・3墳丘部裁ち割り。
 9月1日 現地説明会開催。
 9月3日 SX26・28写真撮影。
 9月4日 SX27写真撮影。
 9月5日 SX23墳丘部裁ち割り。
 9月11日 SX22墳丘部裁ち割り。
 9月12日 SX16・24墳丘部裁ち割り。下層調査終了。

④（平成15・16年度）

平成15年

- 10月20日 調査開始。包含層掘削開始。
- 10月24日 遺構掘削開始。
- 10月27日 S X29・30掘削開始。
- 11月5日 S X29供献土器写真撮影。
- 11月6日 S X29供献土器取り上げ。
- 12月1日 S X20・29完掘。

平成16年

- 2月19日 S X20供献土器写真撮影。
- 3月23日 遺構完掘。
- 4月5日 調査区清掃。
- 4月6日 遺物取り上げ。
- 4月7日 空撮。全景・個別写真撮影。
- 4月13日 補足測量完了。調査終了。

⑤（平成15・16年度）

平成16年

- 2月20日 包含層掘削開始。
- 4月15日 S X35～37掘削開始。
- 4月21日 S X38掘削開始。
- 5月14日 S X39・40、建物6～8、溝133掘削開始。
- 5月24日 S X41検出。
- 6月29日 建物7・8写真撮影。
- 7月1日 建物4～6・土坑162写真撮影。

平成16年

- 7月19日 福井豪雨発生。県理文本部施設被災に伴う復旧作業のため調査中断（～25日）。
- 7月26日 調査区清掃（～翌月3日）。
- 8月4日 空撮。
- 8月6日 S X36～39写真撮影。
- 8月9日 S X35・40・41写真撮影。調査終了。
- 9月19日 現地説明会開催。88名来踏。

⑥（平成16年度）

平成16年

- 8月12日 包含層掘削開始。
- 9月1日 遺構精査開始。
- 9月6日 遺構掘削開始。
- 11月5日 遺構完掘。
- 11月8日 平板測量。

平成16年

- 11月9日 全景写真撮影。
- 11月10日 S X41写真撮影。鉄塔東側トレンチ東壁セクション作図・写真撮影。
- 11月26日 器材撤収。調査終了。

Ⅲ区（平成16年度）

平成16年

- 8月26日 包含層掘削開始。
- 9月6日 遺構精査開始。
- 9月21日 住居1掘削開始。
- 10月27日 遺構完掘。平板測量開始。
- 10月28日 全景・住居1写真撮影。
- 11月1日 住居1貼床掘削開始。

平成16年

- 11月8日 遺構再精査。見直し。
- 11月11日 平板測量。層序図作図。
- 11月17日 全景写真撮影。埋め戻し開始。
- 11月25日 埋め戻し終了。
- 11月26日 器材撤収。
- 12月8日 埋め戻し修正。調査終了。

註

- Ⅱ区-①・②については、上層調査は1区調査日程との兼ね合いで個別に実施したが、下層調査は同時に実施した。したがって、下層調査時に①・②という区別は実質機能していないが、上層調査と対照できるよう、そのまま使用した。また、Ⅱ区-⑥の西端部で包含層の堆積状況を観察するために入れた、任意のトレンチ（第7・11図）は、区割図には反映させなかった。
- 調査不要と結論付けた根拠には、まず遺構がほとんど分布していないこと、事業予定地の自然地形が九頭竜川に向かって急激に下降する斜面になっており、包含層の莫大な土量に反して、遺物の含まれる割合が非常に少ないこと、などが挙げられる。なお、調査区の自然地形については、第3章でも詳述しているので、あわせて参照されたい。

参考文献

九頭竜川流域誌編集委員会 編 2000 『九頭竜川流域誌 水との闘い そして共生』 九頭竜川水系治水百周年記念事業実行委員会



第3図 調査風景 上：遺物取り上げ（左：Ⅱ区-② 右：Ⅱ区-③）
 中左：遺構掘削状況（Ⅱ区-④） 中右：福井豪雨による調査区水没状況（Ⅱ区-④・⑤）
 下：現地説明会（左：Ⅱ区-③） 右：Ⅱ区-④・⑤

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

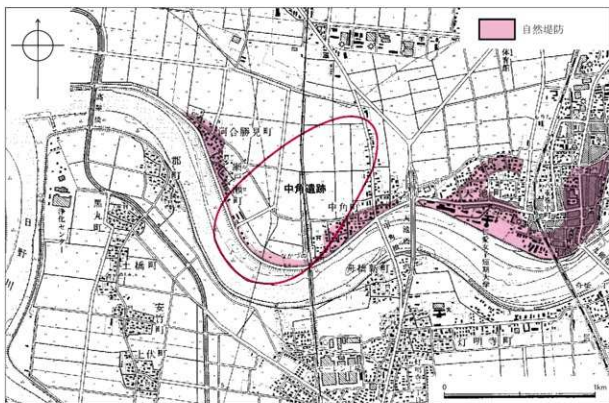
第1節 地理的環境 [図版第1-(2)、第4図]

福井県は古代の越前・若狭両国から構成され、本州日本海沿岸のほぼ中央近く、本州が西から次第に北東へ折れ曲がる付近に位置する。現在では敦賀市の東方、木ノ芽山嶺を境に以北を嶺北、以南を嶺南と呼び、行政的にも大別される。嶺北地方は越前国から現在の敦賀市を除いた範囲にはほぼ相当し、嶺南地方は古代の若狭国に現在の敦賀市を合わせた範囲に相当する。

嶺北地方に広大な水系を展開する九頭竜川と、その支流の中でも特に長大な日野川ならびに足羽川による相乗的な沖積作用で形成されたのが福井平野である。この平野をほぼ東西に横断する九頭竜川を境に、北部地域は特に坂井平野とも呼ばれ、その坂井平野の南端部、九頭竜川と日野川の合流域付近の九頭竜川北岸一帯には、かつて禁裏御領（皇室の荘園）として開発・経営された河合庄が存在したとされる。この「河合」の名は現在でも地区名として地元に残り強く根付いており、中角遺跡の所在する福井市中角町はその河合地区南端部に位置している。

中角は九頭竜川の渡船場として古くから知られた地で、交通の要衝であった。また、九頭竜川と日野川の合流点に近く、江戸時代には「米河戸」とも呼ばれ、年貢米の積み出しがおこなわれるなど、近代に入って陸運手段が急速に発達するまでは、陸路と水路の両利を得た通運拠点として活用されていた。

現在の中角集落は、主に九頭竜川北岸に展開する広大な自然堤防（第4図朱網掛部）上に立地している。中角遺跡の推定範囲は総面積は70万㎡あまりにおよぶ（同図朱網掛内）が、今回の調査によって、中角集落をはじめとする、周辺の自然堤防にもその範囲が拡大する可能性を指摘できる⁽¹⁾。



第4図 中角遺跡周辺地形図 (縮尺1/25,000)

第2節 歴史的環境〔第5図〕

本節では中角遺跡周辺域の主要な弥生・古墳時代遺跡のうち、特に近年の主要な調査事例を記す。

法土寺遺跡（第5図5） 福井市江上町字法土寺・字漆谷に所在する。国道416号改良工事に伴い、平成6～11年度にかけて県理工文が発掘調査を実施し、弥生時代後期および古墳時代中・後期の墳墓・古墳群を確認した。墳墓・古墳は総数36基を数え、うち後期古墳19基のほとんどが横穴式石室を内蔵する。また、中期古墳である22号墳には頸甲・肩甲が副葬されるなど、群内でも突出した内容を誇る。

漆谷遺跡（第5図6） 福井市江上町字漆谷に所在する。国道416号改良工事に伴い、平成5年度に県理工文が発掘調査を実施し、後期古墳を主体とする古墳群と中・近世墓群を確認した。古墳は総数5基を検出し、うち1～4号墳が横穴式石室を内蔵する後期古墳で、いずれも副葬品を伴う。中でも1号墳からは馬具・装身具・工具類・須恵器など、質・量とも他を圧倒する豊富な副葬品が出土した。墓の規模や出土遺物の時期・内容、石室の形態などから推測して、古墳群は1号墓を盟主墓とした支群であり、北部九州の影響を強く受けて造営されたものと判断される。

石盛遺跡（第5図15） 福井市石盛町に所在する。森田北東部土地区画整理事業に伴い、福井市文化財保護センターが平成14・15・18・19・21年度に発掘調査を実施した。弥生・古墳時代の遺構として、平成15年度に古墳時代中期の竪穴住居跡や掘立柱建物など、さらにその下層部から洪水の流砂で埋没したと見られる弥生時代の区画溝を検出した。

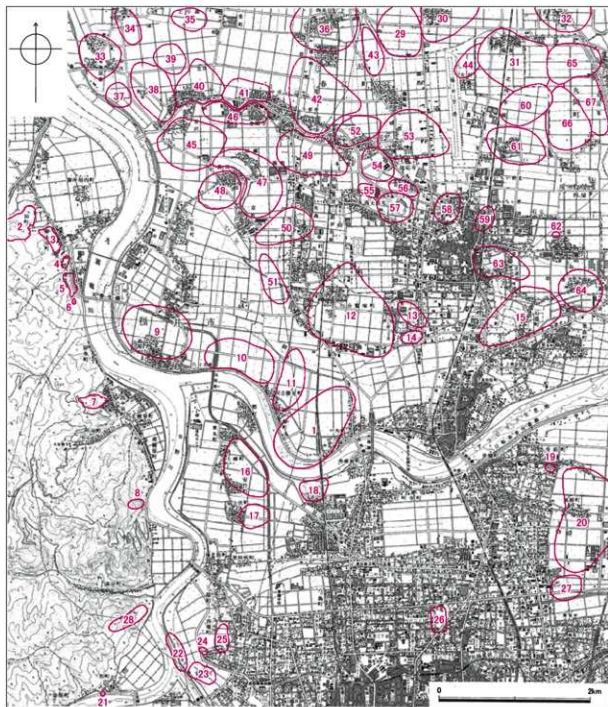
高柳遺跡（第5図20） 福井市高柳町に所在する。縄文時代晩期から近・現代にわたる複合遺跡で、市場周辺土地区画整理事業に伴い、福井市文化財保護センターが平成10年度以降、30余次にわたって発掘調査を実施している。弥生・古墳時代の遺構として、方形周溝墓・四隅突出型墳墓や掘立柱建物などのほか、治水工事跡と見られる柵列や盛土の跡も検出されている。

下市古墳（第5図21） 福井市下市町に所在する。県道殿下福井線道路改良工事に伴い、平成19年度に県理工文が発掘調査を実施し、周溝を伴う円墳の一部を確認した。墳丘の規模は直径128m、周溝の外周直径は156mを測り、古墳時代後期の築造と推測される。

菅谷烏帽子遺跡（第5図22） 福井市菅谷町字烏帽子に所在する。九頭竜川等河川改修事業に伴い、平成5・6・17・18年度に県理工文が発掘調査を実施し、弥生時代および奈良・平安時代の集落跡を確認した。弥生時代の遺構としては、土坑墓3基のほか、溝や土坑・ピットなどを検出した。出土遺物の内容から、弥生時代中期を主体とする集落跡と判断されるが、居住遺構や方形周溝墓が確認されず、土坑墓が散発的に検出された状況などから、調査区は集落の外縁部に相当するものと推測される。

若宮遺跡（第5図32） 坂井市坂井町若宮に所在する。国営九頭竜川下流土地改良事業に伴い、平成18・19年度に県理工文が調査を実施し、縄文時代から室町時代にわたる複合遺跡を確認した。弥生時代の遺構には、中期の方形周溝墓1基、後期の平地式住居5棟などがあり、出土遺物は後期に属するものが大半を占める。また、古墳時代の自然河川からは廃棄されたと見られる土器が多く出土した。

東太郎丸遺跡（第5図57） 坂井市春江町東太郎丸字東古屋敷に所在する。福井県児童科学館建設事業に伴い、平成7年度に県理工文が発掘調査を実施し、古墳時代から近世にわたる集落跡を確認した。古墳時代の遺構は溝2条や土坑4基、ピット・土器だまりなどで、建物もしくはそれに類する遺構は検出されなかった。出土遺物の時期幅は古墳時代初頭から前期の間におさまる。古墳時代遺構の全体に占める割合が非常に低く、分布にも偏りが見られることから、古墳時代集落の中心は調査区外の北東方向に存在するものと推定されている^[2]。



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-------------|------------|
| 1 中角遺跡 | 17 土伏遺跡 | 33 正舟遺跡 | 49 松木遺跡 | 65 舟吉福島通遺跡 |
| 2 仙古墳群 | 18 舟橋新遺跡 | 34 砥玉遺跡 | 50 平柳遺跡 | 66 舟吉遺跡 |
| 3 銅大谷古墳群 | 19 高柳中代遺跡 | 35 上小森遺跡 | 51 針原阪塩遺跡 | 67 舟吉正琳遺跡 |
| 4 大安寺古墳 | 20 高柳遺跡 | 36 西長田遺跡 | 52 本堂遺跡 | |
| 5 法上寺遺跡 | 21 下市古墳 | 37 取次遺跡 | 53 江留中遺跡 | |
| 6 藤谷遺跡 | 22 菅谷鳥帽子遺跡 | 38 石塚阪取遺跡 | 54 江留中號行遺跡 | |
| 7 四十谷古墳群 | 23 菅谷西野遺跡 | 39 石塚坪坑遺跡 | 55 西太郎丸遺跡 | |
| 8 深谷古墳 | 24 三郎丸遺跡 | 40 石塚遺跡 | 56 隨心寺遺跡 | |
| 9 高原遺跡 | 25 西堀遺跡 | 41 中庄遺跡 | 57 東太郎丸遺跡 | |
| 10 六日市遺跡 | 26 大宮遺跡 | 42 千歩寺遺跡 | 58 江留下遺跡 | |
| 11 河合勝見遺跡 | 27 開免遺跡 | 43 藤原塚大道遺跡 | 59 為国遺跡 | |
| 12 鷺塚遺跡 | 28 深谷古墳群 | 44 大跡遺跡 | 60 神布日遺跡 | |
| 13 つくし野遺跡 | 29 東長田島木遺跡 | 45 安代遺跡 | 61 神布日遺跡 | |
| 14 天池遺跡 | 30 東長田遺跡 | 46 金剛寺遺跡 | 62 中橋高場遺跡 | |
| 15 石塚遺跡 | 31 福島遺跡 | 47 田畑遺跡 | 63 正蓮花北条路遺跡 | |
| 16 土橋遺跡 | 32 若宮遺跡 | 48 高江遺跡 | 64 寄安遺跡 | |

第5図 中角遺跡と周辺の弥生・古墳時代遺跡分布図(縮尺1/50,000)

江留下遺跡（境元町地区）（第5図58） 坂井市春江町境に所在する。磯部川改修工事に伴い、平成6年度に埋文が調査を実施し、古墳時代と鎌倉・室町時代を主とする集落跡であることを確認した。古墳時代の遺構として、一辺約18mを測る方墳1基を検出している。埋葬施設や盛土は後世の削平により消失していたが、幅1.0～1.2m、深さ1.0～1.5mほどの周溝が残存し、周溝底からは少量ながら古墳時代前期に属する土師器片が出土した。また、古墳を含めた当時の集落が旧磯部川の自然堤防上、もしくは微高地上に存在していた可能性が指摘されている。

舟寄福島遺跡（第5図65） 坂井市丸岡町舟寄に所在する。国営九頭竜川下流土地改良事業に伴い、平成17・18年度に埋文が調査を実施し、縄文時代晩期・弥生時代中期（下層）と弥生時代後期・古墳時代前期（上層）などの各時期にわたる遺構・遺物を検出した。弥生時代以降の遺構は住居2棟、掘立柱建物9棟、井戸3基などで、住居のうち1棟は方形周溝墓の可能性もある。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期のものが主で、玉作り関連遺物も多数出土している。

註

- 1 第4・5図に示した中角遺跡の範囲は、今回の調査以前に作成された『福井県遺跡地図』（福井県教育委員会1993）に基づく。中角集落や自然堤防に遺跡の範囲が拡大する可能性については、第6章で詳述する。なお、九頭竜川堤外地部分については、平成16年（2004）に実施した試掘調査では、遺構・遺物等は一切検出されず、遺跡はもともと存在しなかったか、もしくは河川の浸食により滅失したものと結論付けた。
- 2 要平成8年度にこの調査区の東約80mの地点でおこなわれた、旧春江町教育委員会による同遺跡発掘調査（春江町教育委員会2000）において、古墳時代遺物を伴う溝や土坑が検出され、古墳時代集落の東方への広がりが実際に確認された。

参考文献

- 河原純之・島田正彦・華田嘉彦・松浦義則 責任編集 1989 『角川日本地名大辞典 18 福井県』 角川書店
 国土地理院 2004 『1:25,000 土地条件図 福井』
 小栗田 淳 監修 1981 『福井県の地名』 日本歴史地名体系 第18巻 平凡社
 白嶋祐司 2007 『高柳遺跡（30・31次）』 『第22回 福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 西向美智代 2003 『高柳遺跡（17次）』 『第18回 福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 春江町教育委員会 2000 『東太郎丸遺跡』 春江町埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集
 福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『漆谷遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第31集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『江留下遺跡（境元町地区）』 福井県埋蔵文化財調査報告 第33集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『下市古墳』 福井県埋蔵文化財調査報告 第116集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『菅谷島帽子遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第104集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『中角遺跡1 - I区上層編 -』 福井県埋蔵文化財調査報告 第100集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『中角遺跡2 - I区下層編 -』 福井県埋蔵文化財調査報告 第105集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 『中角遺跡3 - II・III区上層編 -』 福井県埋蔵文化財調査報告 第110集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『東太郎丸遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告 第39集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『舟寄福島遺跡』 『年報21 平成17年度』
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『舟寄福島遺跡』 『年報22 平成18年度』
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 『法土寺遺跡I』 福井県埋蔵文化財調査報告 第49集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 『法土寺遺跡II』 福井県埋蔵文化財調査報告 第63集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 『若宮遺跡』 『年報22 平成18年度』
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 『若宮遺跡』 『年報23 平成19年度』
 福井県教育委員会 1997 『間発遺跡・高柳遺跡・石盛遺跡』 遺跡発掘事前総合調査Ⅱ
 福井市教育委員会 1998 『高柳遺跡』 遺跡発掘事前総合調査事業Ⅲ 試掘調査報告書
 福井市教育委員会 2001 『高柳遺跡・間発遺跡 - 平成9～11年度にかけて行った発掘調査の概要 -』
 福井市文化財保護センター 2004 『石盛遺跡』 『第19回 福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

第3章 遺跡の概要

第1節 II区の概要 [図版第2・4-(1)、第2・6・7・9～11図]

1 地形

調査II区の規模は東西で最大276m、南北で最大36m、総面積7,740㎡を測る。引堤事業であるため、調査区は川の弯曲に沿って長く伸び、下流側（西側）ほど幅が徐々に狭くなる。周辺の現況は堤防・堤外地および畑地⁽¹⁾で、区内の事業以前の状況は工場施設とその敷地および畑地であった（第2図）。

遺構検出面⁽²⁾の標高を区別別に見ると、まず①・②までは東-西5.90～6.10m、南-北6.10～5.90mと、おおむね平坦である。③は全体に6.10～6.30mの微妙な高まりが点在し、東半部までは東-西・南-北とも5.90～6.00mとほぼ平坦であるが、西半部では東-西6.00～5.60m、南-北5.60～6.00mと、西方（下流）および南方（川側）への緩やかな下降傾向が認められる。④～⑥ではこの下降傾向がより顕著に現れ、北半部では東-西5.90～5.50m、南-北5.50～5.90mと、③の西半部に近い傾向を見せるが、南半部では東-西5.60～3.40m、南-北3.40～5.60mと、特に南西隅周辺で最大2m以上の高低差を有する急峻な斜面が現出している。これらの地形は微高地上の平坦地形、およびその周縁部の傾斜地形と推測され、本遺跡が自然堤防上に展開している状況を実地に確認したものと見えよう。

2 層序

標準層序は以下のように大別され、その基本的内容はI区とほぼ同様である。なお、表土層は近年の整地・造成などによる攪乱が著しく、自然堆積層とは評価し得ないので省略する。

I層：褐灰色～茶褐色粘質土で構成される上層遺物包含層。土師器・須恵器、土師質皿・越前焼など律令・中世遺物を主に含む。現地表下40～50cmにあり、堆積の厚さは30～50cmになる。

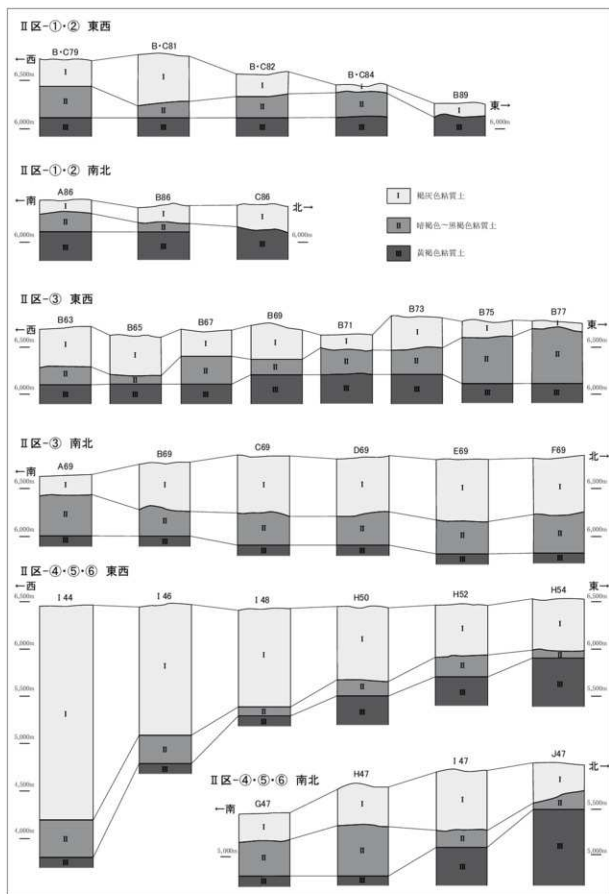
II層：暗褐色～黒褐色粘質土で構成される下層遺物包含層。弥生土器・土師器など、弥生・古墳時代遺物を主に含む。堆積の厚さは30～50cmになる。

III層：黄褐色～黄緑褐色粘質土で構成される地山層。深度の深い地点では湧水の状況によって還元色（青緑灰色～青灰色など）に変わる。

土質はI～III層とも共通し、粘性はやや弱く、砂質気味である。特にIII層は下流側・川側ほど砂質傾向が強く、④～⑥ではほとんど砂質土に変移している。堆積状況⁽³⁾（第6図）は前項で確認した地形と同様で、特に④～⑥の傾斜地形ではI・II層の偏在が認められる。まず、北半部ではI層にさほどの変化は見られないが、II層が10～20cmと総じて貧弱で、場所によってはI層直下でII層を欠き、III層上面が直接露出する場合もある。対して、南半部ではI層が非常に発達し、特に南西隅の斜面では最大220cm以上におよぶ一方、II層は10～50cmと場所によってばらつきはあるが、基本的には標高が低い所ほど堆積が厚くなる傾向が見られる。これらの事実は、傾斜地形の影響でII層が低方へ相当量流動した状況を示しているものと考えられる⁽⁴⁾。

3 遺構の分布状況

検出した遺構は周溝墓⁽⁵⁾41基、獨立柱建物8棟、住居3棟、井戸2基などである⁽⁶⁾（第7・9～11図）。溝や土坑・ピットなどについては、基本的に遺物が得られた遺構にのみ番号を付し、その総数は溝139条、土坑175基、ピット494基をそれぞれ数える⁽⁷⁾。このほか、調査区内にかつて存在した工場施設の痕跡や、その撤去に伴う廃材や瓦礫の埋却跡など、大小様々な攪乱も数々散見された。



第6図 調査II区土層柱状模式図

本来はⅡ層中の何処かに下層生活面が存在していたと推測されるが、Ⅱ層の平面・断面いずれにおいても遺構等の視認が困難だったため、確実に遺構が視認可能なⅢ層上面を便宜的に遺構検出面と定め、調査を実施した。また、調査Ⅱ区は調査計画の区切りにより、6つの区割(①～⑥)に分けられるが、検出された下層遺構の内容や傾向を考慮すれば、①・②(平成10～12年度調査区)と③～⑥(平成13～16年度調査区)に二分できるものと考えられる。以後はこの区分を基本として記述する。

遺構の分布状況には、両地区で明確な相違が認められる。まず、平成10～12年度調査区(第9図)は、建物・住居や井戸など生活遺構を主体とし、集落の生活域であったことがうかがえる。ただ、中世期の大規模開発⁸⁾によって、下層遺構面が広範囲に攪乱されており、遺構の遺存状態は良くない。遺構密度はほぼ一様だが、比較的大型の遺構が調査区南西部に偏る傾向が見て取れる。

一方、平成13～16年度調査区(第10図)は多数の周溝墓⁹⁾が主体を占め、集落の墓域であることが知れる。後世の開発がさほど進まなかったため、遺構の遺存状況はおしなべて良好である。遺構密度はほぼ一様だが、周溝墓およびその関連遺構(墓壙など)以外、例えば掘立柱建物などの生活遺構は、すべて周溝墓の密集から外れた場所に位置している。また、調査区南西端の急峻な斜面には遺構がほとんど分布していない。

4 遺物の出土状況

出土遺物量は、平成10・11年度30箱(大コンテナ、以下同じ)、12年度13箱、13年度20箱、14年度40箱、15・16年度38箱、総量141箱を得た¹⁰⁾。これを調査区別に見ると、平成10～12年度調査区で43箱、平成13～16年度調査区で98箱となる。単位面積あたりの量では平成10～12年度調査区の方が若干多いが、特に問題とするほどの差ではない。

出土遺物の所属時期は、おおむね縄文時代晩期、弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期の3時期に大別され、それぞれの時期に断絶期間を挟む。また、地区による遺物の時期的偏りは特に見られない。

遺物の内容は弥生時代から古墳時代の土器が主で¹¹⁾、包含層資料が大半であるが、遺構出土資料も相当量得られ、特に周溝墓の周溝内出土品に良好な資料が多く見受けられる。土器の量から判断すれば、主体となる時期は弥生時代中期後葉と、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉までの2時期と認められよう。

このほかの遺物には、石器類や玉作り関連遺物がある。特に後者については、包含層掘削段階で玉製品や原石資料を検出したため、検出区域の包含層および遺構覆土を中心に土壌洗浄を随時実施し、遺物の抽出を試みた。その結果、管玉・勾玉などの完成品をはじめ、その未製品や剥片・原石なども相当量得たが、玉鉏や玉錐などの工具類はほとんど得られなかった。

第2節 Ⅲ区の概要〔図版第4-(2)、第2・7・8図〕

1 地形と層序

調査Ⅲ区の規模は、北東-南西12.0m、北西-南東11.8m、総面積144㎡を測る。周辺の現況は畑地で、区内の事業以前の状況も同様であった(第2図)。遺構検出面の標高は東-西6.00～6.20m、南-北6.20～6.00mと、おおむね平坦である。標準層序の基本属性は近接するⅡ区-⑤・⑥(平成16年度調査区)とはほぼ共通するが、相違点もいくつか見られる。なお、表土層は耕作土である。

I層：褐灰色～茶褐色粘質土で構成される遺物包含層。中世遺物を含む。現地地下15～20cmにあり、堆積の厚さは30～40cmである。

II層：暗褐色～黒褐色粘質土で構成される遺物包含層。弥生式土器や土師器・須恵器を含む。堆積の厚さは50～60cmである。

III層：黄褐色～黄緑褐色砂質土で構成される地山層。

土質についてはII区とほぼ同様で、いずれの層も粘性はやや弱く、I・II層は砂質土、III層は砂質土である。堆積状況は地形が平坦なことから一様に安定しており、II区で見られた土層の偏在や欠失は見られない。また、遺物の包含量や組成がII区とは大きく異なり、I層では中世遺物をわずかに含むに過ぎず、II層も土師器・須恵器が主体で、いわゆる下層遺物である弥生・古墳時代遺物はごく少ない。

2 遺構と遺物

検出した遺構は住居1棟、溝3条、土坑13基、ピット26基である(第8図)。ごく小規模な土坑・ピットを除いては、ほとんどの遺構が部分的検出にとどまった。遺構の分布状況については、住居をはじめとして、比較的大型の遺構が多く密集する印象を受けるが、調査区が狭小なこともあって、積極的な評価は難しい。

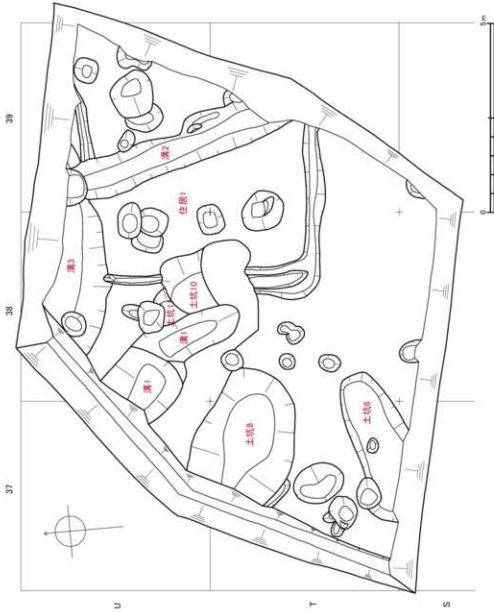
出土遺物量は総量で9箱を得た。内容は前項で記したように、土師器・須恵器が主体であり、律令期が主体時期と認められるが、この点に関しては、II区と全く状況が異なっている。

註

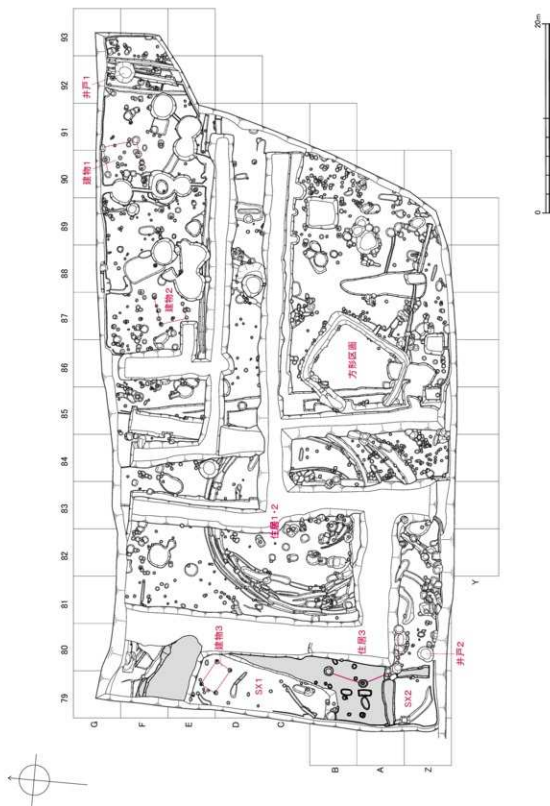
- 1 平成22年度現在、I・II区ともすでに新堤防が築堤され、旧堤防はすべて撤去されている。
- 2 ここで言う遺構検出面は、当時の生活面と必ずしも一致しない。詳細は遺構の分布状況の項を参照されたい。
- 3 平成10～12年度調査区(II区-①・②)の柱状図は、他地区に比べて非常に断片的である。これは上層遺構調査において検出された大規模な堀割によって、通しセクションの各所が寸断されたためである。
- 4 地山層であるIII層は砂質土であるため、III層もある程度流動した可能性が高い。
- 5 本報告で「周溝墓」と呼称する遺構は、周溝によって区画される墓を指す。この種の墓に類する遺構には「墳丘墓」や「古墳」などがあるが、これらの定義はいずれも未だ確立されていない。むしろ、これらの形態や規模・築造技術などには本質的な差異が認められず、用語として適当でないとの指摘もある。本報告ではこういった用語の問題はあえて考慮せず、あくまで便宜的な用語として「周溝墓」を使用する。
- 6 本報告で提示する図は各区割の測量図を接合・編集したもので、各区境界上の遺構の表現には推定値も含まれる。
- 7 これらの遺構の中には、現地調査後の検討により、掘立柱建物の柱穴や周溝墓の周溝など、別遺構の一部と判断されたものも含まれる。
- 8 II区上層遺構調査では大規模な堀割をはじめ、掘立柱建物や井戸など多数の遺構を検出した。詳細は「中角遺跡3」を参照されたい。
- 9 一部の周溝墓(SX1・2)は平成10～12年度調査区に跨っている。
- 10 下層遺構以前に実施した上層調査の際にも下層遺物を相当量得たので、実質的な量はこれより多くなる。なお、上層調査時に得た下層遺物はすべて下層包含層遺物として扱い、あわせて整理・検討した。また、石器にはI区出土遺物も含まれる。
- 11 このほか、土師器・須恵器などの上層(律令・中世)遺物も相当量得ている。これらは主に包含層掘削時や遺構精査時に検出したものであり、詳細については第5章第5節を参照されたい。

参考文献

- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 「中角遺跡1 - I区上層編 -」 福井県埋蔵文化財調査報告 第100集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 「中角遺跡2 - I区下層編 -」 福井県埋蔵文化財調査報告 第105集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 「中角遺跡3 - II・III区上層編 -」 福井県埋蔵文化財調査報告 第110集



第8図 調査Ⅲ区下階遺構図 (縮尺1/100)



第9図 調査Ⅱ区下層遺構図(1) 平成10～12年度(縮尺1/400)

第4章 遺構

本章ではⅡ・Ⅲ区下層調査で検出された主要な遺構を調査区別に記述する。各遺構の出土遺物については、第5章を参照されたい。なお、本章で提示する各遺構の規模（長さ・幅・深さ）や方位（角度）などの数値は、すべて遺構検出面を基準として、測量図上で測定・算出した概数値である。溝・土坑・ピットは、遺物の出土したものにのみ遺構番号を付した。また、建物や住居などに属する溝・土坑・ピットの各遺構番号（土1、p1など）は、各遺構内の固有番号ではなく、遺跡全体の通し番号である。

第1節 Ⅱ区：平成10～12年度調査区〔図版第5・6、第9・12～16図、第1・2表〕

本調査区で検出した遺構は、掘立柱建物3棟、住居3棟、井戸2基、方形区画1基、周溝墓2基、溝69条、土坑69基、ピット165基を各々数える。本節では主要な遺構について解説するが、周溝墓（S X 1・2）については、ともに次調査区に跨るため、詳細は次節で記述する。

1 掘立柱建物

全体を検出し得たものが1棟（建物3）、部分的な検出にとどまったものが2棟（建物1・2）で、いずれも比較的小規模な掘立柱建物である。構造は建物1が3間×1間、建物2が2間×1間、建物3が1間×1間とそれぞれに異なり、柱間も建物1・2の桁行が若干近似しているほかは、基本的に不規則で統一性は見受けられない。柱穴は平面形が不整形形が略方形の掘り方を有し、その大きさはおおむね建物の規模に比例している。建物の方位は建物1・2が相似し、建物3とは異なる。このほか、各属性の詳細は一覧表（第1表）を参照されたい。

建物1（第12図） 中世の井戸により、北西隅の柱穴を欠失する。柱間は桁行の両端で1.40m前後、中央のみ1.60m前後で、梁行は3.66mを測る。柱穴の平面形は略方形が主で、一辺70cm前後、深さ40～60cmを測る。

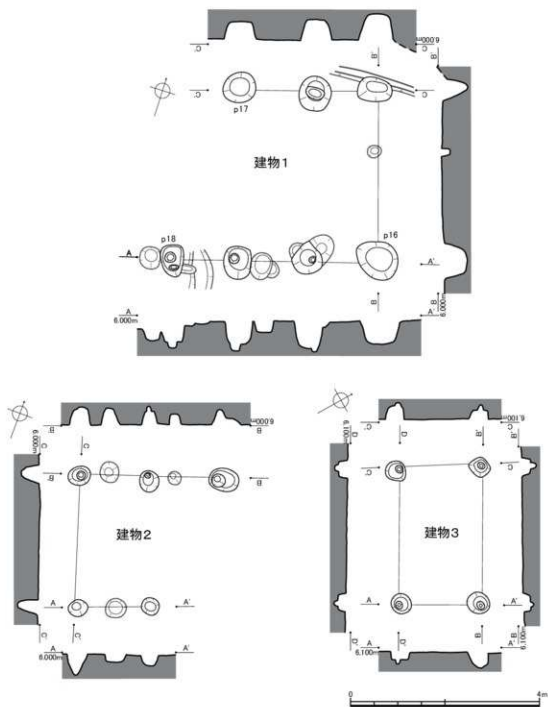
建物2（第12図） 建物1同様、中世の井戸により、南東隅の柱穴を欠失する。柱間は桁行が1.50～1.60m、梁行は2.84mを測る。柱穴の平面形は略円形が主で、直径40～60cm、深さ40cm前後を測る。

建物3（第12図） 柱間は桁行2.95m、梁行1.78mを測る。柱穴の平面形は略円形あるいは略方形を呈し、直径・一辺50cm前後、深さ30cm前後を測る。

2 住居

3棟とも周溝で区切られた円形ないし楕円形の区画内に複数の主柱穴を有する、いわゆる平地住居と考えられる。中世の堀に各所を分断されているため、部分的な検出にとどまるが、いずれも広大な規模を有する。なお、図中に示した周溝の軌跡（朱破線）は、あくまで現状の推測に基づくものであり、各周溝の対応関係を確定するものではない。

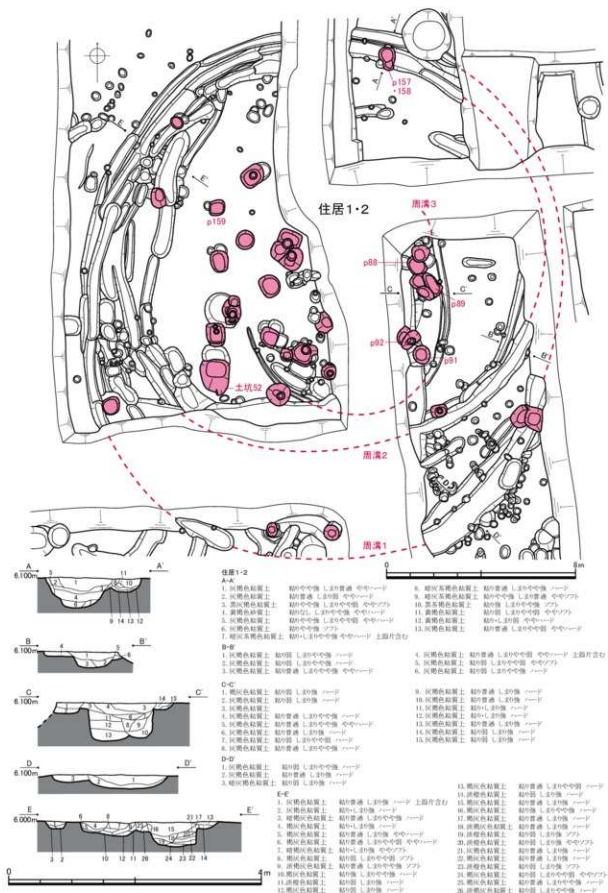
住居1・2（第13図） Z-E 81～85区にかけて検出した。軌跡の異なる周溝が外縁に2条（周溝1・2）、区画内に1条（周溝3）認められ、少なくとも外縁2条にそれぞれ対応する住居2棟が入れ子式に重複しているものと推測される。しかし、周溝1・2はいずれも大小長短様々な溝の集合体で構成され、特に西半部では多くの溝が錯綜しており、これを峻別するのは事実上不可能である。そのため、本項では2棟を特に区別せず、「住居1・2」と一括して扱う。ただし、記述を進める便宜上、周溝1およびその区画を住居1、周溝2およびその区画を住居2とそれぞれ呼称する。



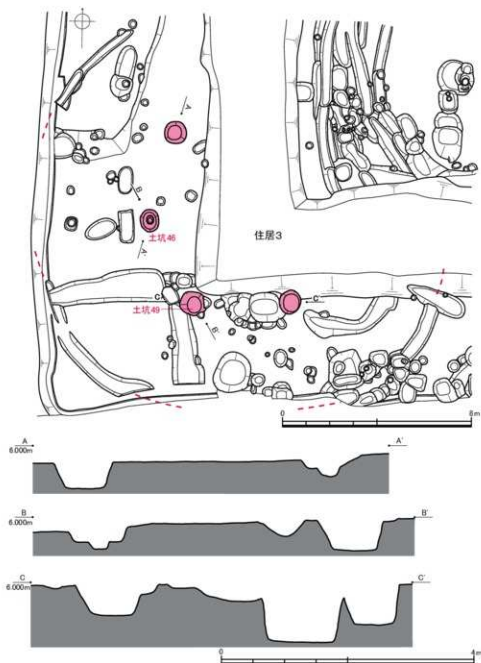
第12図 建物1～3実測図(縮尺1/80)

第1表 掘立柱建物一覧表(1)

名称	検出区	挿図No.	桁×梁	構造	方位 (桁行方向)	桁行(m)	梁行(m)	出土遺物	備考
建物1	F・G 90・91	第12図	3×1	側柱	N73°E	4.42	3.66		
建物2	E・F 87	第12図	2×1	側柱	N71.5°E	2.94	2.84		
建物3	D・E 79・80	第12図	1×1	側柱	N61°W	2.98	1.78		SX1周溝内に立地。



第13図 住居1・2実測図(平面図：縮尺1/160、断面図：縮尺1/60)



第14図 住居3実測図（平面図：縮尺1/160、エレベーション：縮尺1/60）

両住居の推定規模は、住居1が南北に長い楕円形を呈し、長軸22.4m・短軸20.0m、住居2が南北にやや潰れた円形を呈し、直径18.2mをそれぞれ測る。住居内からは柱穴と見られる遺構（朱網）を多数検出したが、その大半は住居の中央に集中しており、2棟分の主柱穴が重複している状況がうかがえる。この類の住居は主柱穴を不規則に配する事例が多く、各住居の主柱穴の峻別や具体的な配列の復元は難しい。ただ、住居1のほぼ中央に位置する周溝3は、その軌跡が周溝1に相似していることから、住居1に伴うものと見られ、その内郭に住居1の主柱穴が特に集中していると考えられる。以上のことから、住居2から住居1への拡張あるいは建替がおこなわれたものと解釈できる。遺物は弥生後期後葉の土器（第73図）が出土している。また、直接出土した例ではないが、Z～C81～84区で管玉およびその未製品（第97・98図）が集中出土しており、これらは当住居ならびに住居3にも伴う可能性が高い。

住居3（第14図）Z～C78～82区にかけて検出した。住居1・2ならびに周溝墓2基（SX1・2）と重複するものと推測される。全体形はほぼ円形を呈し、直径は推定で17.68mを測る。外縁に周溝を1条伴うが、その規模は場所ごとに異なり、南東部で幅63cm・深さ13cm、南西部で幅80cm・深さ27cm、北西部で幅37cm・深さ16cmをそれぞれ測る。

住居内からは柱穴と見られる遺構をいくつか検出し、主柱穴（朱網部）とその配列を部分的に復元し得た。この柱穴列は住居のほぼ中心に位置し、その平面形状は六角形を呈しているものと推測され、柱間は3.80～4.10mを測る。柱穴の掘り方はおおむね隅丸方形かそれに近い平面形を呈し、最大長90～110cm、深さ30～60cmをそれぞれ測る。前述のとおり、直接の出土例ではないが、Z～C81～84区で管玉および未製品が集中出土しており、当住居にも伴う可能性が高い。

重複する遺構との先後関係についてまとめる。まず、住居1・2との重複箇所と見られる北東部には多くの溝が錯綜しており、周溝を特定し得ない。想定される軌跡上に対応する周溝が見出せないことから、あるいはこの部分は開口していた可能性も指摘できるが、いずれにせよ先後関係は不明である。一方、SX1・2との先後関係については、直接検証し得る断面図などは得られていないが、両遺構の切り合い部に相当するSX1周溝覆土に住居3周溝の痕跡は認められなかったことから、少なくともSX1には先行するものと判断される。

3 井戸

II区下層調査において井戸と判断した遺構は、本調査区で検出したこの2基のみである。平面形状は不整形円形ないし不整形円形で、掘り方の形状・大きさとも、特に規格性のようなものは見て取れない。いずれからも井戸枠は検出されなかった。個々の詳細は一覧表（第2表）を参照されたい。

井戸1（第15図）粘土層を主体とする覆土に炭化物・植物遺体などの有機物が多く含まれる点などから、井戸と判断した。井戸枠ではないが、掘り方底面中央のやや南寄り、木の板材が6枚、敷き並べられた状態で検出された。底面を安定させるために敷かれたものと見られ、あるいは上部に井戸枠を伴っていた可能性も考えられるが、ほかに部材は一切得られなかった。

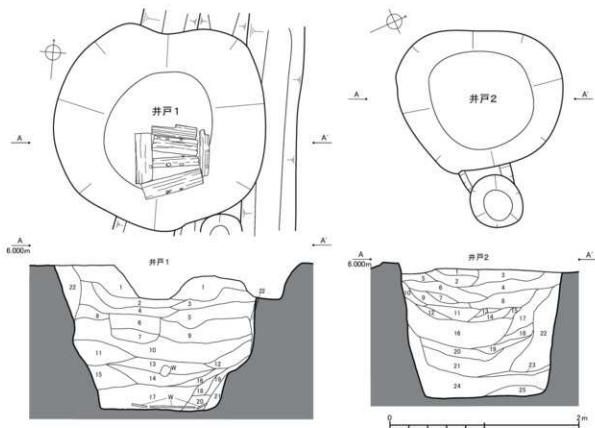
板はいずれも厚さ2cm前後で、長さ50～60cm・幅18cm前後のものが2枚と、長さ50cm前後・幅10cm前後のものが4枚である。また、6枚中5枚の木端際に、長方形の小穴が1～3箇所空けられているところから、もともと別の構造物の部材を、敷板として転用・再利用したものと見られる。

井戸2（第15図）遺構の形状や規模などから井戸と判断したが、井戸1に比べて、その覆土は粘土層や有機物に乏しい。前項で記した住居3の内部に位置しており、住居3と重複していると見られるが、その先後関係は不明である。

4 方形区画

Z～C85～87区で検出した（第16図）。周溝で区切られた長方形の区画で、中世の堀や溝などによって、南西隅を一部欠失している。現状で遺構の性格を断定し得ないため、便宜的に「方形区画」と呼称する。区画の規模は長軸8.70m・短軸7.02m、周溝の規模は幅90～120cm・深さ60～70cmを測り、長軸はN27°Eを向く。区画内で遺構はほとんど検出されなかった。住居1・2に近隣するが、ちょうど近接部を中世の堀で欠失しているため、両遺構が切り合っていたかどうかは不明瞭である。

上層遺構調査時（平成8～10年度）に、この区画の直上で黄灰褐色土の広がり（朱網掛部）を検出した。当初は堅穴遺構の類と推測して調査したが、遺構の底面や壁面の立ち上がりを見出せず、むしろ黄灰褐色土の堆積が下方へ広がっていく様子が観察できたため、平面的広がりを確定させた段階で掘削を



井戸1

1. 赤茶褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 中～やや硬
2. 赤茶褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 中～やや硬 黄灰色土多量混入、鉄分多量含む
3. 赤茶褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 中～やや硬 黄灰色土多量混入、鉄分多量含む
4. 赤茶褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 中～やや硬 黄灰色土多量混入、鉄分多量含む
5. 赤茶褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 中～やや硬 黄灰色土多量混入、鉄分多量含む
6. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 非常に硬 黄灰色土多量混入、鉄分多量含む
7. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 中～やや硬 黄褐色土少し混入、鉄分含む
8. 赤褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 非常に硬 黄灰色土多量混入、鉄分多量含む
9. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 非常に硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
10. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
11. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
12. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 中～やや硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
13. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 中～やや硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
14. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
15. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
16. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
17. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
18. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
19. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
20. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
21. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
22. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
23. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
24. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む
25. 黄灰色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、黄灰色土若干混入、鉄分多量含む

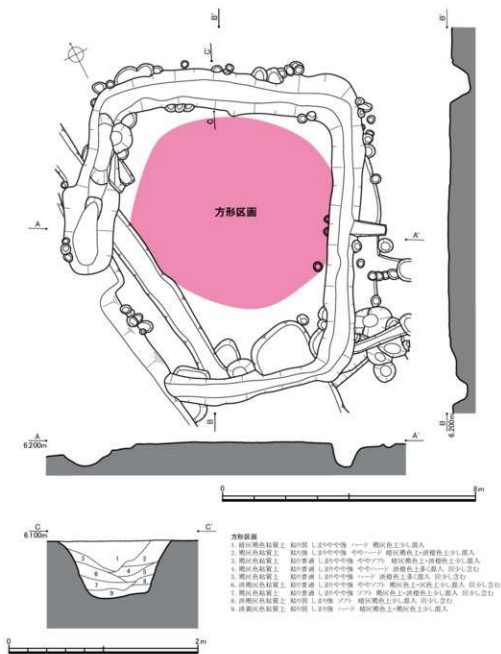
井戸2

1. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
2. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
3. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
4. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
5. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
6. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
7. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
8. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
9. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
10. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
11. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
12. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
13. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
14. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
15. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
16. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
17. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
18. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
19. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
20. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
21. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
22. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
23. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
24. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む
25. 黄褐色粘質土 粘中～粘 土質普通 硬 黄褐色土多量混入、鉄分多量含む

第15図 井戸1・2実測図(縮尺1/40)

第2表 井戸一覧表

遺構名	地区	挿図No.	平面形状	平面規模(m) 長軸×短軸	深さ(m)	井戸枠	出土遺物	備考
井戸1	F・G92	第15図	不整形円形	2.30×2.28	1.52	なし	木板(6枚)	木板を底面に敷き並べる
井戸2	Z80	第15図	不整形円形	1.77×1.50	1.36	なし		



第16図 方形区画実測図（平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40）

止めた。その後、この黄灰褐色土を掘り込む形で、中世の掘立柱建物が築造されていることを確認したため、今回検出した方形区画に伴う盛土と最終的に判断した。

この遺構の性格については、周溝で方形に区切った区画の内部に盛土を施す、という状況から、いわゆる方形周溝墓である可能性がまず指摘できる。ただ、周溝墓と仮定する場合、本調査区が建物・住居や井戸など生活遺構を主体とし、周辺に周溝墓や墓塚などの埋葬関連遺構が見当たらないこと、西方に展開する大規模な周溝墓群（平成13～16年度調査区：次節参照）から隔絶していることなど、不自然な点が目立つ。むしろ、周溝を伴う遺構として広義に捉えるならば、このような区画内に掘立柱建物を伴うと見られる事例も数多いことから、近接する住居1・2に伴う建造物、例えば倉庫のような建物という可能性も十分考慮されよう。

第2節 II区：平成13～16年度調査区〔図版第7～20、第10・11・17～63図、第3～6表〕

本調査区で検出した下層遺構は、周溝墓41基、掘立柱建物5棟、溝70条、土坑110基、ピット329基をそれぞれ数える。本節ではこれらの遺構のうち、代表的なものを抽出して解説する。

1 周溝墓

1) 全体の概要

周溝墓は調査区のはほぼ全域で検出した。これらのうち、周溝区画内いわゆる「墳丘」と呼ぶべき隆起地形を有するものはほとんどないが、本項ではこの周溝区画内部を便宜的に「墳丘部」と呼称する。

墳丘部の平面形はその大多数が方形だが、前方後方形(SX1)や円形(SX23)も見られる。また、方形の周溝形態については、陸橋部の数と位置に着目して、四隅切れ(四隅に陸橋部を有する)、二隅切れ(二隅に陸橋部を有する)、一隅切れ(一隅に陸橋部を有する)、一辺の中央切れ(一辺の中央に陸橋部を有する)、全周(陸橋部を有さない)の各類型に分別できる。これら形態の墓群内における内訳は、四隅切れと一辺の中央切れが主体を占め、全周と一隅切れは少なく、二隅切れは1例のみである。

墳丘部の規模(墳丘部の長軸ないし主軸)が最も大きい周溝墓はSX1で、長軸20.75m・短軸18.25mをそれぞれ測る。一方、最も小さい周溝墓はSX17で、長軸3.60m・短軸3.12mをそれぞれ測る。また、規模の分布を見ると、最も数が多いのが8.00～10.00m前後のもので、4.00～6.00m前後のものもこれに続く。この2群で周溝墓全体の7割近くを占め、これら以上の規模のものは数が少ない。特にSX1(長軸20.75m)、SX18(長軸16.00m)、SX23(直径14.84m)、SX35(主軸19.52m)の4基は、墓群の中でも規模が突出している。

墳丘部に埋葬施設を有するものは少なく、いわゆる「墳丘」が後世に削平もしくは流失を被った可能性が高い。したがって、本項で述べる出土遺物とは、そのほぼすべてが周溝内から出土したものである。また、いずれの周溝墓においても、周溝内埋葬の痕跡は認められなかった。

2) 個別の概要

各周溝墓の概要を、付随すると推測される埋葬施設(墓壙)や周辺遺構と併せて記述する。詳細については、周溝墓一覧表(第3表)および土坑一覧表(第4表)を参照されたい。

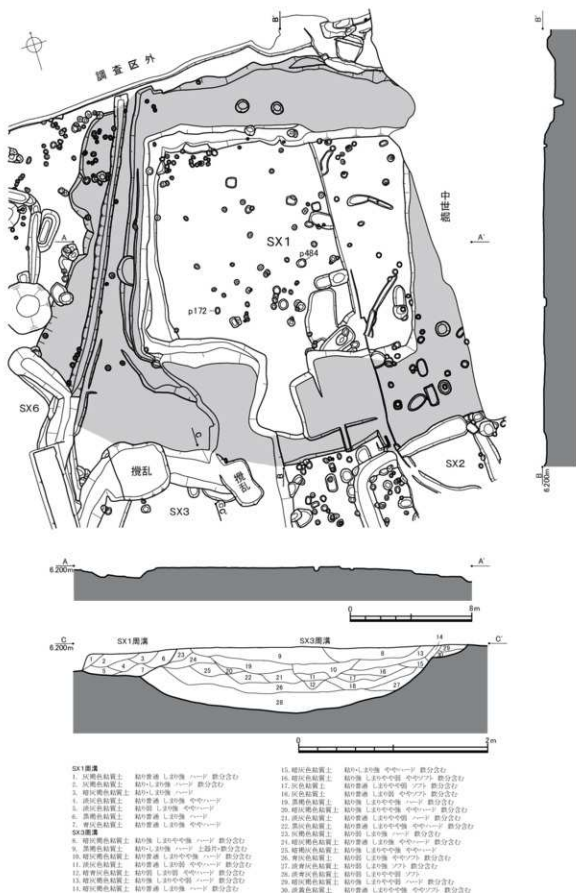
SX1(第17図) 墳丘部のすべてと周溝の大半を検出した。周溝は東辺の一部欠失するが、墳丘部を全周しているものと推測される。墳丘部はいわゆる前方後方形を呈し、その規模は前方部が長さ5.00m・幅4.31m、後方が長さ15.75m・幅18.25mをそれぞれ測る。墳丘部の全長は20.75mにおよび、本遺跡最大の規模を有する周溝墓である。周溝南東隅でSX2に、周溝南辺でSX3にそれぞれ重複し、SX3に後行する(断面C-C')。SX2は重複部断面が不明瞭で、先後関係を判定できなかった。古墳前期前半の土器(第65図)や打製石鏃(第92図15)が出土した。

SX2(第18図) 墳丘部および周溝の北半部を検出した。北東隅に1箇所の陸橋部を残すと見られるが、土坑45が重複しており、不明瞭である。

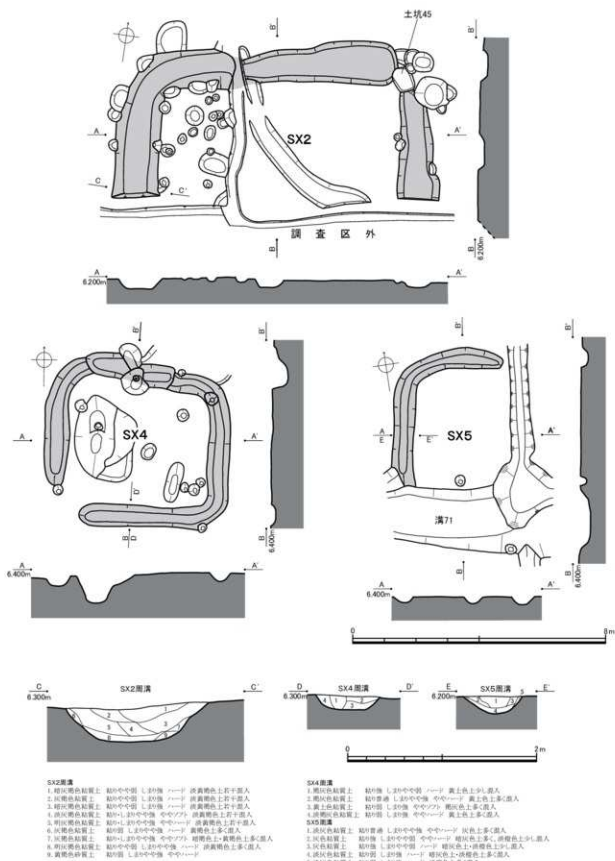
SX3(第19図) 墳丘部と周溝の大半を検出した。南東辺中央に1箇所の陸橋部を残す。北東辺でSX1に重複し、これに先行する(第17図断面C-C')。古墳前期前葉の土器(第66図)が出土した。

SX4(第18図) 墳丘部と周溝をすべて検出した。南西隅に1箇所の陸橋部を残す。西辺でSX27に重複するが、周溝が直接切り合わないため、先後関係を判定できなかった。弥生後期後葉の土器(第67図1・2)や打製石斧(第95図14)が出土したが、土器はいずれも小片で、積極的評価は難しい。

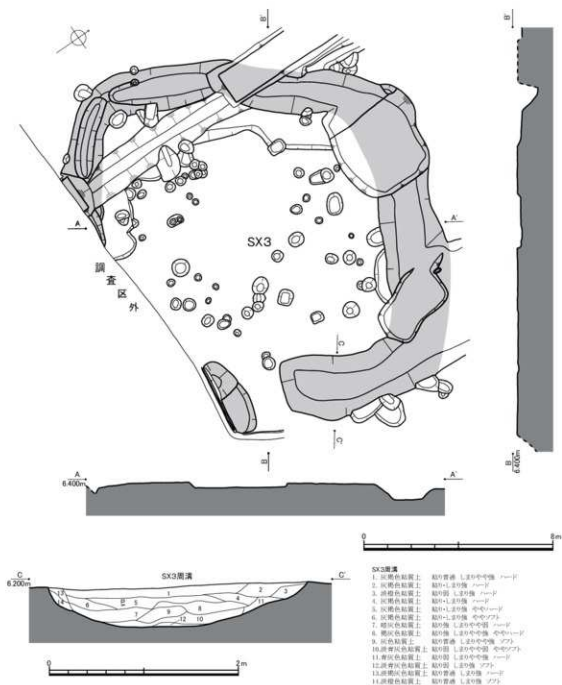
SX5(第18図) 墳丘部と周溝を一部検出した。北東隅に少なくとも1箇所の陸橋部を残す。



第17図 SX1実測図（平面図：縮尺1/250、断面図：縮尺1/40）



第18図 SX2・4・5実測図(平面図:縮尺1/120、断面図:縮尺1/40)

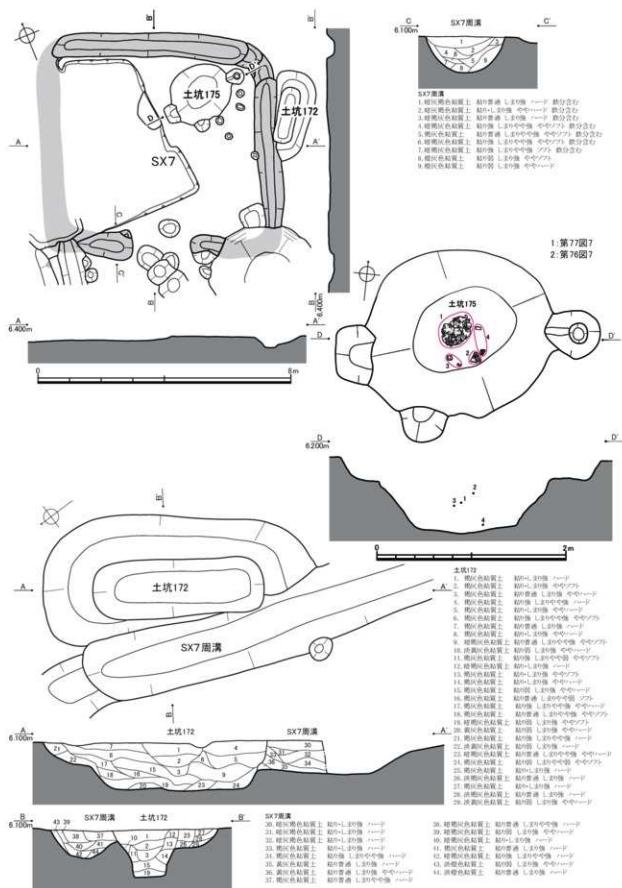


第19図 SX3実測図（平面図：縮尺1/160、断面図：縮尺1/40）

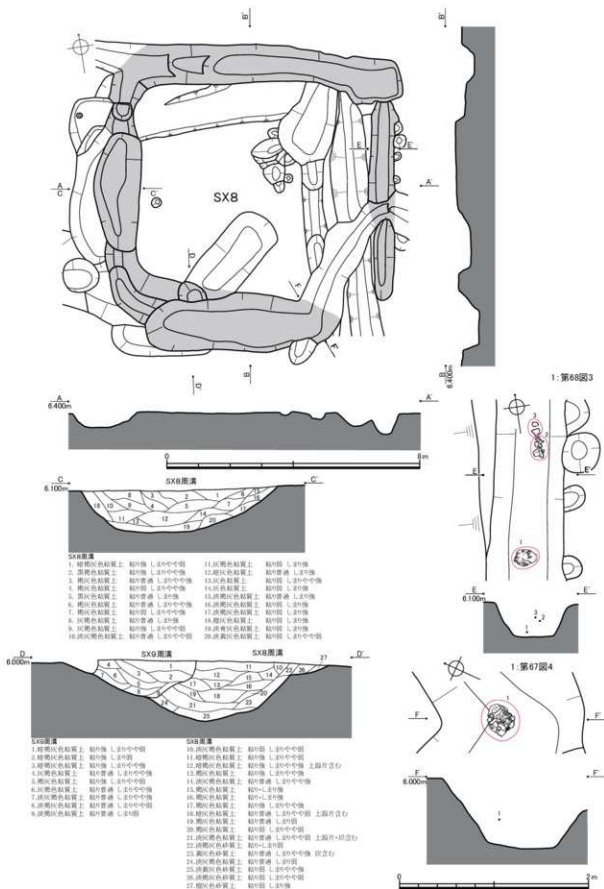
SX6（第20図） 墳丘部と周溝をほぼすべて検出した。北東辺中央に1箇所の陸橋部を残す。北隅でSX8に、西隅でSX26にそれぞれ重複するが、いずれも重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかった。古墳前期の土器（第67図3～9）が出土しており、特に陸橋部近くの周溝内出土品（出土状況D-D'、第67図3）は供献土器と推測される。

後述するSX8出土土器の内容を考慮すると、SX6はSX8に後行する可能性が高いと推測される。また、SX8出土土器として図示した個体（第22図出土状況F-F'、第67図4）は、所属時期から見てSX6に伴うものと考えられる。

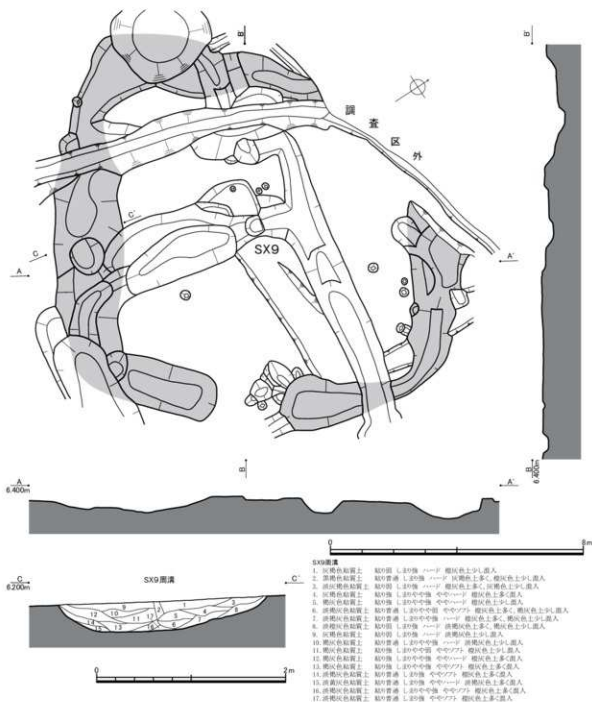
SX7（第21図） 墳丘部の西半と、周溝西辺から南西隅および南東隅を掘乱で欠失する。南辺中央



第21図 SX7・土坑172・175実測図（SX7平面図：縮尺1/120、土坑平面図・断面図・出土状況図：縮尺1/40）



第22图 SX 8 实测图 (平面图·缩尺1/120、断面图·出土状况图·缩尺1/40)



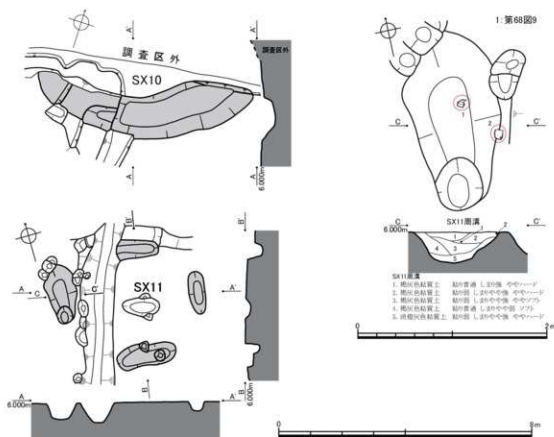
第23図 SX9実測図（平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40）

に1箇所の陸橋部を残す。南西隅でSX8に重複すると推測されるが、攪乱で重複部を欠失しており、先後関係を判定できない。

土坑172（第21図）SX7周溝南東辺に外接する。西縁でSX7に重複し、これに後行する（土坑断面A-A'、同B-B'）。墓塚と推測される。

土坑175（第21図）SX7墳丘部に位置する。弥生中期の土器（出土状況D-D'、第76図7、第77図7）が出土した。

SX8（第22図）墳丘部と周溝をすべて検出した。南東隅に1箇所の陸橋部を残す。南東隅でSX6に、北東隅でSX7に、西半部でSX9にそれぞれ重複し、SX9に先行する（断面D-D'）。SX6・



第24図 SX10・11実測図（平面図：縮尺1/120、断面図・出土状況図：縮尺1/40）

7については、いずれも重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかつた。弥生中期中葉～後葉の土器（第68図1～6）が主に出土した。

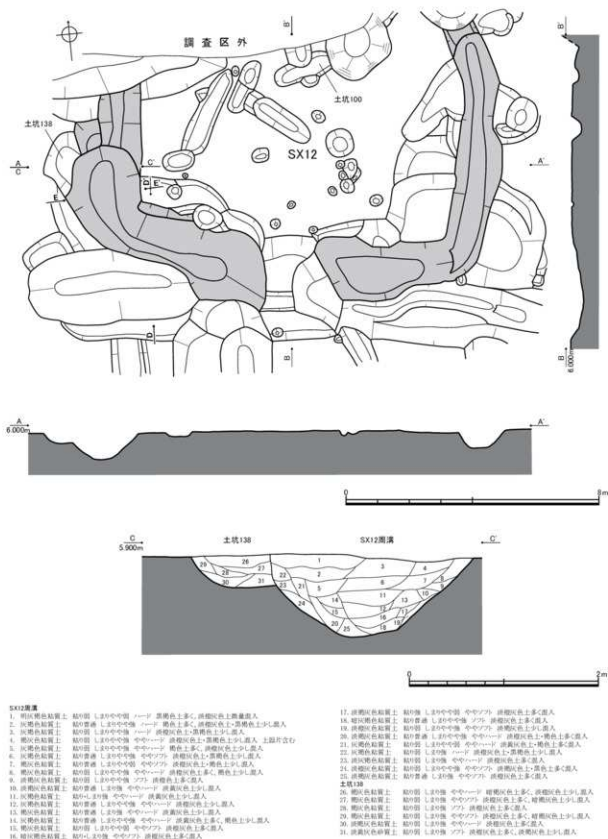
前述のように、SX6出土土器の内容を考慮すると、SX6に先行する可能性が高いと推測される。また、出土状況F-F'に示したSX6・8各周溝の交錯箇所出土した土器（第67図4）は古墳前期前半のものであり、SX6に伴うものと考えられる。

SX9（第23図） 墳丘部および周溝の北隅を欠失する。南東辺の中央に1箇所の陸橋部を残す。東半部でSX8に重複し、これに後行する（第22図断面D-D'）。また、北東辺でSX10に重複するが、攪乱のため重複部の大半を欠失しており、先後関係を判定できなかつた。弥生後期後葉～終末期の土器（第68図7・8）が出土した。

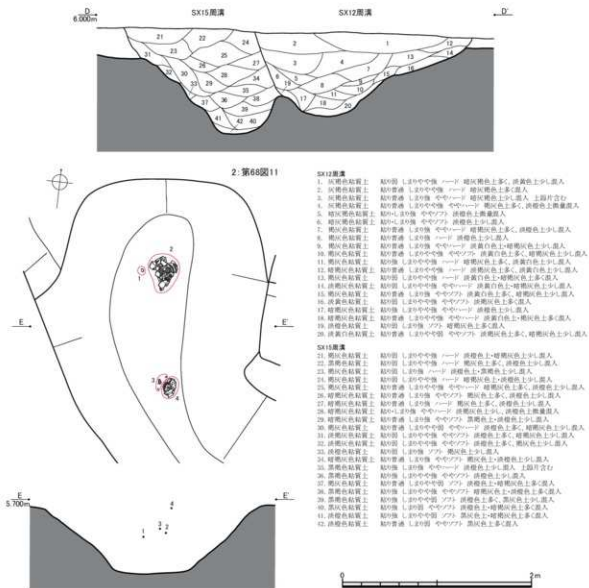
SX10（第24図） 墳丘部および周溝の南辺部を検出した。周溝は円弧を描くように見え、墳丘部が円形を呈する可能性を指摘できる。南辺でSX9に重複するが、前述のように先後関係は不明である。

SX11（第24図） 墳丘部と周溝をすべて検出した。周溝が粗略なため、墳丘部の輪郭は不明瞭である。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。北辺でSX18に重複するが、重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかつた。弥生後期後葉～終末期の土器（第68図9）が出土した。

SX12（第25・26図） 墳丘部および周溝の南半部を検出した。南辺中央に1箇所の陸橋部を残す。西辺でSX13に、南西隅でSX15に、南東隅でSX18にそれぞれ重複し、SX15・18に後行する（第26図断面D-D'、第32図断面D-D'）。SX13については、重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかつた。古墳前期の土器（第68図10～12）が出土した。



第25図 SX12実測図(1)(平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40)



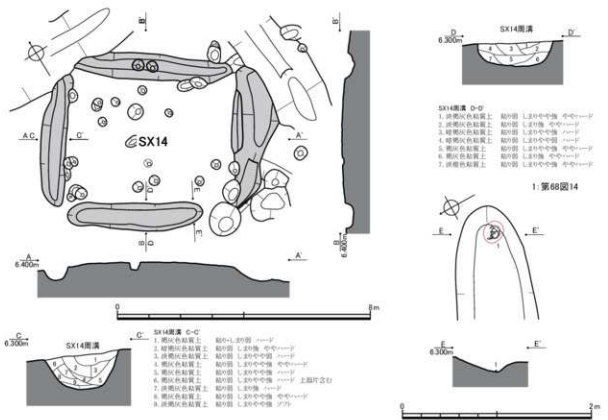
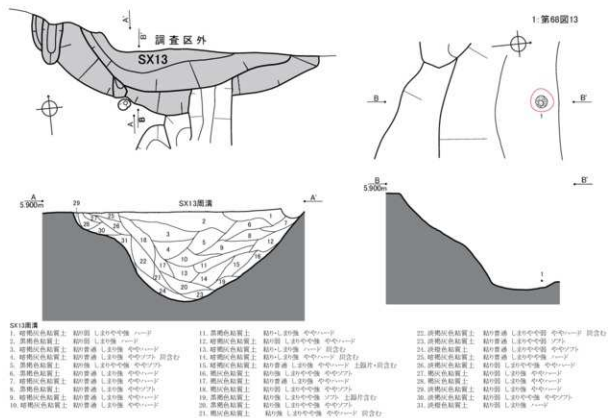
第26図 SX12実測図(2)(縮尺1/40)

S X13 (第27図) 周溝南辺のみ検出した。南辺でS X12に重複するが、前述のように先後関係は不明である。弥生後期の土器(第68図13)や石錘(第92図37)、楔形石器(第92図41)が出土した。

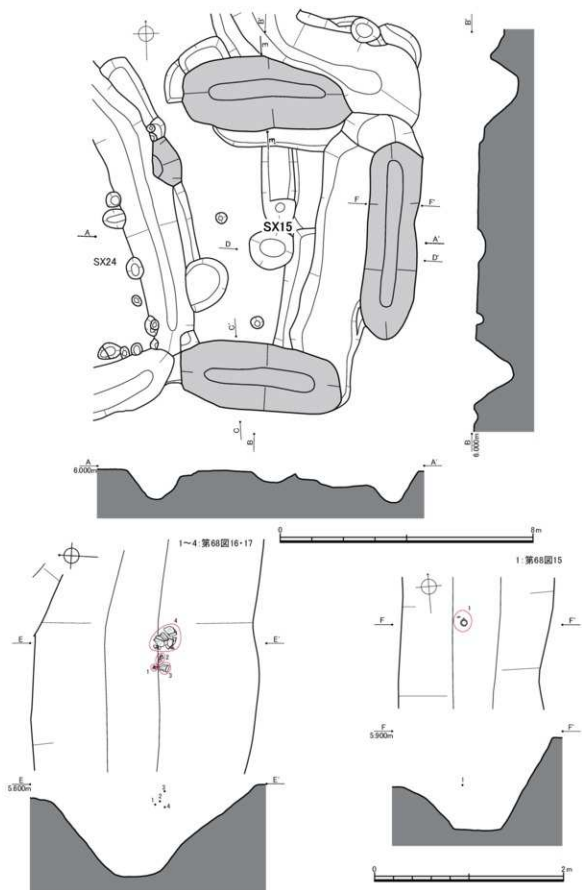
S X14 (第27図) 墳丘部と周溝をほぼすべて検出した。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。S X22 (第37図)の入れ子になっており、北隅および東隅でS X22に重複、これに先行する(第37図断面C-C')。また、弥生中期後葉の土器(第68図14)や管玉の荒削未製品(第98図4)が出土した。

S X15 (第28・29図) 墳丘部をほぼすべてと周溝の西辺を除く3辺を検出した。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。北辺でS X12に、東辺および南辺でS X18に、西辺と南辺でS X24 (第41図)にそれぞれ重複し、S X12に先行(第26図断面D-D')、S X18に後行する(第29図断面D-D')。S X24重複部断面(第42図断面C-C')には切り合いを見出せなかったが、弥生終末期の土器(第68図15~19)が出土しており、後述するS X24出土土器の内容を考慮すると、S X15はS X24に後行する可能性が高いものと推測される。

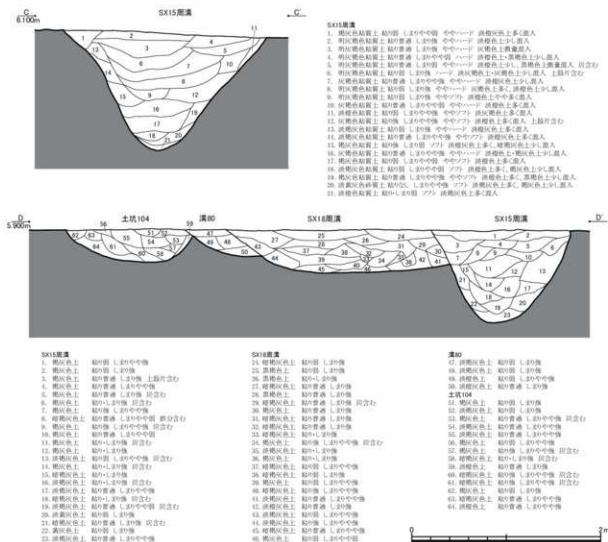
S X16 (第30・31図) 墳丘部北隅と周溝北西辺から北隅をわずかに欠失する。周溝は全周するもの



第27図 SX13・14実測図(平面図:縮尺1/120,断面図・出土状況図:縮尺1/40)



第28図 S X15尖測図(1)(平面図：縮尺1/120、出土状況図：縮尺1/40)



第29図 SX15実測図(2)(縮尺1/40)

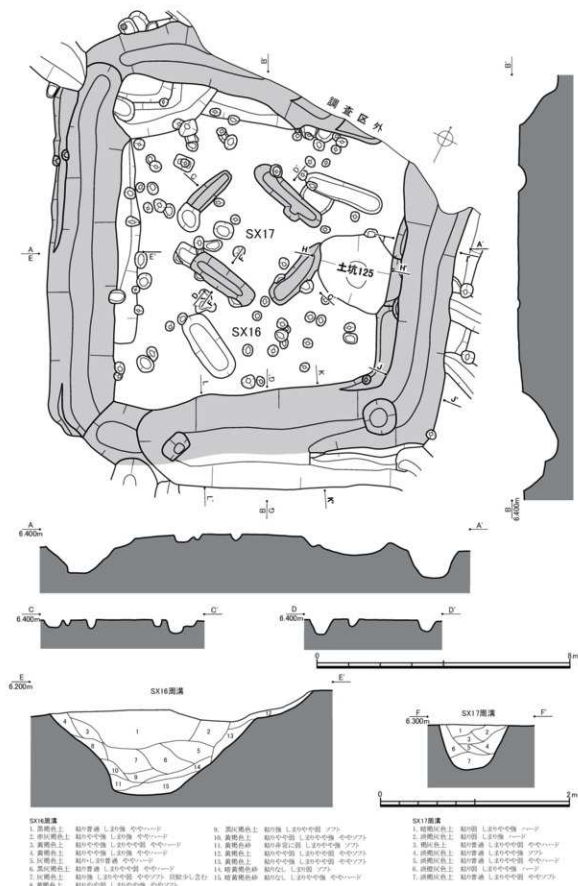
と推測される。西隅でSX21に、南東辺でSX24にそれぞれ重複し、SX21に後行(第36図D-D')、SX24に先行する(第31図G-G')。弥生中期後葉の土器(第69図1~7)が出土した。

土坑125(第30・31図) SX16墳丘部に位置し、周溝北東辺に内接する。弥生中期中葉の土器(第31図出土状況H-H'、第77図5)や凹石(第96図5)が出土した。

SX17(第30・31図) 墳丘部と周溝をすべて検出した。概要で述べたように、墓群の中で最も規模の小さい周溝墓である。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。SX16の入れ子になっており、SX16に先行する可能性が高いと推測される。

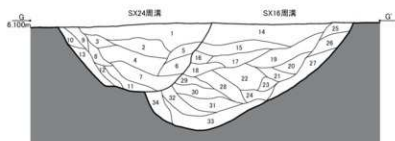
SX18(第32図) 墳丘部と周溝をすべて検出した。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。北辺でSX12・19に、西辺でSX15にそれぞれ重複し、SX12・15に先行する(第26図断面D-D'、第32図断面D-D')。北辺の重複部断面(第32図断面D-D')には、SX19との切り合いが見出せなかった。ただし、SX19がSX18の入れ子であることを考慮すると、SX19に後行する可能性が高いものと推測される。弥生後期の土器(第69図8)が出土した。

SX19(第33図) 墳丘部と周溝をすべて検出した。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。前述のようにSX18の入れ子になっており、北辺でSX18に重複、これに先行する可能性が高い。弥生中



第30図 S X16・17・土坑125実測図(1)(平面図:縮尺1/120、断面図:縮尺1/40)

第2節 Ⅱ区：平成13～16年度調査区

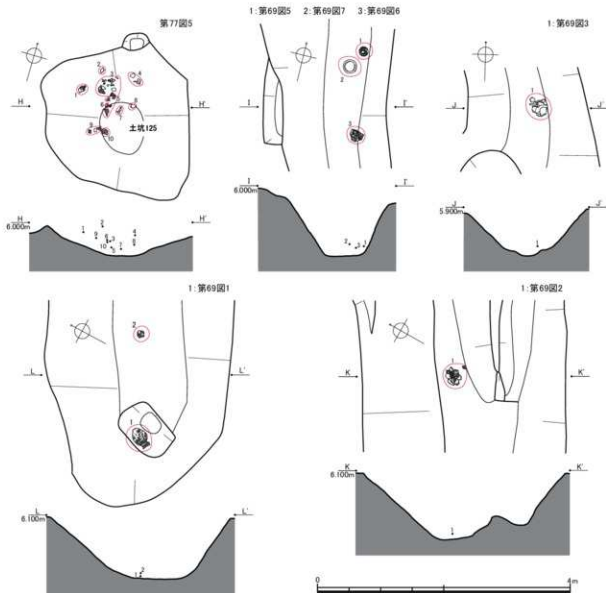


SX24流域

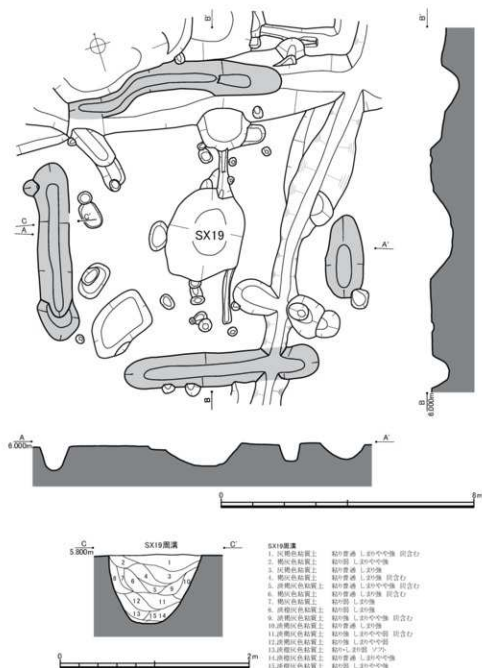
1. 灰褐色粘質土 粘中質 土砂中強 ヤマノフ
2. 灰褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
3. 褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
4. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
5. 褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
6. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
7. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
8. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
9. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
10. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
11. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
12. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
13. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ

SX16流域

14. 灰褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
15. 灰褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
16. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
17. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
18. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
19. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
20. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
21. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
22. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
23. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
24. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
25. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
26. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
27. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
28. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
29. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
30. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
31. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
32. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
33. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ
34. 暗褐色粘質土 粘弱質 土砂中強 ヤマノフ



第31図 S X16・17・土坑125実測図(2) (断面図：縮尺1/40、出土状況図：縮尺1/60)



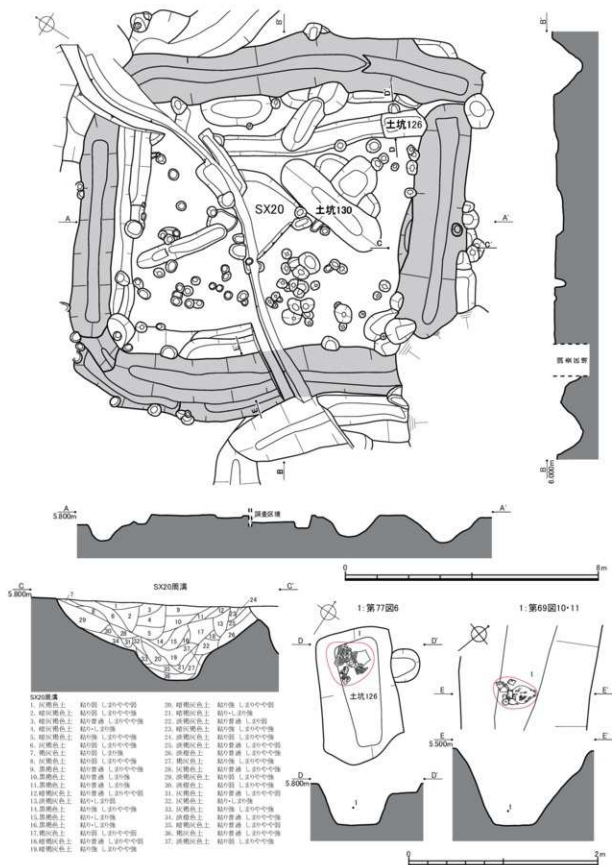
第33図 S X19実測図（平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40）

期後葉の土器（第69図9）や石庖丁（第93図3）が出土した。

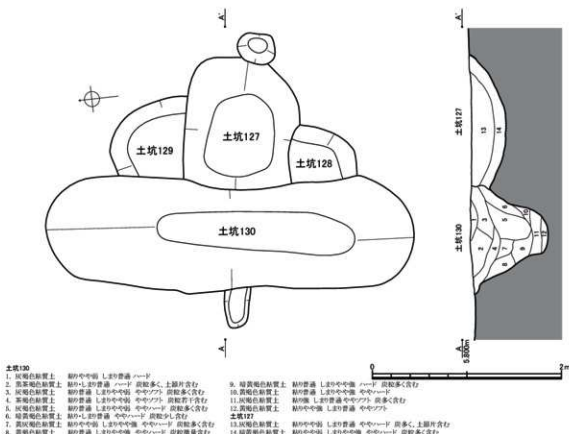
S X20（第34図） 墳丘部と周溝をほぼすべて検出した。周溝は全周し、陸橋部を残さないものと推測される。北隅でS X21に、南西辺でS X34にそれぞれ重複し、これらに先行する（第36図断面E-E'、第50図断面D-D'）。また、直接重複しないが、北西に隣接するS X29にも先行する（第45図断面D-D'）。弥生中期後葉の土器（第69図10・11）や、打製石鏃（第92図19）およびその未製品（第92図35）、管玉の石核（第97図2）が出土した。

土坑126（第34図） S X20墳丘部に位置し、南東辺に内接する。S X20との重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかった。弥生中期前葉の土器（第77図6）が出土した。

土坑130（第34・35図） S X20墳丘部に位置する。S X20に伴う埋葬施設（墓墳）と考えられる。



第34図 SX20・土坑126実測図(平面図:縮尺1/120、断面図・出土状況図:縮尺1/40)



第35図 土坑130実測図（縮尺1/40）

S X 21（第36図） 墳丘部および周溝の南辺から南東隅にかけて検出した。検出範囲が狭いため、墳丘部の形状や全体の規模は推測し得ない。南東隅でS X 16に、南西隅でS X 20にそれぞれ重複し、S X 16に先行（断面D-D'）、S X 20に後行する（断面E-E'）。

S X 22（第37図） 墳丘部の大半と周溝の南辺を除く3辺を検出した。北東・北西の2隅に陸橋部を残すが、東辺南端で周溝が若干閉じかける様子が見られることから、南東隅にも陸橋部が残る可能性が高い。北辺および東辺でS X 14に、西辺でS X 24にそれぞれ重複し、いずれにも後行する（断面C-C'、断面D-D'）。弥生後期後葉の土器（第70図1～6）が出土した。

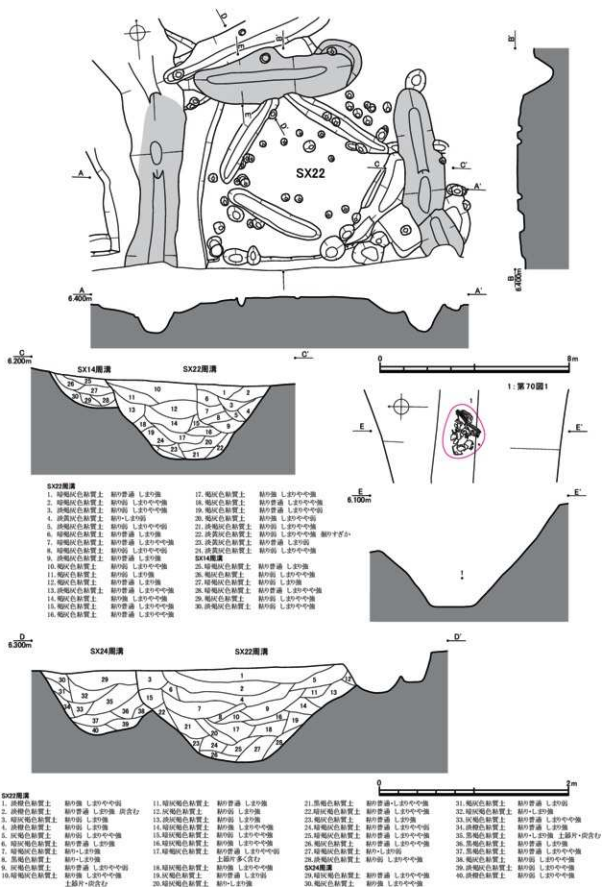
S X 23（第38図） 墳丘部と周溝のいずれも北半部を検出した。墳丘部は円形を呈する。周溝は袂状に廻り、少なくとも西方に1箇所陸橋部を残す。東縁でS X 22に、北東縁でS X 24に、北西縁でS X 25にそれぞれ重複し、S X 22・25に後行する（断面C-C'、断面D-D'）。S X 24重複部断面（第42図断面D-D'）には切り合いを見出せなかった。古墳前期後葉の土器（第70図7～12）が出土した。

後述するS X 24出土土器の内容を考慮すると、S X 24に後行する可能性が高いと推測される。

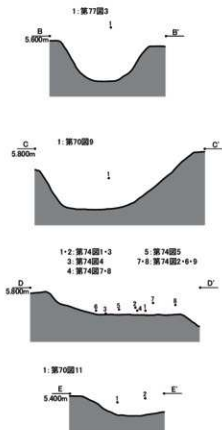
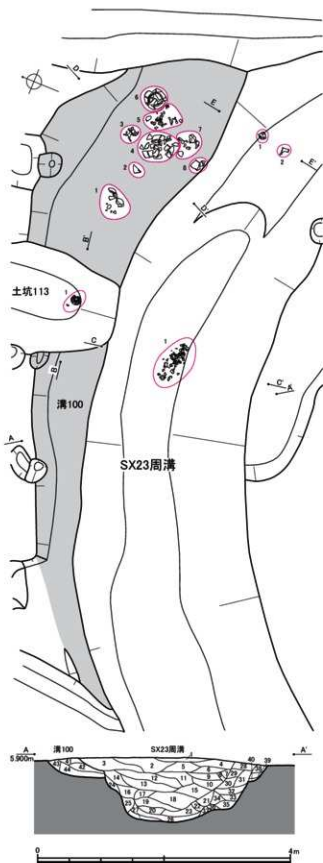
溝100（第39図） S X 23周溝北縁に外接する。S X 23に重複し、これに先行する（断面A-A'）。弥生後期後葉の土器（第74図）が出土した。

土坑111・112（第40図） ともにS X 23墳丘部に位置する。規模や形状が近似しており、長軸もほぼ同じ方向を向くことから、いずれもS X 23に付随する埋葬施設（墓塚）と推測される。

S X 24（第41・42図） 墳丘部と周溝をほぼすべて検出した。周溝は全周し、陸橋部を残さないものと推測される。東辺でS X 15に、北辺でS X 16に、南辺でS X 22に、西辺でS X 23とそれぞれ重複し、



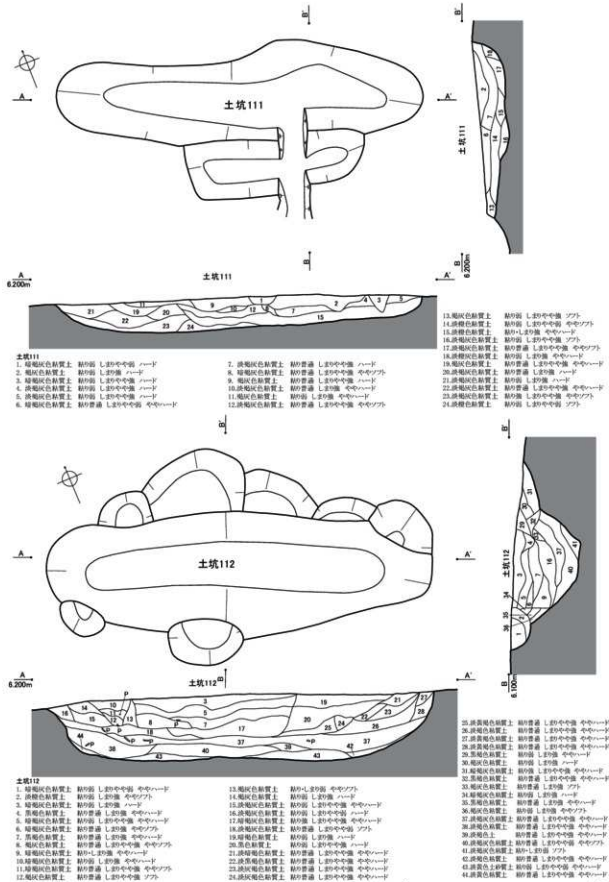
第37図 SX22実測図（平面図：縮尺1/160、断面図・出土状況図：縮尺1/40）



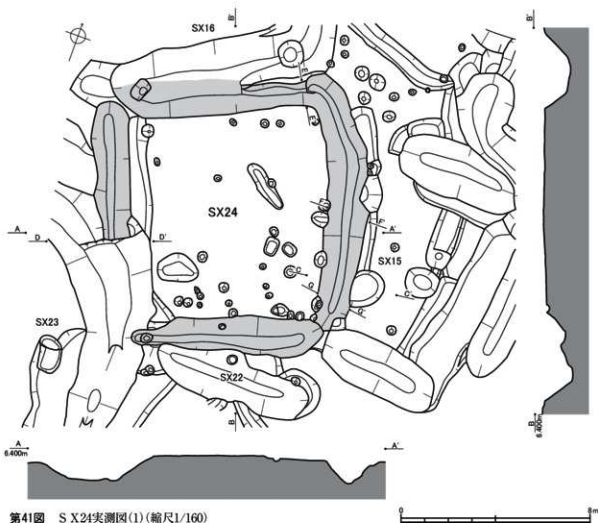
SX23周溝

1. 緑灰色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 2. 緑褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 3. 緑褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 4. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 5. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 6. 緑褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 7. 褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 8. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 9. 褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 10. 灰褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 11. 褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 12. 緑褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 13. 緑褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 14. 灰褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 15. 灰褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 16. 褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 17. 褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 18. 灰褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 19. 褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 20. 褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 21. 灰褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 22. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 23. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 24. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 25. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 26. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 27. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 28. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 29. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 30. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 31. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
- 溝100
41. 緑褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 42. 灰褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 43. 緑褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド
 44. 黄褐色粘質土 粘り強 土砂中含 砂+ド

第39図 S X23・溝100実測図(縮尺1/60)



第40図 土坑111・112実測図(縮尺1/40)



第41図 SX24実測図(1)(縮尺1/160)

SX16に後行(第31図断面G-G')、SX22に先行する(第37図断面D-D'、第42図断面D-D')。SX15・23重複断面(第42図断面C-C'、第42図断面D-D')には、いずれも切り合いが見出せなかった。弥生中期後葉の土器(第71図1～3)や、打製石鎌(第92図23)、石庖丁(第93図4)が出土した。

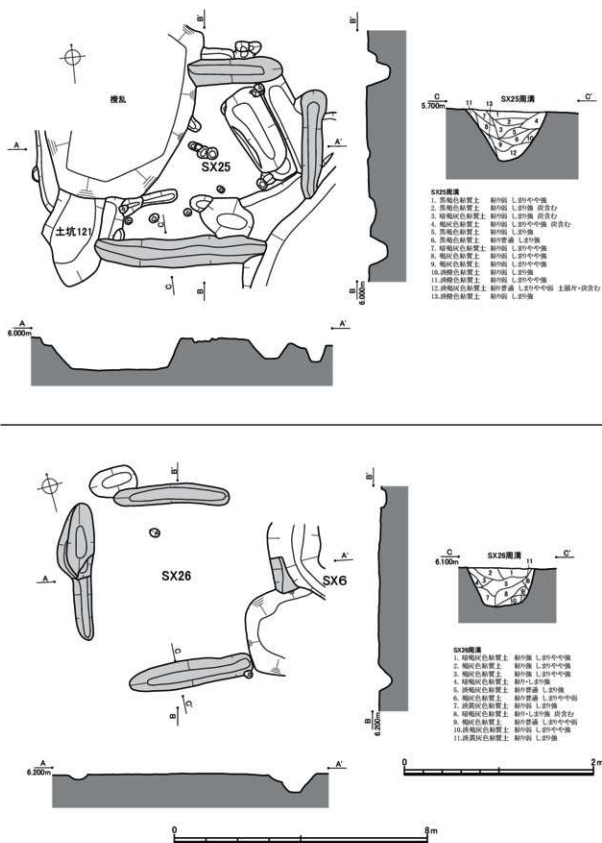
前述のように、SX15・23各出土土器の内容を考慮すると、SX15・23いずれにも先行する可能性が高いと推測される。

SX25(第43図) 墳丘部および周溝の北西半部を攪乱で大きく欠失する。墳丘部は方形を呈すると推測されるが、正確な形状や規模は把握し得ない。少なくとも北東隅に1箇所の陸橋部を残す。北東隅でSX23に重複し、これに先行する(第38図断面C-C')。打製石鎌(第92図22)が出土した。

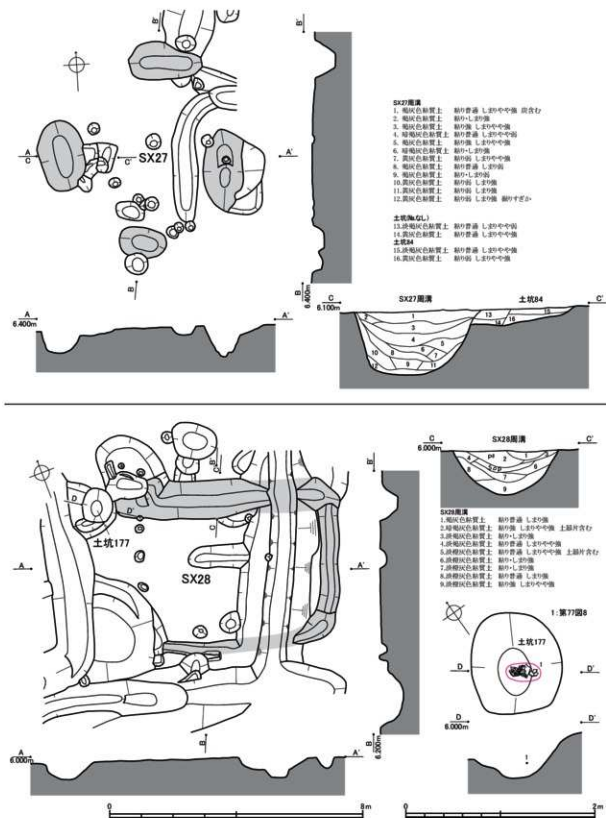
SX26(第43図) 墳丘部をほぼすべてと周溝の大半を検出した。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。東辺でSX6と重複するが、先後関係は不明である。

SX27(第44図) 墳丘部と周溝のほぼすべてを検出した。墳丘部は方形を呈すると推測されるが、周溝がほぼ楕円形の土坑のような外形であるため、輪郭は全く判別できない。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。東辺でSX4に重複するが、周溝が直接切り合わないため、先後関係は不明である。

SX28(第44図) 墳丘部および周溝の一部を検出した。北辺の周溝西端が閉じているので、少なくとも1箇所の陸橋部を残すと見られる。



第43図 S X 25・26実測図（平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40）



土坑177（第44図）SX28周溝北辺西端に外接する。弥生中期中葉の土器（第77図8）や石廬丁（第93図2）が出土した。

SX29（第45図）墳丘部と周溝の南半部を検出した。陸橋部は確認できない。直接重複してはいないが、南に隣接するSX20に後行する（断面図D-D'）。また、東に隣接するSX21に重複すると推測されるが、重複部は調査区外であり、先後関係を判定できなかった。弥生中期後葉の土器（第71図4）や打製石鏃（第92図17）が出土した。

SX30（第46図）墳丘部と周溝をすべて検出した。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残す。墳丘部の中央に地山の掘削土を用いたと見られる盛土を施す（エレベーションA-A'・B-B'）が、このような盛土を検出したのはSX30のみである。盛土は平面形状で楕円形に近い隅丸長方形を呈し、その規模は長軸7.04m、短軸5.04m、最大厚0.54mをそれぞれ測る。また、盛土の裾には幅50～100cm、深さ2～20cmの浅い溝状のくぼみがあり、何らかの意図で起伏を作出した可能性も指摘できる。西辺でSX36に重複し、これに後行する（断面C-C'）。打製石鏃（第92図11・16）や磨製石斧（第93図8・11・17・21）、打製石斧（第94図11）、凹石（第96図10）が出土した。

土坑144（第48図）SX30墳丘部の北辺際、北東隅の陸橋部近くに位置する。SX30に後行する（断面B-B'）。SX30がある程度埋没した後に掘削された墓壙と考えられる。

SX31（第47図）墳丘部と周溝をすべて検出した。四隅に各1箇所、計4箇所の陸橋部を残すものと推定される。南東隅でSX32に、東辺でSX33に、北東隅でSX34にそれぞれ重複し、SX32に先行する（第49図断面C-C'）。SX33・34については、いずれも重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかった。

後述するSX32出土土器の内容を考慮すると、少なくとも弥生中期後葉以前の築造であると見なされる。なお、このことから推定し得るSX33・34との先後関係については、各項にて記述する。

SX32（第48・49図）墳丘部および周溝の北隅部のみ検出したため、正確な形状や規模は推定し得ない。北隅でSX31に重複し、これに後行する（第49図断面C-C'）。弥生中期後葉の土器（第71図5・6）が出土した。

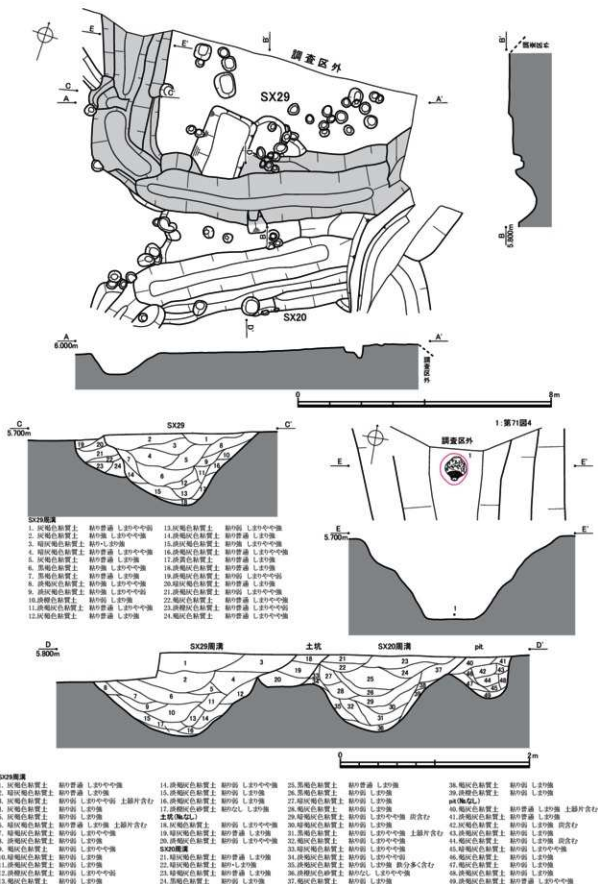
SX33（第49図）墳丘部のすべてと周溝の大半を検出した。北西隅に1箇所の陸橋部を残す。SX34の入れ子になっていることから、SX34に先行している可能性が高い。西辺でSX31に重複するが、重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかった。弥生後期後葉の土器（第71図7）が出土した。

出土土器の内容とSX31の推定築造時期を考慮すると、SX31に後行する可能性が高いと推定される。

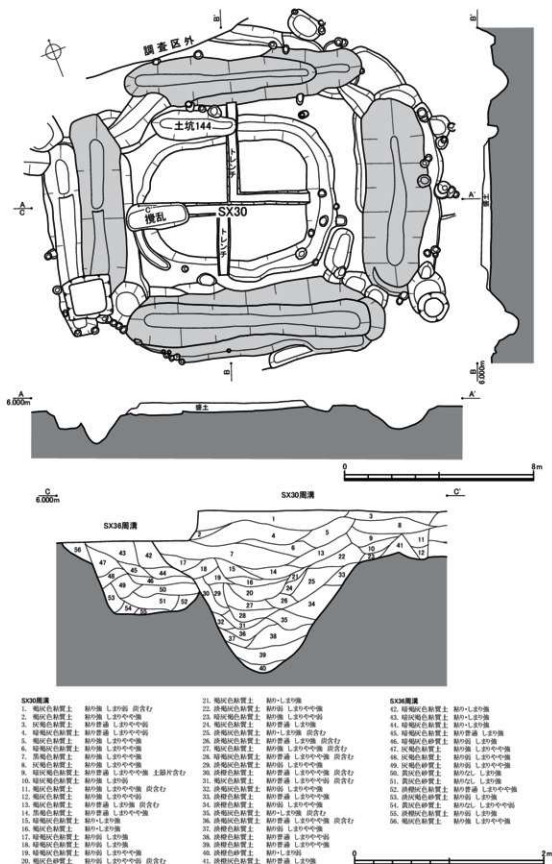
SX34（第50図）墳丘部および周溝の北半部のみ検出した。墳丘部は方形もしくは多角形を呈すると推測される。北東辺でSX20に、西隅でSX31に重複し、SX20に後行する（断面D-D'）。SX31については、重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかった。弥生後期後葉の土器（第71図8）や打製石斧（第94図8）、凹石（第96図9）が出土した。

出土土器の内容とSX31の推定築造時期を考慮すると、SX31に後行する可能性が高いと推定される。

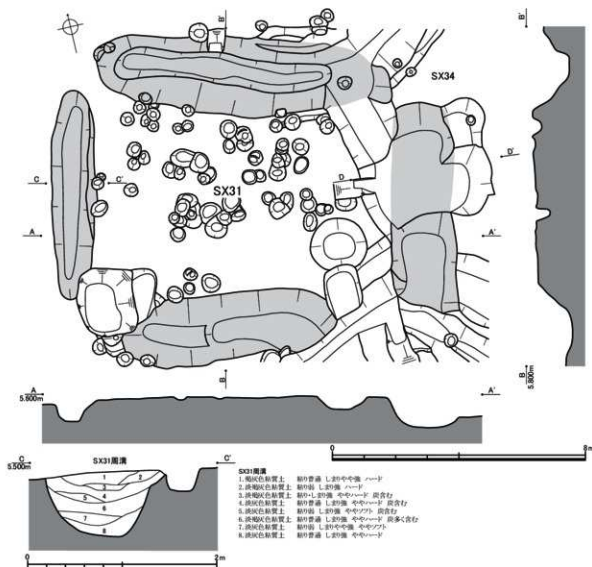
SX35（第51・52図）墳丘部および周溝の南半部を検出した。東辺中央に1箇所の陸橋部を残す。墳丘部の規模（東西長）はSX1におよばないものの、南北長は21.00m以上を測るものと推定され、SX1にはほぼ匹敵する規模を持つと考えられる。東辺ではSX36に、南辺でSX37に重複し、SX37に先行する（第52図断面D-D'）。SX36重複部断面には切り合いを見出せなかった。弥生後期後葉の土器（第71図9～11）や楔形石器（第92図42）が出土しており、後述するSX36出土土器の時期を考慮



第45図 SX29実測図(平面図・縮尺1/120、断面図・出土状況図:縮尺1/40)



第46図 SX30実測図（平面図：縮尺1/160、断面図：縮尺1/40）



第47図 SX31実測図（平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40）

すると、SX36に後行する可能性が高いと推測される。

当地の自然地形は周辺より相当隆起しており、これを利用して周溝墓を築造したものと考えられる。

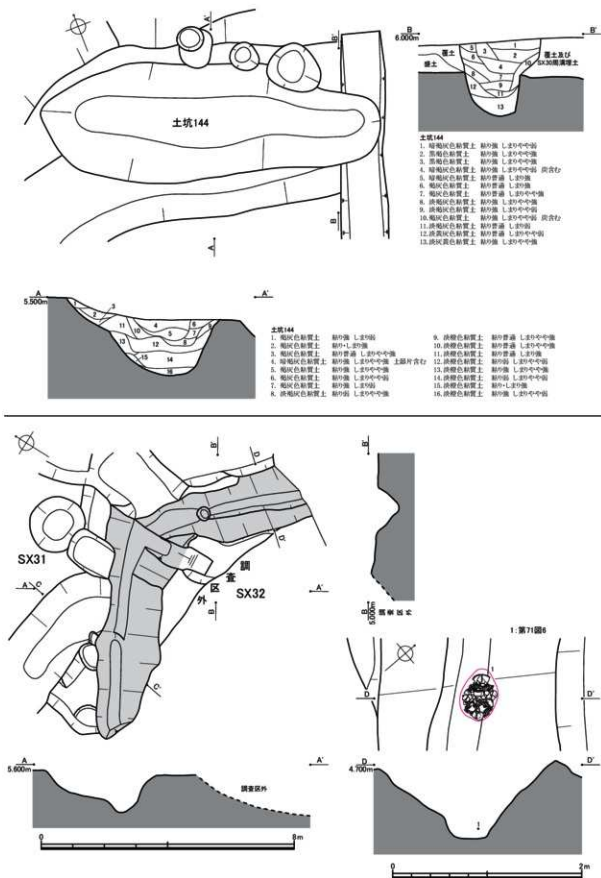
土坑174（第53図） SX35墳丘部に位置する。平面形は長方形を呈し、SX35の主体部と推測される。なお、本遺構は上層遺構面で偶然検出され、断面図も上層調査時に作成したため、下層調査時に改めて作成した平面図とは、外形や深さなどに齟齬がある。

SX36（第54図） 墳丘部と周溝をすべて検出した。周溝南東隅に1箇所の陸橋部を残す。東辺でSX30に、西辺でSX35に重複し、SX30に先行する（第47図断面C-C'）。弥生中期中葉および後葉の土器（第72図1・2）が出土した。

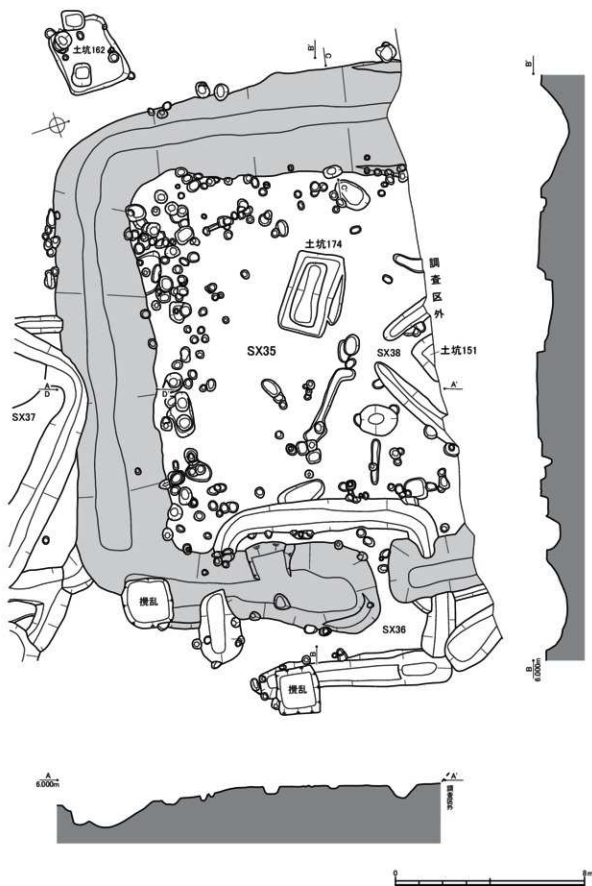
前述のように、SX35出土土器の時期を考慮すると、SX35に先行する可能性が高いと推測される。

溝111（第54図） SX36周溝の北東隅に重複するが、重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかった。周溝墓の周溝である可能性が高い。弥生後期後葉～終末期の土器（第75図5）が出土した。

SX37（第55図） 墳丘部および周溝の南半部を検出した。北隅でSX35に重複し、これに後行する（第52図D-D'）。また、北西辺で建物5・溝129に重複し、これに先行する（断面D-D'）。

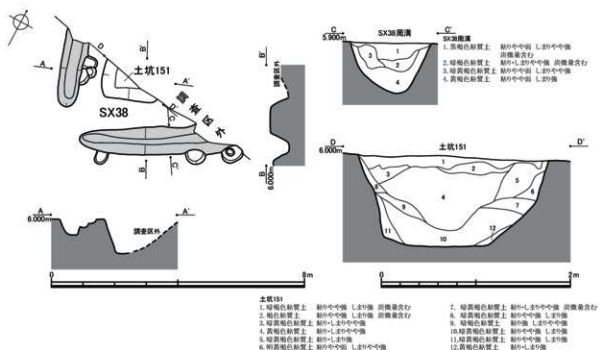
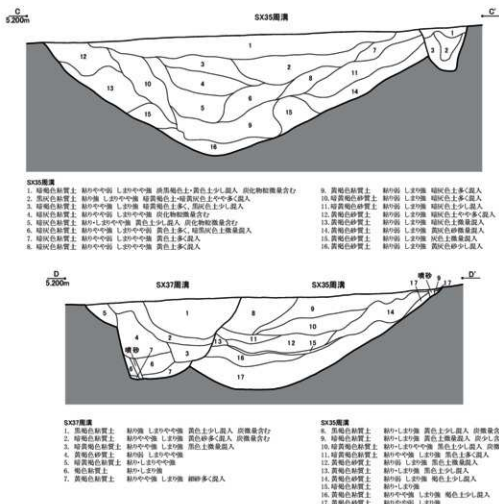


第48図 土坑144・SX32実測図（SX32平面図：縮尺1/120、土坑144平面図・断面図：縮尺1/40）

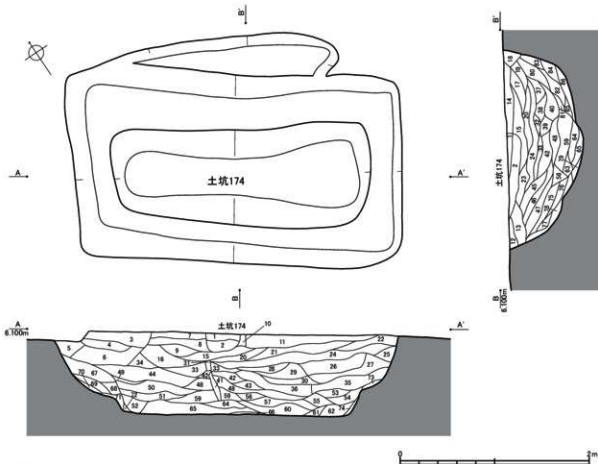


第51図 S X35・38実測図(1)(縮尺1/160)

第2節 Ⅱ区：平成13～16年度調査区



第52図 S X35・38実測図(2)(平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40)



土坑174

1. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト 炭少し含む
2. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
3. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
4. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
5. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ハード
6. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
7. 灰褐色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
8. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
9. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
10. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
11. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
12. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト 炭含む
13. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
14. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
15. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
16. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト 炭含む
17. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
18. 層間色粘質土 断面別 しまり強 ハード
19. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
20. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
21. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
22. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 ハード
23. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
24. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
25. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
26. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト 土層片含む
27. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
28. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト

29. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
30. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
31. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
32. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ハード
33. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
34. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
35. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
36. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
37. 層間色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
38. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
39. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
40. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
41. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
42. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
43. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
44. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
45. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
46. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
47. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
48. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
49. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
50. 層間色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
51. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
52. 層間色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
53. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
54. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
55. 層間色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
56. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
57. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト

58. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
59. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
60. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
61. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
62. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
63. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
64. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
65. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
66. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
67. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
68. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
69. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
70. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
71. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
72. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
73. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト
74. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
75. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
76. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
77. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
78. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
79. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 ソフト
80. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
81. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
82. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
83. 層間色粘質土 断面別 しまり強 中ヤマト
84. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
85. 層間色粘質土 断面別 しまり中強 中ヤマト
86. 洪積灰色粘質土 断面別 しまり強 ソフト

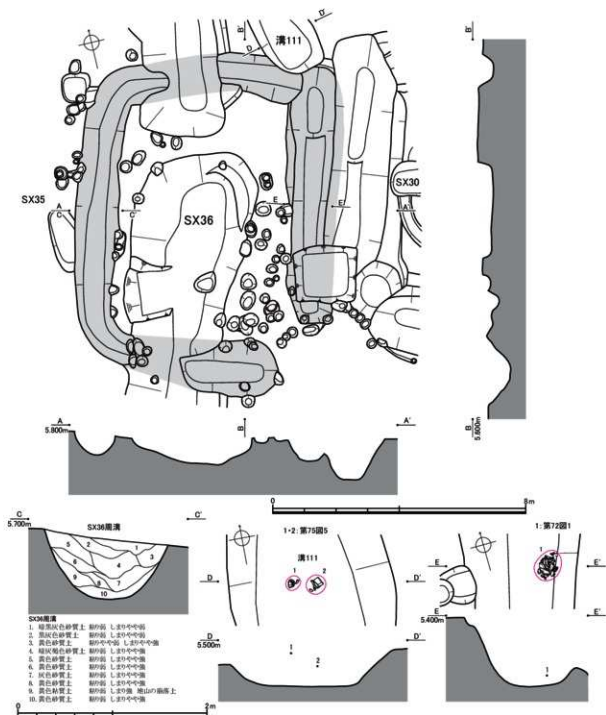
第53図 土坑174実測図(縮尺1/40)

土坑148(第56図) S X 37墳丘部に位置する。S X 37に伴う埋葬施設の可能性がある。磨製石鏃(第92図4)が出土した。

S X 38(第52図) 墳丘部および周溝の一部を検出した。少なくとも周溝南側に1ヶ所の陸橋を残す。S X 35の入れ子になっていることから、S X 35に先行する可能性が高いと推測される。

土坑151(第52図) S X 38墳丘部に位置する。平面形は方形を呈すると推測され、S X 38に伴う埋葬施設と推定される。弥生中期のものと見られる土器片を転用した紡錘車(第72図3)が出土した。

S X 39(第58図) 墳丘部および周溝をすべて検出した。周溝南西辺の両端に2箇所の陸橋を残す。



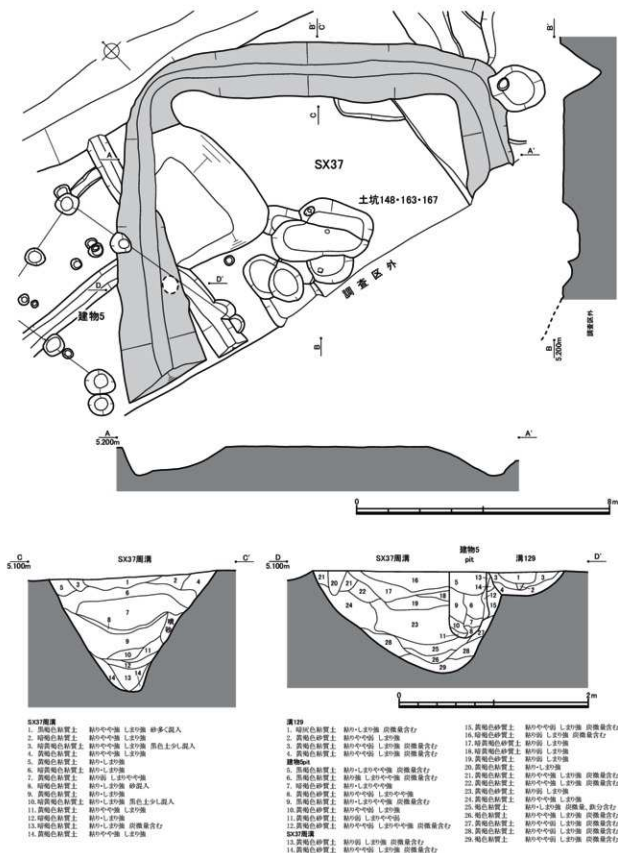
第54図 SX36実測図（平面図：縮尺1/120、断面図・出土状況図：縮尺1/40）

北西隅で溝133に非常に近接するが、重複しない。

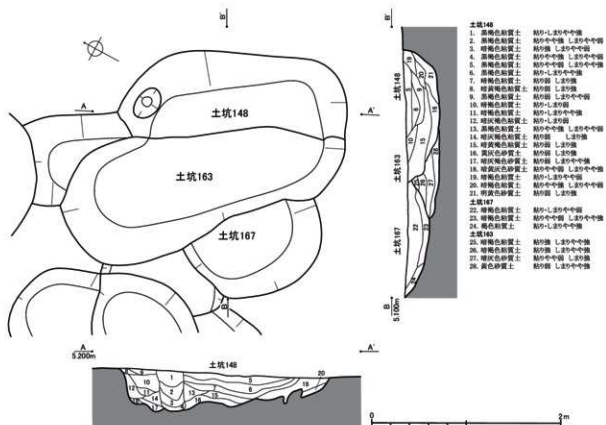
S X40（第57図） 填丘部および周溝の南半部を検出した。陸橋部は確認できない。

溝133（第57図） 幅0.60～0.98m、深さ0.13～0.66mを測る。S X40の外側で円弧を描いて廻り、南西縁に5.00mほどの開口部を残す。S X39北東隅およびS X40南東隅に非常に近接するが、いずれにも重複しない。

この溝については、周溝墓に関連した遺構ではなく、例えば前節で触れたような平地住居、もしくは建造物に伴う周溝である可能性が想定される。建造物に伴う周溝と仮定した場合、その区画内に位置す



第55图 SX37实测图(平面图: 縮尺1/120、断面图: 縮尺1/40)



第56図 土坑148・163・167実測図（縮尺1/40）

るS X 40もまた周溝墓ではなく、同様の周溝および区画の一部である可能性も同時に想定されるが、現状ではいずれとも判断しがたい。

S X 41（第58図） 墳丘部および周溝の南辺を検出した。周溝南西辺の両端に2箇所の陸橋部を残すが、南端の陸橋部は非常に狭小で、西端の陸橋部のみ明瞭である。東側にある溝133との間の地形は急激に沈降しており、自然隆起地形の周縁に周溝を巡らせた状況が推測される。弥生後期後葉と見られる土器（第72図4）が出土した。

S X 41は一連の周溝墓群から離れ、孤立した位置にある。さらに前項で指摘したように、S X 40が周溝墓でない場合、S X 41と周溝墓群の位置関係は一層隔絶したものになり、S X 40と同様にS X 41も周溝墓以外の、周溝を伴う何らかの遺構である可能性に留意すべきとも考えられるが、これもやはり現状で結論を下すのは困難である。

3) 所属時期

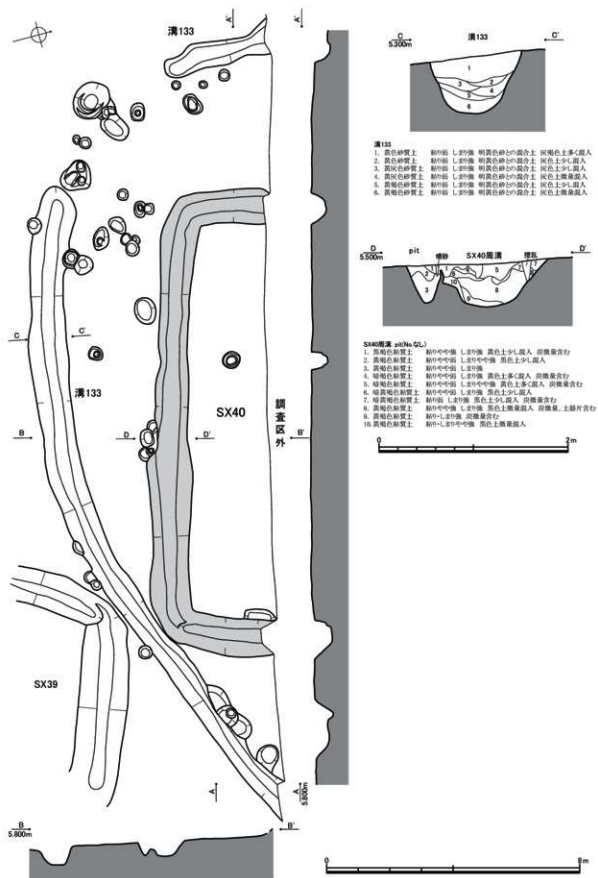
今回判明した周溝墓間の先後関係（第3表）および出土土器から、おおよその所属時期を推定し得る周溝墓を時期別に列挙する。

弥生中期に属すると推定されるのは、S X 14・16・19・20・21・24・29・31・32・36である。

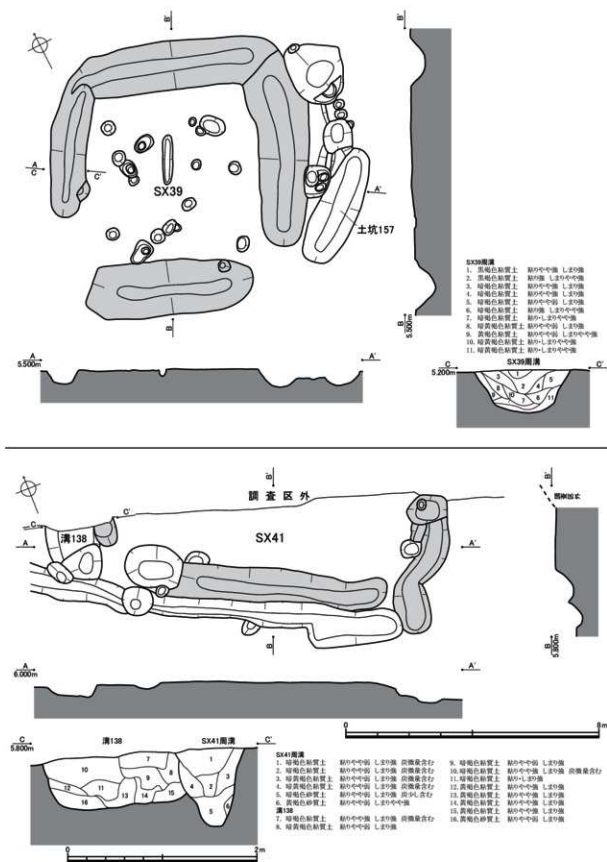
弥生後期に属すると推定されるのは、S X 22・33・34・35である。

弥生終末期に属すると推定されるのは、S X 15である。

古墳前期に属すると推定されるのは、S X 1・3・6・12・23である。



第57図 S X 40・溝133実測図 (平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40)



第58図 S X 39・41実測図(平面図：縮尺1/120、断面図：縮尺1/40)

第4章 遺構

第3表 周溝墓一覧表 (数値の単位はすべてm、カッコ付き数値は残存値)

名称	検出区	陣岡No.	形態(墳丘部・周溝)	墳丘部		各周溝の計測値(最大長×最大幅×深さ、SX23のみ最大幅×深さ)			
				長軸	短軸	東	西	南	北
SX1	A-F74~80	第17回	前方後方形・全周	20.75	18.25	(23.65)×(4.15)×0.24	(23.40)×(7.10)×0.36	(28.80)×(8.05)×0.42	(18.60)×(5.90)×0.55
SX2	Z-A78~80	第18回	方形・不明	8.10	—	(3.40)×1.36×0.13	(4.52)×1.44×0.30	—	8.24×1.40×0.09
SX3	Z-B73~77	第19回	方形・一辺切れ	12.68	11.88	13.16×2.72×0.62	(8.88)×1.52×0.63	(7.72)×2.76×0.51	14.24×1.88×0.59
SX4	Z-A70~72	第18回	方形・一隅切れ	4.92	3.99	4.50×0.75×0.23	3.66×0.51×0.27	4.62×0.75×0.15	5.31×0.78×0.09
SX5	B72	第18回	方形・不明	—	—	—	(3.93)×0.72×0.20	—	2.94×0.69×0.20
SX6	B-E72~75	第20回	方形・一辺切れ	9.93	9.75	10.53×1.83×0.76	10.41×1.77×0.67	10.92×1.11×0.76	8.94×1.98×0.77
SX7	E-F73~75	第21回	方形・一辺切れ	(6.72)	6.00	(5.76)×0.78×0.31	—	(2.88)×0.90×0.33	(6.78)×0.78×0.42
SX8	D-F72~74	第22回	方形・一隅切れ	8.28	7.47	7.68×0.84×0.55	8.40×1.50×0.47	7.59×2.22×0.63	9.24×1.56×0.35
SX9	D-F70~73	第23回	方形・一辺切れ	10.86	8.40	(8.82)×1.77×0.61	(7.44)×2.10×0.26	(11.16)×2.16×0.50	(6.06)×1.80×0.50
SX10	F-G73-74	第24回	不明・不明	—	—	—	—	(6.51)×1.59×0.34	—
SX11	A68・69	第24回	方形・四隅切れ	4.02	2.91	1.38×0.54×0.29	1.89×0.93×0.31	1.92×0.72×0.31	(1.38)×0.66×0.46
SX12	D-F67~69	第25・26回	方形・一辺切れ	11.40	—	(8.34)×1.50×0.57	(3.55)×2.40×0.83	11.97×2.37×0.80	—
SX13	E-F66~68	第27回	不明・不明	—	—	—	—	(8.73)×(2.10)×(0.90)	—
SX14	A-B65-66	第27回	方形・四隅切れ	6.30	4.38	(4.47)×1.50×0.57	(4.20)×0.81×0.45	4.32×0.90×0.28	(5.04)×0.84×0.24
SX15	B-E66~68	第28・29回	方形・四隅切れ	8.58	(7.26)	6.27×2.31×0.97	—	5.10×2.13×1.13	(5.13)×2.40×1.00
SX16	D-G63~65	第30・31回	方形・全周	11.10	10.65	(8.76)×2.07×1.04	13.41×2.22×0.84	12.39×2.10×1.07	(7.56)×1.98×0.90
SX17	E-F64	第30回	方形・四隅切れ	3.60	3.12	2.40×0.72×0.43	(1.50)×0.63×0.22	2.31×0.78×0.49	2.70×0.63×0.36
SX18	A-D67~71	第32回	方形・四隅切れ	16.00	11.16	8.88×1.72×0.47	(9.46)×2.24×1.03	(4.84)×2.64×1.09	(13.66)×(2.04)×0.62
SX19	B-D68~70	第33回	方形・四隅切れ	8.91	8.79	2.64×1.20×0.56	3.64×1.11×0.74	6.21×1.11×0.62	(6.48)×(1.17)×(0.22)
SX20	D-C60~63	第34回	方形・全周	10.47	9.33	(11.43)×1.80×0.62	(10.29)×2.04×1.12	(8.94)×2.13×0.99	(8.49)×1.32×0.50
SX21	F-G62-63	第36回	不明・不明	—	—	—	—	(8.04)×1.77×0.63	—
SX22	Z-B64~67	第37回	方形・不明	10.92	—	(6.80)×1.88×1.10	(7.30)×2.16×1.20	—	6.72×2.20×1.18
SX23	A-D61~65	第38・39回	円形・块状	14.84	—	(1.68)×0.81	2.88×0.90	—	(2.56)×0.91
SX24	B-E64~66	第41・42回	方形・全周	10.08	9.76	10.36×1.80×0.82	(5.88)×1.60×0.66	(8.16)×1.60×0.84	(9.60)×1.12×0.75
SX25	C-D60~62	第43回	方形・不明	5.34	—	(3.75)×0.84×0.50	—	(5.49)×0.93×0.56	(3.00)×0.84×0.75
SX26	C-D71~72	第43回	方形・四隅切れ	6.27	5.52	(1.17)×(0.75)×0.27	4.38×1.20×0.36	3.96×0.87×0.42	3.66×0.83×0.16
SX27	Z-B70-71	第44回	方形・四隅切れ	5.19	4.77	2.64×(1.26)×0.99	2.22×1.50×0.72	1.50×0.84×0.40	2.34×1.23×0.60
SX28	D-E70-71	第44回	方形・不明	4.41	—	4.95×0.63×0.41	—	(5.22)×0.45×0.16	(7.14)×1.23×0.52
SX29	G-H59~61	第45回	方形・不明	9.24	—	—	(5.43)×2.16×0.80	(9.03)×1.59×0.65	—
SX30	E-H56~59	第46回	方形・四隅切れ	12.44	9.96	8.40×2.84×1.05	(8.76)×1.92×1.23	10.32×3.28×1.08	10.08×2.20×0.92
SX31	C-E56~59	第47回	方形・四隅切れ	10.41	7.50	(6.66)×2.10×0.74	6.66×1.44×0.70	(6.87)×2.16×0.97	9.45×2.52×1.20
SX32	B-C57~59	第48・49回	方形・不明	—	—	(6.30)×1.92×0.78	—	—	(7.44)×2.04×1.43
SX33	C-D59・60	第49回	方形・一隅切れ	4.56	3.75	(4.44)×(0.60)×(0.38)	(3.75)×(1.32)×(0.61)	(5.10)×(1.14)×(0.36)	(4.26)×1.20×0.56
SX34	D-E58~61	第50回	方形・不明	7.29	—	(5.91)×1.80×0.81	(3.96)×1.92×0.77	—	9.00×2.19×0.80
SX35	E-J51~56	第51・52回	方形・一辺切れ	19.52	—	(15.32)×3.68×0.80	(14.68)×4.80×1.26	21.68×4.00×1.15	—
SX36	F-H55~57	第54回	方形・一隅切れ	9.15	6.21	8.13×(1.50)×0.90	9.15×1.44×0.54	5.88×1.80×0.75	(7.50)×1.29×0.48
SX37	D-F51~54	第55回	方形・不明	10.76	—	(4.50)×1.56×0.89	9.60×2.67×0.98	—	(11.10)×1.89×1.08
SX38	H-I54-55	第52回	方形・不明	—	—	—	(2.34)×0.81×0.56	(4.92)×0.90×0.62	—
SX39	H-I48~50	第58回	方形・二隅切れ	6.84	6.52	6.51×1.92×0.67	5.16×1.20×0.58	5.40×1.74×0.72	(7.29)×1.56×0.53
SX40	J-K46~49	第57回	方形・不明	13.20	—	(3.66)×1.23×0.56	(3.12)×1.17×0.52	14.22×1.44×0.49	—
SX41	K-M42~45	第58回	方形・不明	10.40	—	(4.65)×1.14×0.20	(9.72)×0.72×0.82	(6.57)×1.11×0.65	—

第2節 Ⅱ区：平成13～16年度調査区

※方位は墳丘部の長軸を基本とし、前方後方は前方部の、円形や一边の中央に陪植部を残すものは陪植部の方位とした。

方位	各周溝底面標高値				埋葬施設 (基数)	出土遺物	遺構先後関係 (古→新:推定含む)	備考
	東	西	南	北				
N17°E	5.57	5.40	5.40	5.42	—	土器(古墳前期前半)、打製石鏃	SX3→SX1	
N82°E	5.85	5.74	—	5.77	—	—		
N55.5°W	5.51	5.45	5.54	5.36	—	土器(古墳前期前葉)	SX3→SX1	
N87.5°W	5.94	5.84	6.03	5.81	—	土器(弥生後期後葉)、打製石斧		
N9°E	—	5.90	—	5.89	—	—		
N41°E	5.20	5.21	5.36	5.17	—	土器(古墳前期)	SX8→SX6	
N22°E	5.68	—	5.63	5.58	—	—		
N82°W	5.43	5.59	5.22	5.41	—	土器(弥生中期中葉～後葉)	SX8→SX6・9	
N57°W	5.43	5.51	5.50	5.37	—	土器(弥生後期後葉～終末期)	SX8→SX9	
—	—	—	5.54	—	—			
N75°W	5.68	5.60	5.68	5.39	—	土器(弥生後期後葉～終末期)		
N5°E	5.14	4.91	4.82	—	—	土器(古墳前期)	SX15・18・24→SX12	
—	—	—	4.69	—	—	土器(弥生後期)、石鏃、楔形石器		
N58.5°W	5.62	5.77	5.95	5.97	—	土器(弥生中期後葉)、管玉	SX14→SX22	
N3°E	4.81	—	4.75	4.62	—	土器(弥生終末期)	SX18・24→SX15→SX12	
N26°W	4.72	4.96	4.96	4.95	—	土器(弥生中期後葉)	SX17・21→SX16→SX24	
N75°W	5.79	5.99	5.75	5.84	—		SX17→SX16	
N72°W	5.48	4.81	4.86	5.13	—		SX19→SX18→SX12・15	
N19°E	5.39	5.07	5.29	4.98	—	土器(弥生中期後葉)、石甕丁	SX19→SX12・15・18	北側周溝掘出。
N23°W	4.90	4.59	4.80	4.89	1	土器(弥生中期後葉)、打製石鏃・木製品、管玉	SX20→SX21・29・34	
—	—	—	5.40	—	—		SX20→SX21→SX16	
N83°W	4.85	4.80	—	4.90	—	土器(弥生後期後葉)	SX14・24→SX22→SX23	西溝切れか。
N74.5°W	4.80	4.80	—	4.90	2	土器(古墳前期後葉)	SX22・24・25→SX23	
N20°W	5.00	5.10	5.10	5.30	—	土器(弥生中期後葉)、打製石鏃、石甕丁	SX16→SX24→SX15・22・23	
N5°E	5.00	—	5.10	5.00	—	打製石鏃	SX25→SX23	西溝切れか。
N75°W	5.76	5.60	5.65	5.80	—			
N8.5°E	5.35	5.30	5.71	5.40	—			
N21°E	5.69	—	5.75	5.40	—	土器(弥生中期中葉)、石甕丁		
N72.5°E	—	4.79	4.81	—	—	土器(弥生中期後葉)、打製石鏃	SX20→SX29	
N71°W	4.46	3.97	4.23	4.63	—	打製石鏃、磨製石斧、打製石斧、凹石	SX36→SX30	
N77°W	4.46	4.75	4.36	4.37	—		SX31→SX32・33・34	
N30°W	3.88	—	—	3.81	—	土器(弥生中期後葉)	SX31→SX32	
N82°W	5.29	5.04	4.85	5.10	—	土器(弥生後期後葉)	SX31→SX33→SX34	
N55.5°E	4.82	4.70	—	4.74	—	土器(弥生後期後葉)、打製石斧、凹石	SX20・31・33→SX34	
N71°W	4.52	4.34	3.95	—	1	土器(弥生後期後葉)、楔形石器	SX36・38→SX35→SX37	
N13°E	4.52	4.80	4.43	4.82	—	土器(弥生中期中葉・後葉)	SX36→SX30・35・37	
N46°W	3.88	3.93	—	3.78	1	磨製石鏃	SX35・36・38→SX37	
N62.5°E	—	5.35	5.23	—	1		SX38→SX35・37	
N27°E	4.57	4.65	4.43	4.80	—			
N75°W	4.84	5.04	4.82	—	—			
N64°W	4.93	4.93	4.94	—	—	土器(弥生後期後葉)		東側周溝掘出。

第4表 土坑一覧表(1)

名称	検出区	碑図No.	平面形状	方位(長軸)	平面規模(m) 長軸×短軸	深さ(m)	出土遺物	備考
土坑172	E75	第21図	隅丸長方形	N36.5° E	(2.93)×(1.39)	0.50		SX7に後行
土坑175	F74-75	第21図	楕円形	N63.5° E	(2.06)×1.83	0.80	土器(弥生中期)	SX7墳丘部で検出
土坑125	F65	第31図	不定形	N62° W	2.84×2.32	0.48	土器(弥生中期中葉)、 四石	SX16墳丘部で検出
土坑126	E62	第34図	略長方形	N41° W	1.40×0.83	0.44	土器(弥生中期前葉)	SX20墳丘部で検出
土坑130	E-F61-62	第35図	長楕円形	N7.5° E	3.90×1.21	0.83		SX20墳丘部で検出
土坑111	B-C62-63	第40図	歪長楕円形	N68° W	3.90×1.65	0.34		SX23墳丘部で検出
土坑112	B62-63	第40図	長楕円形	N67.5° W	4.09×1.36	0.72		SX23墳丘部で検出
土坑177	E70	第44図	楕円形	N35° E	1.08×0.96	0.48	土器(弥生中期中葉)、 石函丁	SX28に近接
土坑144	G-H57-58	第48図	歪長楕円形	N66° W	3.61×1.28	0.80		SX30に後行
土坑151	I54	第52図	方形	N27.5° W	—	0.96	鈴鐺車(土器片転用)	SX38墳丘部で検出
土坑174	H53	第53図	長方形	N56° W	3.55×2.05	0.85		SX35墳丘部で検出
土坑148・163・167	D-E53	第56図	不定形	—	—	0.36		SX37墳丘部で検出

※遺構名は掲載順。

2 掘立柱建物

全体を検出し得たのが3棟(建物6～8)、部分的な検出にとどまったのが2棟(建物4・5)で、すべて掘立柱建物である。構造は建物4・6・8が3間×2間、建物7のみ2間×1間である。建物5は全体の構造を確定できないが、重複する建物4との類似性から3間×2間の可能性が高いと考えられる。柱間は建物4～6・8で桁行・梁行とも近似するが、建物7のみ異なる。柱穴は平面形が円形もしくは方形の掘り方を有し、方形が特に多い。このほか、各建物の詳細は一覧表(第5表)を参照されたい。

建物4(第59図) 柱間は桁行・梁行とも2.00～2.20mを測る。柱穴は平面形が直径50cm前後の略円形、もしくは一辺50～80cmの略方形の掘り方を有し、深さは40cm前後を測る。南東隅でSX37に、東桁行・南梁行で建物5に重複するが、いずれも重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかった。

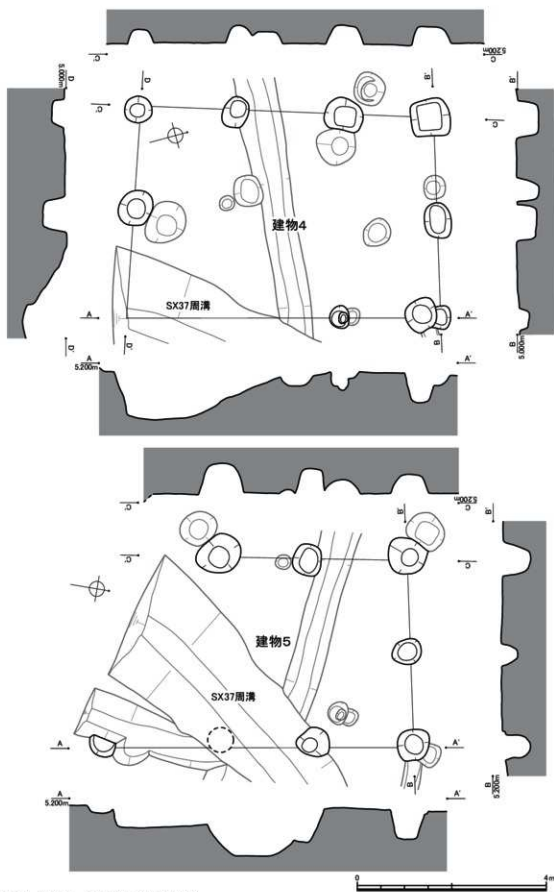
建物5(第59図) 柱間は桁行・梁行とも1.90～2.10mを測る。柱穴は平面形が略円形を呈するものが多く、直径は60～100cmまで大きさは様々である。柱穴の深さは20～70cmまでかなりばらつきがあるが、深さ60～70cmのものが最も多い。東桁行でSX37に重複し、これに後行する(第55図断面D-D')。

前述のように南梁行が確定しないが、建物4と柱穴の規模・構造や柱間が酷似していることから、建物4と同様の3間×2間建物が想定される。その場合、建物4も建物5と同様、SX37に後行する可能性が高いと推測される。

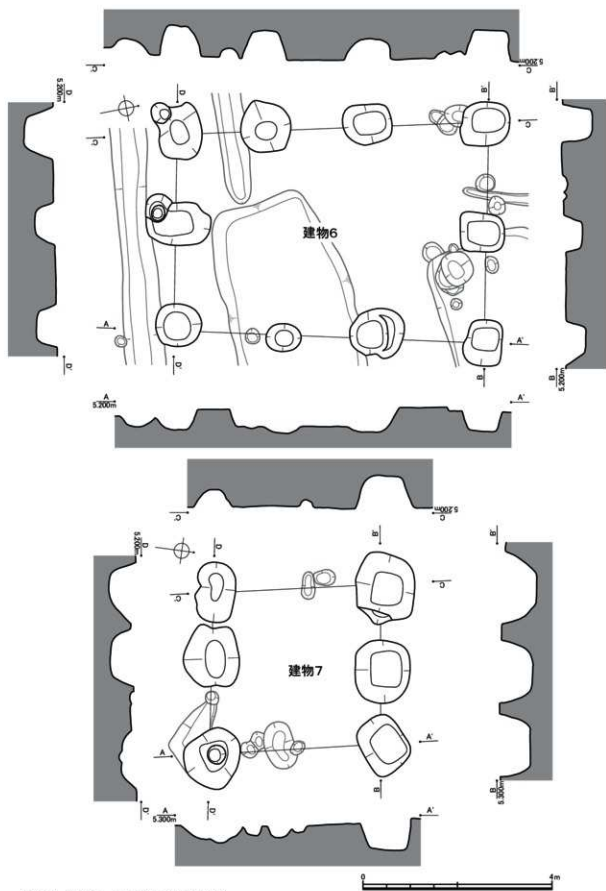
建物6(第60図) 柱間は桁行・梁行とも1.90～2.50mまでばらつきがあり、最も多いのは2.20～2.40mである。柱穴は平面形が長径70～100cmの楕円形、もしくは一辺80～140cmの略方形の掘り方を有し、深さは40～60cmを測る。北梁行で土坑162に重複し、これに後行する(第62図断面A-A')。

建物7(第60図) 柱間は桁行が1.60～1.80m、梁行は3.66mをそれぞれ測る。柱穴は平面形が一辺80～150cmの略方形の掘り方を有するものがほとんどで、深さは60～70cmを測る。北桁行で溝133に、東梁行・南桁行でSX39に、同じく南桁行で建物8にそれぞれ近接するが、いずれも重複しない。ただ、SX39とは北西隅階橋部を塞ぐ形になり、また建物8とは柱列が極端に近接するため、いずれとも所属時期が異なる可能性が高いと推測される。

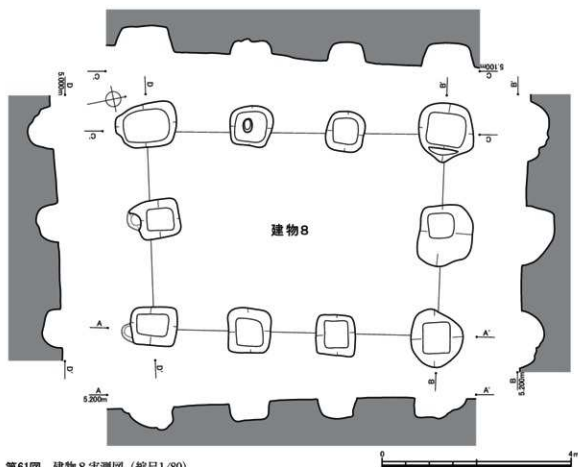
建物8(第61図) 柱間は桁行・梁行とも2.10m前後を測る。柱穴は平面形が比較的整った一辺80～130cmの略方形の掘り方を有し、深さは40～50cmを測る。北梁行でSX39および建物7と非常に近接するが、いずれも重複しない。前述のように、両遺構とは所属時期が異なる可能性が高いと推測される。



第59図 建物4・5尖測図(縮尺1/80)



第60図 建物6・7尖測図(縮尺1/80)



第61図 建物8実測図(縮尺1/80)

第5表 掘立柱建物一覧表(2)

名称	検出区	棟目No.	桁×梁	構造	方位 (桁行方向)	桁行(m)	梁行(m)	出土遺物	備考
建物4	E・F51・52	第59図	3×2	側柱	N14°E	6.22	4.26		建物5に重複
建物5	E・F51・52	第59図	3×2	側柱	N10°W	6.54	3.98		建物4に重複
建物6	F・G50・51	第60図	3×2	側柱	N11°E	6.62	4.70		土坑162に後行
建物7	H・I47・48	第60図	2×1	側柱	N83.5°E	3.42	3.66		
建物8	G・H47・48	第61図	3×2	側柱	N12°E	6.34	4.28		

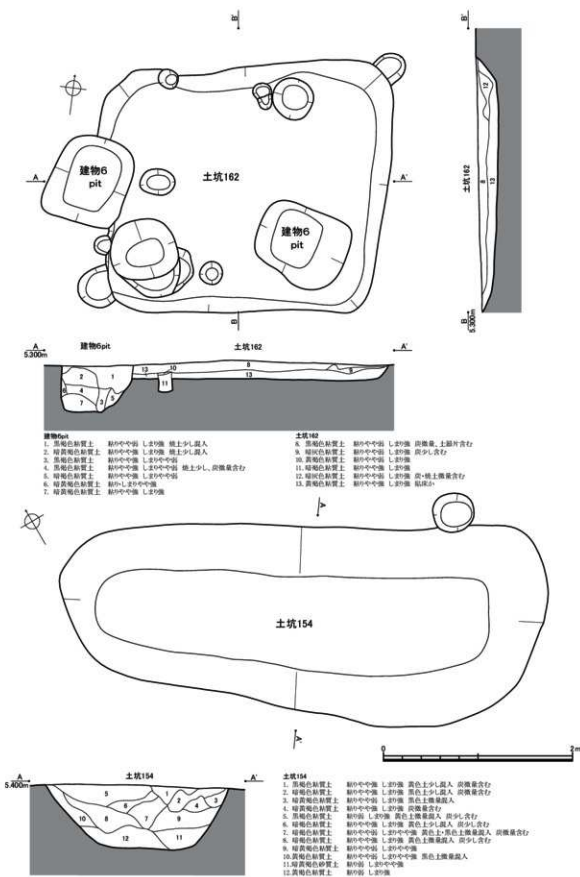
3 土坑

本項では、周溝墓の項で併記した以外の主要な土坑について記す。

土坑162(第62図) 平面形状は隅丸方形を呈し、覆土には炭や焼土が含まれ、底面には貼床が施されていたと推定される。土坑内および周辺に柱穴は検出し得なかった。建物6柱穴が覆土を掘り込んでいることから、建物6に先行することが知れる(断面A-A')。

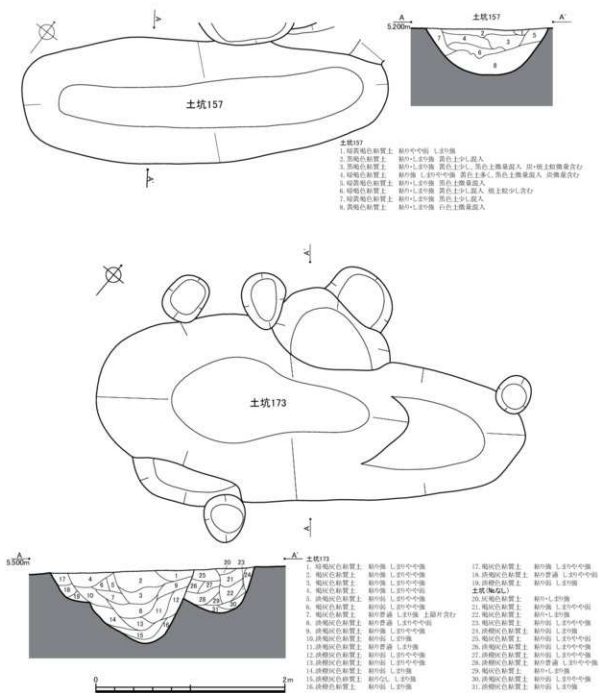
いわゆる竪穴住居の特徴を備えているが、現地調査時は、住居としては規模が小さ過ぎると判断し、暫定的に土坑とした。ただ、当調査区ではこの種の遺構をほかには検出しておらず、さらに貼床が施されていたことも考慮すると、純然たる居住空間ではなかったにせよ、当時の人々がこの遺構の内で何らかの活動をおこなうべく築造したものと考えられる。

土坑154・157・173(第62・63図) この3基はいずれも単独で築造された墓塚で、周溝墓には伴わないものと見られる。



第62図 土坑162・154実測図(縮尺1/40)

第2節 II区：平成13～16年度調査区



第63図 土坑157・173実測図(縮尺1/40)

第6表 土坑一覧表(2)

名称	検出区	挿図No.	平面形状	方位(長軸)	平面規模(m) 長軸×短軸	深さ(m)	出土遺物	備考
土坑162	C50-51	第62図	方形	N83°E	3.12×2.58	0.22		壁穴 建物6に先行
土坑154	I-50-51	第62図	長槽円形	N58°W	5.19×2.10	0.66		
土坑157	H50	第63図	長槽円形	N51°E	3.89×1.33	0.48		SK39に近接
土坑173	D-E56	第63図	長槽円形	N57°E	4.58×(1.95)	0.78		

※遺構名は掲載前。

第3節 Ⅲ区〔図版第21、第8・64図、第7表〕

Ⅲ区で検出した下層遺構は、住居1棟、溝3条、土坑13基、ピット26基をそれぞれ数える。調査区が狭小であるため、ごく小規模な土坑・ピットを除いては、ほとんどの遺構が部分的検出にとどまった。住居をはじめとして、比較的大型の遺構が多く密集する印象を受けるが、調査範囲はごく限られており、積極的に評価できない。

本節ではこれら遺構のうち、主要な遺構を抽出して記述する。各遺構の詳細については、遺構一覧表(第7表)を参照されたい。

1 住居

住居1(第64図) T・U38・39区で、南西隅および南・西・北辺の各一部を検出した。いわゆる堅穴住居である。平面形状は東西に長い隅丸長方形を呈すると推定される。各辺の向きは東西-南北方向にほぼ準拠するが、3辺のうち北辺だけが他辺とやや向きが逸れている。

部分的な検出にとどまったため、住居の長辺・短辺はいずれも確定しないが、最大長は7.34m以上、最大幅は6.40m前後と推定される。深さは0.12m(壁溝除く)を測り、床面の標高は6.00~6.09mの範囲で変移するが、場所による偏りは特になく、おおむね平坦と言って良い。また、壁際に幅0.30~0.50m、深さ0.15~0.40mを測る壁溝が巡り、特に南西隅で西辺の壁溝が2条に分かれて並走する。

床面に主柱穴と見られる遺構(住1p1~3、土坑2)を検出しており、これもやはり東西-南北方向に向きがほぼ準拠する、柱穴列を構成している可能性が高い。柱穴は掘り方の平面形や大きさが様々で一定しないが、深さは0.69~0.76mの範囲で近似する(エレベーションC-C'・D-D')。

中央付近で溝2に、西辺で土坑10にそれぞれ重複し、いずれにも先行する(住居1断面A-A')。また、北側で溝3にも重複しているが、重複部断面を得られず、先後関係を判定できなかった。

9・10世紀代に属すると見られる、須恵器の坏・埴・坏蓋(第99図1~3)が出土した。

2 溝

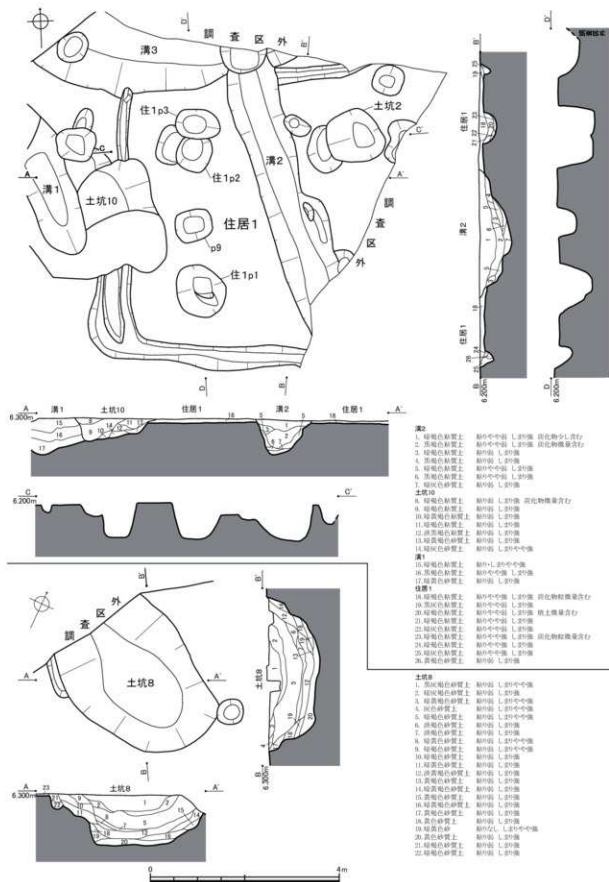
溝1(第8・64図) T・U39区で検出した。当初は中央で屈曲する細い落ち込みを溝と判断したが、実際は南縁が土坑8に接する、幅広い落ち込みである。

幅2.63~3.32m、深さ0.68~0.80m、溝底の標高は5.30~5.41mをそれぞれ測り、北西方向へ緩やかに下降する。方向はN21°WからN41°Wへ屈曲していく。東端で土坑10に、南縁で土坑8にそれぞれ重複し、これらに先行する(前者は住居1断面A-A'、後者は調査時に調査区壁面を目視で確認)。

遺構の形状が不安定なところから、途中で掘削を中止・放棄された状況が想定される。

溝2(第64図) T・U39区で検出した。幅0.86~1.20m、深さ0.62~0.77m、溝底の標高は5.29~5.36mをそれぞれ測り、北方へ緩やかに下降する。方向はN15°Wを向き、調査区東辺から北辺を縦断している。溝のほぼ全体が住居1に、北端で溝3にそれぞれ重複し、これらに後行する(住居1断面A-A'、遺構精査時に溝3覆土切り合いを目視で確認)。須恵器の高台付の埴・坏蓋(第99図31)が出土した。

溝3(第64図) U38・39区で南壁のみ検出した。巨大な土坑である可能性も高いが、暫定的に溝と判断した。深さ0.11~0.49m、溝底の標高5.55~5.73mをそれぞれ測り、東方へ下降する。方向はN83°Wを向き、南壁は調査区北辺に沿って、西から弧を描きつつ北寄りに逸れる。東端で溝2に、南壁で住居1にそれぞれ重複し、溝2に先行する。前述のように、住居1との先後関係は不明である。



第64圖 住居1・溝1・2・土坑8・10実測図(縮尺1/80)

3 土坑

土坑6（第8図） S・T 37・38区で南縁の一部を除く大半を検出した。平面形状は長方形に近い長楕円形を呈する、浅皿状の土坑である。最大長4.00 m、最大幅1.50 m、深さ0.21 mを測る。長軸はN 70° Eを向く。

土坑8（第64図） T・U 37・38区で西端部を除く大半を検出した。全体の形状がうかがえる遺構としては、住居1以外で最も大きい遺構である。平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、最大長3.20 m、最大幅2.70 m、深さ1.11 mを測る。長軸はN 62° Wを向く。前述のように、北縁で溝1に重複し、これに後行する。

土坑10（第64図） T・U 38区で検出した。溝1の覆土を一部掘り込んでいたものと見られ、全体の形状は推測できない。深さ0.46 mを測る。住居1および溝1に重複し、これに後行する（住居1断面A-A'）。

第7表 Ⅲ区遺構一覧表

名称	検出区	拜図No.	平面形状	方位(長軸)	平面規模(m) 最大長×最大幅 (溝は幅のみ)	深さ(m)	出土遺物	備考
住居1	T・U38-39	第64図	隅丸長方形	N85°W	(7.34)×6.40	0.12	須恵器(坏・埴・坏蓋)	溝2・土坑10に先行
溝1	T・U39	第8・64図	—	N21°~41°W	2.68~3.32	0.68~0.80		土坑8・10に先行
溝2	T・U39	第64図	—	N15°W	0.86~1.20	0.62~0.77	須恵器(埴)	住居1・溝3に後行
溝3	U38-39	第64図	—	N83°W	(1.74)	0.11~0.49		溝2に先行
土坑6	S・T37-38	第8図	長楕円形	N70°E	(4.00)×1.50	0.21		
土坑8	T・U37-38	第64図	歪楕円形	N62°W	3.20×2.70	1.11		
土坑10	T・U38	第64図	—	—	—	0.46		住居1・溝1に後行

※遺構名は掲載順。

第5章 遺物

第1節 Ⅱ区：土器〔図版第22～32-（1）、第65～91図、第8表〕

本節で図示した土器は遺構出土品を中心とする330点で、主に弥生時代中期から古墳時代前期までの時期幅を有する。本文中の土器製作技術とその痕跡に関わる用語は、佐原真氏により体系化されたもの（佐原1964）を用い、「ヘラケズリ」などの片仮名表記とした。また、器種の名称は例えば「壺形土器」等をすべて「壺」と略して記した。

紙幅の都合により、各個体の詳述は避け、特筆すべき事項の記載に努めた。詳細については実測図・写真図版および観察表を参照されたい。

本文中で用いる時期区分について説明する。本遺跡が所在する福井県嶺北地域では、今回対象とする時期を網羅し、かつ汎用性を有する土器編年は未だ存在しないのが現状である。よって、研究の蓄積が多い石川県の研究成果との対応関係を示す。弥生時代中期は必要に応じて前葉・中葉・後葉に分け、福海貴子氏の編年（福海2003）では、前葉が3～5期、中葉が6～8期、後葉が9・10期とそれに後続する戸水B式に対応する。後期も同様に前葉・中葉・後葉に分け、田嶋明人氏の編年（田嶋1986・2007）では、前葉が仮称V-1期に、中葉がV-2・3期に、後葉が2群（法仏式）に対応する。続いて、弥生時代終末期を設け、3・4群に対応させる。古墳時代前期も前葉・中葉・後葉に分け、前葉が5・6群、中葉が7・8群、後葉が9・10群におおむね対応する⁽¹⁾。

1 遺構出土土器

S X 1 出土土器（第65図）

1は外来系譜の二重口縁壺で、頸部に突帯が見られる。2の壺は底部に焼成後穿孔をしている。外来系壺の存在と在来系壺（5・6）の口縁部の外反する形状から、これらは古墳前期前葉のものと思われる。なお、後述する包含層出土の第86図1もS X 1に伴う可能性が高い。

S X 3 出土土器（第66図）

古墳前期前葉のものが主である。1は口縁部を内傾して立ち上げる大型複合口縁壺で、北陸地方では珍しいが、西日本では当該期に一般的に見られるものである。口縁から頸部までの内面には樹脂状の黒色物の塗布が見られ、これもこの種の土器に多く認められる特徴である（畑1998）が、搬入品と断定できる胎土・焼成ではなかった。土器棺として使用される頻度の高い器種であり、土器棺墓の可能性もある。在来系壺（3～6・11）は、S X 1出土品と同様に強く外反するものが主である。高坏には在来系の有段口縁をもつもの（8）と、外来系の内湾口縁をもつもの（10）がある。有段口縁をもつ器台（7）と小型高坏（9）は弥生後期後葉と見られ、明らかな時期差がある。別遺構からの混入であろう。

S X 4・6 出土土器（第67図）

1・2はS X 4出土。いずれも小片で、弥生後期後葉のものと考えられるが、遺構の時期を示すかどうかは不明である。3～9はS X 6出土。3は大型の二重口縁壺である。在来系譜だが肩部に櫛波状文を施し、外来系の影響も見られる。口縁部外面の円形浮文は粘土紐を円板状に巻いて貼り付けている。古墳前期前葉のものであろう。4は古墳前期前葉の外来系の壺である。口縁部にハケム原体による羽状刺突文と竹管円形浮文を、肩部に櫛波状文と直線文をそれぞれ施す。出土状況（第22図）からはS X 6・8のいずれに帰属するか判別しかねるが、次項で示すS X 8出土土器（第68図1～6）が弥生中期



第65図 SX1出土土器実測図(縮尺1/4)

主体であることから、SX6に伴うものと考えられる。5の甕と9の高杯は弥生後期のものであり、混入品と考えられる。

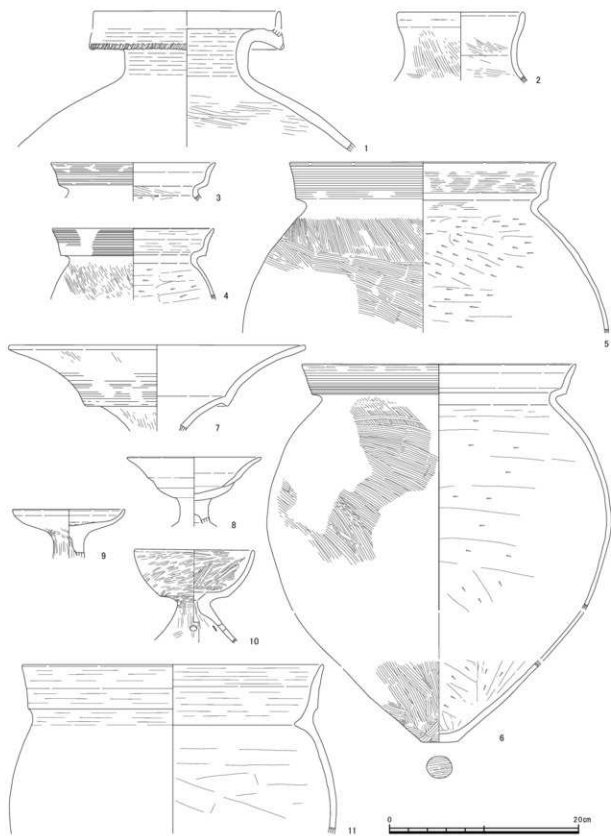
SX8・9・11～15出土土器(第68図)

1～6はSX8出土。3の壺は遺存状態が良く、遺構の時期を示す土器と考えられる。弥生中期後葉のものである。対して、1・2の壺や4・5の甕は中期前葉のものと見られ、別遺構からの混入と考えられる。7・8はSX9出土。8は脚台がつく無頸壺で、体部に突帯の装飾をもつ。弥生後期後葉か終末期でも古相を下限とするものであろう。SX11出土の9は台付無頸壺で、弥生後期後葉から終末期のものと見られる。

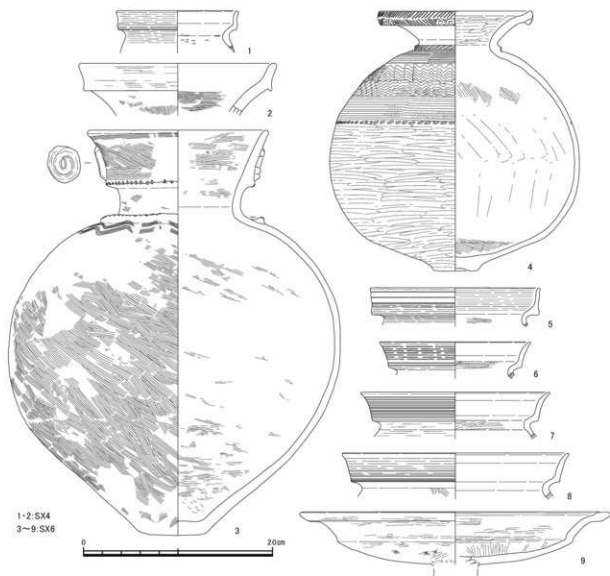
10～12はSX12出土。10は台付壺と見られる。11の直口壺は頸部に刺突文を施す突帯を回し、肩部に櫛描直線文・波状文を施す外来系のものである。12は単純口縁の甕である。いずれも古墳前期前葉のものと見られる。SX13出土の13は粗製の鉢である。外面は摩耗しているが、ヘラケズリ調整は確実に施している。内面調整はナデ調整を施す。弥生後期のものであろうか。SX14出土の14は鉢で、内外面にハケメ調整を施す。弥生中期後葉のものである。15～19はSX15出土。17の把手付無頸壺は口縁部が外反する。18・19は有段口縁をもつ甕で、口縁部が直線的に立ち上がり、外反はしない。これらの特徴から、弥生終末期のものと見られる。

SX16・18～20出土土器(第69図)

1～7はSX16出土。1～3は壺である。1は外面をハケメ調整後、肩部に櫛描直線文・波状文を施し、その下にU字状の記号様の櫛描文装飾を施す。底部付近はナデ調整、内面はハケメ調整をナデ消し、口縁部は端部近くにヨコナデ調整を施す。2は外面をハケメ調整後、頸部に1条の櫛描直線文を施す。内面はハケメ調整後、下半を丁寧にナデ消し、口縁部にはヨコナデ調整を施す。底部には木炭痕が残る。3は外面をハケメ調整、内面はハケメ調整をナデ消し、口縁部にはヨコナデ調整を施す。底部の外周はかすかに高台状に影らみをもつ。4は台付の水差である。体部は上半に櫛描簾状文とヘラ列点文から成る文様帯をもち、下半にはヘラミガキ調整を施す。口縁部の把手上に刻り込みをもち、外面の脚台が接続する部分に2条の沈線を刻む。内面はナデ調整を施す。5～7は鉢である。5は内外面にハケメ調整、口縁部にヨコナデ調整を施し、円孔を1箇所穿つ。6も内外面にハケメ調整を施し、頸部に紐孔を穿つ。外面にスガが少量認められる。7は6と比較して大きく外反して開口縁部をもつ。外面はハケメ後に下半をヘラミガキ調整、内面はハケメ調整を丁寧にナデ消し、口縁部にはヨコナデ調整を施す。以上のSX16出土品は、壺・鉢各個体の形態と台付水差の存在から、弥生中期後葉の良好な一括資料と考えられる。



第66圖 SX3出土土器実測図（縮尺1/4）



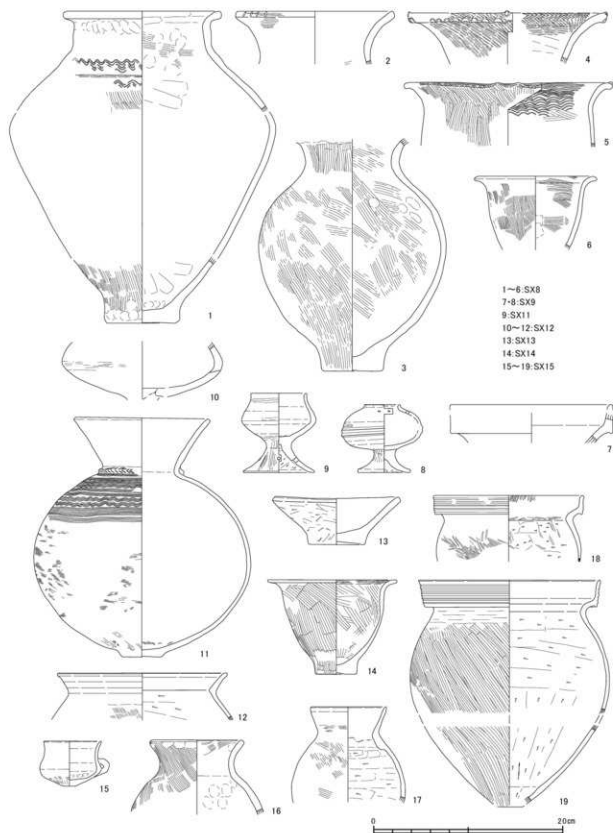
第67図 SX 4・6 出土土器実測図 (縮尺1/4)

8はSX 18出土の壺である。口縁部は調整が粗雑で、内面にヘラケズリ調整を施す。弥生後期のものか。9はSX 19出土の壺で、外面はハケメ後のヘラミガキ調整、内面はハケメ調整を施す。弥生中期後葉のものと見られる。10・11はSX 20出土。10の壺は外面にハケメ調整を施し、頸部に2条の沈線を刻む。肩部には1箇所縦位の突起を作り、その上に刻み目を入れ、突起の周囲を楕円形に囲む沈線を刻む。口縁部は端部付近にヨコナデ調整を施す。11は口縁部が水平に開く高坏である。坏部内外面にハケメ調整を施す。以上のSX 20出土品2点はSX 16と同じく弥生中期後葉のものと考えられる。

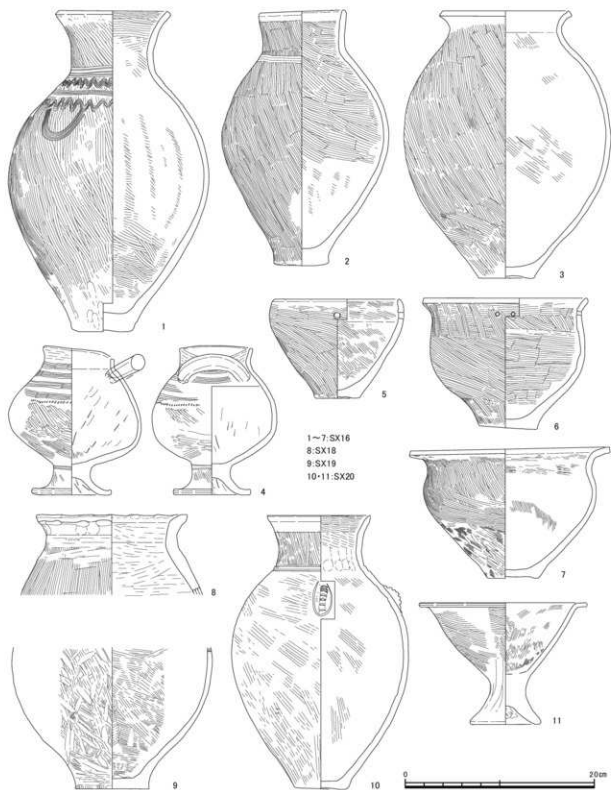
SX 22・23出土土器 (第70図)

1～6はSX 22出土。1は甕の体部である。スス・コゲが見られ、調理に使用されたことが明らかである。2は台付壺の脚部で、有段部に擬凹線文を施す。3は小型の壺である。器面の残りが悪いが、ヘラによる直線文・山形文や渦文状のスタンプ文を施す。4の甕は頸部の締まりが強く、スス等の調理の痕跡もないので、台付の壺である可能性もある。6は器台の脚部で、外面の段が屈曲する部分に沈線を3条刻む。内面にヘラケズリ調整を施す。以上はいずれも弥生後期後葉のものである。

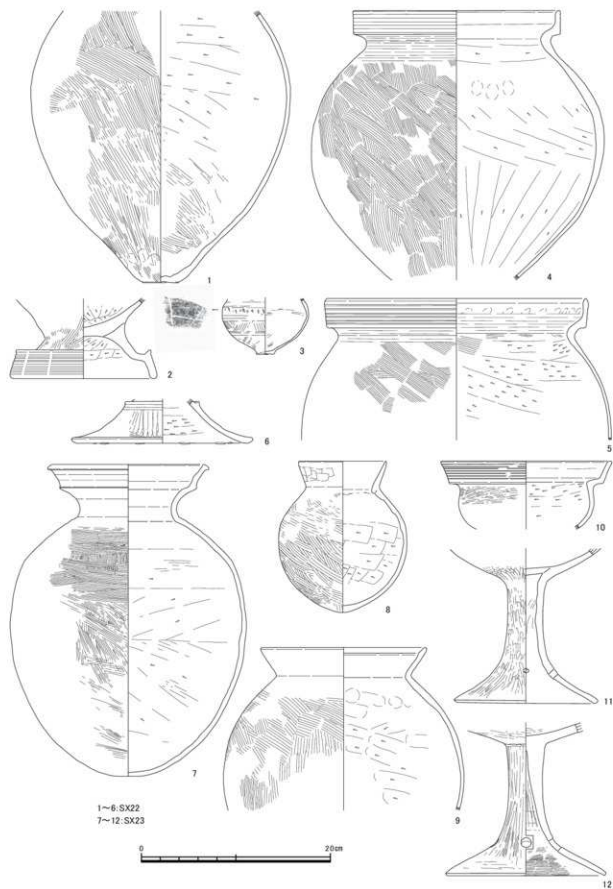
7～12はSX 23出土で、今回検出した周溝墓の出土土器としては最も新しい。7は丸底の有段口縁壺



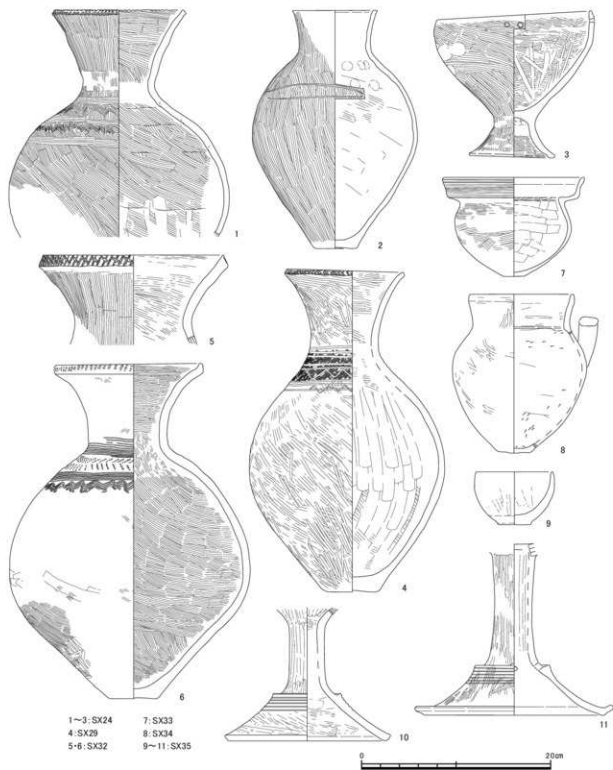
第68圖 SX8・9・11~15出土土器実測図(縮尺1/4)



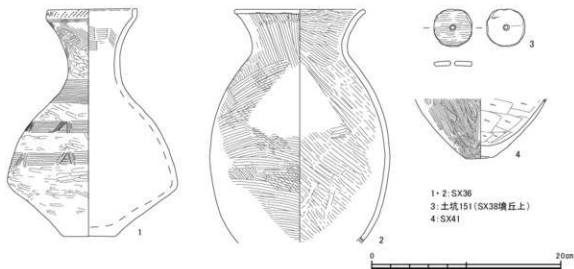
第69図 S X 16・18~20出土土器実測図(縮尺1/4)



第70圖 S X 22・23出土土器実測図(縮尺1/4)



第71图 S X 24・29・32~35出土土器实测图(缩尺1/4)



第72図 S X 36・38・41出土土器実測図(縮尺1/4)

である。外面にハケメ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。8は単純口縁をもつ壺である。外面に条線の密度がやや粗いハケメ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。ス・コゲが付着し、調理に使用された痕跡と見られる。9の甕は口縁端部が内側に肥厚する。肥厚部分は幅広く、高さも低い。外面に左上がりをもつハケメ調整を施す。これらは古墳前期後葉に位置づけられる。10の有段口縁をもつ鉢や、11・12の高坏脚部は弥生後期後葉のものであり、明確な時期差がある。切り合い関係にある溝 100 からの混入であろう。

S X 24・29・32～35 出土土器(第71図)

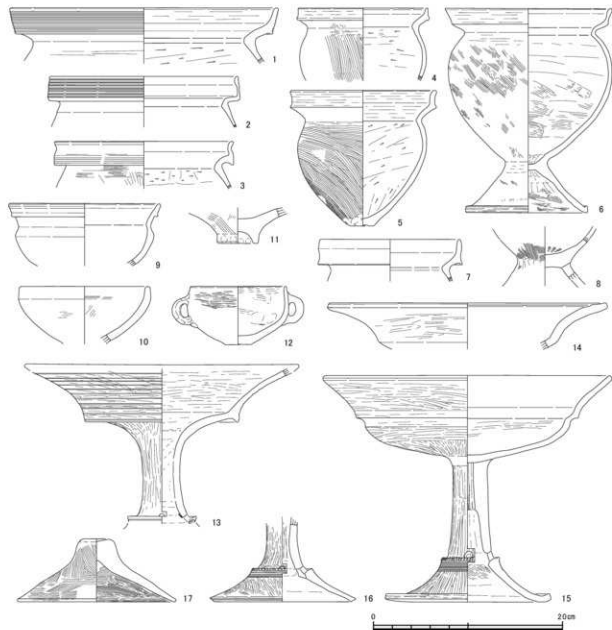
1～3はS X 24出土。1・2は壺である。1は内外面にハケメ調整を施し、肩部に櫛描直線文・波状文を施す。口縁端部には上下から刻み目を入れる。2は短い直口の口縁部をもち、外面にハケメ調整、内面にナデ調整を施す。肩部にヘラによる水平方向の線2条の記号文を施す。3は台付の鉢である。ハケメ調整後、内面にナデ調整を施す。口縁部にはヨコナデ調整を施し、口縁直下に紐孔をもつ。

4はS X 29出土の壺で、やや縦長の胴部に弱く外反する口縁部がつく。外面はハケメ後にヘラミガキ調整、内面はハケメ調整後にナデ消しを施す。口縁部も体部と同様の調整で、端部にはヨコナデ調整の後、上下に綾杉状の刻み目を入れる。頸部には縄文を施文した後、沈線文様を帯状に施文する。沈線は10条刻まれ、うち2条が波状文、他は直線文である。北陸地方在来の器形に信州地方の栗林式の文様を採用した土器である。所属時期は弥生中期後葉に位置づけられる。

7はS X 33出土の有段口縁をもつ鉢で、口縁部に擬凹線文を施す。プロポーシオンはやや深さをもち、頸部の括れはしっかりしている。弥生後期後葉でも古相にあたる。8はS X 34出土の把手付壺である。外面は全体的にヘラミガキ調整で、体部内面はヘラケズリ調整を施す。弥生後期後葉のものであろう。9～11はS X 35出土。9の鉢は口縁部が内弯し、底部はわずかに突出する。10は器台の脚部である。外面はヘラミガキ調整を施し、段の部分に5条の沈線を刻む。11は高坏の脚部で、外面は10と同様にヘラミガキ調整を施す。6条の沈線が刻まれ、4方向に円孔を穿つ。

S X 36・38・41出土土器(第72図)

1・2はS X 36出土の壺である。1は細頸壺で、受口状の口縁部をもち、体部は下半が膨らみ、角をもって屈曲する。文様は口縁部に櫛描列点文を、肩部から腹部にかけて櫛描直線文帯をそれぞれ施す。下2段の直線文帯には、上から間隔を置いて山形の櫛描文を加えて施す。櫛描直線文帯の上下への沈線



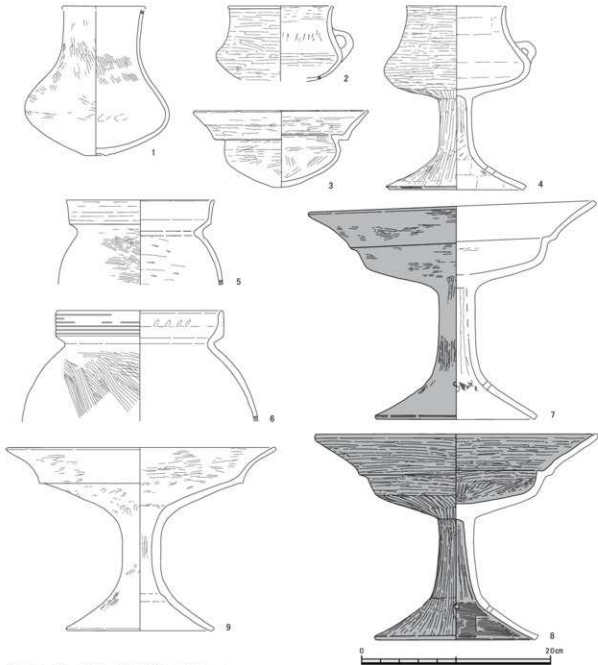
第73図 住居1・2出土土器実測図(縮尺1/4)

での区画は見られない。東海地方の貝田町式の壺の特徴を備えるものであり、弥生中期中葉に属するものである。一方、2は内外面ハケメ調整で、縦長の胴部をもち、口縁部は強く外反して開いている。中期後葉のものと考えられる。1・2の個体間には明確な時期差が認められ、SX36の所属時期は遺物のみでは判断が下せない。

3はSX38 墳丘上の土坑151から出土した土器片の転用による紡錘車である。弥生中期の資料であろう。SX41出土の4は甕の体部下半である。外面にハケメ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。弥生後期後葉のものであろうか。

住居1・2出土土器(第73図)

1～7は有段口縁をもつ甕である。外面に擬凹線文を施すものが主体であるが、口縁部の立ち上がる形状は多様である。6は脚台をもち、脚の端面には沈線状の凹みが回る。スス等の調理の痕跡は認められない。8は遺存状態が悪いが、6と同様の器種であろう。9～12は鉢である。11は当該期の底部と

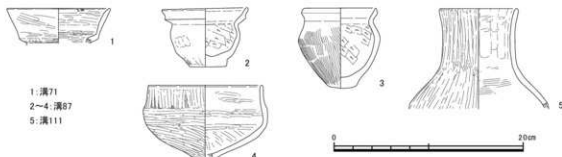


第74図 溝100出土土器実測図(縮尺1/4)

しては特異な形状であり、縄文土器かもしれない。12は把手をつけ、ヘラミガキ調整をおこなう精製品である。13は有段口縁をもつ器台である。口縁部に沈線文帯をもち、脚部には4方向の円孔を穿つ。14は口縁端部の内側が肥厚する高坏である。口縁部は強く外反して開く。15は有段口縁をもつ高坏である。ヘラミガキ調整を基調とする。口縁部は大きく開き、擬凹線文は施さない。脚部は有段で、段の部分にのみ沈線と刻みを施す。4方向の円孔を穿つ。16は15と同種の脚部で、高坏か器台かは区別できない。17は蓋で、内外面にハケメ調整を施す。以上の土器群は弥生後期後葉を主体とする資料と言える。

溝100出土土器(第74図)

1は口縁部が直立して伸びる壺で、外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整を施す。底部は径が小さいうえ、凹みをもつ。2は把手付の無頸壺である。内外面にヘラミガキ調整を施す精製品で、脚台の有



第75図 溝71・87・111出土土器実測図(縮尺1/4)

無は不明である。3は有段口縁をもつ鉢である。内外面にヘラミガキ調整を施す精製品である。口縁部は強く外反し、擬凹線文を施さない。全体のプロポーションは浅く、底部もはっきりしない。いずれもSX33出土の同形態の鉢(第71図7)よりも後出的な特徴である。5は有段口縁で、口縁部が直線的に立ち上がる。6も口縁部がやや厚みをもつものの直立し、内面には連続指頭瓦痕が見られる。7は有段口縁をもつ高環で、3の鉢同様口縁部が大きく開く。外面の大半と環部の内面はヘラミガキ調整を施し、外面全体を赤彩する。口縁部は無文である。脚部には4方向の円孔を穿つ。8も同種の高環である。赤彩は環部内面でも確認できる。9は受け部のみ有段の器台で、ヘラミガキ調整を基調とし、擬凹線文を施さない点で高環・鉢と様相を同じくする。

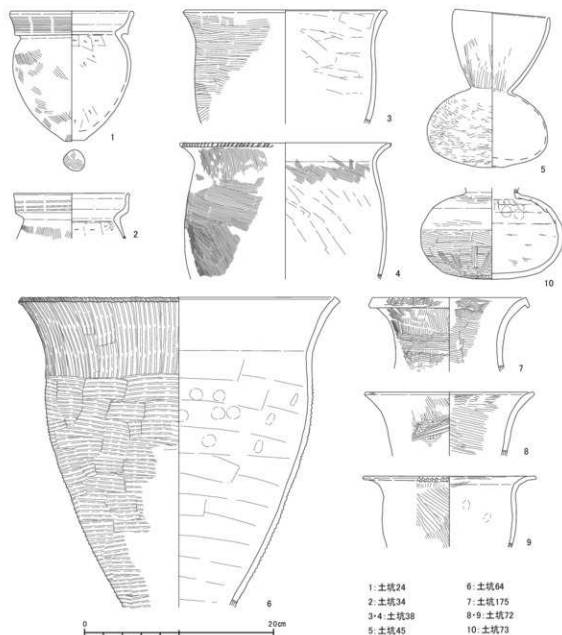
以上の溝100出土土器は、甕の形態と無文化した有段口縁の鉢・高環から、弥生後期後葉でも新しい段階の一括資料と評価できる。

溝71・87・111出土土器(第75図)

溝71出土の1は小形の有段口縁壺の口縁部で、内外面にヘラミガキ調整を施す精製品である。2～4は溝87出土。2は無文の有段口縁をもつ小形の鉢である。外面はナデの後に水平方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整で終わる。3は単純口縁の甕で、外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整を施す。4は鉢で、内外面にヘラミガキ調整を施す。5は溝111出土の壺で、頸部が直立し、口縁部はわずかに開いて終わる。外面にヘラミガキ調整、内面はハケメ後にナデ調整を施す。これらはいずれも弥生後期後葉から終末期の範疇に属するだろう。

土坑24・34・38・45・64・72・73・175出土土器(第76図)

土坑24出土の1は擬凹線文を施す有段口縁をもつが、外反せず丸く収めた端部をもつ。弥生後期後葉のものである。土坑34出土の2も同時期のものであろう。3・4は土坑38出土の甕で、外面にハケメ調整、内面にナデ調整を施す。3は頸部が緩やかに屈曲し、口縁部の外反も弱い。これに対し、4は強く屈曲し、外反して開く。口縁部には刻み目を入れる。弥生中期中葉のものであろう。5は土坑45出土の口縁が内湾する外来系の壺で、古墳前期前葉のものである。6は土坑64出土の甕で、外面および口縁端面に櫛状原体による条痕調整を施す。ス・コケが付着しており、調理に供したものであろう。弥生中期前葉のものである。7は土坑175出土の壺で、頸部・口縁部・口縁部内面のいずれも櫛状文で装飾する。弥生中期中葉。8・9は土坑72出土の甕である。8は口縁部が緩やかに開く甕で、外面頸部および口縁部内面に櫛状波状文・直線文を施し、口縁端面にも櫛状波状文を施す。9は口縁部が大きく外反して開く。体部外面に密度がやや粗いハケメ調整を施し、口縁部をヘラで刻む。内面はナデ調整を施す。外面にはススが付着する。これらは弥生中期中葉のものである。10は土坑73出土の壺で、扁平な体部の外面にハケメ調整を施し、丸底をもつ。古墳前期のものであろう。

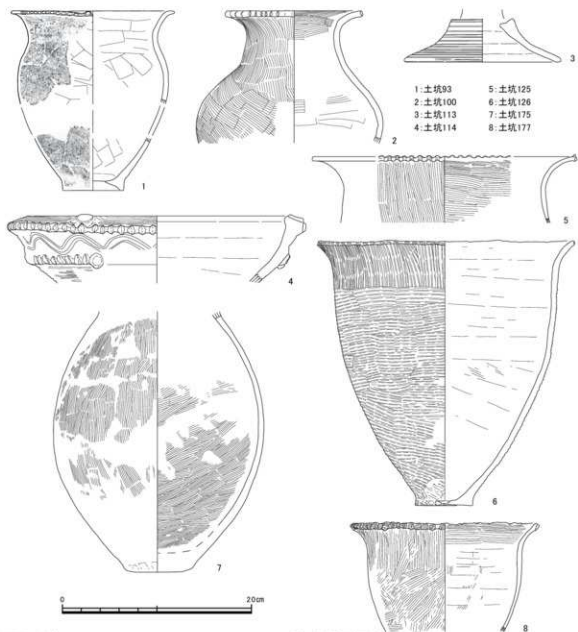


第76図 土坑24・34・38・45・64・72・73・175出土土器実測図（縮尺1/4）

土坑93・100・113・114・125・126・175・177出土土器（第77図）

1は土坑93出土の甕である。内外面にナデ調整を施し、口縁端部に刻目を入れ、部分的にさらに大きく押し上げられる。弥生中期中葉のものである。2は土坑100出土の頸部が強く締まる広口壺である。体部にハケメ調整を施し、口縁端部をへらで刻む。弥生中期後葉のものか。3は土坑113出土の高坏もしくは器台の脚部と見られ、外面を多条の沈線で飾る。弥生後期後葉のものである。4は土坑114出土の条痕文系大形壺の口縁部で、口縁端部の上下と受口状に屈曲した外面に、刻み目をもつ突帯が付く。口縁端面には突起を作り出し、その間を沈線文様で埋めている。受口部分の外面には二股状の原体で波状文を施す。弥生中期前葉のものである。

5は土坑125出土の甕である。内外面ハケメ調整を施し、口縁端部は押圧により波状口縁面に仕上げられる。弥生中期中葉のものである。6は土坑126出土の甕である。外面調整には二枚貝を工具に用いたと

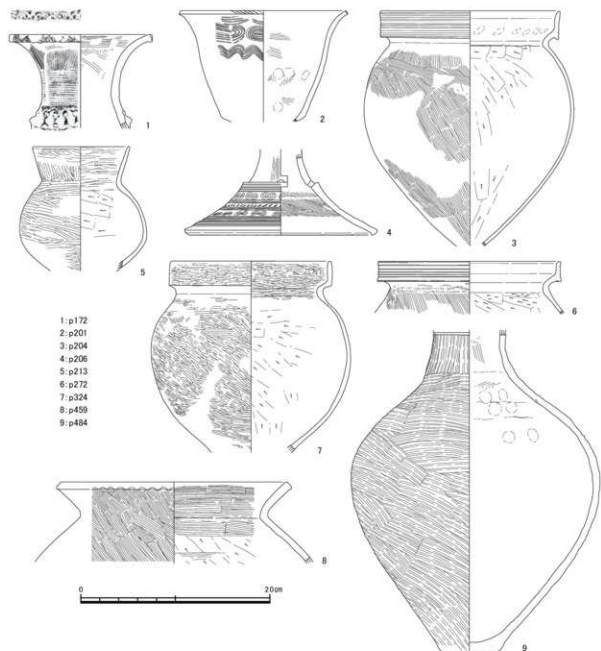


第77図 土坑93・100・113・114・125・126・175・177出土土器実測図(縮尺1/4)

思われる。口縁端部には同種の原体で押し引き状の刺突文を入れている。内面はナデ調整を施す。外面にスス、内面下半にはコゲが付着するなど、調理の痕跡が明瞭である。焼成後、底部に穿孔している。弥生中期前葉のものである。7は土坑175出土の甕で、体部外面にハケメ調整を施し、内面はハケメ調整後に上半をナデ消す。弥生中期前葉から中葉のものか。8は土坑177出土の甕で、外面にハケメ調整、内面にナデ調整を施し、ハケメ原体で口縁端部に刻み目を入れる。弥生中期中葉のものである。

p172・201・204・206・213・272・324・459・484出土土器(第78図)

1はp172出土の壺の口縁部で、頸部に貼付突帯がある。弥生中期中葉のものである。2はp201出土の甕で、口縁部外面に櫛描文を施す。文様は器面の剥落により不鮮明であるが、上段に流水文のような対になる屈曲があり、下段には波状文を施す。口縁端部には斜位の刻み目を入れる。弥生中期前葉のものである。3はp204出土の甕で、口縁の有段部が直立し、体部の肩が張るなど、弥生終末期でも古相のものであろう。4はp206出土の脚部で、外面に沈線・列点文・S字状のスタンプ文と文様を施し、

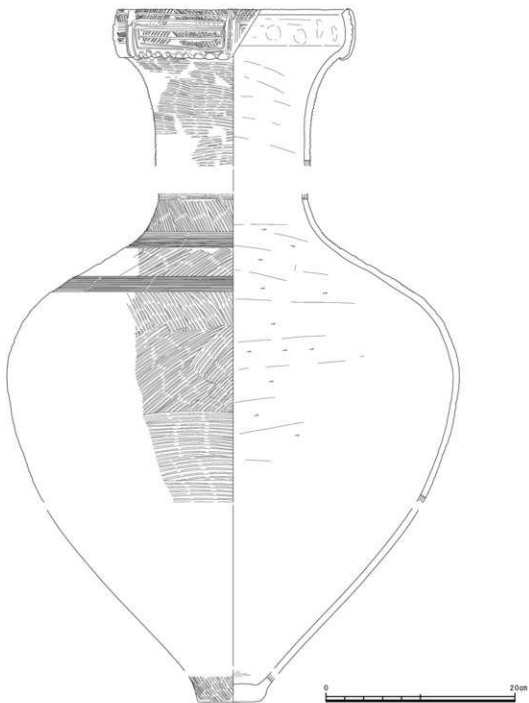


1: p172
2: p201
3: p204
4: p206
5: p213
6: p272
7: p324
8: p459
9: p484

第78図 p172・201・204・206・213・272・324・459・484出土土器実測図(縮尺1/4)

4方向の円孔を穿つ。弥生後期後葉でも古相のものか。5はp213出土の壺で、古墳前期前葉頃のものと考えられる。

6はp272出土の擬凹線文を施す有段口縁甕で、弥生後期後葉のものである。p324出土の7は甕の形態をもつが、内外のヘラミガキ調整を根拠に壺と判断した。しかし、外面にはススの付着も見られる。内面には頸部以上に密度の高いヘラミガキ調整を施すほか、体部にもヘラケズリ調整後に一部ヘラミガキ調整を施しているようである。弥生後期後葉のものである。8はp459出土の甕で、口縁部にハケメ調整、その後端部にヨコナデ調整を施し、端面には下から刻み目を入れる。体部内面にはヘラケズリ調整を施す。弥生中期後葉のものか。p484出土の9は条痕文系の壺である。条痕調整には櫛状原体を使用したものと見られ、調整の方向は左上がりである。内面にはナデ調整を施す。胎土は褐色であり、他所からの搬入品と考えられる。弥生中期前葉のものである。



第79図 p483出土土器実測図（縮尺1/4）

p483出土土器（第79図）

大型の条痕文系の壺である。調整および頸部から肩部にかけての直線文は櫛状原体によるものである。受口状を呈する口縁部の外面は縦位の突帯で区画した後に沈線を入れ、その間に斜位の沈線を充填する。屈曲部外面には大きめの刻み目が入る。内面は全体的にナデている。体部外面にはススの付着が見られる。弥生中期中葉でも古相のものか。

2 包含層出土土器

本項では包含層出土品のほか、遺構出土品のうち、明らかに古い時期の混入品と認定できるものも含む。以下の記述は縄文晩期、弥生中期、弥生後期～古墳前期に大別しておこなう。

1) 縄文土器

出土量は他時期に比べて少なく、破片を主体とする。時期は晩期中葉～後葉の比較的短い時間幅に限られ、主体が晩期中葉となる。以下、文様の有無により分別し、説明をおこなう。

有文土器（第80図1～3）

無文土器に比べて出土量が少ない。器形復元個体が3点あり、分類せず各個説明する。

1は深鉢であり、口縁部が強く外反する。胴部のみ文様帯を有す。頸屈曲部よりやや下方に短沈線文列を巡らし、下位に沈線区画の縄文帯を配す。短沈線文列と縄文帯の間は縄文の磨り消しをおこない、幅の狭い無文帯とする。縄文帯内には鍵の手文と0段多条の無節縄文1を施す。鍵の手文には横位短沈線が付随することから、入組鍵の手文の変形とも考えられる。鍵の手文の上下末端は区画沈線と連結する。文様描線は棒状工具により深く施すため、描線以外は視覚上、陽刻文状となる。無文帯上方の口頸部には横位ケズリ後ナデを施すが、無文帯とは異なり、丁寧ではない。上方を向く口縁部内面には胴部と同様の縄文帯を配す。端部にはヘラ状工具による押し引きを施す。押し引きを強く施すため、表面を向く口端部は小波状を呈す。内面頸屈曲部には工具による太く浅い沈線を配す。

2は深鉢頸胴部片である。頸部がくびれ、底部に向かい強くすままる。胴中央部に文様帯を有す。頸屈曲部直下は丁寧なミガキによる幅広の無文帯とする。胴部文様帯は沈線区画の縄文帯3帯からなり、0段多条の縄文R Lを施す。中央帯には入組三又文を施す。文様描線は棒状工具による浅い沈線であり、指ナデも部分的に併用する。このため、文様帯区画線の上下端はミガキにより部分的に消失する。入組三又文末端の二又部は小振りで半円状ではなく、上下区画沈線と連結しない。胴部下方にはミガキを施すが、工具痕が残るなど、頸屈曲部下の無文帯の調整ほど丁寧ではない。ミガキ方向は文様帯直下が横位、それ以下が縦位である。なお、色調が黄色を帯び、胎土に砂粒をあまり含まない点は、他の縄文土器と異なる。

3は小型の鉢であり、短い口縁部がわずかに外反する。口縁部全域を縄文帯とし、頸部には下端区画線となる押し引き列点文を配す。縄文帯には無節縄文1を施す。施文順序は縄文、横位列点文である。胴部にはナデを施す。

無文土器（第80図4～11、第81図）

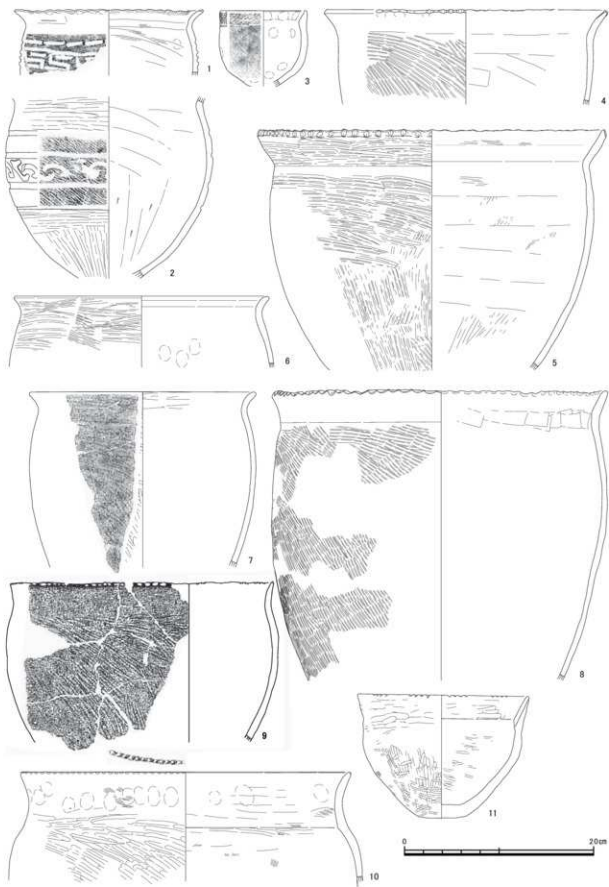
縄文土器の大半を占める。器種は深鉢が中心となり、鉢・浅鉢が若干ある。器形復元個体15点について、調整・器形・器種により分類をおこない説明する。

第1群土器（第80図5～7）

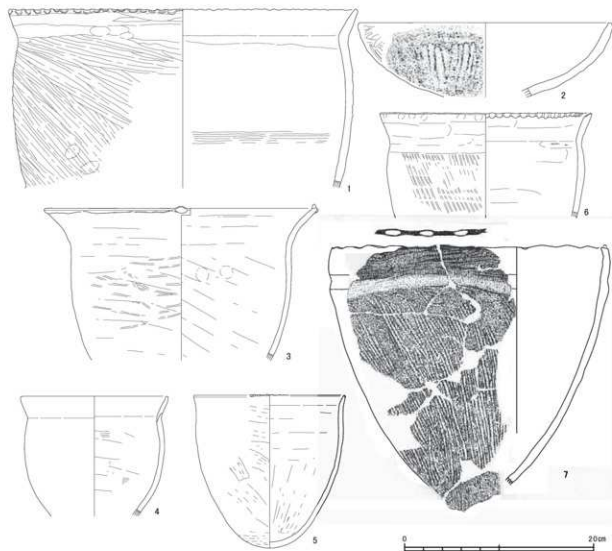
外面全域に条痕を施す土器。施文方向は部位により異なり、口頸部が横斜位、胴部が縦斜位を中心とする。条痕はミガキあるいはナデ状であり、きわめて浅い。単位が不明瞭で、原体幅・条線の太さにばらつきがある。施文順序は胴部が最終となる。胴部の施文方向は下方から上方である。

1類（5）口縁部が「く」字状に外反する深鉢。内面に段を有す。5の頸部には条痕が顕著ではなく、ケズリ痕が残る。胴部上半には下半の縦位条痕後に横位条痕を施す。

2類（6・7）口縁部が短く「C」字状に外反する深鉢。口径が胴径以下となる。2例とも口端部をナデにより丸く収める。6の内面には赤彩が認められる。



第80圖 包含層出土土器実測図(1)(縮尺1/4)



第81図 包含層出土土器実測図(2)(縮尺1/4)

第2群土器 (第80図4・8～11)

口頸部にナデ、胴部に縦斜线条痕を施す土器。条痕は第1群土器と同様である。施文順序は胴部条痕が最終となる。胴部条痕の施文方向は下方から上方である。

- 1類 (4・8) 口縁部が「く」字状に外反する深鉢。内面に段を有す。
- 2類 (10) すばまる頸部が直線的に立ち上がり、口縁部が外反する深鉢。口径が胴径より小さい。
- 3類 (9) すばまる頸部から短い口縁部が直線ぎみに立ち上がる深鉢。口径が胴径より小さい。
- 4類 (11) 肥厚する口縁部がやや外反する小型の鉢。口縁部内面には接合時の段を残す。口端部上面には3～4箇所が一単位となるヘラ状工具によるキサミ帯を11箇所配す。口縁部はケズリ後、指などによる粗い横位ナデを施す。胴部は条痕後ナデを施す。底部は平底であり、底面にはナデを施す。

第3群土器 (第81図1・2)

口頸・口辺部にナデ、胴・体部に縦斜线条痕を施す土器。条痕は第1・2群土器と比較して、単位が不明瞭で、原体幅・条線の太さにばらつきがある点で共通するが、条線が太く深い点で異なる。施文順序は胴・体部条痕が最終となる。胴・体部条痕の施文方向は下方から上方である。

1類 (1) 口縁部が「く」字状に外反し、頸部がくびれる深鉢。内面に段を有す。

2類 (2) 口辺部が内湾して立ち上がる浅鉢。2は口辺部に横位ナデを施すが、輪痕が残る。口端部をナデにより丸く取る。

第4群土器 (第81図3～5)

外面全域にナデを施す土器。原体や単位が不明なものが多い。

1類 (4) 口縁部が「く」字状に外反する深鉢。内面に段を有す。4はやや小型の深鉢である。

2類 (3) 頸部のくびれが弱く、口縁部が強く外反する深鉢。3の口端部にはナデによる面を有し、端部側面には指による押圧を水平に施す。押圧は4単位以下となる。胴部はケズリ後ミガキに近い丁寧なナデを施す。施文方向は口頸部から胴部上方が横斜位、これ以下が縦位となる。

3類 (5) 口辺部が胴部からやや直線的に立ち上がる器形、いわゆる砲弾形を呈す深鉢。5は口辺部がやや外反する。底部は丸底であり、厚みも器壁同様に薄い。外面調整は強いナデであり、施文方向は口辺部が横位、胴部が縦斜位を基本とする。底側部には横位ナデ、底部外面にはナデを施す。

第5群土器 (第81図6)

口頸部に横位ケズリ、胴部に縦位条痕を施す土器。条痕は第1・2群土器と同様である。施文順序は口頸部ケズリが最終となる。胴部条痕の施文方向は下方から上方である。

6は口縁部が外反する深鉢である。内面に弱い段を有す。口縁部内面に指による押圧を施す。口縁部直下の調整は顕著ではないが、口頸部には板状工具による横位ケズリを施す。このため、縦位条痕の上端部が消失する。胴部にはケズリ後、縦位条痕を施す。

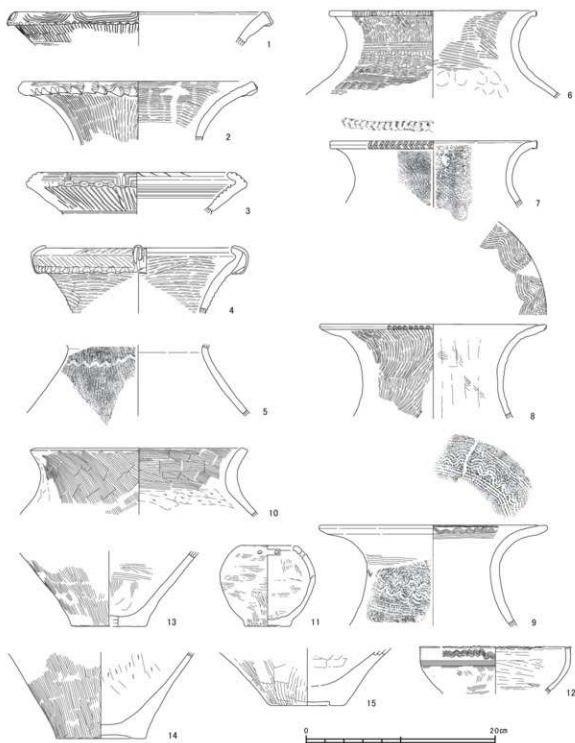
第6群土器 (第81図7)

口辺部に横位ナデ、胴部に縦位条痕を施す土器。条痕は他群土器とは異なり明確である。施文順序は口辺部が最終となる。胴部条痕の施文方向は上方から下方である。

7は口辺部が胴部からやや直線的に開いて立ち上がる深鉢である。口辺部がやや内湾する。口端部には指による押圧を間隔をあけて施す。頸部には接合時の凹部が残る。条痕原体は幅1.5cmで3、4条の条線を1単位とする。条痕施文後、口辺部に幅0.3～0.5cm程度の板状工具による横位の強いナデを施す。このため、縦位条痕の上端部が消失する。

位置づけ

有文土器は晩期中葉の中屋式後半段階に相当する。無文土器のうち、第1群、第2群1・4類、第3群1類、第4群は器形から有文土器と同様の時間的位置をあたえうる。しかし、第1・2群に認められるミガキあるいはナデ状の浅い条痕を施す手法は、北陸地方中央部では主体とならず、様相を異にすると考えられる。口頸部が内傾する第2群2・3類はおおむね中葉に位置づけられ、器形からは東海・近畿地方との関連が予想される。第5・6群は後葉～末の在地系「糞置式」に相当する。以上から、中葉の第1～4群には、器種(器形)・調整法において在地性が認められるものとし、時間的に後続する第5・6群(「糞置式」)への一系的な型式論的連続性を考えた場合、「糞置式」に一般的に認められる口頸部内傾深鉢の存在、外反口縁における屈曲の鈍化、条痕・ナデ方向の部位による区別や口頸部のナデから口頸部の縦位条痕ナデ消しといった点において、漸化的変化・段階的変遷も想定しうる。この観点に立てば、本遺跡出土土器群は、中屋式後半～「糞置式」まで、時間的にほぼ連続して存在すると考えられる。ただし、きわめて限定的な資料であるため、地域的様相の把握には、本遺跡周辺地域において近年増加している当該期の資料との比較を通じて、検討をおこなう必要がある。

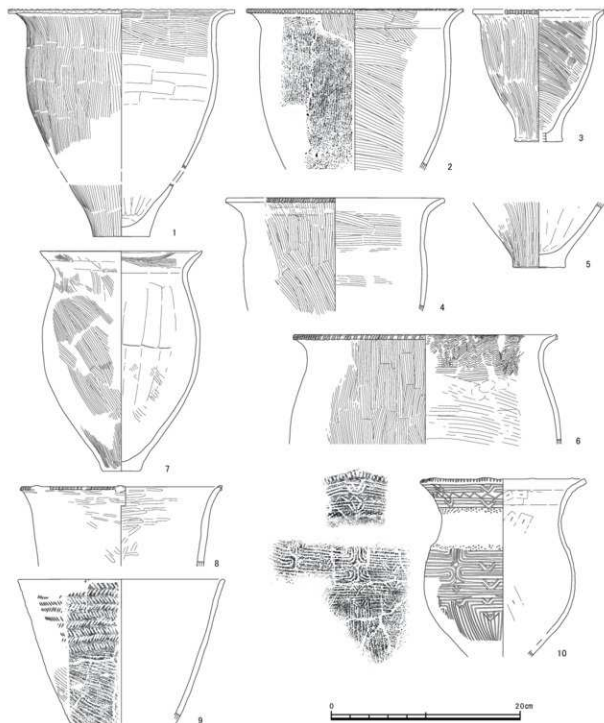


第82図 包含層出土土器実測図(3) (縮尺1/4)

2) 弥生中期の土器

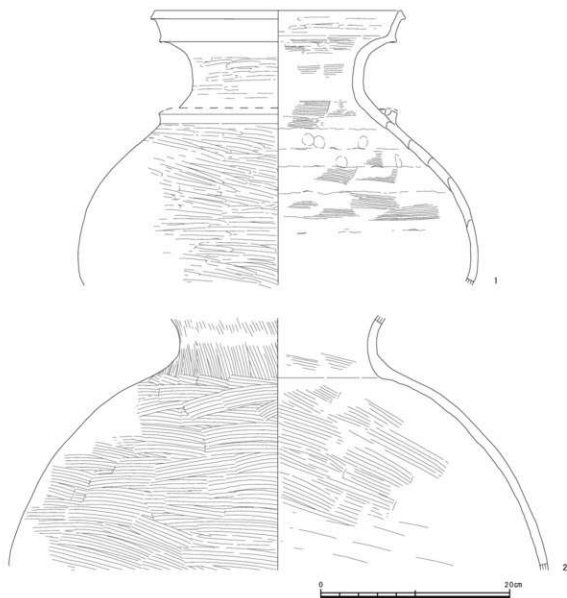
壺 (第82図)

1～4は条痕文系の壺である。5はハケメ調整を施し、ヘラで1条の波状文を施す。弥生中期前葉のものか。11は小形の無頸壺で紐孔をもつ。外面はハケメ調整、内面はナデ調整を施す。弥生中期中葉のものか。12は受口状口縁をもつ壺と考えられる。口縁部外面に櫛描直線文・波状文を施し、口縁端部はヘラで刻み目を入れる。弥生中期中葉のものと考えられる。



第83図 包含層出土土器実測図(4) (縮尺1/4)
甕 (第83図)

1はハケメ調整を基調とする中型の甕で、口縁端部への刻み目により波状口縁風になる。8は内外面にヘラミガキ調整を施し、口縁端部は刻み目のほか、部分的に押圧する。9は体部に条痕調整を施し、口縁部に羽状刺突文を帯状に重ねる。頸部をもたず、口縁部は直線的に開く。弥生中期前葉のものと考えられる。10は沈線文系土器で、口縁部は7箇所を山形に突出させる。沈線文様のほか、口縁端部に刻み目を、口縁部文様帯の直下と体部文様帯の直上に横描列点文を施す。外面にススが付着する。弥生中期前葉のものである。



第84図 包含層出土土器実測図(5)(縮尺1/4)

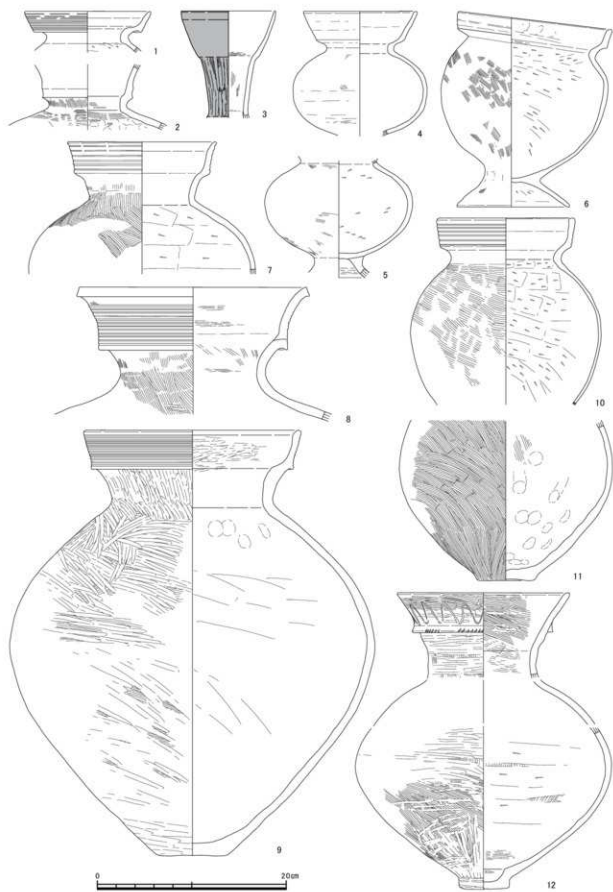
3) 弥生後期～古墳前期の土器

壺 (第84～86図)

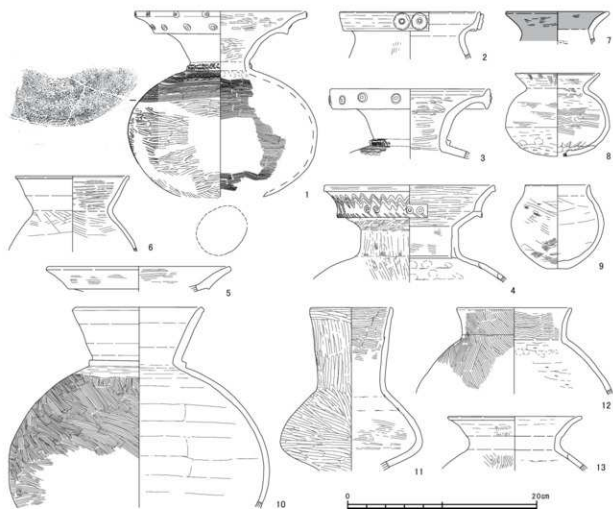
第84図1は口縁部が有段を呈し、頸部には突帯を貼り付ける大型壺である。口縁部は無文で、体部外面にヘラミガキ調整を施す。弥生終末期ごろのものであろう。2も大型の壺である。内外面にはハケメ調整を施すが、1と同様の有段口縁をもつと考えられる。

第85図は擬凹線文を施文する有段口縁壺を中心に図示した。6など形態からは甕との区分が難しいものもある。3は精製の細頸壺で、扁平な体部をもつと考えられる。口縁内外面はヘラミガキ調整で、外面に赤彩を施す。弥生後期後葉のものである。12は突帯の貼り付けにより、一見有段口縁に見える口縁部をもつ。口縁部外面の文様はヘラによる波状文のみである。弥生終末期から古墳前期前葉のもつと考えられる。

第86図1は口縁部と肩部に文様をもつ精製の二重口縁壺である。底部に焼後穿孔をしていることや、二重口縁壺という形態から、周溝墓の供献土器と考えられる。この個体の出土位置はD77区であるが、



第85圖 包含層出土土器実測図(6)(縮尺1/4)



第86図 包含層出土土器実測図(7)(縮尺1/4)

当区に存在する周溝墓はSX1のみであり、SX1に伴う供献土器の可能性が高い。

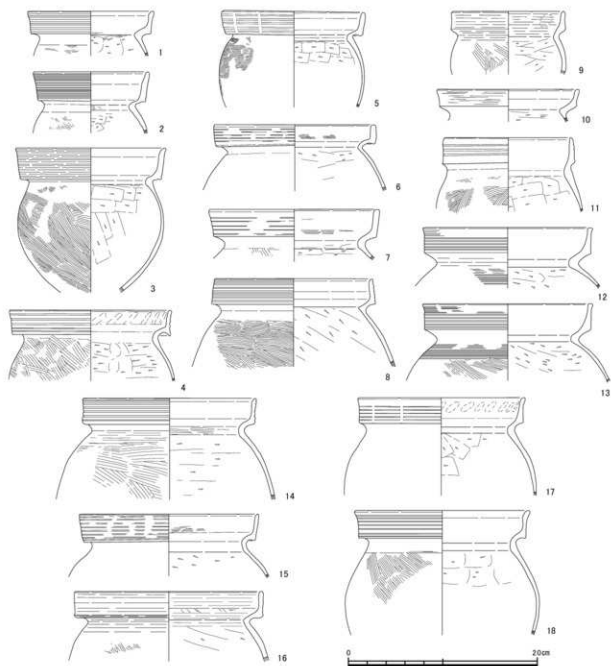
3・4も同種の加飾壺で、竹管円形浮文と櫛描波状文で装飾を施す。3の頸部には刻み目をもつ突帯が回り、4では口縁の屈曲部外面に刻み目を入れる。いずれも古墳前期前葉のものである。7は小形の広口壺で、口縁部の内外面に赤彩を施す。9は小形の無頸壺で、不明瞭な平底をもつ。弥生後期後葉から終末期のものか。10は直口壺で、体部外面にハケメ調整を施し、頸部に突帯を付ける。古墳前期の範疇にあるだろう。11はヘラミガキ調整を施した長頸壺で、弥生後期後葉から終末期のものと考えられる。

甕 (第87～89図)

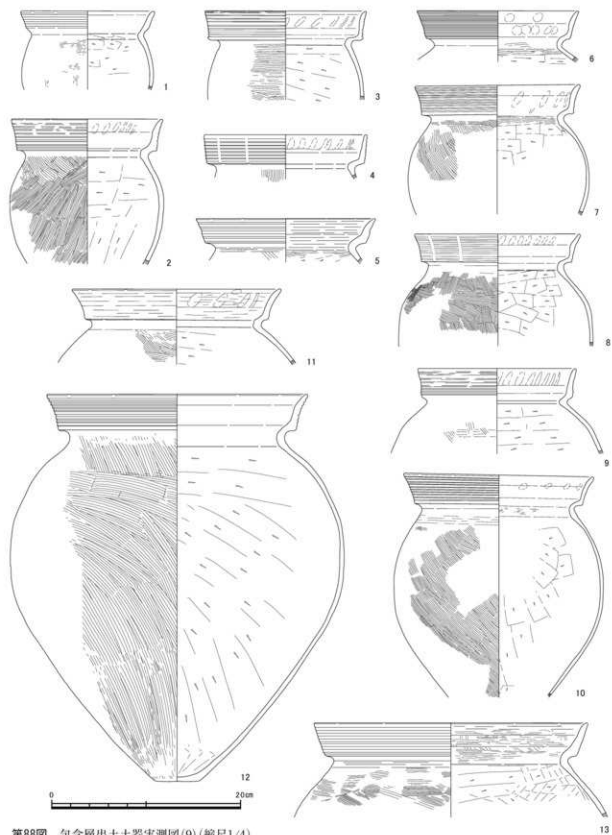
第87・88図には有段口縁で擬凹線文をもつものを挙げた。第87図に挙げたものは、主に有段部が外反せず直線的であり、口縁端部は先細りしないなどの特徴をもつもので、弥生後期後葉から終末期でも古相に属すると考えられるものである。4には口縁内面に連続指頭圧痕が認められる。

これに対して、第88図は挙げたものは、主に外反する有段口縁をもち、口縁端部が先細り傾向にあるもので、ほとんどの個体で内面の連続指頭圧痕が認められる。時期は弥生終末期を主体とし、一部は古墳前期前葉に下ると考えられる。

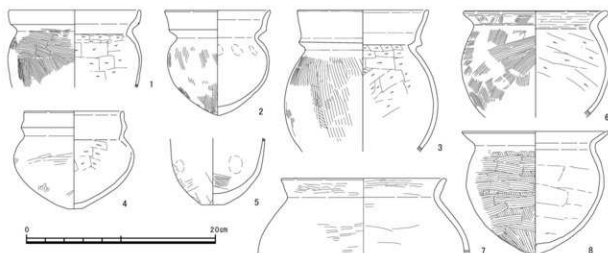
第89図に挙げたのはその他の甕で、無文の有段口縁をもつ1～4は、弥生後期後葉から終末期にかけてのものである。外反する単純口縁をもつ6～8は、古墳前期前葉から中葉のものであろう。



第87図 包含層出土土器実測図(8)(縮尺1/4)



第88図 包含層出土土器実測図(9)(縮尺1/4)



第89図 包含層出土土器実測図(10)(縮尺1/4)

高坏・器台類 (第90図)

1・2は大きく開く坏部をもつ高坏で、2は口縁端部が内側に肥厚する。弥生後期後葉のものである。3は有段口縁をもつ高坏で、弥生後期後葉のものである。4は同種の高坏であるが、坏部・脚部ともに法量の縮小が見られる。弥生終末期のものと考えられる。5は口径が小さく深いタイプのもので、弥生終末期でも新しい段階から古墳前期前葉に見られるものである。9は外来系の小型高坏で、口縁部外面に沈線と刺突文から成る文様帯をもつ。古墳前期前葉のものである。

13~16の器台は、当該期に特有の受け部・脚部の両者が有段となるものである。大きく外反して開く受け部にヘラミガキ調整を施し、文様が脚部の段の部分のみにしか見られない、弥生後期後葉の新相から終末期にかけてのものが主体となっている。17は下半の形状が不明だが、有段口縁をもつ小型器台である。古墳前期前葉のものか。20は裝飾器台で、受け部の上半に三角形と円形の透孔を、下段に涙滴形の透孔を穿つ。定型化する以前の型式と考えられ、弥生終末期でも古相のものであろう。24は小型器台の典型品で、脚部に円孔を3方向に穿つ。古墳前期前葉のものである。

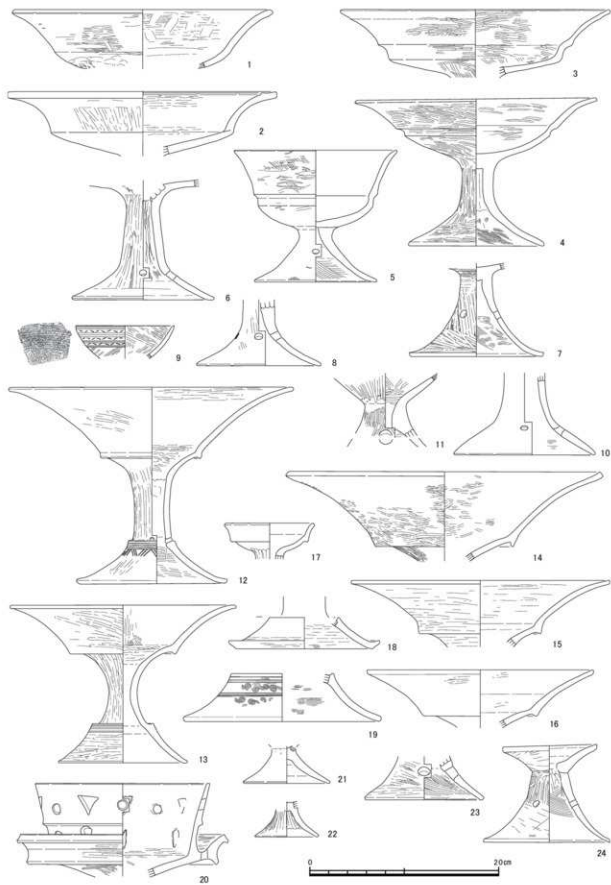
無頸壺・鉢など (第91図)

1~6は精製の無頸壺である。3・4は把手と脚台がつく形態で、3は把手を欠損する。5・6はその小型品である。6は把手の痕跡をもつ。弥生後期後葉から終末期のものと考えられる。

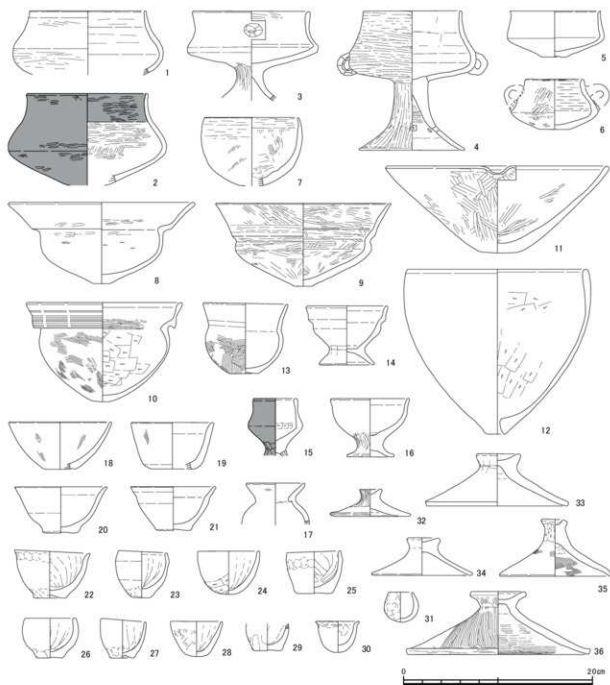
8~10は有段口縁をもつ鉢である。8・9は無文で全体をヘラミガキ調整で仕上げ、10は擬凹線文を施し、体部外面にハケメ調整を施す。これらはいずれも弥生後期後葉のものであるが、10が古く、8・9が新しいと考えられる。低い脚台をもつ同形態の小型品である14も同時期のものか。

11の鉢は片口をもち、内外にヘラミガキ調整を施す精製品である。12は有孔鉢で、内面をヘラケズリ調整で仕上げる。ともに弥生後期後葉から終末期のものであろう。15は脚台付の小型無頸壺で、外面には赤彩が確認できる。弥生後期後葉のものか。17は小型の壺である。

22~30は小型の鉢である。口縁部や底部の形態に多様性があり、時期を特定するのは難しい。31は小型球形の鉢で、いわゆるミニチュア品である。これも詳しい時期はわからない。32~36は壺である。32はヘラミガキ調整、33~35はナデ調整で仕上げるのに対し、36はハケメ調整で終える。



第90圖 包含層出土土器実測図(11)(縮尺1/4)



第91圖 包含層出土土器実測図(12)(縮尺1/4)

3 小結

II区出土土器について若干の所見をまとめる。

1) 時期

縄文土器は晩期後葉を下限としているのに対して、確実な弥生時代の土器の上限となるのは土坑・ピットおよび包含層中に認められる弥生中期前葉のものである。よって縄文晩期末から弥生前期にかけての資料が不在となっている。

弥生中期前葉・中葉の資料は土坑・ピットおよび包含層中に認められる。また、弥生中期中葉の資料にはSX36出土の壺（第72図1）がある。周溝墓に帰属するとすれば、周溝墓造営の上限となる資料であるが、同遺構からは中期後葉の土器も出土しており、本来別の遺構に伴っていた可能性もある。

続く弥生中期後葉には、周溝墓出土資料を中心に資料が豊富になる。SX16出土の水差（第69図4）の存在などから、西方からの影響は認められるものの、いわゆる凹線文系土器は存在せず、在来系譜の土器でははぐめられている。石川県では中期末に凹線文系土器の影響が顕在化した段階として戸水B式が設定されているが、本遺跡では時間軸上で弥生中期末に属する資料は含まれていない。

次に見られる時期は弥生後期後葉である。この時期には複数の周溝墓のほか、住居1・2や溝100²¹など各種の遺構出土資料が見られる。このあり方は弥生終末期から古墳前期前葉まで継続して認められ、特に古墳前期前葉は周溝墓出土資料が豊富になっている。しかし、その後の古墳前期中葉以降の資料は包含層中においても見出せない。この段階は古墳前期後葉にあたるSX23出土の土器群が例外的に存在するのみである。

2) 外来系土器

今回報告した資料の中で特筆すべき外来系土器として、SX29出土の信州地方の栗林式系土器（第71図4）が挙げられる。久田正弘氏が石川県内における同種の土器についてまとめている（久田2009）が、その多くが模倣土器で、信州との交流は上越・越中地方を介した間接的な形が主体だったとされる。本遺跡出土例も在来系譜の壺に栗林式の文様を採用した模倣土器である。当遺跡が所在する福井県嶺北地域では、中期後葉段階の遺跡の調査事例は未だ少ない状況にあるが、今後の調査の進展により同様の資料が増加することが期待されよう。

また、弥生後期以降のものでは、一定量認められる古墳前期前葉の近江・東海系土器を別とすれば、SX3出土の大形複合口緑壺の口縁部（第66図1）が、中国・四国地方を中心として西日本一帯に分布する土器であり、外来系土器と評価できる。

3) 周溝墓出土土器

今回の調査は途中に空隙を挟むにせよ、弥生中期から古墳前期までの時期幅で周溝墓を確認できている。当地域における墳墓の調査例は、弥生後期以降の丘陵上の遺跡が大部分であり、丘陵上に造営される数が少ない弥生中期に始まり、その後の時期にかけて継続的に一遺跡内で墳墓の造営が確認できる例は認められていない。今回出土した土器群は平野部に位置する周溝墓出土資料ではあるものの、墳墓で使用された土器の変遷を知る上で貴重な事例であると言えるだろう。

まず、SX16を始めとする弥生中期後葉の周溝墓出土資料は各種の壺類を主体とし、それに鉢などが加わる組成をもっている。同時期の日常土器の組成が分かる遺跡は近くにはないが、甕を含まず壺を主体として構成される点が当該期の周溝墓使用土器の特徴と言えるだろう。

弥生後期後葉から終末期の周溝墓出土資料では良好な個体は少ないが、壺以外にも甕や高坏・器台な

ど各器種が認められ、特定器種への偏りは認められない。当該期は北陸西南部独自の様相が発達し、外来系の影響もほとんど認められない時期と評価されている。日常土器と周溝墓使用土器との間に顕著な組成の差異が認められないことは、両者の違いを問わず、土器を使用するあらゆる場面で北陸西南部独自の様相をもっていたことが背景にあると考えられる。

続く古墳前期前葉は在来系譜と外来系譜の両者の土器から構成される。これは同時期の日常土器のあり方と変わらない。しかし、SX6出土品（第67図3・4）やSX12出土品（第68図11）など、装飾をもつ壺も散見される。当該期の墳墓で各種の壺が出土するあり方（堀2008）と共通する様相である。

また、SX1に伴う可能性が高い二重口縁壺（第86図1）は、底部に丁寧な焼成後穿孔をおこなっている。同時期においては、大阪府久宝寺・加美遺跡群や小路遺跡、愛知県西上免遺跡などの近畿地方から東海地方を中心とした広範囲で、周溝墓出土土器に認められる事象である。前方後方形という墳丘形だけでなく、土器を使用する埋葬時の行為も一体として、他地域と共有していた証左と言えるだろう。

註

- 1 弥生後期後半から古墳前期前葉の土器について、筆者は福井県嶺北地域の編年試案（投稿中。概要については、平成22年6月6日、石川考古学研究会総会で口頭にて発表）を作成した。本報告で用いる土器編年はこの試案の区分に基づくものであるが、執筆時点現在未発表であるため、北陸地方において最も汎用性を認められている田嶋氏の編年（田嶋1986・2007）との対応を示した。筆者の区分は氏の編年とは方法が異なるが、大筋では氏の区分と一致する結果となっており、問題は少ないと考えている。
- 2 溝100出土資料の評価については、堀大介氏が2002年に提示した土器編年（堀2002）において、当該資料を風巻（月影）1式の標識資料として挙げているが、筆者は弥生後期後葉すなわち法仏式に位置づけた。これは法仏式と月影式の区分の捉え方の違いによるものであり、筆者は法仏式を北陸独自の型式が発達し始める段階と評価した上で、当該土器群が帰属する時期までを法仏式と呼称するのが妥当であると考えている。

参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 1997 「西上免遺跡」 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第73集
 大阪府文化財センター 2007 「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅲ」 大阪府文化財センター調査報告書 第156集
 大阪府文化財センター 2004 「小路遺跡（その3）」 大阪府文化財センター調査報告書 第113集
 佐原真 1964 「弥生式土器の製作技術」 [紫雲出] 説問町文化財保護委員会
 田嶋明人 1986 「IV 考察 - 漆町遺跡出土土器の編年の考察 -」 [漆町遺跡 1] 石川県立埋蔵文化財センター
 田嶋明人 2007 「法仏式と月影式」 [石川県埋蔵文化財情報] 18 石川県埋蔵文化財センター
 畑幡子 1998 「古墳時代前期の土器・土製品」 [河内平野遺跡群の動態] V 大阪府文化財調査研究センター
 久田正弘 2009 「弥生時代の東日本系土器集成」 [石川考古学研究会々誌] 52 石川考古学研究会
 福海貴子 2003 「第Ⅵ章第1節 八日市地方遺跡出土土器の検討」 [八日市地方遺跡 1] 小松市教育委員会
 堀大介 2002 「古墳成立期の土器編年 - 北陸西南部を中心に -」 [朝日山] 朝日町教育委員会
 堀大介 2008 「北陸における古墳の出現」 [古代学研究] 180 古代学研究会

第8表 Ⅱ区出土土器観察表

標号	No.	形態	出土地区	数量(m)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
65	1	皿	C76 SX1周溝	(口)22.0 (底)9.0	良	やや密 砂粒多	にぶい橙	(口)刷突文 (口～底)ハケ→横ナブ	(口)横線点線文 (口)突文、ハケ→ナブ	10%	
65	2	皿	B78 SX1周溝	(口)7.6 (底)17.2	良	密 砂粒少	橙	(口)ハケ→縦ミギキ (底)→ナブ、指頭正底	(口～底)縦ミギキ→横ミギキ	90%	底面焼成痕穿孔
65	3	皿	F79 SX1周溝	(口)8.1 (底)3.2 (高)7.2	やや 不良	やや密 砂粒多	浅黄橙	(口～底)ナブ	(口～底)ナブ (底)ハケ (底)横ナブ	50%	
65	4	皿	F79 SX1周溝	(口)10.0 (底)6.1	良	やや粗 砂粒多量	にぶい黄橙	(口～底)ハケ→ナブ (底)指頭正底	(口～底)ナブ (底)ハケ→ナブ	不明	
65	5	壺	B77 SX1周溝	(口)13.0 (底)14.0	良	やや密 砂粒多	にぶい橙	(口～底)横ナブ、指頭正底	(口)横線12条 (口)ナブ	10%	
65	6	壺	D75 SX1周溝	(口)15.6 (底)13.4	良	やや密 砂粒少	にぶい黄橙	(口)ナブ (口)ハケ	(口)横線	不明	
65	7	皿	F79 SX1周溝	(口)1.8 (底)6.5	良	やや密 砂粒少	橙	(底～底)ナブ	(底～底)ハラナブ	不明	
66	1	皿	Z73 SX3周溝	(口)17.6 (底)12.5	良	やや密 砂粒多	(内)にぶい黄 (外)橙	(口～底)指頭正底、横ナブ	(口)指頭正底、ナブ→刷み (底～底)横ナブ	不明	口縁部内面 集合数番号
66	2	皿	Z73 SX3周溝	(口)13.2 (底)7.2	不良	密 砂粒多量	にぶい黄橙	(口～底)ハケ→ナブ	(口)ナブ (口)ハケ→ナブ	不明	
66	3	壺	SX3周溝	(口)17.2 (底)14.1	良	やや密 砂粒多	にぶい橙	(口)横ナブ (口)ハケ (底)ハラケツ	(口)横線 (口)ナブ	不明	
66	4	壺	SX3周溝	(口)17.0 (底)17.5	良	粗 砂粒多	(内)暗褐色 (外)にぶい黄橙	(口～底)横ナブ (底)ハラケツ	(口)横線11条 (口)横ナブ (底)ハケ	20%	
66	5	壺	A73 SX3周溝	(口)27.0 (底)18.0	良	やや粗 砂粒多	灰黄	(口～底)ナブ (底)ハラケツ	(口)横線 (口)横ナブ (底)ハケ	不明	
66	6	壺	A73 SX3周溝	(口)29.0 (底)4.0 (高)16.0	良	密 砂粒多	浅黄橙	(口～底)ナブ (底)ケツ	(口)横線11条 (口～底)ハケ→ナブ	10%	
66	7	脚台	Z73 SX3周溝	(口)31.2 (底)19.1	良	やや密 砂粒少	浅黄橙	不明	(口～底)ミギキ	不明	
66	8	高杯	Z73 SX3周溝	(口)14.2 (底)7.4	良	やや密 砂粒多	橙	(口～底)ナブ	(口～底)ナブ	30%	
66	9	高杯	A73 SX3周溝	(口)11.0 (底)5.1	やや 良	やや密 砂粒多	浅黄橙	(口～底)ナブ (脚)上げり	(口～底)横ナブ (脚)縦ミギキ	不明	
66	10	高杯	Z76 SX3周溝	(口)12.4 (底)10.0	良	やや密 砂粒少	橙	(口～脚)ミギキ (脚)上げり	(口～脚)ミギキ	50%	径孔×3
66	11	壺	Z73 SX3周溝	(口)21.0 (底)17.0	良	やや粗 砂粒ごく少	(内)暗褐 (外)橙	(口～底)横ナブ	(口～底)横ナブ	不明	
67	1	壺	A71 SX4周溝	(口)12.0 (底)4.0	良	やや密 砂粒多	にぶい橙	(口)ナブ (口)ハケ (底)ハラケツ	(口～底)横ナブ	不明	
67	2	皿	A71 SX4周溝	(口)20.0 (底)5.0	良	密 砂粒少	灰白	(口～底)ハケ→ナブ	(口)横線? (口)ハラ→ナブ	不明	

第5章 遺物

標号	%	遺種	出土地区	数量(m)	構成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
67	3	壺	074 SX6周溝	(口)18.8 (底)5.2 (高)42.8	やや不真 中々粗 砂粒多		(内)浅黄緑 (外)橙	(口)ハケ (底)横ナデ	(口)ハケ・浮文 (底)ハケ・変形文に刻み (体)ナデ	90%	
67	4	壺	073 SX6周溝	(口)14.0 (底)4.6 (高)27.5	真		(内)に深い黄 (外)浅黄緑	(口)横ナデ (底)ハケナデ	(口)刻み・浮文 (底)変形文に刻み (体)七字一直接・波状文・横刻突	80%	
67	3	壺	073 SX6周溝	(口)17.0 (底)4.1	真	やや粗 砂粒多量	灰白	(口)ナデ (底)ハケ	(口)横刻 (底)ナデ	不明	
67	6	壺	073 SX6周溝	(口)15.0 (底)3.9	真	やや粗 砂粒多	に深い赤褐	(口)横ナデ (底)ハケ	(口)横刻 (底)横ナデ	不明	
67	7	壺	073 SX6周溝	(口)20.0 (底)5.0	真	やや粗 砂粒多	に深い黄緑	(口)横ナデ (底)ハケ (体)横ナデ	(口)横刻11条 (底)ナデ	10%	
67	6	壺	073 SX6周溝	(口)23.0 (底)5.0	真	やや粗 砂粒多	に深い黄緑	(口)横ナデ	(口)横刻 (底)ハケナデ	10%	
67	9	高坪	073 SX6周溝、F78 土 坑73	(口)32.6 (底)30.6	真	やや粗 砂粒多	に深い橙	(口)横ナデ→ 横ナデ	(口)横ナデ	13%	
68	1	壺	073 SX8周溝	(口)16.2 (底)7.2 (高)33.0	粗 砂粒多量	(内)黄緑 (外)浅黄緑	(口)ナデ (底)ハケ・横刻正直 (体)ナデ・横刻正直	(口)横ナデ→横刻正直 (底)ハケ→直線・波状文 (体)ハケ→横刻正直	不明		
68	2	壺	072 SX8周溝	(口)16.0 (底)5.3	真	やや粗 砂粒多	(内)に深い黄緑 (外)浅黄緑	(口)横ナデ	不明	不明	
68	3	壺	073 SX8周溝	(底)6.2 (高)24.6	真	やや粗 砂粒多	橙	(底)ハケ・横刻正直	(底)ハケナデ	50%	
68	4	壺	D-073-74 SX8周溝	(口)20.0 (底)5.4	真	やや粗 砂粒多量	(内)灰 (外)浅黄緑	(口)赤褐 (底)ナデ	(口)赤褐→刻み (底)赤褐	不明	周溝交差部
68	5	壺	073 SX8周溝	(口)21.0 (底)7.7	真	やや粗 砂粒多	(内)灰白 (外)黄緑	(口)横ナデ→ハケ	(口)刻み (体)ハケ	不明	
68	6	壺	072 SX8周溝	(口)12.2 (底)7.0	粗 砂粒多	(内)に深い黄緑 (外)に深い赤褐	(口)ハケ	(口)横ナデ (底)ハケ	(口)横ナデ (底)ハケ	不明	
68	7	器台?	073 SX9周溝	(底)3.2	不真 中々粗 砂粒多	に深い黄緑	(底)横ナデ	(底)横ナデ	不明	不明	
68	8	台付壺	071 SX9周溝	(口)3.7 (底)5.4 (高)17.2	真 磨 砂粒少	橙	(口)横ナデ (底)横刻正直	(口)横ナデ	(口)横ナデ	100%	内径×2
68	9	台付鉢	A63 SX11周溝	(口)5.0 (底)3.4 (高)16.4	真	やや粗 砂粒多	橙	(口)横ナデ (台)ヘラケツ	(口)台)ハケ→七字ナデ、ナデ	80%	内径×4
68	10	台付壺	D-067 SX12周溝	(底)6.2	真	やや粗 砂粒多	浅黄緑	不明	不明	不明	
68	11	壺	087 SX12周溝	(口)13.9 (底)3.9 (高)25.4	やや不真 中々粗 砂粒多	浅黄緑	(底)ハケ	(底)変形文に刻み (体)ハケ→直線・波状文	70%		
68	12	壺	087 SX12周溝	(口)17.0 (底)5.0	真	やや粗 砂粒多	橙	(口)横ナデ (体)ヘラケツ	(口)横ナデ (体)ハケ	不明	
68	13	鉢	087 SX13周溝	(口)13.6 (底)4.0 (高)5.1	真	やや粗 砂粒多	黄緑	(口)横ナデ	(口)横ナデ	100%	

第1節 Ⅱ区：土器

標号	%	器種	出土地区	数量(oz)	構成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
68	14	鉢	A66 SX14周濠	(口)13.7 (底)4.4 (高)19.0	やや不 良	粗 砂粒多量	浅黄緑	(口～底)ハケ	(口)織ナデ (底)織ハケ	80%	外面一部保存者
68	15	鉢	D67 SX15周濠	(口)6.0 (底)1.3 (高)4.8	不良	やや密 砂粒少	浅黄緑	(口～底)ナデ (底)指頭正直	(口～底)ナデ (体下部)ハケ	100%	
68	16	蓋	D67 SX15周濠	(口)9.4 (高)7.9	やや良	やや密 砂粒多	橙	(口～底)ハケ→ナデ (底)指頭正直	(口)指頭正直 (底)織ハケ	不明	
68	17	蓋	D67 SX15周濠	(口)7.0 (高)10.0	良	やや密 砂粒少	にがい黄緑	(口～底)織ナデ (底)ケズ	(口)織ナデ (底)織ハケ	10%	
68	18	壺	D67 SX15周濠	(口)15.0 (高)7.0	良	やや密 砂粒多	浅黄緑	(口～底)ヒガキ、ナデ (底)ヘラケツ→ヒガキ	(口)指頭正直 (底)ナデ (体)ヒガキ	不明	
68	19	壺	D67 SX15周濠	(口)19.2 (高)14.0 (底)8.0	良	やや密 砂粒多	橙	(口～底)織ナデ (底)ヘラケツ	(口)指頭正直 (底)織ナデ (体)ハケ	60%	
69	1	蓋	D66 SX16周濠	(口)11.4 (底)5.2 (高)24.0	やや良	やや密 砂粒少	(内)浅黄緑 (外)橙	(口～底)ハケ→ナデ	(口)織ナデ (底)織ハケ→直線・直状文 (体下部)ハケ→ナデ	90%	
69	2	蓋	D66 SX16周濠	(口)8.8 (底)5.8 (高)27.1	良	密 砂粒少	にがい黄緑	(口)ナデ (底)織ハケ	(口)ナデ (底)織ハケ→ナデ	80%	
69	3	蓋	D66 SX16周濠	(口)11.2 (底)5.8 (高)28.3	良	密 砂粒多量	(内)浅黄 (外)にがい橙	(口～底)織ナデ (底)ハケ→ナデ	(口)織ナデ (底)織ハケ	90%	
69	4	台付水差	D65 SX16周濠	(口)7.5 (底)9.0 (高)15.8	良	密 砂粒多	橙	(口～底)ハケ→ナデ (底)ナデ	(口)ナデ (底)織ヒガキ→指頭正、直線文	90%	
69	5	鉢	F65 SX16周濠	(口)13.2 (底)4.8 (高)18.5	良	密 砂粒少	橙	(口～底)ハケ→ナデ	(口)織ナデ (体)指めハケ	100%	内孔×2
69	6	鉢	F65 SX16周濠	(口)17.0 (底)9.0 (高)13.8	良	密 砂粒少	にがい黄緑	(口～底)織ハケ→指めハケ (底)ナデ	(口)ナデ (底)織ハケ→織ハケ (体)織ハケ	90%	内孔×2
69	7	鉢	F65 SX16周濠	(口)19.8 (底)5.2 (高)13.9	良	密 砂粒多	(内)橙黄 (外)橙	(口)織ナデ (底)織ハケ→ナデ	(底)織ハケ→織ハケ (体下部)ハケ→ヒガキ	100%	内外面保存者
69	8	蓋	D68 SX18周濠	(口)14.0 (高)9.0	良	やや粗 砂粒少	にがい橙	(口～底)ナデ	(口)指頭正直 (底)織ハケ→ナデ	不明	
69	9	蓋	SX19周濠	(口)7.8 (高)13.0	良	やや密 砂粒多量	浅黄緑	(底～底)ハケ→ナデ	(底～底)ケズ→ヒガキ	20%	
69	10	蓋	F60 SX20周濠	(口)11.0 (底)5.1 (高)19.0	良	やや密 砂粒少	にがい橙	(口～底)指ナデ→ハケ (底)織ハケ	(口)織ナデ (底)織ハケ→指頭正直 (体)ハケ	100%	
69	11	高坪	F60 SX20周濠	(口)17.0 (底)7.1 (高)12.9	やや不 良	やや密 砂粒少	橙	(口～底)ハケ→ナデ (底)ヘラケツ	(口～底)ハケ (底)織ハケ→ナデ→織ナデ	80%	
70	1	壺	965 SX22周濠	(口)3.8 (高)29.8	良	やや密 砂粒多	浅黄	(底～底)ハケ→ヘラケツ	(体)ハケ (体下部)指頭正直、ハケ	45%	
70	2	台付壺	965 SX22周濠	(口)4.0 (高)9.3	不良	やや密 砂粒多量	浅黄緑	(底)ケズ (台)ケズ	(底)織ハケ (台)指頭正直	40%	
70	3	蓋	965 SX22周濠	(口)1.8 (高)15.0	良	密 砂粒少	浅黄緑	(底)ハケ→ナデ	(底)ハケ→ヒガキ→ 沈線3条、竹管刺突	80%	

第5章 遺物

標号	%	原種	出土地区	数量(m)	構成	粘土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
70	4	壺	365 SX22周溝	(口)21.7 (底)28.5	良	やや密 砂粒多	浅黄緑	(口)ナデ (底)フタケ (胴)指頭正丸、ヘラケズ	(口)顔面縁6条 (底)縁ナデ (体)ハケ	90%	
70	5	壺	366 SX22周溝	(口)27.3 (底)15.0	良	やや密 砂粒多	浅黄緑	(口)指頭正丸、横ナデ (底)ハケ (体)ハケ→ヘラケズ	(口)顔面縁6条 (底)縁ナデ (体)ハケ	不明	
70	6	脚台	A66 SX22周溝	(高)19.2 (底)4.7	良	密 砂粒少	浅黄緑	(口)ヘラケズ→ナデ	(口)ヘケ→縁七ギキ	不明	
70	7	皿	SX23周溝	(口)16.0 (底)23.0	良	密 砂粒多	橙	(口～底)横ナデ (底)ヘラケズ	(口～底)横ナデ (体)ハケ	20%	
70	8	皿	A64 SX23周溝	(口)9.1 (底)16.1	良	やや密 砂粒多量	浅黄緑	(口～底)ナデ (底)ケズ	(口～底)ナデ→ヘラケズ (体)縁のハケ	50%	内外面付着
70	9	壺	364 SX23周溝	(口)17.2 (底)17.5	良	やや密 砂粒多量	浅黄緑	(口～底)指頭正丸、ナデ (底)ヘラケズ	(口～底)ナデ (体)ハケ	70%	
70	10	鉢	A64 SX23周溝	(口)18.0 (底)7.2	良	密 砂粒多	黄緑	(口～底)横ナデ (底)ヘラケズ	(口)顔面縁7条 (体)七ギキ	20%	
70	11	高杯	C64 SX23周溝	(高)14.4 (底)16.4	やや 良	密 砂粒ごく少	橙	(口)七ギキ (底)横ナデ	(口～底)縁七ギキ	40%	円孔×4
70	12	高杯	C63 SX23周溝	(高)16.0 (底)16.2	やや密 砂粒ごく少	良	橙	(口)七ギキ (底)ハケ	(口～底)七ギキ	40%	円孔×4
71	1	壺	365 SX24周溝	(口)13.6 (底)24.0	良	やや密 砂粒少	(内)浅黄緑 (外)橙	(口～底)ハケ	(口)縁のみ (底)縁ハケ→直縁・底状文 (体)七ギキ	50%	
71	2	壺	366 SX24周溝	(口)18.4 (底)4.4 (高)25.7	良	やや密 砂粒少	橙	(口～底)ハケ、指頭正丸→ ヘラケズ	(口～底)ハケ	50%	
71	3	台付鉢	C66 SX24周溝	(口)16.6 (底)9.9 (高)15.5	密 砂粒少	二色・橙	(口～底)ハケ→ナデ→七ギキ (底)ハケ→ナデ、指頭正丸	(口)横ナデ (底)縁ハケ→ナデ	(口)縁のみ (底)縁ハケ→直縁・底状文 (体)七ギキ	90%	円孔2×2
71	4	壺	360 SX29周溝	(口)12.2 (底)5.9 (高)34.2	良	密 砂粒ごく少	二色・黄緑	(口～底)ハケ (底)縁ハケ→ナデ	(口)縁のみ (底)縁ハケ→直縁・底状文 (体)七ギキ	70%	
71	5	壺	B-C17～19 SX32周溝	(口)19.0 (底)9.5	やや密 砂粒多量	二色・黄緑	(口～底)ハケ→ナデ	(口)縁のみ (底)ハケ	不明		
71	6	壺	C59 SX32周溝	(口)15.2 (底)5.9 (高)38.5	やや密 砂粒多	明黄緑	(口～底)横ハケ (底)縁のハケ	(口)縁のみ (底)縁ハケ	(口)縁のみ (底)縁ハケ→直縁文 (体上部)直縁・底状文 (体下部)ハケ→七ギキ	80%	
71	7	鉢	C50 SX33周溝	(口)14.8 (底)23.1 (高)18.5	良	やや密 砂粒多	(内)浅黄 (外)橙	(口)横ナデ (底)ハケ (底)縁ハケ→ナデ	(口)縁のみ (底)横ナデ (体)ハケ	90%	内外面付着
71	8	壺	360-61 SX34周溝	(口)18.8 (底)3.9 (高)38.8	良	やや密 砂粒少	(内)浅黄 (外)二色・黄緑	(口～底)縁七ギキ (底)縁ハケ→ナデ	(口～底)七ギキ	90%	
71	9	鉢	352 SX35周溝	(口)10.0 (底)3.4 (高)15.3	良	やや密 砂粒少	橙	(口～底)ヘラケズ	(口～底)七ギキ	60%	
71	10	脚台	352 SX35周溝	(高)16.0 (底)14.1	良	やや密 砂粒ごく少	橙	(底)七ギキ (口)ハケ→ナデ	(底)縁七ギキ (口)ハケ→指頭縁5条	50%	
71	11	高杯	352 SX35周溝	(高)19.9 (底)18.2	密 砂粒少	二色・黄緑	(口)七ギキ (底)横ナデ	(口)七ギキ (底)七ギキ→縁指縁6条	(口)七ギキ (底)七ギキ→縁指縁6条	90%	円孔×4
72	1	壺	C57 SX36周溝	(口)9.4 (底)5.2 (高)24.1	良	やや密 砂粒多	明赤褐	(口～底)ハケ	(口)縁のみ (底)縁ハケ→七ギキ→直縁文	90%	外面一部付着
72	2	壺	356 SX36周溝	(口)13.3 (底)24.8	良	やや密 砂粒ごく少	二色・黄緑	(口～底)ハケ	(口～底)ハケ	50%	

第1節 Ⅱ区：土器

標号	%	遺構	出土地区	数量(個)	構成	胎土	色澤	内面調整	外面調整	残存率	備考
72	3	土器台車用 煎餅車	54 土坑151	(標)4.1 (厚)9.3	良	中々粗 砂粒少	灰黄緑	(裏)ナデ	(裏)ハケ	100%	
72	4	甕	44 SX41周溝	(口)14.0 (底)2.6 (高)6.4	良	粗 砂粒多量	橙	(口～底)ケツリ	(口～底)ハケ	30%	
73	1	甕	D84 住居1・2(標14)	(口)26.0 (高)9.0	良	中々粗 砂粒少	浅黄緑	(口～底)横ナデ (底)ヘラツクス	(口)縦凹線9条 (底)横ナデ	不明	
73	2	甕	C-D81 住居1・2(標54)	(口)19.0 (高)5.3	良	中々粗 砂粒多	灰白	(口～底)ナデ	(口)縦凹線7条 (底)横ナデ	不明	
73	3	甕	B84 住居1・2(標19)	(口)18.0 (高)5.1	良	中々粗 砂粒多	(内)浅黄緑 (外)灰	(口～底)横ナデ (底)ヘラツクス	(口)横ナデ (底)横ナデ、ハケ	不明	
73	4	甕	B81 住居1・2(標54)	(口)13.0 (高)7.7	良	中々粗 砂粒多	橙	(口～底)ナデ (底)ハケ	(口～底)ナデ (底)ハケ	不明	外面一部残存
73	5	甕	C81 住居1・2(標66)	(口)15.2 (底)2.3 (高)14.4	良	中々粗 砂粒多	にぶい黄緑	(口～底)横ナデ (底)ヘラツクス	(口～底)横ナデ (底)横ナデ、ハケ (体下部)凹線3条	70%	外面一部残存
73	6	台付甕	B84 住居1・2(標12)	(口)17.0 (底)12.0 (高)21.7	良	中々粗 砂粒多	橙	(口)横ナデ (底)横、縦ハケナデ	(口)横ナデ (底)横ハケナデ	80%	
73	7	甕	C81 住居1・2(標54)	(口)14.0 (高)4.0	良	中々粗 砂粒多	(内)にぶい黄緑 (外)浅黄緑	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ	不明	外面残存
73	8	台付鉢小	D81 住居1・2(標59)	(高)4.0	良	中々粗 砂粒多	(内)にぶい黄緑 (外)にぶい黄緑	(底)横ハケナデ	(脚)ハケナデ	不明	
73	9	鉢	D84 住居1・2(標15)	(口)15.8 (高)6.6	中々 不良	中々粗 砂粒多	にぶい黄緑	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ	30%	
73	10	鉢	D84 住居1・2(標12)	(口)13.5 (高)6.1	中々 不良	中々粗 砂粒多量	浅黄緑	(口)ナデ (底)七ガキ	(口)ナデ、七ガキ	20%	
73	11	深鉢小	D84 住居1・2(標14)	(底)4.0 (高)3.8	良	中々粗 砂粒多	浅黄緑	(口～底)ハケ、凹線7条	(口～底)横ハケ、七ガキ	40%	
73	12	鉢	D82 住居1・2(標14・53)	(口)10.0 (底)2.8 (高)6.2	中々 不良	粗 砂粒多	(内)にぶい黄緑 (外)橙	(底)横ナデ、凹線7条	(底)横ナデ、凹線7条 (体～底)ハケナデ、凹線7条	不明	
73	13	器台	D81-82 住居1・2(標140)	(高)18.0	良	粗 砂粒少	にぶい黄緑	(口～底)横七ガキ (脚)ナデ	(口～底)横七ガキ→縦凹線 (脚)横七ガキ	60%	内孔1×3
73	14	高坪	D82 住居1・2(標141)	(口)29.0 (高)4.9	良	粗 砂粒少	黄緑	(口～底)横ナデ	(口～底)七ガキ	不明	
73	15	高坪	D81-82 住居1・2(標54)	(口)20.2 (底)17.0 (高)24.0	良	中々粗 砂粒多	浅黄緑	(口～底)七ガキ (脚)七ガキ (底)横ナデ→横ナデ	(口～底)七ガキ (脚)縦七ガキ (底)縦七ガキ→縦凹線7条、内孔	90%	内孔1×4
73	16	脚鉢	D84 住居1・2(標14)	(底)14.5 (高)9.0	良	粗 砂粒少	橙	(脚)七ガキ (底)横ナデ	(脚)七ガキ (底)七ガキ→縦凹線5条・1条	40%	
73	17	甕	D81-82 住居1・2(標140)	(口)16.6 (底)6.7 (高)3.8	中々 不良	粗 砂粒多	浅黄緑	(口～天)ハケ、ナデ	(口～天)ハケ、ナデ	40%	
74	1	甕	D63 標100	(底)2.2 (高)14.4	中々 不良	中々粗 砂粒多	灰白	(底)横ハケ→凹線7条	(底)横七ガキ	不明	外面一部残存
74	2	鉢	C-D63-64 標100	(口)11.0 (高)7.0	良	中々粗 砂粒少	橙	(口)ナデ (底)七ガキ	(口)ナデ (底)七ガキ	40%	
74	3	鉢	D63 標100	(口)18.4 (底)10.5 (高)8.1	良	中々粗 砂粒少	浅黄緑	(口～底)七ガキ	(口～底)七ガキ	70%	
74	4	台付甕	C-D63-64 標100	(口)19.5 (底)14.2 (高)19.4	良	中々粗 砂粒少	浅黄	(脚)七ガキ→ケツリ (底)ナデ	(口)横七ガキ (脚)横七ガキ	90%	内孔1×4

第5章 遺物

標号	%	遺種	出土地区	数量(α)	構成	粘土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
74	5	壺	C-D63-64 横100	(I)15.6 (α)79.0	良	やや硬 砂粒多量	(内)黄灰 (外)灰白	(口)縦ナデ (底)ケズ	(口)縦凹線 (底)縦ハケ→横ナデ	不明	
74	6	壺	C-D63-64 横100	(I)17.4 (α)111.7	不良	やや硬 砂粒少	黄灰	(口)指頭瓦痕	(口)縦凹線6条 (口)ナデ (底)ハケ	30%	
74	7	高坏	C-D63-64 横100	(I)30.1 (α)18.6 (α)23.1	良	やや硬 砂粒多	黄灰緑	(口)刷毛シガキ (底)しばり (底)ハケ	(口)縦ハケ (口)縦シガキ (底)縦シガキ	100%	外面赤銅ナ、円孔 1×4
74	8	高坏	C-D63-64 横100	(I)29.7 (α)17.9 (α)21.8	良	滑 砂粒ごく少	黄灰緑	(口)刷毛シガキ→縦シガキ (底)しばり (底)横ハケ	(口)縦シガキ (底)縦シガキ	90%	外面赤銅ナ、円孔 1×4
74	9	高坏	C-D63-64 横100	(I)28.0 (α)13.2 (α)19.4	良	滑 砂粒少	(内)緑 (外)に灰い黄緑	(口)横シガキ (底)しばり (底)横ナデ	(口)縦シガキ	50%	
75	1	蓋	A71-72 横71	(I)130.8 (α)13.7	良	滑 砂粒少	黄灰緑	(口)縦シガキ	(口)縦シガキ	不明	
75	2	鉢	D62 横87	(I)8.8 (α)3.1 (α)6.2	やや 不良	やや硬 砂粒多	(内)灰白 (外)に灰い橙	(口)縦ハケナデ (底)ヘラタテ (底)指頭瓦痕 (底)ヘラナデ	(口)縦ハケナデ (底)指頭瓦痕 (底)ヘラナデ	90%	外面底面黒付
75	3	壺	D62 横87	(I)7.6 (α)3.9 (α)8.5	良	やや硬 砂粒少	灰白	(口)縦ハケナデ (底)ケズ	(口)ヘラタテ (口)ナデ (底)ハケ	90%	外面黒付
75	4	鉢	D62 横87	(I)12.0 (α)7.0	良	やや硬 砂粒少	橙	(口)縦ハケ→横シガキ	(口)縦ハケ→横シガキ →縦シガキ	60%	
75	5	蓋	B56 横111	(I)8.2 (α)10.0	良	やや硬 砂粒少	黄灰	(口)縦ハケ→横ナデ →横シガキ	(口)縦ハケ→横シガキ	不明	
76	1	壺	A87 土坑24	(I)12.8 (α)2.0 (α)13.8	不良	やや硬 砂粒多	に灰い黄緑	(口)縦ハケナデ (底)ケズ	(口)縦凹線6条 (底)縦ハケ	60%	
76	2	壺	A87 土坑34	(I)12.1 (α)4.0	不良	粗 砂粒やや多	黄灰緑	(口)縦ハケナデ (底)ケズ	(口)縦凹線3条 (口)横ナデ (底)縦ハケ	不明	
76	3	壺	B84 土坑38	(I)21.2 (α)12.1	不良	粗 砂粒多	黄灰緑	(口)縦ハケナデ	(口)縦ハケ	不明	
76	4	壺	B84 土坑38	(I)22.4 (α)14.5	やや 不良	やや硬 砂粒多量	黄灰	(口)横ナデ (口)ハケ (底)ヘラナデ	(口)縦ハケ (口)縦ハケ (底)縦ハケ	不明	内外面黒付
76	5	蓋	A79 土坑45	(I)19.9 (α)2.2 (α)18.7	良	やや硬 砂粒少	橙	(口)縦シガキ	(口)縦シガキ (底)縦シガキ	80%	
76	6	壺	L-A80 土坑64	(I)23.2 (α)22.0	良	やや硬 砂粒やや多	(内)に灰い橙 (外)に灰い黄緑	(口)縦指頭瓦痕、ヘラナデ	(口)縦ハケ (底)縦ハケ→横条痕	70%	
76	7	蓋	B-775 土坑175	(I)16.2 (α)7.0	不良	やや硬 砂粒多	黄灰緑	(口)縦ハケ、黄灰文	(口)縦黄灰文 (口)縦ハケ、黄銅・黄灰文	不明	
76	8	壺	B-775 土坑72	(I)18.0 (α)9.7	やや 不良	やや硬 砂粒多	に灰い橙	(口)縦黄灰文→横ハケ	(口)縦ハケ→黄灰文	不明	
76	9	壺	B-775 土坑72	(I)18.4 (α)7.5	やや 不良	やや硬 砂粒多	に灰い黄緑	(口)ハケ→横ナデ (底)縦ハケナデ	(口)縦ハケ (底)縦ハケ	不明	
76	10	蓋	778 土坑73	(α)1.9 (α)9.7	不良	滑 砂粒ごく少	黄灰緑	(底)しばり砂痕	(底)縦ハケ→横ナデ→シガキ (底)縦ハケ→横ハケ	70%	
77	1	壺	B69 土坑93	(I)17.0 (α)16.4 (α)19.0	やや 不良	粗 砂粒多量	(内)に灰い黄緑 (外)黒緑	(口)縦ヘラナデ (底)指ナデ	(口)縦指ナデ (底)縦ヘラナデ	60%	
77	2	蓋	B68 土坑100	(I)14.2 (α)14.0	やや 不良	粗 砂粒多量	に灰い黄緑	(口)縦ハケ→横ナデ (底)ハケ	(口)縦ハケ (底)ヘラタテ	70%	
77	3	脚瓶	D63 土坑113	(α)16.4 (α)14.6	良	やや硬 砂粒少	に灰い黄緑	(底)縦ナデ	(底)縦凹線	60%	

第1節 Ⅱ区：土器

標号	No.	器種	出土地区	数量(㎝)	構成	胎土	色調	内部調整	表面調整	残存率	備考
77	4	壺	G4 SX16周溝、D61-42土坑114	(口)27.0 (底)17.0	良	漆 砂粒少	にがい釉	(口～腹)ナデ	(口～腹)刷み、条痕 (腹～底)刷み	不明	
77	5	壺	P65 土坑125	(口)25.0 (底)17.0	良	中～粗 砂粒多量	浅黄緑	(口～底)横ハケ	(口腹)刷み (腹～底)横ハケ	不明	
77	6	壺	S82 土坑126	(口)27.0 (底)4.0 (高)28.0	良	中～粗 砂粒多	にがい黄緑	(口～底)横ナデ	(口腹)刷み (腹～底)条痕 (体下部)条痕一階面ニ張	50%	底部結成後穿孔
77	7	壺	P75 土坑176	(口)4.0 (底)27.0	中～良	中～粗 砂粒多	黄質	(腹)ハケ (底)横ナデ	(腹)ハケ (底)横ナデ	80%	
77	8	壺	S70 土坑177	(口)19.0 (底)11.0	良	粗 砂粒多量	浅黄	(口)横ハケ (腹～底)ハケ→横ナデ	(口腹)刷み (腹～底)ハケ	不明	
78	1	壺	C77 p172	(口)14.0 (底)10.0	不良	中～粗 砂粒多	(内)灰白 (外)にがい黄緑	(口～腹)ハケ	(口腹)刷み (腹)縦ハケ→底腹文→ 押正黄赤	不明	
78	2	壺	S70 SX28周溝-p201	(口)11.0 (底)12.0	良	中～粗 砂粒多量	にがい黄緑	(口～底)ハケ→横ナデ	(口腹)刷み (腹～底)ハケ→ナデ→横底文	不明	内面一部に煤付着
78	3	壺	A68 p204	(口)18.9 (底)13.0 (高)24.9	良	中～粗 砂粒多	黄質	(口～腹)横ナデ、指面正張 (底)ハケ→ナデ	(口)縦刷毛 (腹)横ナデ (底)ハケ	80%	
78	4	罎部	A67 p206	(口)18.4 (底)9.1	良	粗 砂粒少	にがい黄緑	(腹)ハケ→横ナデ	(腹)縦七ギキ (腹)縦刷毛、文様	70%	口径×4
78	5	壺	S69 p213	(口)16.1 (底)13.2	良	粗 砂粒多	橙	(口)ミギギキ (腹)ハケ→縦七ギキ (底)七ギキ	(口)縦七ギキ (腹)ハケ→縦七ギキ (底)七ギキ	50%	
78	6	壺	p272	(口)19.2 (底)5.4	良	中～粗 砂粒多	(内)浅黄緑 (外)黄質	(口～腹)横ナデ (底)ハケ→ナデ	(口)縦刷毛 (腹)横ナデ (底)ハケ	不明	
78	7	壺	P54 p224	(口)16.8 (底)20.3	良	中～粗 砂粒多	橙	(口～腹)横七ギキ、指面正張 (底)ハケ→ナデ	(口腹)指押正 (口)縦七ギキ (腹)横ナデ (底)ハケ→横七ギキ	70%	外面煤付着
78	8	壺	44 p459	(口)23.0 (底)8.7	良	中～粗 砂粒少	黄質	(口～腹)横ハケ (底)ハケ→ナデ	(口)横ナデ→指押正 (腹～底)ハケ	不明	
78	9	壺	D78 p464	(口)5.4 (底)33.0	良	中～粗 砂粒少	にがい黄緑	(腹)ハケ (底)指面正張、横ナデ	(腹)縦条痕 (底)条痕	80%	
79	-	壺	A76 p483	(口)24.0 (底)9.0 (高)16.0 (口底) 9.0	良	中～粗 砂粒多	浅黄緑	(口～腹)指面正張、横ナデ (底)ハケ→ナデ	(口)条痕、浮文、指押正 (腹～底)条痕	不明	
80	1	罎鉢	45 包含層	(口)19.0 (底)7.1	良	粗 砂粒多	黄質	(口～腹)ナデ (腹)灰濁	(口腹)ハケ→ナデ (口)縦刷毛、縁の浮文、隅文、ミギギキ	不明	外面口縁部炭化物付着
80	2	罎鉢	P62 SX26周溝	(口)19.0	良	中～粗 砂粒多	にがい黄緑	(腹)ナデ→横ナデ	(腹)縦刷毛、縁文、七ギキ	不明	外面腹上平部炭化物付着
80	3	小部鉢	P57-G7-S6 SX20横正張土	(口)9.0 (底)9.0	良	中～粗 砂粒少	にがい釉	(口～腹)指面正張、ナデ	(口～腹)押し引き列点文、隅文 (腹～腹)指面正張、ナデ	70%	
80	4	罎鉢	256 包含層	(口)29.5 (底)10.0	良	中～粗 砂粒多	黄質	(口～腹)ナデ	(口腹)横ハケ→ナデ (口～腹)条痕 (腹～腹)条痕	不明	
80	5	罎鉢	360 包含層	(口)26.5 (底)25.5	良	中～粗 砂粒多	にがい黄緑	(口～腹)ナデ	(口腹)指押正 (口～腹)条痕 (腹)ナデ	40%	内面腹下平部炭化物付着
80	6	罎鉢	SX31 周溝	(口)26.6 (底)17.5	良	中～粗 砂粒多	明黄質	(口～腹)ナデ	(口～腹)条痕	不明	内面砂赤痕
80	7	罎鉢	S59 SX33周溝	(口)23.0 (底)18.0	不良	中～粗 砂粒多	(内)にがい赤釉 (外)灰濁	(口～腹)ナデ	(口～腹)条痕	10%	
80	8	罎鉢	C60 土坑137	(口)34.6 (底)20.7	中～良	中～粗 砂粒多	にがい黄	(口～腹)ナデ	(口腹上)指押正 (口～腹)ナデ (腹)条痕	不明	内面腹下平部炭化物付着

第5章 遺物

標号	%	器種	出土地IC	容量(cm)	構成	胎土	色別	内面調整	外面調整	残存率	備考
80	9	陶鉢	6-F02 土庫127	(口)027.60 (底)017.1	良	粗砂粒多	靑	(口～胴)ナデ	(口縁上)へう状工具押し引き (口～胴)ナデ (底)糸痕	不明	外面化粧土付着
80	10	陶鉢	6-0 SX33周溝	(口)034.60 (底)011.60	良	粗砂粒多	浅黄	(口～胴)指頭正底、ナデ (胴)ナデ	(口縁上)へう状工具ナデ (口～胴)ナデ (底)糸痕	不明	
80	11	小形鉢	9-9 包含層	(口)17.9 (底)2.7 (高)13.1	良	中～粗砂粒多	明褐色	(口～底)ナデ	(口縁上)へう状工具による9～6箇所 溝一単位上するキズ(縦 11箇所) (口～胴)ケズリナデ (底)糸痕+ナデ	90%	外面口縁部保護層
81	1	陶鉢	9-11 溝103	(口)027.0 (底)016.0	良	中～粗砂粒少	(内)灰層 (外)に灰+黄緑	(口～胴)ナデ	(口縁部)へう状工具ナデ (口～胴)ナデ (底)糸痕	不明	
81	2	陶鉢	SX31周溝	(口)026.2 (底)07.9	中～良	粗砂粒多量	浅黄	(口～胴)ナデ	(口縁)ナデによる丸味 (口)縁位ナデ (底)糸痕一筋ナデ	40%	
81	3	陶鉢	SX31周溝	(口)026.6 (底)016.0	良	中～粗砂粒多	に灰+黄緑	(口～胴)ナデ	(口縁部)指押正 4単位以下 (口～胴)ケズリナデ	不明	
81	4	陶鉢	0-9 SX33周溝	(口)018.2 (底)012.7	良	粗砂粒多量	に灰+黄緑	(口～胴)ナデ	(口縁)ナデによる縁面 (口～胴)ナデ	20%	
81	5	陶鉢	0-6 溝北	(口)016.0 (底)016.3	良	粗砂粒多	(内)面層 (外)緑	(口～底)ナデ	(口縁)へう状工具押し引き (口～胴)ナデ	不明	
81	6	陶鉢	0-6 包含層	(口)022.2 (底)011.1	良	粗砂粒多量	(内)に灰+黄緑 (外)陶灰	(口～胴)ナデ	(口縁内)指押正 (底)糸痕+ケズリ (口～胴)ケズリ+糸痕	5%	
81	7	陶鉢	9-6 包含層	(口)034.0 (底)021.0	不具	中～粗砂粒多	(内)に灰+黄緑 (外)緑層	(口～胴)ナデ	(口縁上)指押正 (口～胴)糸痕+ナデ (底)糸痕	不明	
82	1	皿	0-6 包含層	(口)026.0 (底)01.0	良	中～粗砂粒少	(内)陶灰 (外)に灰+黄緑	不明	(口)糸痕、筋み	不明	
82	2	皿	0-60 SX29周溝	(口)024.2 (底)06.2	不具	中～粗砂粒多	(内)陶灰 (外)に灰+黄緑	(口～胴)縁糸痕	(口縁)指押正、糸痕 (口～胴)縁糸痕	不明	
82	3	皿	0-75 SX1周溝	(口)019.0 (底)4.4	良	中～粗砂粒多	(内)灰白 (外)黄緑	(口)糸痕	(口)糸痕	不明	
82	4	皿	0-63 包含層	(口)020.0 (底)07.0	良	中～粗砂粒多	浅黄	(口)ナデ (底)糸痕	(口)糸痕→筋み、浮文 (底)糸痕	不明	
82	5	皿	9-32 包含層	(口)07.0	中～良	中～粗砂粒多	(内)浅黄緑 (外)灰白	(口～底)ナデ	(口～底)ハケ→直状文	不明	
82	6	皿	0-63 包含層	(口)021.0 (底)09.3	良	粗砂粒多量	(内)に灰+黄緑 (外)緑泥質	(口～胴)糸痕 (底)指頭正底	(口縁)糸痕で筋み (口～底)糸痕→縁部で直線・ 筋状文	不明	
82	7	皿	0-66 包含層	(口)021.0 (底)07.0	良	中～粗砂粒多	に灰+黄緑	(口～胴)ハケ	(口縁)筋み (底)ハケ+ナデ	不明	
82	8	皿	0-75 包含層	(口)024.0 (底)010.0	良	中～粗砂粒多	に灰+黄緑	(口)糸痕筋状文 (口～胴)ナデ	(口縁)筋み (底)糸痕	不明	
82	9	皿	0-60 SX20周溝	(口)023.0 (底)010.7	不具	粗砂粒多	浅黄	(口)直線・筋状文 (底)ナデ	(口)ナデ (底)直線・筋状文	不明	
82	10	皿	0-3 包含層	(口)021.0 (底)07.0	中～良 不具	中～粗砂粒多	浅黄緑	(口)ハケ (底)ハケ+ケ	(口～胴)へうケ	不明	
82	11	皿	0-67 包含層	(口)05.0 (底)4.6 (高)6.3	良	中～粗砂粒多	に灰+黄緑	(口～底)ハケ→縁ナデ (底)指頭正底	(口～底)ハケ	30%	縁丸あり
82	12	皿	0-63 包含層	(口)016.0 (底)05.0	良	中～粗砂粒多	に灰+黄緑	(口縁)筋み (口～底)ナデ	(口～底)ハケ→ 直線・直線文	不明	
82	13	底皿	0-76 包含層	(口)07.0 (底)09.0	良	中～粗砂粒多	浅黄緑	(底～口)ハケ+ナデ	(底)ハケ	20%	

第1節 Ⅱ区：土器

標高	%	器種	出土地区	数量(m)	構成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
82	14	底皿	056 包含層	(表)9.4 (裏)19.0	良	中々泥 砂粒多	浅黄緑	(赤～藍)ハラケズ	(赤)ハケ	不明	
82	15	底皿	P-G8 SX30横丘盛土	(表)7.6 (裏)10.1	中々 不良	泥 砂粒多	浅黄	(黒)ハラケナド、ナド	(赤)ハラケ～ハラケナド	不明	外面一部残存者
83	1	甕	054 包含層	(口)24.0 (表)6.0 (裏)24.0	不良	中々泥 砂粒多量	黄緑	(口～黒)横ハケ (黒)ナド	(口)押出による皮状化 (黒～赤)横ハケ	70%	
83	2	甕	78 包含層	(口)22.0 (裏)17.0	良	中々泥 砂粒多	灰黄緑	(口～赤)ハケ	(口)黒い (黒～赤)横ハケ	不明	
83	3	甕	956 包含層	(口)14.0 (表)14.0 (裏)14.0	良	中々泥 砂粒ごく少	にぶい黄	(口)横ナド (黒～赤)ハケ	(口)黒い (黒～赤)横ハケ	40%	
83	4	甕	087 SX18埋溝	(口)22.0 (裏)12.0	良	中々泥 砂粒多量	にぶい黄緑	(口～赤)ハラケナド	(口)黒い (黒～赤)ハケ	50%	
83	5	甕	270 包含層	(口)5.4 (裏)16.9	良	中々泥 砂粒ごく少	にぶい黄緑	(赤～藍)ハラケ	(赤)ハケ	20%	内面残存者
83	6	甕	SX32埋溝	(口)27.0 (裏)11.0	良	中々泥 砂粒多	黄緑	(口～黒)縦紋文 (赤)ハラケ～横ナド、指図圧痕	(口)黒い (黒～赤)横ハケ	20%	
83	7	甕	365 包含層	(口)17.2 (表)4.0 (裏)23.0	良	中々泥 砂粒多	(内)浅黄緑 (外)橙	(口)ハラケ (黒～赤)ハラケ～ハラケナド (黒)指図圧痕	(口)黒い (黒～赤)ハラケナド (赤)ハラケ	40%	
83	8	甕	A73 SX3埋溝	(口)21.0 (裏)8.0	良	泥 砂粒多	橙	(口～赤)七ガキ	(口)黒い (黒～赤)七ガキ	不明	
83	9	甕	060 包含層	(口)21.0 (裏)13.3	良	中々泥 砂粒多	(内)灰黄 (外)にぶい黄緑	(口～赤)ナド	(口)黒い (赤)縦紋文、ハケ	50%	内～外面残存者
83	10	甕	A85 包含層	(口)17.1 (裏)14.0	不良	泥 砂粒多量	浅黄	(口～赤)ハラケズ	(口)黒い (黒～赤)文様～縦刺突	80%	中々遺構出土
84	1	皿	785 包含層	(表)26.0 (裏)29.0	良	泥 砂粒少	(内)黄緑 (外)灰黄	(口)ハラケ～七ガキ (黒～赤)ハラケナド	(口)横ナド (黒)七ガキ、突帯文 (赤)七ガキ	不明	
84	2	皿	287 包含層	(表)27.0	良	中々泥 砂粒少	にぶい黄緑	(黒～赤)ハラケナド	(黒～赤)縦ハケ～横ハケ	不明	
85	1	皿	068 包含層	(口)13.2 (裏)14.0	良	中々泥 砂粒ごく少	にぶい黄緑	(口～黒)横ナド (赤)ナズ	(口)縦目線8条 (黒)横ナド	不明	
85	2	皿	100 包含層	(表)18.5	良	泥 砂粒少	浅黄緑	(口～黒)横ナド (赤)ハケ、指図圧痕	(口)横ナド (黒～赤)ハケ	不明	
85	3	皿	L-N37-38 包含層	(口)10.0 (裏)11.0	良	泥 砂粒ごく少	浅黄緑	(黒～赤)ハラケナド	(黒)ハラケ～七ガキ	不明	群馬県3号トンチ 内外面面取
85	4	皿	370 包含層	(口)12.0 (裏)13.3	良	中々泥 砂粒ごく少	橙	(口～赤)ナド	(口～赤)ハラケナド	50%	
85	5	皿	345 包含層	(表)12.0	中々 不良	中々泥 砂粒多	にぶい黄緑	(口～藍)ハラケズ (白)ナド	(口～白)ハラケナド	40%	
85	6	皿	343 包含層	(口)16.2 (表)13.4 (裏)30.7	良	中々泥 砂粒多	黄緑	(口～黒)横ナド、指図圧痕 (黒)ハラケズ (白)ハラケズ	(口～黒)横ナド (赤～白)ハケ	80%	
85	7	皿	A87 包含層	(口)15.7 (裏)14.0	良	中々泥 砂粒少	浅黄	(口)横ナド (赤)ナズ	(口)縦目線8条 (黒)横ナド (赤)ハケ	不明	
85	8	皿	K-L-45-46 包含層	(口)24.0 (裏)13.5	良	中々泥 砂粒多	にぶい黄緑	(口～赤)ハケ	(口)縦目線12条 (黒)横ナド (赤)ハケ	不明	中々遺構出土
85	9	皿	287 包含層	(口)22.0 (表)17.0 (裏)45.0	良	中々泥 砂粒多	(内)黄緑 (外)橙	(口)横七ガキ (赤)指図圧痕、ハラケナド	(口)縦目線12条 (黒～赤)ハラケ～七ガキ	70%	

第5章 遺物

標号	%	器種	出土地区	数量(㎝)	構成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
85	10	甕	967 包含層	(口)14.3 (高)19.8	貝	やや粗 砂粒多	黄緑	(口～腹)横ナデ (底)ヘラケツ	(口)縦凹線6条 (腹)横ナデ (底)ヘラ	50%	
85	11	甕	965 包含層	(口)8.9 (高)17.0	貝	滑 砂粒ごく少	橙	(体～底)指環正底、ヘケ	(体)ヘケ	40%	
85	12	甕	970-C67-68 包含層	(口)18.0 (高)15.0 (底)19.0 (口)7.0	貝	やや粗 砂粒少	灰黄	(口～腹)ハケ～ヒダキ (底)ハケ～ヘラナデ	(口～腹)ハケ～ヒダキ 尖唇に刻み (体)ヘケ～ヒダキ	40%	
86	1	甕	977 包含層	(口)18.8 (高)19.7	貝	滑 砂粒少	橙	(口～腹)ヒダキ、指環正底 (底)ヘケ	(口)浮文×16 (腹)尖唇文に刻み (体)ヒダキ～底縁～表状文	70%	底面焼成痕穿孔
86	2	甕	978 包含層	(口)14.8 (高)15.0	貝	やや粗 砂粒多量	灰黄緑	(口～腹)横ナデ	(口)縦凹線、浮文	不明	
86	3	甕	976-E17 包含層	(口)16.4 (高)17.4	やや 貝	滑 砂粒少	(内)緑文 (外)灰黄緑	(口～腹)ヒダキ	(口)浮文 (腹)横ナデ、尖唇文に刻文 (体)表状文・底縁文	不明	浮文 推定16個
86	4	甕	944 包含層	(口)15.8 (高)10.3	貝	やや粗 砂粒少	橙	(口)縦ヒダキ (腹)ヘケ (底)ナデ、指環正底	(口)ナデ～底状文、刻み (腹～底)ヘケ～ヒダキ	不明	
86	5	甕	A76 包含層	(口)19.2 (高)21.7	やや 不貝	やや粗 砂粒少	灰黄緑	(口)ハケ～ナデ	(口)ハケ～ナデ	不明	
86	6	甕	952 包含層	(口)16.0 (高)18.0	貝	やや粗 砂粒多	黄緑	(口～腹)ヒダキ (底)ヘケ	(口～腹)ナデ	不明	
86	7	甕	957 包含層	(口)16.0 (高)13.0	やや 不貝	やや粗 砂粒多	赤	(口)ヒダキ (腹)ヘラケツ	(口～腹)ヒダキ	不明	内外面赤染
86	8	甕	954 包含層	(口)9.0 (高)16.8	貝	やや粗 砂粒少	灰黄	(口)底縁1条 (口～腹)ハケ～横ナデ (底)指環正底	(口～腹)横ナデ～ヘケ (底)指環正底～ヘラケツ	60%	
86	9	甕	943 包含層	(口)9.7 (高)12.4 (底)8.3	貝	やや粗 砂粒多	(内)緑 (外)明黄緑	(口～腹)ナデ	(口～腹)ハケ～ヒダキ	50%	
86	10	甕	A80 包含層	(口)13.2 (高)21.0	貝	やや粗 砂粒少	(内)灰黄 (外)橙	(口～腹)横ナデ (底)ナデ	(口～腹)横ナデ (底)ヘケ	30%	
86	11	甕	952 包含層	(口)8.4 (高)17.2	貝	やや粗 砂粒ごく少	灰黄	(口～体)横ヘケ	(口)ヒダキ (腹)縦ヒダキ	80%	
86	12	甕	945 包含層	(口)12.0 (高)9.2	やや 不貝	やや粗 砂粒多	黄緑	(口～腹)ヘケ (底)指環正底、ヘラケツ	(口～腹)ヘケ	20%	外面一部黒付着
86	13	甕	943 包含層	(口)14.0 (高)15.8	粗 砂粒多量	粗 砂粒多量	にじい黄緑	(口～腹)横ナデ	(口～腹)ヘケ～横ナデ	不明	
87	1	甕	A69 包含層	(口)13.2 (高)14.7	貝	やや粗 砂粒多	にじい黄緑	(口～腹)横ナデ (底)ヘラケツ	(口)縦凹線5条 (腹)横ナデ (底)ヘケ～ナデ	3%	
87	2	甕	287 包含層	(口)12.0 (高)9.5	不貝	粗 砂粒多	灰黄緑	(口)横ナデ (腹)ヘケ (底)ヘラナデ	(口)縦凹線12条 (腹)横ナデ (底)ヘケ	不明	
87	3	甕	A84 包含層	(口)15.7 (高)11.4	貝	やや粗 砂粒少	にじい黄緑	(口～腹)横ナデ (底)ケツ	(口)縦凹線8条 (腹)横ナデ (底)ヘケ	30%	外面一部黒付着
87	4	甕	A68 包含層	(口)17.0 (高)17.4	貝	やや粗 砂粒多	黄緑	(口～腹)横ナデ、指環正底 (底)ヘラケツ	(口)縦凹線5条 (腹)横ナデ (底)ヘケ	不明	
87	5	甕	A87 包含層	(口)14.7 (高)10.3	貝	滑 砂粒少	橙	(口)横ナデ (底)ケツ	(口)縦凹線5条 (腹)横ナデ (底)ヘケ	不明	
87	6	甕	943 包含層	(口)16.8 (高)16.8	貝	やや粗 砂粒多	灰黄緑	(底)ヘラケツ	(口)縦凹線6条	不明	
87	7	甕	968 包含層	(口)17.8 (高)19.2)	貝	やや粗 砂粒多	黄緑	(口～腹)横ナデ (底)ヘラケツ	(口)縦凹線5条 (腹)横ナデ (底)ヘケ	不明	

第1節 Ⅱ区：土器

標号	%	器種	出土地区	数量(㎖)	構成	胎土	色澤	内面調整	外面調整	残存率	備考
87	8	甕	G33 包含層	(I)116.0 (Ⅱ)79.3)	真	やや硬 砂粒多	にぶい黄緑	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線7条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘラ	不明	
87	9	甕	J43 包含層	(I)111.7 (Ⅱ)76.7)	真	やや硬 砂粒少	橙	(I)～(Ⅱ)指頭正底→ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)～(Ⅱ)ナズ (Ⅲ)ヘラ	不明	
87	10	甕	A70 包含層	(I)114.8 (Ⅱ)75.4)	やや 不真	やや硬 砂粒少	にぶい黄緑	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)～(Ⅱ)横ナズ	不明	
87	11	甕	A87 包含層	(I)113.3 (Ⅱ)77.0)	真	やや硬 砂粒多	にぶい黄緑	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線3条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘラ	不明	外面残存者
87	12	甕	C63 包含層	(I)117.2 (Ⅱ)76.2)	真	硬 砂粒多	(Ⅱ)灰青 (Ⅲ)灰黄	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線8条 (Ⅲ)縦田線、ヘケ	不明	
87	13	甕	B-C63 包含層	(I)117.8 (Ⅱ)76.1)	真	硬 砂粒多	(Ⅱ)灰青 (Ⅲ)灰黄	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ケツ	(I)縦田線8条 (Ⅲ)縦田線、ヘケ	不明	中央遺構出土
87	14	甕	36A 包含層	(I)116.2 (Ⅱ)70.8)	真	硬 砂粒多	浅黄橙	(I)横ナズ (Ⅱ)ヘケ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線6条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	20%	
87	15	甕	A68 包含層	(I)118.8 (Ⅱ)76.0)	真	やや硬 砂粒多	黄橙	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線8条	不明	
87	16	甕	343 包含層	(I)118.8 (Ⅱ)77.4)	真	やや硬 砂粒多	にぶい黄緑	(I)～(Ⅱ)ヘケ→ナズ (Ⅲ)ケツ	(I)縦田線 (Ⅱ)ヘケ→ヘケ→横ナズ	3%	外面残存者
87	17	甕	A87 包含層	(I)117.5 (Ⅱ)70.4)	やや 不真	やや硬 砂粒多	にぶい橙	(I)横ナズ、指頭正底 (Ⅲ)ケツ	(I)縦田線5条	不明	
87	18	甕	A69 包含層	(I)118.1 (Ⅱ)71.2)	真	やや硬 砂粒多	浅黄橙	(I)～(Ⅱ)ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線7条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	不明	
88	1	甕	K45 包含層	(I)114.0 (Ⅱ)78.3)	不真	粗 砂粒多	浅黄橙	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線6条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	不明	外面残存者
88	2	甕	F73 包含層	(I)116.0 (Ⅱ)71.5)	真	やや硬 砂粒多	浅黄橙	(I)～(Ⅱ)指頭正底、横ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線8条 (Ⅱ)ヘケ	40%	
88	3	甕	389 包含層	(I)117.0 (Ⅱ)79.5)	真	硬 砂粒ごく少	(Ⅱ)にぶい橙 (Ⅲ)灰黄	(I)～(Ⅱ)横ナズ、指頭正底 (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線8条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	不明	外面残存者
88	4	甕	A70 包含層	(I)117.1 (Ⅱ)74.3)	やや 真	やや硬 砂粒多	(Ⅱ)にぶい黄緑 (Ⅲ)明黄緑	(I)～(Ⅱ)横ナズ、指頭正底 (Ⅲ)ヘケ→ヘラケツ	(I)縦田線7条 (Ⅲ)横ナズ	3%	
88	5	甕	J48 包含層	(I)118.8 (Ⅱ)74.8)	真	やや硬 砂粒多	(Ⅱ)浅黄緑 (Ⅲ)にぶい黄緑	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘケ→ヘラケツ	(I)縦田線9条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	不明	
88	6	甕	J48 包含層	(I)117.0 (Ⅱ)75.4)	真	粗 砂粒多	にぶい黄緑	(I)横ナズ、指頭正底 (Ⅱ)ヘケ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線12条 (Ⅲ)横ナズ	不明	
88	7	甕	F93 包含層	(I)117.3 (Ⅱ)71.9)	真	やや硬 砂粒少	浅黄橙	(I)横ナズ、指頭正底 (Ⅱ)ヘケ (Ⅲ)ケツ	(I)縦田線10条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	20%	外面残存者
88	8	甕	287 包含層	(I)117.5 (Ⅱ)72.0)	やや 不真	やや硬 砂粒少	浅黄橙	(I)横ナズ、指頭正底 (Ⅱ)ケツ	(I)縦田線7条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	不明	
88	9	甕	F93 包含層	(I)116.0 (Ⅱ)79.0)	真	粗 砂粒多	にぶい橙	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ケツ	(I)縦田線8条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	不明	
88	10	甕	A87 包含層	(I)120.0 (Ⅱ)73.8)	不真	やや硬 砂粒多	明黄緑	(I)横ナズ、指頭正底 (Ⅱ)ヘケ (Ⅲ)ケツ	(I)縦田線10条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	30%	
88	11	甕	J43 包含層	(I)122.0 (Ⅱ)76.0)	真	やや硬 砂粒多	浅黄橙	(I)～(Ⅱ)横ナズ、指頭正底 (Ⅲ)ヘラケツ	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘケ→ナズ	不明	
88	12	甕	83 包含層	(I)127.4 (Ⅱ)73.9 (Ⅲ)74.0)	真	やや硬 砂粒多	橙	(I)～(Ⅱ)横ナズ (Ⅲ)ヘラケツ	(I)縦田線9条 (Ⅲ)横ナズ (Ⅳ)ヘケ	30%	外面残存者

第5章 遺物

標号	%	器種	出土地区	数量(㎝)	構成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
88	13	壺	44 包含層	(口)28.8 (底)10.0	良	中々硬 砂粒多	にぶい黄緑	(口～底)ハケ→七ガキ (底)ハケ→ナデ	(口)刷目線11条 (底)横ナデ (体)ハケ→ナデ	不明	
89	1	壺	A70 包含層	(口)13.6 (底)9.2	中々良	中々硬 砂粒多	(内)橙 (外)明黄緑	(口～底)横ナデ (底)ハケ→ナデ	(口～底)横ナデ (体)ハケ	20%	
89	2	壺	279 包含層	(口)11.2 (底)9.2 (高)11.2	良	中々硬 砂粒や中々多	浅黄緑	(口～底)ナデ (底)ナデ、指腹正直	(口～底)横ナデ (底)横ハケ	80%	外面一部腐付着
89	3	壺	289 包含層	(口)13.7 (底)15.1	良	中々硬 砂粒多	浅黄緑	(口～底)横ナデ (底)ナデ	(口～底)横ナデ (底)ハケ	40%	外面腐付着
89	4	壺	A87 包含層	(口)10.4 (底)11.6 (高)10.3	良	中々硬 砂粒や中々多	橙	(口～底)横ナデ (底)ナデ	(口～底)横ナデ (体)横七ガキ→縦七ガキ	50%	
89	5	壺	K45 包含層	(口)2.6 (底)7.1	中々不良	中々硬 砂粒多	にぶい黄緑	(体～底)ハケ、ナデ、指腹正直	(体)ハケ、ナデ、指腹正直	30%	
89	6	壺	143 包含層	(口)14.8 (底)11.3	良	中々硬 砂粒多	(内)にぶい黄 (外)にぶい橙	(口～底)ハケ→横ナデ (底)ハケ→ナデ	(口～底)ハケ→横ナデ	20%	
89	7	壺	D57 包含層	(口)17.2 (底)8.2	良	中々硬 砂粒多	にぶい黄緑	(口～底)ハケ→ナデ (底)ナデ	(口～底)七ガキ	不明	
89	8	壺	83 包含層	(口)15.4 (底)9.9 (高)13.0	良	中々硬 砂粒多量	にぶい橙	(口～底)ハケ→横ナデ	(口～底)ナデ (体)横ハケ→縦ハケ	70%	
90	1	高杯	D63 包含層	(口)27.6 (底)6.3	良	硬 砂粒少	にぶい黄緑	(口～底)ハケ→ナデ	(口～底)七ガキ	不明	
90	2	高杯	83 包含層	(口)28.0 (底)6.8	良	中々硬 砂粒少	(内)橙 (外)黄緑	(口～底)横七ガキ	(口)横ナデ (体)横七ガキ	43%	
90	3	高杯	U-N37-38 包含層	(口)28.2 (底)7.2	良	中々硬 砂粒少	橙	(口～底)七ガキ	(口～底)七ガキ	40%	数珠裏面へシテ
90	4	高杯	370 包含層	(口)25.2 (底)14.2 (高)15.7	良	中々硬 砂粒多	浅黄緑	(口～底)七ガキ (底)ハケ→ナデ	(口～底)七ガキ	60%	
90	5	高杯	K45 包含層	(口)17.2 (底)13.0 (高)14.0	中々不良	硬 砂粒多	橙	(口～底)ナデ (底)ハケ→ナデ	(口～底)ハケ→ナデ	60%	汚孔×3
90	6	高杯	43→43-44 包含層	(口)14.6 (底)12.7	良	中々硬 砂粒ごく少	にぶい黄緑	(口)七ガキ (底)ハケ→ナデ	(口)横七ガキ、横ナデ	30%	汚孔×3
90	7	高杯	A77 包含層	(口)14.0 (底)9.9	良	中々硬 砂粒ごく少	にぶい橙	(底)ハケ→ナデ	(口～底)ハケ→七ガキ	30%	
90	8	脚杯	A71 包含層	(口)13.0 (底)7.0	中々不良	硬 砂粒少	浅黄緑	(口)ナデ	(口)七ガキ	30%	汚孔×3
90	9	高杯	K45 包含層	(口)10.4 (底)7.3	中々良	中々硬 砂粒少	橙	(口～底)七ガキ	(口～底)七ガキ→(仕舞)条、 磨削突	不明	
90	10	脚杯	C66 包含層	(口)14.8 (底)9.7	中々良	中々硬 砂粒多	浅黄緑	(口)ナデ (底)ハケ→ナデ	不明	23%	汚孔×4
90	11	脚台	349 包含層	(高)6.7	良	中々硬 砂粒少	(内)橙 (外)浅黄緑	(口)七ガキ、ナデ	(口)七ガキ	40%	汚孔
90	12	脚台	U-N37-38 包含層	(口)29.8 (底)15.4 (高)20.5	良	硬 砂粒少	黄緑	(口～底)七ガキ (底)ハケ	(口～底)七ガキ (口)七ガキ→刷目線4条	80%	汚孔×4
90	13	脚台	A87 包含層	(口)22.8 (底)12.6 (高)16.8	良	中々硬 砂粒ごく少	橙	(口～底)七ガキ	(口～底)七ガキ (口)横ナデ	50%	汚孔×3
90	14	脚台	A68 包含層	(口)23.0 (高)9.5	良	中々硬 砂粒少	にぶい黄緑	(口～底)七ガキ	(口～底)七ガキ	20%	

第1節 Ⅱ区：土器

標高	%	器種	出土地区	出量(m)	構成	胎土	色澤	内面調整	外面調整	残存率	備考
90	15	蹄台	A72 包含層	(口)27.2 (底)7.0	真	赤 砂粒ごく少	にぶい黄緑	(口～受)ミガキ	(口～受)ミガキ	不明	
90	16	蹄台	966 包含層	(口)24.0 (底)9.2	真	赤 砂粒ごく少	橙	(口～胴)ミガキ	(口～胴)ミガキ	不明	
90	17	蹄台	K45 包含層	(口)9.2 (底)3.0	やや 不真	赤 砂粒少	橙	(口～胴)横ナデ	(口)横ナデ (胴)縦ミガキ	60%	
90	18	蹄台	C58 包含層	(口)14.0 (底)3.3	真	赤 砂粒ごく少	にぶい黄緑	(胴)横ナデ	(胴)横ナデ→ミガキ	10%	
90	19	蹄台	578 包含層	(口)28.3 (底)5.1	やや 不真	赤 砂粒少	浅黄緑	(胴)ハケ→ナデ	(胴)ミガキ→文様+縦田線5条	不明	
90	20	裝飾蹄台	970 包含層	(口)18.4 (底)9.9	真	赤 砂粒少	灰白	(口～胴)ナデ, ミガキ	(口～胴)ナデ, ミガキ	不明	
90	21	蹄台	287 包含層	(口)9.0 (底)3.9	不真	やや赤 砂粒少	にぶい橙	不明	(天井)ヘウナデ	50%	中央遺構出土
90	22	蹄台	包含層	(口)16.4 (底)3.7	真	やや赤 砂粒少	橙	(天井)横ナデ→縦ナデ	(口)黄文文 (天井)縦ミガキ→ナデ	不明	
90	23	蹄台	959 包含層	(口)11.0 (底)4.0	真	やや赤 砂粒ごく少	橙	(胴)ハケ→横ナデ	(胴)ハケ→ミガキ	30%	内丸×3
90	24	小型蹄台	976 包含層	(口)9.9 (底)1.4 (底)18.4	真	やや粗 砂粒少	橙	(口)ミガキ (胴)ヘウナデ (胴)ハケ→ナデ	(口～胴)ミガキ	80%	内丸×3
91	1	鉢	A70 包含層	(口)12.2 (底)6.8	真	やや赤 砂粒ごく少	橙	(口～胴)横ナデ	(口～胴)ミガキ	不明	
91	2	鉢	285 包含層	(口)12.0 (底)9.8	真	やや粗 砂粒多	浅黄緑	(口～胴)ミガキ	(口～胴)ミガキ	不明	内面一部、外周黒 漆
91	3	台付鉢	A87 包含層	(口)12.1 (底)9.3	真	赤 砂粒少	にぶい黄緑	(口)ミガキ	(口～胴)ミガキ	80%	
91	4	台付鉢	A87 包含層	(口)10.2 (底)11.2 (底)14.8	真	赤 砂粒少	浅黄	(口～胴)横ナデ (胴～底)ハケ→ナデ	(口～胴)横ミガキ (胴～底)縦ミガキ	70%	把手付
91	5	鉢	968 包含層	(口)9.6 (底)2.6 (底)4.9	真	やや赤 砂粒少	浅黄緑	(口～胴)横ナデ (底)ナデ	(口～胴)横ナデ (底)ナデ	60%	
91	6	鉢	CH7-D68 包含層	(口)5.8 (底)3.0 (底)3.3	真	やや粗 砂粒多	にぶい黄緑	(口～底)ナデ	(口～胴)ハケ→ナデ→ ミガキ	不明	
91	7	鉢	978 包含層	(口)9.9 (底)7.3	粗 砂粒ごく少	にぶい黄緑	(口)ナデ (胴)ハケ→ナデ, 南面直底	(口)ナデ (口～胴)横ナデ	(口～胴)横ナデ	60%	
91	8	鉢	L-N27-28 包含層	(口)19.0 (底)2.9 (底)8.7	真	赤 砂粒多	浅黄緑	(口～底)ミガキ (底～底)ヘウケツ	(口～底)ミガキ	不明	数点東面シンチ
91	9	鉢	963 包含層	(口)18.4 (底)2.0 (底)8.8	真	赤	黄緑	(口～底)ミガキ	(口～底)ミガキ	30%	
91	10	鉢	A80 包含層	(口)16.0 (底)2.9 (底)10.5	真	やや赤 砂粒少	にぶい橙	(口)縦ミガキ (底)ヘウケツ	(口)縦田線5条 (底)ヘウケ	30%	中央遺構出土, 外 面黒付着
91	11	鉢	987 包含層	(口)23.4 (底)4.1 (底)9.2	真	赤 砂粒少	にぶい黄緑	(口～底)ミガキ	(口～底)ミガキ	50%	外周黒付着
91	12	香丸鉢	943 包含層	(口)19.5 (底)2.9 (底)17.5	やや 不真	やや粗 砂粒多量	(内)暗灰黄 (外)浅黄緑	(口～底)ヘウケツ	(口～底)横ナデ	60%	中央遺構出土, 内面一部に黒付 着
91	13	鉢	A86 包含層	(口)8.6 (底)2.9 (底)7.6	真	やや粗 砂粒少	にぶい黄緑	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ (底)ナデ	50%	内面一部黒付 着

第5章 遺物

標号	%	遺種	出土地区	数量(m)	構成	粘土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
91-14		台付鉢	209 包含層	(口)16.41 (底)5.6 (重)16.2	真	やや硬 砂粒多	にぶい緑	(口)横ナゲ (底、脚)回転→ウケズ	(口)横ナゲ (脚)横→ナゲ (底)横ナゲ	50%	
91-15		台付鉢	A89 包含層	(口)4.6 (底)16.0	真	硬 砂粒少	赤	(口)ナゲ (底、脚)→ウケズ	(口)横ナゲ (脚)→ナゲ	50%	外面赤彩
91-16		鉢	C83 包含層	(口)10.33 (底)14.9 (重)16.2	真	やや硬 砂粒多	灰白	(口→底)横ナゲ (底)回転→直	(口)横ナゲ (脚)→ナゲ (底)横ナゲ	50%	中央遺構出土
91-17		蓋	B74 包含層	(口)16.0 (底)4.4	真	硬 砂粒少	橙	(口→底)ナゲ	(口→底)ハケーナゲ	不明	
91-18		鉢	J44 包含層	(口)10.0 (底)13.0 (重)5.0	真	やや硬 砂粒ごく少	橙	(口→底)ナゲ	(口→底)ハケーナゲ	30%	
91-19		鉢	B52 包含層	(口)10.6 (底)14.0 (重)4.9	不真	粗 砂粒多	灰白	(口→底)ナゲ	(口→底)ハケウ	不明	
91-20		鉢	B87 包含層	(口)10.4 (底)2.4 (重)4.8	真	やや粗 砂粒やや多	橙	(口→底)ナゲ	(口)ナゲ (脚→底)七ガキ、ナゲ	20%	
91-21		鉢	B87 包含層	(口)10.9 (底)3.5 (重)4.6	真	やや硬 砂粒やや多	橙	(口→底)ナゲ	(口→底)ナゲ	20%	
91-22		鉢	包含層	(口)7.9 (底)3.4 (重)3.1	不真	やや硬 砂粒少	にぶい黄緑	(口→底)ナゲ	(口→底)ナゲ、指環圧痕	80%	
91-23		鉢	B87 包含層	(口)5.2 (底)2.4 (重)3.0	不真	やや粗 砂粒少	明赤褐	(口→底)ナゲ	(口)ナゲ (底)指環圧痕	80%	
91-24		鉢	B87 包含層	(口)16.4 (底)1.6 (重)4.8	不真	やや粗 砂粒少	にぶい黄緑	(口→底)指ナゲ	(口→底)ナゲ (底)→ウケズ	不明	
91-25		鉢	B87 包含層	(口)5.6 (底)3.7 (重)4.5	真	やや硬 砂粒やや多	灰白	(口→底)ナゲ	(口)ナゲ (底)ナゲ、指環圧痕	80%	
91-26		鉢	C87 包含層	(口)10.3 (底)2.6 (重)4.2	不真	やや硬 砂粒多	浅黄緑	(口→底)指ナゲ	(口→底)指ナゲ	50%	外面底面漆付
91-27		鉢	B89 包含層	(口)4.6 (底)2.4 (重)4.2	不真	やや硬 砂粒少	橙	(口→底)ナゲ	(口)ナゲ (底)ナゲ、指環圧痕	80%	
91-28		鉢	B87 包含層	(口)5.3 (底)2.4 (重)3.7	不真	やや粗 砂粒少	黄黄	(口→底)ナゲ	(底)ハケ	80%	
91-29		鉢	K44 包含層	(底)2.0	やや 真	やや硬 砂粒少	(内)浅黄 (外)緑灰	(底→底)指ナゲ	(底→底)指ナゲ	60%	
91-30		鉢	K44 包含層	(口)4.4 (底)3.3	真	やや硬 砂粒多	浅黄緑	(口→底)指ナゲ、指環圧痕	(口→底)指環圧痕 (底)指ナゲ	10%	
91-31		鉢	K44 包含層	(口)2.5 (底)3.2	真	やや粗 砂粒多	にぶい黄緑	(口→底)指ナゲ	(口→底)指ナゲ、指環圧痕	10%	
91-32		蓋	B52 包含層	(口)7.7 (底)12.0 (重)2.1	不真	やや粗 砂粒多	浅黄緑	不明	(底)凹キ	90%	
91-33		蓋	F94 包含層	(口)14.9 (底)15.0 (重)4.2	やや 不真	やや粗 砂粒多	浅黄緑	(天井)ナゲ	(脚)→ナゲ	不明	
91-34		蓋	A70 包含層	(口)10.3 (底)4.9 (重)3.0	真	やや粗 砂粒多	(内)にぶい黄緑 (外)浅黄緑	不明	不明	50%	
91-35		蓋	D90 包含層	(口)2.2 (底)11.0 (重)16.0	真	硬 砂粒少	(内)灰白 (外)にぶい黄緑	(口)横ハケ (天井)指環圧痕	(口)ナゲ (天井)ハケーナゲ	40%	
91-36		蓋	C-D-E8 包含層	(口)19.2 (底)6.7 (重)15.0	真	硬 砂粒多	黄黄	(口→天井)ハケ→横ナゲ	(口→天井)ハケーナゲ	40%	

第2節 II区：石器〔図版第33～36、第91～96図、第9・10表〕

1 構成と分布

石器の構成を第9表に示す。武器や農具・調理具が主体で祭祀具もあり、豊富で多様な道具類から成る。武器に石鏃や磨製石剣、農具に石庭丁、工具に磨製石斧や石錐・削器など、土掘具に打製石斧、調理具に石皿や凹石・磨石など、祭祀具に環状石斧や石刀がある。石鏃未製品や剥片も多く出土した。

石質の構成は安山岩が9割弱で、チャートや砂岩・粘板岩がある。ほかに蛇紋岩や片岩も各1点ずつある。器種別では、石鏃などの剥片石器は緻密な安山岩が中心で、チャートもわずかに用いられる。磨製石斧や打製石斧、凹石や磨石などは安山岩中心で砂岩、石庭丁は粘板岩も用いられる。また、磨製石斧にはチャートや蛇紋岩もわずかにあり、磨製石剣・石鏃はすべて粘板岩である。

E～G57～59区とB～F66～69区の2ヶ所でややまとまるが、ほかは数点程度で全体的に散在する。大半が包含層や遺構覆土からまともらずに出土し、器種別に分布が偏る状況も見られない。

第9表 石器組成表

石質	磨製石剣	石鏃		石錐	楔形石器	削器	剥片	石庭丁	磨製石斧				打製石斧	石錘	石鏃	凹石	磨石	石刀	計	
		行製	未製						環状	船方	柱状	扁平								
安山岩		23	7	2	5	3	140	12	1	14	1	170		1	6	6	21	1	413	
チャート		3					26								1				32	
砂岩										3	1	1				2	8		16	
粘板岩	1	3						3											7	
蛇紋岩										1									1	
片岩																			1	
計	1	3	26	7	2	5	166	15	1	18	2	2	170	1	1	7	8	29	2	470

2 石器の形態

磨製石剣(第92図1) 鉄剣形の基部。両側縁下位に段を持ち、刃間が^{はな}作出されている。両面に研磨され、斜行する擦痕が見られる。

磨製石鏃(第92図2～4) いずれも平基無茎鏃で、両面とも器体中軸が竊状となる。また、両面に研磨され、長軸方向や斜行する研磨痕が見られる。3・4は両側縁が緩く弯曲する。

打製石鏃 多くは両面中心に調整される。基部や全体の形状から以下のように類別した。

1類(第92図5～18) 凹基無茎鏃。基部に挟入が作出され、三角形を呈す。5～13は基部の挟入が緩やかである。5は側縁上半が緩く弯曲する。6は薄手で、側縁が直線的である。7～9は側縁下半が緩く内弯する。7・8は表面の器体中軸が竊状となる。また、7は先端の作出が不十分であり、再加工されたと考えられる。10・11は側縁が内弯し、基端が丸みを持つ。10は薄手で、側縁が鋸歯状となる。12・13は周辺中心に調整される。13は小形で、側縁が緩く弯曲する。14～18は基部の挟入がわずかである。14は側縁が直線的で、長三角形状を呈す。基端が尖鋭に作出される。15～17は側縁が緩く弯曲する。17は器体中央が厚手となっている。18は幅広でずんぐりした形状を呈す。

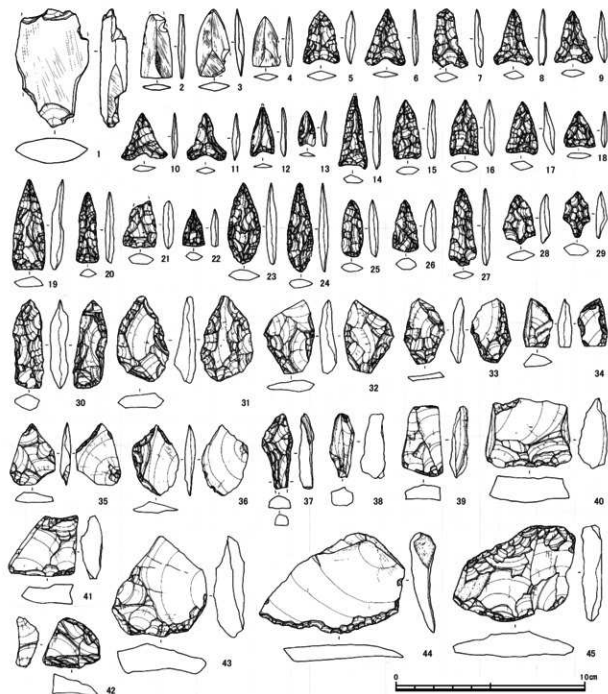
2類(第92図19～22) 平基無茎鏃で、基部が平らに作出される。19は長身の大形で、周辺中心に調整される。20は細身で、側縁上位に段を持つ。21は左側縁中程が内弯する。22は小形である。

3類(第92図23・24) 凸基鏃で、基部が突出する。ともに長身の大形で側縁が弯曲する。

4類(第92図25・26) 凹基鏃で、基部が丸みを持つ。26は厚手で、基部境が最大幅となる。

5類(第92図27～29) 有茎鏃。27は長身の大形で、側縁上位が緩く弯曲する。28は幅広で、調整がやや粗く器体上半が反る。29は厚手で、基部が大きく突出する。また、側縁上位に段を持つ。

石鏃未製品(第92図30～36) 器体に素材面を多く残し、屈曲や凹凸をもつ不整な形状である。多くは2～4類の未製品と考えられる。30は長身だが厚手で、両面に粗く調整される。31～34は周辺中心

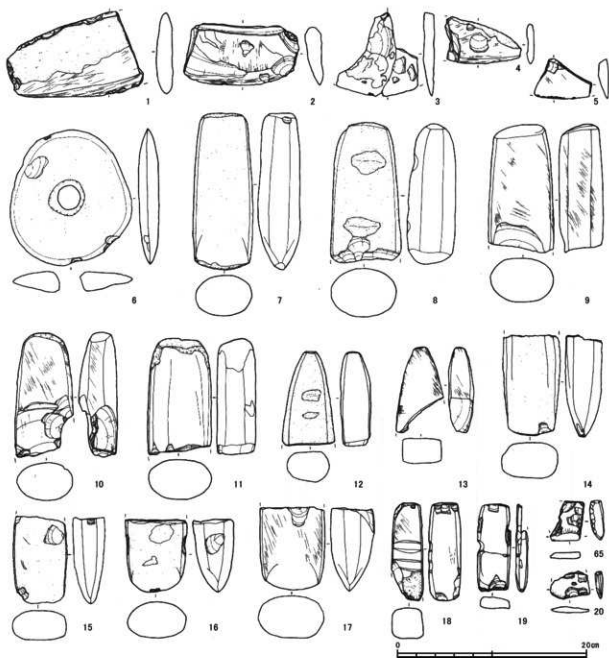


第92図 石器実測図(1)(縮尺1/2)

に調整される。31は大形幅広で側縁が彎曲する。32は基端に素材面、上端に折断面を残す。33は右側縁の裏面側が未調整である。34は小形だが厚手で、左端に折断面を残す。35・36は先端中心に調整される。35は側縁下半に折断面、36は左側縁上位に打面と右側縁に素材の縁を残す。

石錐(第92図37) 両側縁が内弯し、基部境に緩く段を持つ。細長い刃部が作出され、基部との境は明瞭である。表面の周辺中心に調整される。

楔形石器(第92図38~42) いずれも両極打法により作出される。上下にバルブを持つ両極剥離は見られないが、表裏に対向する複数の剥離面がある。また、上下端に線状の潰れが形成される。ほかの器種や未製品を含むとも考えられる。40は両側面、41は右側面が裏面側から折断される。



第93図 石器実測図(2)(縮尺1/4)

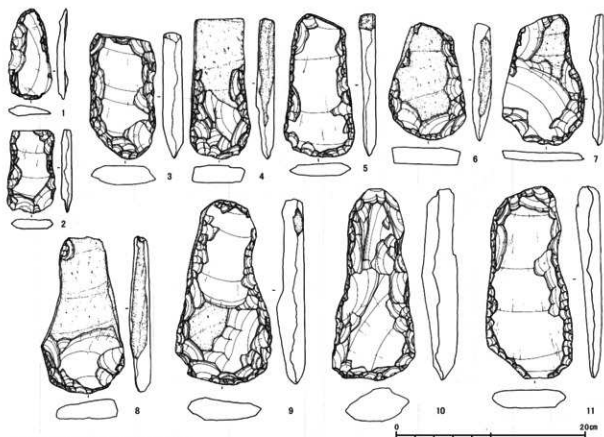
削器(第92図43~45) 横長剥片が素材で、刃部の両面に調整される。上端が屈曲して刃部は緩く外弯する。扇形を呈し、形状が石庵丁と共通する。45は上端の裏面が平坦に調整される。

石庵丁(第93図1~5) いずれも板状剥片が素材で、多くは紐孔を持たず、扇形を呈す。両面の下端から体部にかけて研磨され、外弯する刃部が作出される。また、刃部に長軸方向の擦痕が見られる。1・2は背部に平坦な面を持ち、1は長軸方向に研磨され作出される。2は体部表面に短軸方向の擦痕が見られる。4は左上端に紐孔を持ち、背部はやや外弯する。体部両面に斜行する擦痕が見られる。

環状石斧(第93図6) 中央が両面から穿孔され、器体は研磨により円滑に仕上げられる。周辺に刃部が作出され、円盤形を呈す。

磨製石斧 太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧等がある。

太型蛤刃石斧(第93図7~17) 平坦な基部を持ち、刃部に向け側辺がほぼ平行する。断面は厚く



第94図 石器実測図(3) (縮尺1/4)

円形に近い。7・8・11は基部が敲打により作出される。8は表面に敲打痕があって緩く凹む。9は基部が短軸方向に研磨されて傾く。表裏と側面に斜行する研磨痕が見られる。10は基部に礫面を残し、基部は丸みを持つ。12・13は細くすばまる基部を持つ。12は表裏が平坦に作出され、表面に敲打痕があって緩く凹む。13は側辺や基部に面が作出され、断面が扁平な方形を呈す。表裏と側面に斜行する研磨痕が見られる。定角式磨製石斧と考えられる。14~17は刃部。14は表裏が平坦に作出される。16は表裏と左右側面に敲打痕があって緩く凹む。17は表裏と側面に斜行する研磨痕が見られる。

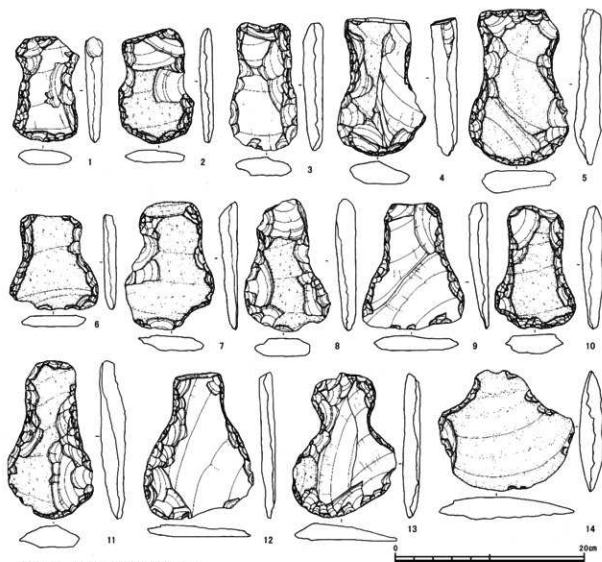
柱状片刃石斧 (第93図18) 平面は柱状で、断面は厚く方形形状を呈す。挟りを2段持ち、短軸方向に研磨されている。器体上半は後が除去され、縁取られる。また、表裏と側面に斜行する研磨痕、上下端には敲打痕が見られる。刃部欠失後に再加工されたとも考えられる。

扁平片刃石斧 (第93図19~21) 断面は扁平な方形形状を呈す。19は左側辺中程に挟りを持ち、柱状片刃石斧が半欠後に再加工されたと考えられる。表面上半に斜行する研磨痕が見られる。20はやや厚手で、側辺が刃部へ向け幅狭となる。表裏に長軸方向や斜行する研磨痕、表面右端には複数の剥離面が見られる。21は薄手で、側辺が刃部へ向け緩く開く。表裏に斜行する研磨痕が見られる。

打製石斧 多くは板状剥片が素材で、周辺中心に調整される。以下、形状から類別した。

1類 (第94図1~5) 基部から刃部がほぼ同じ幅で、短冊形を呈す。1・2は小形の一組で、1は基部がすばまる。2は両側辺上位がわずかに内弯する。3は刃部が丸みをもって偏る。4は板状礫が素材。表裏面下半に調整され、ほかは素材面が多く残る。裏面は周辺中心、表面は器体中央まで平坦に調整される。5は基部から刃部へ側辺がわずかに開く。

2類 (第94図6~11) 基部から刃部へ側辺が開き、撥形を呈す。6は両側辺が直線的に開き、丸



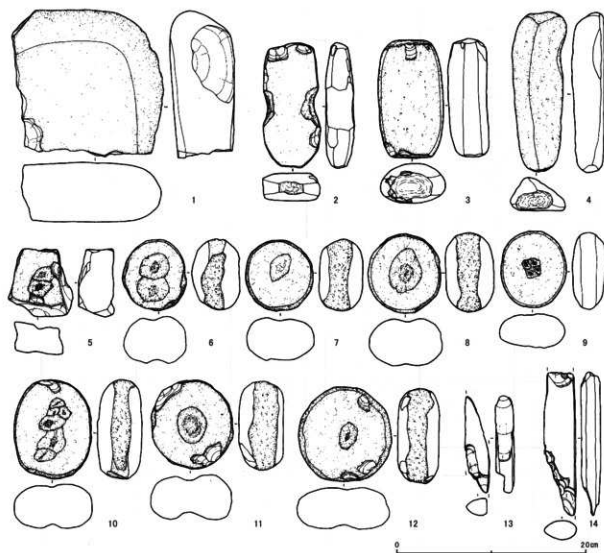
第95図 石器実測図(4)(縮尺1/4)

い刃部を持つ。7～9は一側辺が緩く内湾し、ほかの側辺は直線的に開く。8は表裏面下半に調整され、ほかは素材面が多く残る。また、左側辺の刃部境が屈曲する。10・11は両側边上位がわずかに内湾する。10はやや厚手で、11は刃部が偏る。

3類(第95図1～14) 側辺中ほどのやや上位に挟入を持ち、分銅形を呈す。多くは左右の側辺で弯曲の程度が異なり、挟入部位が若干ずれる。1～5は基部から刃部へ側辺が緩く開く。1・2は小形の一群で、2は両側辺の刃部境が屈曲する。3は基部が内湾する。4は右側辺の刃部境が屈曲する。6～13は側辺下半が大きく湾曲して開き、幅広の刃部を持つ。6は小形で寸詰まりである。7は刃部右半が内湾する。9・10は両側辺の挟入部に潰れが見られる。12は薄手で、基部が直線的にのびる。13は基部が丸みを持ち、刃部は偏る。14は丸みのある稜面を持つ剥片が素材で、幅広の器体を持つ。両側辺の刃部境は屈曲し、挟入部に潰れが見られる。

石皿(第96図1) 大形で扁平な楕円礫が素材で、表裏に磨面を持つ。

敲石(第96図2～4) 2・3は扁平な楕円礫、4は断面三角形の棒状礫が素材。2・4は下端、3は上下端に敲打痕を持つ。2は側辺に面が作出され、断面が扁平な方形を呈す。また、器体中程には敲打により挟入が作出される。3は上下端が平坦となっており、トチタキ石と考えられる。



第96図 石器実測図(5)(縮尺1/4)

凹石(第96図5~12) いずれも表裏に磨面を持ち、器体中央に敲打痕があって凹む。5は直角礫が素材で裏面にも敲打痕を持つ。6~12は扁平な楕円礫が素材で、9以外は周辺に敲打による潰れが見られる。また、7以外は裏面にも敲打痕を持つ。

石刀(第96図13・14) ともに左側縁に刃部と右側縁に平坦な背部が作出され、断面が楔形を呈す。14は左側縁上端にわずかに刃角が作出されている。

3 小結

Ⅱ区の石器群は弥生中期後半を主体時期とし、縄文晩期と時期不詳の資料が混在している。土器との共存や出土状況に恵まれないため、特徴的な形態の器種以外は時期の帰属が難しい。以下、限定的だが時期ごとに群別し、石器の形態や組成の特徴から見た遺跡の性格についてまとめる。

弥生中期後半では、磨製石剣・石鏃、打製石鏃とその未製品、石庖丁や磨製石斧などがある。磨製石剣は鉄剣形、磨製石鏃は平基無茎鏃で、いずれも黒色粘板岩製である。ともに少量で、嶺北では頻例が少ない。磨製石剣は越前市瓜生助遺跡や勝山市志田神田遺跡、磨製石鏃は福井市林・藤島遺跡泉田地区などでわずかに出土した程度である。打製石鏃とその未製品はやや多く出土した。平基無茎鏃もあるが、平基や円・凸基鏃が多くを占め、長身の大型が目立つ。石庖丁は少量だが、紐孔を持たない一群が大平

で、紐孔を持つ形態はわずかである。福井市箕置遺跡でも同様な石廬丁の形態組成が見られ、紐孔を持つ形態の出土例では、坂井市舟寄福島通遺跡や福井市今市岩畑遺跡、瓜生助遺跡などがある。磨製石斧もやや多く出土し、太型蛤刃や柱状片刃・扁平片刃の各形態がある。いずれも破片が多く、高い使用頻度が推察される。また、該期の石器群は、組成の形成過程から二分される。打製石礫は未製品があり、小規模だが石礫などの剥片石器の製作や剥片剥離作業がおこなわれたと考えられる。他の器種は大半が単独個体であり、調査地で石器は製作されていない。他所から搬入され、周辺で使用し廃棄されたと考えられる。磨製石斧は再加工作業が見られた。つまり、大陸系磨製石器は製品として搬入され、打製石礫などの剥片石器は遺跡でも製作作業がおこなわれたと考えられる。

縄文晩期では、蛇紋岩製の定角式磨製石斧と石刀がある。打製石礫に少量混在するとも考えられる。磨製石斧は基部が細く、断面は扁平な方形で縄文的な特徴を持つ。石刀など祭祀具は嶺北北部中心に採集資料が多いが、舟寄福島通遺跡や鯖江市四方谷伏遺跡などでまとまって出土している。

時期不詳では、環状石斧や打製石斧、石皿や凹石などがあり、すべて単独個体である。弥生時代中期から後期にも存続し、上記2時期のいずれかに帰属すると考えられる。組成上、帰属時期は重要で、器種の消長や生産などが地域的な特徴として問題となる。また、環状石斧は県内では4例目となり、大野市亀山や永平寺町粟佐波谷口遺跡、福井市一乗谷朝倉氏遺跡で出土している。

参考文献

- 斎藤秀一 2003 「瓜生助遺跡」 [第18回 福井県発掘調査報告会資料] 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 「今市岩畑遺跡」 福井県埋蔵文化財調査報告 第34集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006 「箕置遺跡」 福井県埋蔵文化財調査報告 第90集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 「粟佐波谷口遺跡」 福井県埋蔵文化財調査報告 第97集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 「志田神田遺跡」 福井県埋蔵文化財調査報告 第107集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2003 「四方谷伏遺跡」 福井県埋蔵文化財調査報告 第71集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 「林・藤島遺跡泉田地区」 福井県埋蔵文化財調査報告 第106集
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 「舟寄福島通遺跡」 [年報21 平成17年度]
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 「舟寄福島通遺跡」 [年報22 平成18年度]
 福井県立朝倉氏遺跡資料館 1985 「特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 X VI」

第10表 石器観察表 (器長・器幅・器厚の単位はcm)

種別	No.	器種	地区	地点	形態	石質	部長	器幅	器厚	遺存
92	1	磨製石剣	E75	包含層	刃部に長軸方向の磨痕。	緑板岩	6.3	3.9	1.4	大半欠
92	2	磨製石礫	H48	包含層	基面に表裏方向の研磨痕。	緑板岩	3.4	1.7	0.4	基端欠
92	3	磨製石礫	L43	包含層		緑板岩	3.4	1.8	0.4	基端石礫欠
92	4	磨製石礫	F32	S37	基面に短軸方向の研磨痕。	緑板岩	2.7	1.5	0.4	完全
92	5	打製石礫	A68	包含層		チャート	2.8	2.0	0.6	完全
92	6	打製石礫	E58	包含層	1面。	安山岩	3.0	2.2	0.4	一部欠
92	7	打製石礫	F53	包含層	1面。	安山岩	3.1	1.9	0.5	一部欠
92	8	打製石礫	C55	遺121	1面。	安山岩	3.0	2.1	0.4	完全
92	9	打製石礫	B82	包含層	1面。裏面下半に素材面を残す。	安山岩	2.8	2.1	0.3	完全
92	10	打製石礫	E55	包含層	1面。	安山岩	2.5	2.4	0.3	完全
92	11	打製石礫	E-H56~89	S30	1面。	安山岩	2.5	2.1	0.4	完全
92	12	打製石礫	Z85	包含層	1面。裏裏に素材面を多く残す。	安山岩	2.6	1.3	0.3	先端欠
92	13	打製石礫	—	表層	1面。裏裏に素材面を多く残す。	安山岩	1.9	0.9	0.3	完全
92	14	打製石礫	I44	包含層	1面。表裏中央に素材面を残す。	チャート	3.9	1.5	0.4	先端欠
92	15	打製石礫	A-F74~80	S31	1面。裏面中央に縦面を残す。	安山岩	3.2	1.4	0.5	完全
92	16	打製石礫	G58	S30	1面。裏面中央に素材面を残す。	安山岩	3.0	1.5	0.6	完全
92	17	打製石礫	G60	S39	1面。	安山岩	2.8	1.7	0.6	完全
92	18	打製石礫	E8-9	T208	1面。表面中央に素材面を残す。1区下層遺構出土。	安山岩	1.9	1.7	0.3	完全
92	19	打製石礫	E60	S30	2面。表裏に素材面を多く残す。	安山岩	4.8	1.7	0.7	完全
92	20	打製石礫	—	T70	2面。	安山岩	3.8	1.2	0.5	完全
92	21	打製石礫	E67	包含層	2面。表裏中央に素材面を残す。	安山岩	2.6	1.8	0.6	先端欠
92	22	打製石礫	C-060~62	S35	2面。基面に縦面を残す。	安山岩	2.0	1.2	0.4	完全
92	23	打製石礫	D64	S34	3面。	安山岩	4.3	1.7	0.5	完全
92	24	打製石礫	E68	T101	3面。側縁が縦直。裏面中央に素材面を残す。	安山岩	4.7	1.4	0.5	一部欠
92	25	打製石礫	B82	包含層	4面。縦糸。表裏中央に素材面を残す。やや磨減。	安山岩	3.0	1.2	0.5	完全
92	26	打製石礫	D65	包含層	4面。裏面中央下半に素材面を残す。	安山岩	2.7	1.4	0.7	完全
92	27	打製石礫	F4	包含層	5面。1区下層遺構出土。	安山岩	4.1	1.5	0.4	完全
92	28	打製石礫	B-C81	遺37	5面。表裏中央に素材面を残す。	安山岩	2.7	1.8	0.5	完全
92	29	打製石礫	B90	包含層	5面。	チャート	2.5	1.4	0.6	完全

第3節 玉作り関連遺物〔図版第37、第97・98図、第11～13表〕

弥生～古墳時代に属する玉は、緑色凝灰岩製管玉および未成品、勾玉、滑石製白玉、ガラス小玉が包含層から出土したほか、土坑139からは管玉・勾玉・算盤玉・小玉が出土した。

管玉および未成品（第97図2～13、第98図1～38）大半は包含層や上層遺構覆土など、明瞭に遺構に伴うものは少ないが、その出土地区にはある傾向が見出せる。まず、完成品と穿孔・仕上げ段階のもの（第98図14～38）はZ～C81～84区付近に集中する。角柱段階のもの（同図1～13）はE・F88・89区、施溝分割による立方体段階のもの（第97図7～13）はE84・H56～E69区に散在する。また、石核および荒割段階その他の剥片類（同図2～6）もG57～A71区付近に散在し、集中する傾向は薄い。Z～C81～84区付近には住居1・2があり、完成品と穿孔・仕上げ段階はこれに伴うものと考えられ、角柱段階はその東側から出土していることになる。穿孔・仕上げ段階が住居付近、調整段階がその外側に存在することは、作業工程によって場所が異なっていた可能性を示唆していると言える。

原石から石核・立方体段階のものに集中区は見られないが、周溝墓群の一角56～72区の間にはほぼ取まる傾向にある。原石はF72区の上層包含層から出土した、8cm角・重さ約800gのものが最大だが、良質な部分は少ない。第97図2は表裏に自然風化面を持つ原石の平坦な面からの打撃によって、同図3と4は反対の稜線部分からの打撃によって割り取り、三角形の荒割未成品を作出したと考えられる。荒割段階の同図6は、節理面と直行する平坦剥離面を打面とした剥離により、形状を整形したものである。

施溝痕を有する立方体段階の形制品は7点を図示し、うち2点は住居の北東側に近接して出土した。いずれも長軸方向と短軸方向にそれぞれ施溝痕を有し、転回しながら打割したものである。一方、それ以外のものは施溝痕が1ないし2条のみで、2条のものも短軸方向に限られる。いずれも弥生中期に属すると考えられ、前者は坂井市加戸下屋敷遺跡の製作技法に類似する。後者が1つの技法の現れである可能性もあるが、資料のまとまりに欠けるため、判断は難しい。なお、図示していないものは、いずれも自然風化して玉の素材に適さない部分を多く含み、これを切除した際の施溝痕を有するものである。施溝によらない場合でも、不要部分を削除して良質部分を得るの共通して見られる作業である。

角柱段階で施溝痕を残すものは存在しない。押圧剥離による側面調整は、1ないし2面のみである。長さは2cm前後が大半で、1.5cm前後のものがこれに続く。太さは0.7～0.8cm前後のものが大半を占める。この傾向は、林・藤島遺跡でのそれに一致する。

研磨によって多角柱に整形しただけの段階のものは存在せず、穿孔を開始したものが4点あるに過ぎない。研磨痕は縦方向に残され、6～8面程度の比較的粗い面取りを施した段階で穿孔している。穴は2mm程度の深さで終わっている場合が多く、穴の先端は先細る。第98図15は片側に穿孔準備としての「あたり」が、先端の細い工具の刺突によって付けられている。

穿孔が終了し、側面に稜線を残すもの（第98図18・20・21）は、穿孔前のものに比べて稜線が多く、より円柱に近い多角柱状を呈している。穿孔後に面的な研磨を再度施し、その後稜線を取り去りながら仕上げ研磨に移行していったことを示していると考えると良いだろう。

穿孔については、両面穿孔がやや優勢で、先端がわずかに細る形状を呈し、内面の線状痕を持つものは4点に止まる。基本的には鉄製工具を用いて穿孔したと考えられる。

住居1・2周辺に集中する角柱段階～完成品は、その製作技法から弥生後期に属すると言える。住居の時期（法仏Ⅱ期）とも合致し、ほぼ同時期と考えられる林・藤島遺跡と多くの点が共通する。

以上のように、本遺跡の管玉関連遺物には、弥生中期と後期のものが存在し、大枠ではあるが、それ

ぞれ調査区の間中部と東側でまとめることが可能である。中間部では施溝痕を有するものが多く見られ、中期の様相が有り、この付近に中期段階の居住域があった可能性も考えられる。

東側の住居に伴うと考えられるものは、角柱段階から完成品に至るものしかない。これは作業が選択的におこなわれていたことを明瞭に示しており、分業・流れ作業化していた可能性をうかがわせる。このような傾向は林・藤島遺跡でも認められ、角柱段階以降の作業が集約されていたと考えられる。

勾玉（第98図39～45）土坑139で3点出土した以外に7点の完成品のみが出土した。石材は翡翠3点、蛇紋岩2点、緑色岩1点、滑石1点である。出土地点は比較的東側に多い傾向があり、住居1・2に伴うと考えられるものは1点のみである。長さ1cm前後の小型の扁平勾玉は、半月状の腹部に挟りを入れられたもので、頭部や尾部は若干丸みを帯びる。穴は片面穿孔がそのほとんどを占め、長さが1.4～1.5cmのものに両面穿孔が見られる。住居1・2に伴う可能性がある44は翡翠製で、頭部には緑色部がなく、質が悪いため欠損しているが、尾部は透明度のある綺麗な緑色を呈し、尾部の先端は細く作られている。長さ3cm弱の45は、ほかの玉類から大きく離れた調査区西側のG48区で出土した。

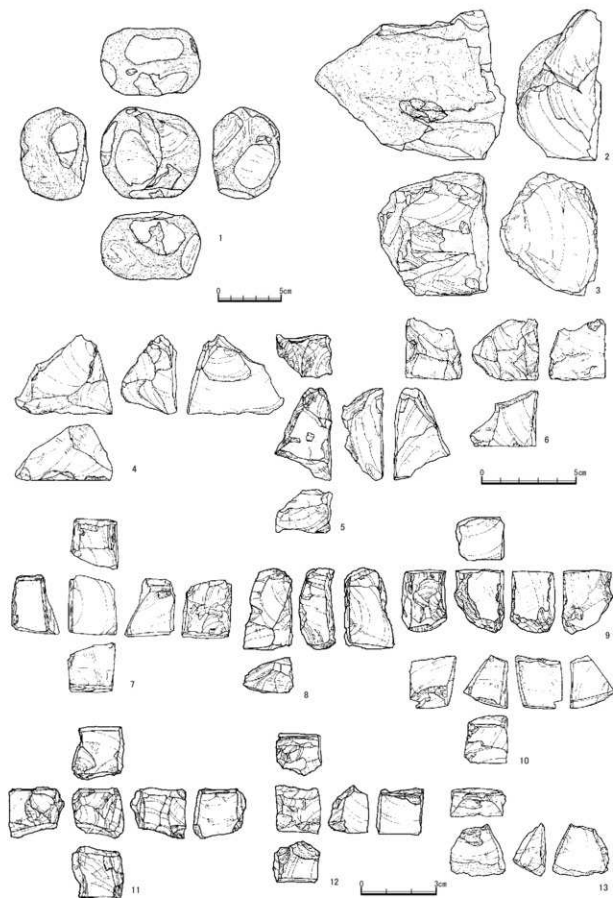
白玉・小玉（第98図46～73）白玉はすべて滑石製で、土坑139以外で28点出土した。このうち21点はF・G88区に集中し、そのほかも80区以東に偏る。直径は大半が0.35cm前後で、0.4～0.45cmのもの5点と、0.5cmを超えるもの1点を含む。厚さは0.11～0.35cmで、統一性はあまり認められない。

ガラス小玉（73）は、住居1・2中央付近のB82区から1点出土した。引き伸ばし法で作られ、直径と厚さがほぼ同じで、浅葱色を呈する。

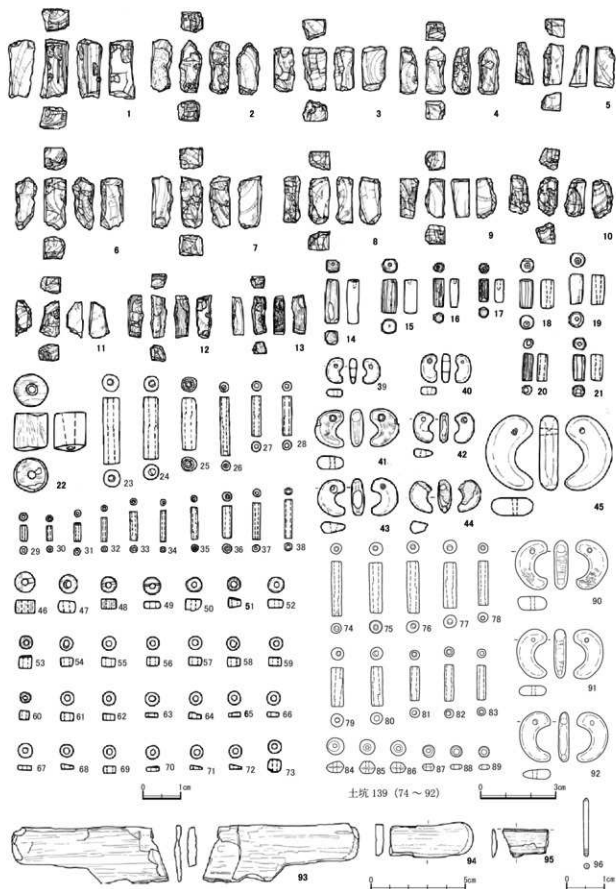
土坑139出土の玉（第98図74～92）土坑の埋土や上層から、管玉10点（74～83）、勾玉3点（90～92）、算盤玉4点（84～87）、小玉2点（88・89）が出土した。管玉2点（74・78）は緑色凝灰岩製で、ほかは黒色～わずかに透明度のある薄緑色（苔色）の頁岩製である。長さは1.5cm前後のもの2cm前後のもの、太さは0.4cm前後のもの0.5cm前後のものがそれぞれ半数ずつ存在する。穴はすべて両面穿孔で、中央付近で両者がずれて貫通する例が多く、側面をわずかに貫くもの（79）もある。勾玉は、90と92が管玉の石材と同質の黒色頁岩製で、91はチャート系石材を使用している。大きさ・形態共に近似し、長さ2cm前後、扁平で頭と尾の違いは明瞭に作出し、平坦な部分を残さず研磨されている。92は背部に稜が立つ程度まで研磨され、薄っぺらな状態にまでなっている。90や92の表面には敲打痕状の凸凹が見られることから、研磨の前に若干敲打による表面調整が施された可能性もある。算盤玉は緑がかった滑石製で、直径は0.6cm前後のものが3点と、0.46cmのものが1点である。小玉は黒色の滑石製で、直径0.45cm前後、厚さは0.17cmと0.19cmでほぼ同じ形状を呈する。

玉製作工具（第98図93～96）工具は、安山岩製穿孔具（96）と紅簾片岩製施溝具（93～95）が出土した。穿孔具は、長さ1.565cm・太さ0.16cmの完形品で、先端には明瞭な回転痕があり、直径0.05cmほどの突出部を持つ。基部先端は楔状に作り出されている。紅簾片岩片は4点あるが、このうち1点には加工・使用痕が認められない。93は刃物の柄のような形状をし、刃に相当する部分は使用されている。柄の部分と峰には磨減が見られ、この形状が意図的なものであることを示している。94は刃に当たる部分は欠損するが、側面端部が丸く研磨整形され、上部側辺にも磨減が見られることから、93と同様の柄に相当する可能性もある。95は下部側辺が尖り、使用痕跡が認められる。

翡翠原石（第97図1）Z86区から出土した。8cm四方で厚さ約5cm、重さ840gを測る転石である。白色地に緑色の筋がわずかに入る。4つの側面は平坦に磨減し、砥石か磨石として使用された痕跡を持つ。本遺跡で翡翠の玉製作をおこなった形跡はなく、なぜこのような利用をしたのか不明である。



第97図 玉作り関連遺物実測図(1)(1：縮尺1/4、2～6：縮尺1/3、7～13：縮尺1/2)



第98図 玉作り関連遺物実測図(2) (1~45・74~92:縮尺2/3、46~73・96:縮尺1/1、93~95:縮尺1/2)

第4節 III区〔図版第32- (2)、第99図、第14表〕

本節で図示した遺物は土師器・須恵器を中心とした土器40点で、弥生時代から中世までの時期幅を有する。主体時期は9・10世紀代である。

1 遺構出土土器

住居1出土土器（第99図1～3）

すべて須恵器である。1は坏で、外面は口縁部から体部に回転ナデ調整を施し、底部は回転ヘラ切りする。内面は回転ナデ調整を施す。2は埵で、外面は口縁部から体部に回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切り痕を残すが、磨滅している。内面は回転ナデ調整を施す。3は坏蓋で、外面は口縁部に回転ナデ調整を施し、天井部を回転ヘラ切りする。内面は回転ナデ調整を施す。外面に降灰が見られる。

2 包含層出土土器

弥生土器（第99図4・5）

2点とも壺の小片で、所属時期の判定は難しい。4は口縁部および頸部で、外面にヨコナデ後ミガキ調整、内面にヨコミガキ調整を施す。5は口縁部で、外面はハケ調整をナデ消した後、刺突文を施す。内面はナデ調整を施し、指頭圧痕を残す。

土師器（第99図6～20）

6は壺である。内外面とも口縁部および体部に回転ナデ調整を施し、底部は外面にヘラケズリ調整をナデ消し、内面にハケ調整を施す。7は須恵器の坏蓋の器形を持つが、焼成は土師器のものである。内外面ともナデ調整の上、赤彩を施す。いわゆる須恵器の生焼けや、焼成・器形の交錯例ではなく、坏蓋の器形と赤彩の外面を当初から意図したものと見られ、その製作の経緯から見て、実用品ではなく、祭祀品の類と推測される。8～14・18・19は埵である。8は内外面とも回転ナデ調整の上、赤彩を施す。9～14・18・19は体部から底部にかけての小片である。いずれも外面体部に回転ナデ調整を施し、底部に回転糸切り痕を残すが、18・19は糸切り痕が磨滅している。内面は体部および底部に回転ナデ調整を施す。15～17は高台付の埵で、ほぼ底部のみの小片である。いずれも内外面に回転ナデ調整を施すが、15の高台内部に回転糸切り痕を残す。20は坏で、ほぼ底部のみの小片である。外面の調整は不明だが、内面はミガキ調整を施す。内外面とも赤彩を施す。

須恵器（第99図21～33・35～39）

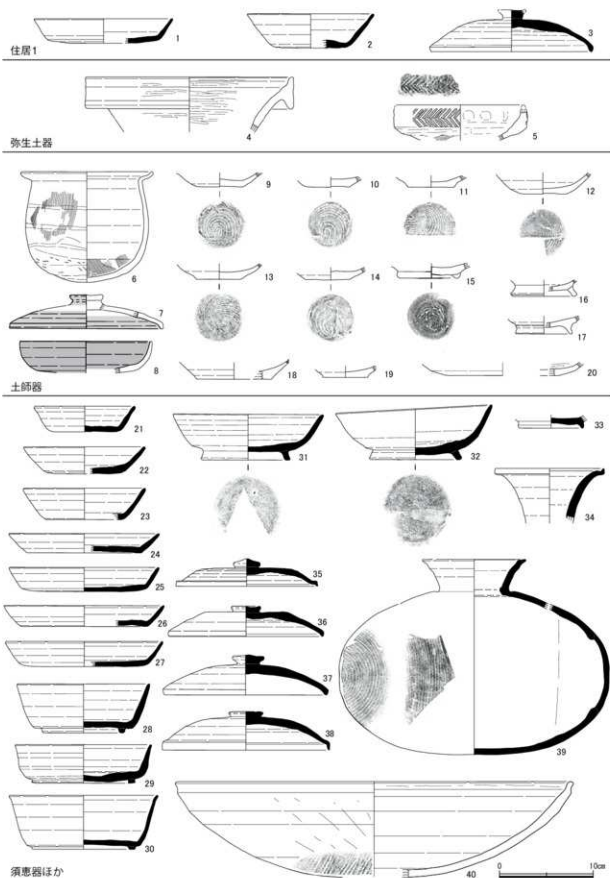
21～27は坏である。いずれも内外面に回転ナデ調整を施すが、21・22・24～26は底部外面に回転ヘラ切り痕を、25は底部内面に指ナデ痕を残す。28～30は高台付の坏である。いずれも内外面に回転ナデ調整を施し、高台内部に回転ヘラ切り痕を、底部内面に指ナデ痕を残す。31～33は高台付の埵である。31・32は内外面に回転ナデ調整を施し、高台内部に回転糸切り痕を残すが、31は回転糸切り後の指ナデ痕が残る。33はほぼ底部のみの小片である。35～38は坏蓋である。いずれも内外面とも回転ナデ調整を施し、外面天井部を回転ヘラ切りする。39は横瓶である。口縁部および体部の破片のみで接合せず、図上で全体形を復元している。外面は口縁部に回転ナデ調整、体部から底部にはカキ目を施す。内面は回転ナデ調整を施す。

灰釉陶器（第99図34）

壺の口縁部と推測される。内外面とも回転ナデ調整を施す。小破片であるため、詳細は不明である。

焙烙（第99図40）

瓦質の焙烙である。内外面とも回転ナデ調整を施すが、外面底部にハケ調整が残る。



第99図 III区出土土器実測図(縮尺1/4)

第5節 II区：上層遺物 - 補遺 - [図版第38、第100-105図、第15表]

1 概要

本節ではII区下層調査で検出した遺物のうち、古代・中世に属する遺物、すなわち上層遺物について記述する。本来ならば、これらの遺物は先に刊行した『中角遺跡3 - II・III区上層編-』（平成21年度刊行）にて総括すべきであったが、遺物整理作業の進捗上、結果として『中角遺跡3』の編集・制作に加えられなかったものである。

図示した点数は土器202点、土製品10点、ガラス小玉23点をそれぞれ数える。まず、土器の内訳は須恵器が最も多く、土師器がそれに次ぎ、中世の土器・陶磁器も若干含む。須恵器は9～10世紀代のものが主だが、古墳時代のものも若干含む。器種は坏が主で、埴・皿・坏蓋・坏身などの小型品や、壺・甕・平瓶などの大型品も含む。土師器も須恵器とほぼ同様の時期幅・傾向を有する。器種は埴が主で、坏や甕・壺・鍋などを含む。中世の土器・陶磁器としては、青磁や緑釉・灰釉陶器、土師質皿（かわらけ）などを得た。土製品の内訳は土鍬10点と馬形土製品1点である。

土器資料の大半を占める土師器・須恵器については、上記と同様の内容がII区上層調査でも認められており、これらの遺物の内容は、大筋においてII区上層遺物のそれに類するものと判断し得る。

ガラス小玉はいずれも外形・孔とも真円に近く仕上げられ、色の鮮明なものが多い。巻きつけ痕が明瞭に残されており、巻きつけ技法で製作されたものと認められる。所属時期の特定は難しいが、製作技法から推測して、古くとも古代以降の所産と判断し得る。

これら上層遺物が得られた要因については、古代以降に周溝墓群の地形が埋没する際、周溝への流入土に混入した状況がまず想定される。また、II区-④以西が傾斜地形で、地山層も砂質傾向が強いことから、低所の上層遺構が高所からの流土に埋没した可能性も高い。その場合、同地区の上層遺構調査で古代の畑の畝跡が検出されていることから、後世の耕作による混入も考慮すべきであろう。

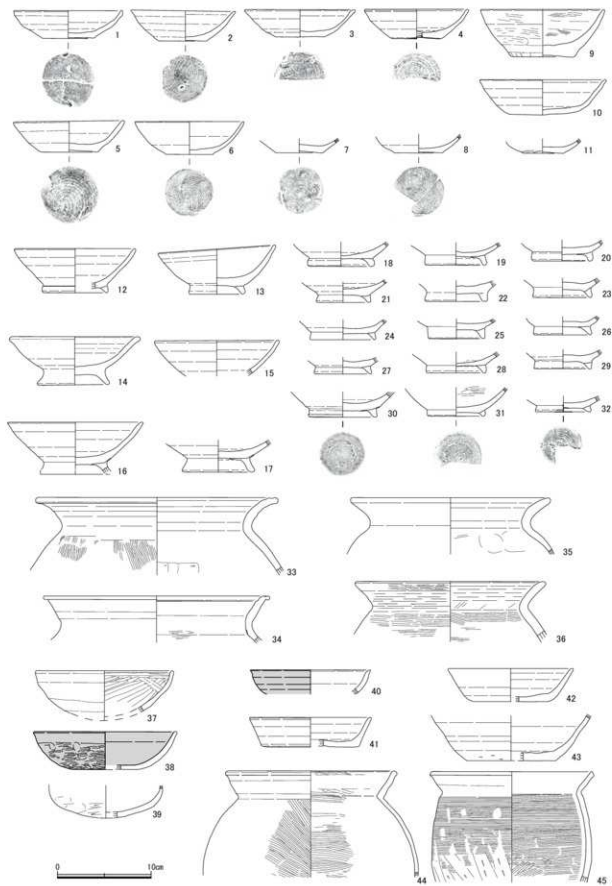
周溝墓群が展開するII区-③以西では、中世遺構・遺物の密度が以東と比較して極端に薄く、代わりに律令期の遺構・遺物が目立つ傾向が認められたが、本資料が土師器・須恵器主体であるのは、その傾向を裏付ける結果とも言える。

2 遺物

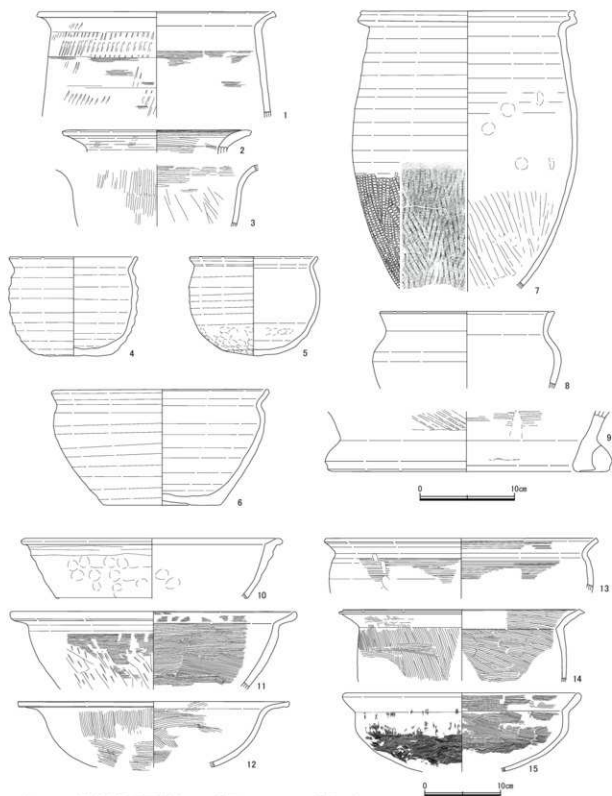
下層調査報告という本書の性格を鑑み、これら上層遺物については各観察表（第15・16表）をもって記述に代えるが、特に注目すべきと思える馬形土製品についてのみ、以下に詳述する。

馬形土製品（第105図18） いわゆる^{ウマカタ}土馬である。包含層より出土したため、所属時期の特定は難しいが、古代の所産と考えられる。土師質で頸の一部と尾、右後脚の下半部を欠く。全体をナデ整形するが、所々にヘラ様工具の粗い整形痕が残る。顔はやや右寄りに傾くが、ほぼ正面を向き、顔面に4箇所の刺突痕で目と鼻を、深めの線刻で口をそれぞれ表現する。たてがみは大半を欠失し、頸の付け根に少し残るのみである。左右の口から頸・背にかけてと、同じく左右の胸前から肩・背にかけて、いずれも縄目様の装飾を線状に施し、それぞれ手綱と胸繫を表現する。同様の装飾を左右の腹から腰で交差しつつ尻にかけて施すのは尻繫の表現と見られる。この縄目様装飾の原体は不明だが、文字通り縄もしくは紐を用いた可能性もある。背には粘土の貼り付けで鞍を表現するが、前輪と後輪はほとんど剥落している。鞍の中央を横断するように粘土紐を棒状に貼り付けているのは、鐙の表現と見られる。

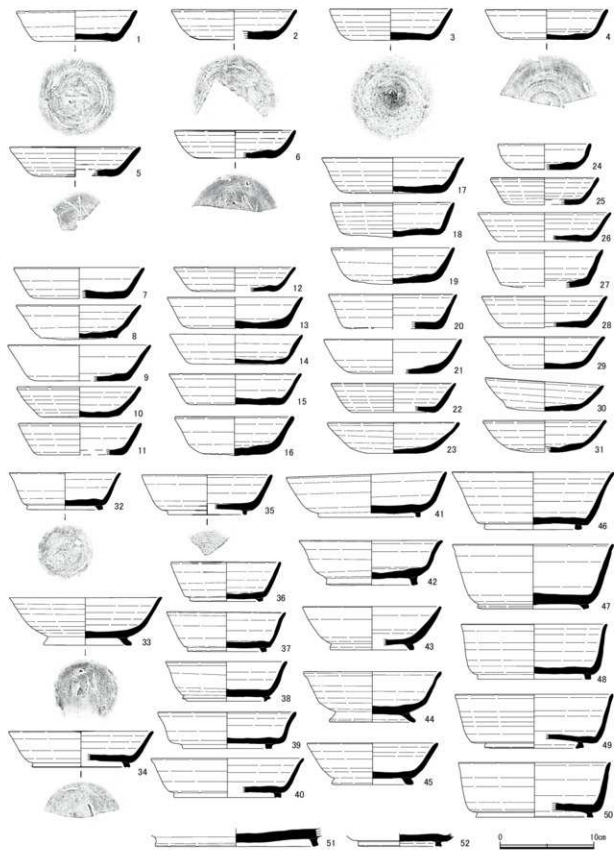
県内の同類資料には、あわら市細呂木・坂井市下新庄・越前市池ノ上（須恵質）の各表採例や、福井市和田防町遺跡・永平寺町吉野塚大明地遺跡・同町藤巻多珍坊遺跡（須恵質）の各出土例がある。



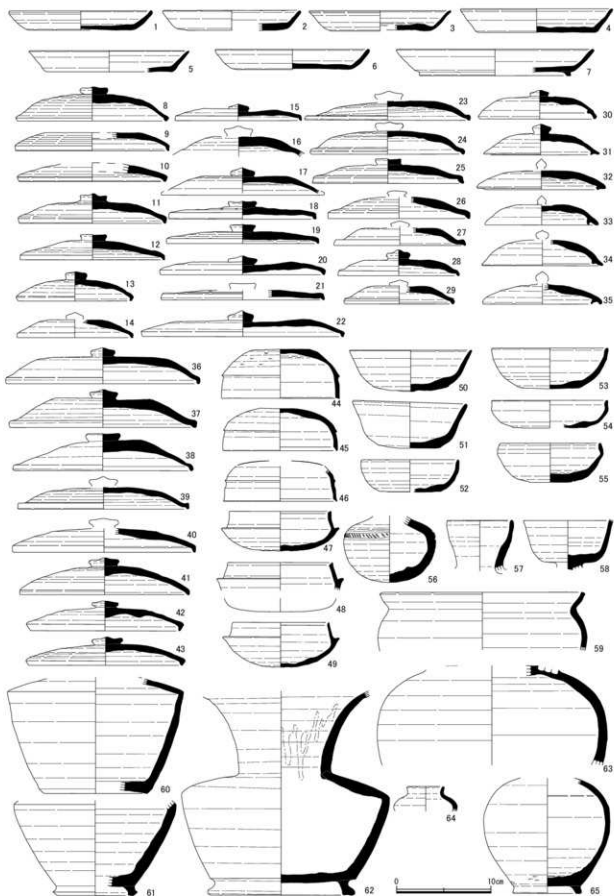
第100圖 上層遺物実測図(1)(縮尺1/4)



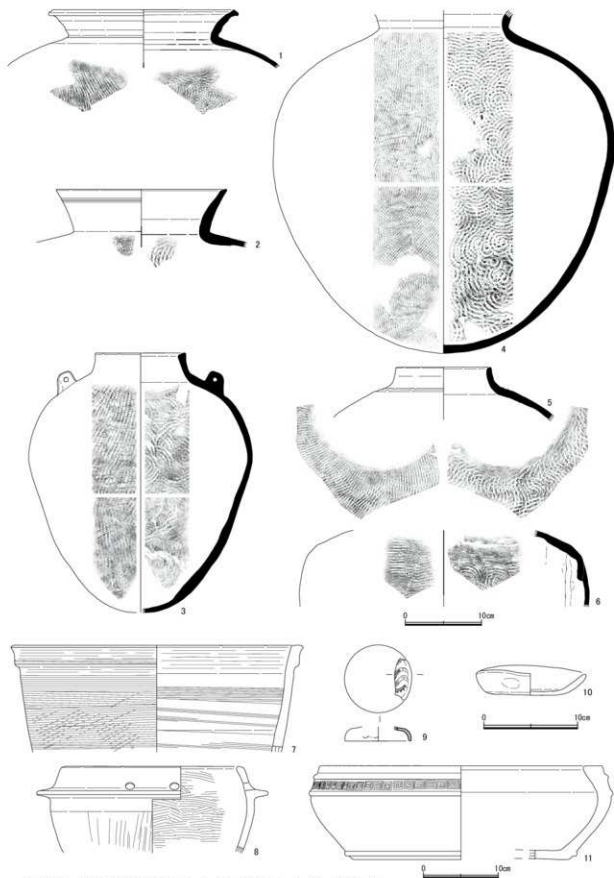
第101図 上層遺物実測図(2) (1~9: 縮尺1/4、10~15: 縮尺1/5)



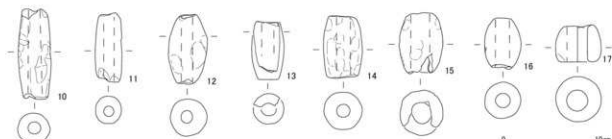
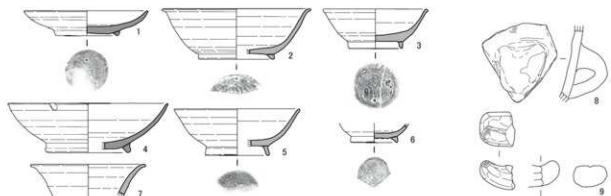
第102図 上層遺物実測図(3) (縮尺1/4)



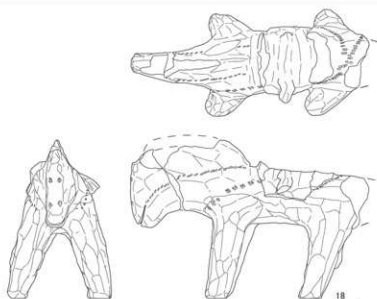
第103図 上層遺物実測図(4)(縮尺1/4)



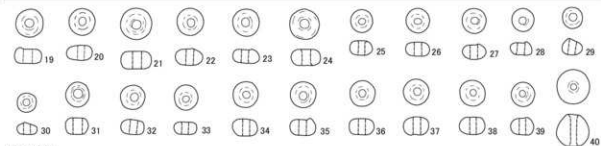
第104図 上層遺物実測図(5)(1~6・11:縮尺1/5、7~10:縮尺1/4)



土鐘



馬形土製品



ガラス小玉

第105図 上層遺物実測図(6) (1~17: 縮尺1/4, 18: 縮尺1/3, 19~40: 縮尺1/1)

第15表 Ⅱ区出土上層土器・土製品観察表

序号	No.	器種	出土地区	容量(cm ³)	状況	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
100	1	土師器 杯	K45 包含層	口H11.40 底H5.5 高12.9	良	今全周 磨粒ごく少	浅黄橙	口～底10割ナデ	口10割ナデ 底10割ホツリ	50%	
100	2	土師器 瓶	L43 包含層	口H11.80 底H5.6 高13.1	良	磨 粒ごく少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	40%	
100	3	土師器 瓶	O40 包含層	口H11.5 底H5.2 高12.30	良	磨 粒ごく少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	30%	
100	4	土師器 瓶	L44 包含層	口H16.7 底H4.8 高13.3	今全周 不良	今全周 磨粒少	浅黄橙	口～底10割ナデ 底5割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	50%	
100	5	土師器 杯	J49 包含層	口H11.4 底H6.9 高13.4	今全周 良	今全周 磨粒多	橙	口～底10割ナデ	口10割ナデ 底10割ホツリ	80%	
100	6	土師器 杯	G57 包含層	口H11.40 底H5.6 高13.5	良	今全周 磨粒ごく少	浅黄橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	30%	
100	7	土師器 杯	J51 包含層	底H5.6 高11.5	良	今全周 磨粒多	浅黄橙	底～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	50%	
100	8	土師器 瓶	G58 包含層	底H5.1 高12.6	良	今全周 磨粒少	白灰・黄橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	50%	
100	9	土師器 瓶	D66 包含層	口H12.80 底H6.6 高13.6	良	今全周 磨粒少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底下部の磨粒	90%	
100	10	土師器 杯	G56 包含層	口H12.20 底H7.2 高13.7	良	磨 粒ごく少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ	50%	
100	11	土師器 瓶	51 包含層	底H2.2 高11.40	良	今全周 磨粒ごく少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ	50%	
100	12	土師器 高台碗	J48 包含層	口H12.6 底H6.8 高14.2	良	磨 粒少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ	30%	
100	13	土師器 高台碗	L44 包含層	口H2.2 底H5.8 高14.7	良	今全周 磨粒少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ	20%	
100	14	土師器 高台碗	O43 包含層	口H13.4 底H7.3 高13.1	今全周 良	磨 粒多	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底の凹・高有	95%	
100	15	土師器 瓶	51 包含層	口H13.60 高13.7	今全周 不良	磨 粒少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ	20%	
100	16	土師器 高台碗	51 包含層	口H14.80 高15.5	良	今全周 磨粒少	浅黄橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	50%	
100	17	土師器 高台碗	51 包含層	底H7.40 高13.40	今全周 良	磨 粒少	内)橙 (外)黄橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	80%	
100	18	土師器 高台碗	51 包含層	底H7.40 高12.6	良	磨 粒少	橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ 底10割ホツリ	50%	
100	19	土師器 高台碗	J47 包含層	底H6.4 高12.6	良	磨 粒少	浅黄橙	底～底ナデ	底～底ナデ	80%	
100	20	土師器 高台碗	51 包含層	底H6.7 高11.30	良	磨 粒多	黄橙	口～底10割ナデ	口～底10割ナデ	40%	
100	21	土師器 高台碗	51 包含層	底H5.5 高12.20	不良	今全周 磨粒少	橙	底～底10割ナデ	底～底10割ナデ	30%	

第5章 遺物

種別	No.	器種	出土地区	数量(個)	状況	取上	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
100	22	土器器 高台壇	L44 包衣層	Ⅰ区16.4 [高12.2]	やや 不良	磨 跡絶少	浅黄橙	Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区10区ナデ	20%	
100	23	土器器 高台壇	D3 包衣層	Ⅰ区16.2 [高12.2]	良	磨 跡絶二少	橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	40%	
100	24	土器器 高台壇	K45 包衣層	Ⅰ区17.8 [高12.0]	やや 不良	今全磨 跡絶少	Ⅰ区1区黄橙 (外)に2区黄橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	50%	
100	25	土器器 高台壇	D3 包衣層	Ⅰ区16.0 [高12.2]	良	今全磨 跡絶二少	に2区橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	45%	
100	26	土器器 高台壇	D50 包衣層	Ⅰ区15.9 [高11.8]	良	磨 跡絶少	黄橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区ナデ	40%	
100	27	土器器 高台壇	D3 包衣層	Ⅰ区15.6 [高11.2]	やや 不良	今全磨 跡絶多	橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区10区に切の摩滅	20%	
100	28	土器器 高台壇	K46 包衣層	Ⅰ区16.2 [高12.2]	やや 不良	今全磨 跡絶多	橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区ナデ	40%	
100	29	土器器 高台壇	D3 包衣層	Ⅰ区16.0 [高12.0]	良	磨 跡絶二少	橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	50%	
100	30	土器器 高台壇	L43 包衣層	Ⅰ区17.2 [高12.2]	良	磨 跡絶少	Ⅰ区1区 (外)橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ→7区ナ	Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区10区に切の摩滅	40%	
100	31	土器器 壇	C71 包衣層	Ⅰ区18.0 [高13.1]	今全磨 跡絶二少	Ⅰ区1区 (外)黄橙	Ⅰ区Ⅰ区7区ナ	Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区10区→切の		不明	
100	32	土器器 高台壇	H54 包衣層	Ⅰ区15.8 [高11.2]	良	今全磨 跡絶少	Ⅰ区1区 (外)橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区10区に切の	20%	
100	33	土器器 壺	D53 包衣層	Ⅰ区125.2 [高18.2]	良	磨 跡絶多	浅黄橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区1区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区ハケ	不明	
100	34	土器器 壺	M41-42 包衣層	Ⅰ区124.0 [高14.5]	良	磨 跡絶二少	橙	Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区ハケ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	不明	
100	35	土器器 壺	H50 包衣層	Ⅰ区120.6 [高16.0]	やや 不良	今全磨 跡絶少	浅黄橙	Ⅰ区Ⅰ区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区ナデ	不明	
100	36	土器器 壺	F35 包衣層	Ⅰ区119.6 [高16.4]	やや 不良	磨 跡絶多	浅黄橙	Ⅰ区Ⅰ区ハケ→ナデ	Ⅰ区Ⅰ区ハケ→ナデ	不明	
100	37	土器器 杯	B96 包衣層	Ⅰ区114.8 [高14.4]	良	磨 跡絶少	Ⅰ区1区 (外)浅黄橙	Ⅰ区ナデ Ⅰ区7区ナ	Ⅰ区Ⅰ区ナデ	90%	
100	38	土器器 壇	H52 包衣層	Ⅰ区115.0 [高14.1]	良	磨 跡絶多	橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区10区に切の摩滅	20%	内外面磨削
100	39	土器器 壇	B78 包衣層	Ⅰ区114.0 [高13.2]	今全磨 跡絶二少	橙	Ⅰ区Ⅰ区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区→ナデ	不明	
100	40	土器器 杯	F32 包衣層	Ⅰ区112.5 [高12.2]	良	今全磨 跡絶二少	橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	20%	外面磨削
100	41	土器器 杯	C80 包衣層	Ⅰ区112.0 [高18.2]	やや 不良	今全磨 跡絶多	灰白	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ、Ⅰ区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区10区に切の摩滅	25%	
100	42	土器器 杯	H56 包衣層	Ⅰ区114.0 [高13.5]	良	磨 跡絶少	灰黄	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区10区に切の摩滅	20%	
100	43	土器器 杯	F56 包衣層	Ⅰ区119.4 [高14.8]	良	磨 跡絶少	Ⅰ区1区黄 (外)に2区橙	Ⅰ区Ⅰ区10区ナデ	Ⅰ区10区ナデ Ⅰ区10区に切の摩滅	80%	

第5節 II区：上層遺物 - 補遺 -

棟号	No.	器種	出土地区	数量(個)	状況	土土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
100	44	土師器 甕	J43 包含層	(口)H17.0 (高)11.3	良	全全周 磨粒多量	(内)黄褐色 (外)に赤い黄褐色	(口～底)ハケ→横ナデ	(口)横ナデ (底)ハケ	不明	
100	45	土師器 甕	J50 包含層	(口)H17.0 (高)11.8	良	全全周 磨粒少	黄褐色	(底)ハケ	(口～底)横ナデ (底)ハケ	40%	
101	1	土師器 甕	J49 包含層	(口)H24.7 (高)11.3	全全周 不良	全全周 磨粒多	黄褐色	(口～底)横ナデ (底)ハケ	(口～底)タテキ→タテキ	不明	
101	2	土師器 甕	B30+B2 包含層	(口)H19.0 (高)12.5	良	磨 粒多	(内)に赤い黄 (外)に赤い黄褐色	(口)ハケ	(口)ハケナデ	不明	
101	3	土師器 深鉢	G64 包含層	(高)10.5	全全周 不良	磨 粒多	黄褐色	(底)横ハケ (底)ナデ	(底)ハケ	不明	
101	4	土師器 甕	H50 包含層	(口)H13.4 (底)H8.9 (高)10.8)	良	全全周 磨粒少	焼	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ (底)ハケ	80%	
101	5	土師器 甕	G61 包含層	(口)H13.2 (高)10.5	良	全全周 磨粒多	黄褐色	(口)横ナデ (底)ハケ	(口～底)横ナデ (底)横ナデ	70%	
101	6	土師器 鉢	B32 包含層	(口)H22.7 (底)H12.4 (高)12.3)	良	全全周 磨粒多	黄褐色	(口～底)横ナデ (底)ナデ	(口～底)横ナデ (底)ナデ	90%	
101	7	土師器 甕	E54 包含層	(口)H22.2 (高)129.5)	良	全全周 磨粒少	に赤い黄褐色	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ (底)ナデ	70%	中使遺構出土
101	8	土師器 甕	B42 包含層	(口)H18.8 (高)10.1)	良	磨 粒少	(内)黄褐色 (外)黄褐色	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ	不明	
101	9	土師器 深鉢	H50 包含層	(底)H26.4 (高)16.5)	良	全全周 磨粒少	黄褐色	(底)ハケ	(底)横ナデ	不明	口縁部に復行着
101	10	土師器 深鉢	G60 包含層	(口)H33.0 (高)10.6)	全全周 不良	磨 粒少	黄褐色	(口～底)ナデ	(口～底)ナデ	不明	
101	11	土師器 甕	H50 包含層	(口)H27.4 (高)16.3)	良	全全周 磨粒多	黄褐色	(口～底)横ハケナデ	(口～底)横ナデ (底)横ハケ	不明	
101	12	土師器 甕	G32 包含層	(口)H25.6 (高)18.8)	良	磨 粒少	黄褐色	(口～底)ハケナデ	(口)横ナデ (底)ハケナデ	不明	
101	13	土師器 甕	G41 包含層	(口)H35.7 (高)17.3)	全全周 不良	全全周 磨粒多	黄褐色	(口～底)横ハケ	(口～底)横ハケ	不明	
101	14	土師器 甕	H50 包含層	(口)H31.0 (高)19.5)	良	全全周 磨粒少	焼	(口～底)ハケ	(口～底)ハケナデ (底)ハケ	不明	
101	15	土師器 甕	F39 包含層	(口)H26.7 (高)11.6)	良	磨 粒少	に赤い黄褐色	(口)横ナデ (底)ハケ	(口～底)横ナデ (底)ハケ	80%	外面復行着
102	1	瓦器 甕	H50 包含層	(口)H12.4 (底)H8.6 (高)13.3)	良	磨 粒少	灰	(口～底)横ナデ (底)ナデ	(口～底)横ナデ (底)横ナデ	90%	
102	2	瓦器 甕	S15+S2 包含層	(口)H12.9 (底)H6.9 (高)13.1)	良	磨 粒少	灰白	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ (底)横ナデ	50%	
102	3	瓦器 甕	H50 包含層	(口)H12.9 (底)H6.9 (高)13.2)	良	磨 粒少	灰	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ (底)横ナデ	80%	
102	4	瓦器 甕	H51 包含層	(口)H12.9 (底)H7.3 (高)13.2)	良	全全周 磨粒少	灰青	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ (底)横ナデ	20%	
102	5	瓦器 甕	H50 包含層	(口)H13.0 (底)H7.4 (高)13.1)	良	全全周 磨粒少	(内)灰白 (外)暗青灰	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ (底)横ナデ	30%	

第5章 遺物

種別	No.	器種	出土地区	数量(個)	状態	土質	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
102	6	瓶蓋器 H50-55 包含層	(口)12.7 (底)4.0 (高)3.9	良	磨 砂粒少	灰	(口～底)同調ナデ	(口)同調ナデ (底)同調ナデ	40%		
102	7	瓶蓋器 H50 包含層	(口)13.0 (底)10.0 (高)3.2	良	磨 砂粒少	にしろ黄	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	10%		
102	8	瓶蓋器 E33-54 包含層	(口)13.0 (底)8.2 (高)3.2	良	磨 砂粒ごく少	灰	(口～底)同調ナデ	(口)同調ナデ (底)同調ナデ	70%		
102	9	瓶蓋器 H50 包含層	(口)13.0 (底)9.2 (高)3.8	やや 不良	磨 砂粒少	灰	(口～底)同調ナデ	(口)同調ナデ (底)同調ナデ	40%		
102	10	瓶蓋器 H46 包含層	(口)12.9 (底)6.7 (高)3.2	良	磨 砂粒少	灰オリーブ	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ	40%		
102	11	瓶蓋器 H49 包含層	(口)12.8 (底)9.8 (高)3.3	良	やや粗 砂粒少	灰	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	不明		
102	12	瓶蓋器 G56 包含層	(口)12.8 (底)9.2 (高)4.0	良	磨 砂粒少	灰	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	30%		
102	13	瓶蓋器 H50 包含層	(口)14.2 (底)9.2 (高)3.2	良	やや粗 砂粒少	灰	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	60%		
102	14	瓶蓋器 F57 包含層	(口)14.1 (底)10.0 (高)3.1	良	磨 砂粒少	灰	(口～底)同調ナデ	(口)同調ナデ (底)同調ナデ	70%		口縁部破片
102	15	瓶蓋器 H49 包含層	(口)13.8 (底)9.2 (高)3.3	良	磨 砂粒ごく少	灰	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	20%		
102	16	瓶蓋器 H50 包含層	(口)12.2 (底)6.0 (高)4.0	やや 不良	磨 砂粒少	灰白	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	20%		
102	17	瓶蓋器 H50 包含層	(口)14.8 (底)10.0 (高)3.7	良	磨 砂粒少	灰黄	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	40%		
102	18	瓶蓋器 M41 包含層	(口)12.8 (底)8.5 (高)3.7	良	磨 砂粒少	灰黄	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	70%		
102	19	瓶蓋器 B1 包含層	(口)12.8 (底)7.5 (高)3.0	不良	やや粗 砂粒少	灰白	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	40%		
102	20	瓶蓋器 H43 包含層	(口)13.4 (底)7.0 (高)4.6	良	磨 砂粒ごく少	(内)暗灰黄 (外)灰黄	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	20%		
102	21	瓶蓋器 G53 包含層	(口)14.4 (底)7.0 (高)3.6	良	磨 砂粒少	灰黄	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	30%		
102	22	瓶蓋器 G51-49 包含層	(口)12.8 (底)9.0 (高)3.1	良	磨 砂粒少	灰	(口～底)同調ナデ	(口)同調ナデ (底)同調ナデ	40%		一併ナデ
102	23	瓶蓋器 H45 包含層	(口)13.5 (底)8.2 (高)3.2	良	磨 砂粒少	暗オリーブ灰	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	90%		
102	24	瓶蓋器 H4 包含層	(口)9.40 (底)5.40 (高)2.7	良	やや粗 砂粒中	灰白	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	不明		破片程度
102	25	瓶蓋器 H44 包含層	(口)11.3 (底)7.0 (高)3.8	良	磨 砂粒ごく少	灰	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ (底)同調ナデ	30%		
102	26	瓶蓋器 H52 包含層	(口)12.8 (底)9.0 (高)3.1	良	磨 砂粒少	灰	(口～底)同調ナデ	(口)同調ナデ (底)同調ナデ	30%		
102	27	瓶蓋器 H45 包含層	(口)12.2 (底)9.0	良	磨 砂粒ごく少	灰黄	(口～底)同調ナデ	(口～底)同調ナデ	40%		

第5節 II区：上層遺物 - 補遺 -

棟号	No.	器種	出土地区	数量(個)	状況	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
102	28	灰赤漆 杯	149 包含層	〔口〕H13.0 〔底〕H4.0 〔高〕13.3	良	漆 跡絶少	オリーブ灰	〔口～底〕刷毛ナデ (底)磨ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	30%	
102	29	灰赤漆 杯	G51 包含層	〔口〕H12.0 〔底〕H6.0 〔高〕13.4	良	漆 跡絶多	灰白	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	70%	外面復元者
102	30	灰赤漆 杯	H45 包含層	〔口〕H12.4 〔底〕H7.6 〔高〕13.5	やや不 良	漆 跡絶少	灰白	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	100%	
102	31	灰赤漆 杯	147 包含層	〔口〕H12.7 〔底〕H3.0 〔高〕13.4	良	漆 跡絶少	オリーブ灰	〔口～底〕刷毛ナデ (底)磨ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ	50%	口縁一部焼戻
102	32	灰赤漆 高台杯	H-100 包含層	〔口〕H11.0 〔底〕H1.4 〔高〕13.9	やや不 良	漆 跡絶少	灰	〔口～底〕刷毛ナデ (底)磨ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ→磨ナデ	60%	
102	33	灰赤漆 高台杯	D50-E53 包含層	〔口〕H16.2 〔底〕H9.3 〔高〕15.1	良	漆 跡絶少	内)灰黄 (外)灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ→タケツリ	80%	
102	34	灰赤漆 高台杯	H50 包含層	〔口〕H15.2 〔底〕H10.2 〔高〕13.0	良	やや不 良	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ→タケツリ	90%	
102	35	灰赤漆 高台杯	G-150 包含層	〔口〕H13.0 〔底〕H8.1 〔高〕14.1	良	漆 跡絶多	灰白	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	25%	
102	36	灰赤漆 高台杯	G48 包含層	〔口〕H11.3 〔底〕H7.0 〔高〕14.1	良	漆 跡絶少	灰	〔口～底〕刷毛ナデ (底)磨ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ→磨ナデ	90%	底面復元
102	37	灰赤漆 高台杯	J50 包含層	〔口〕H12.4 〔底〕H3.2 〔高〕14.2	良	漆 跡絶多	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	70%	
102	38	灰赤漆 高台杯	H55 包含層	〔口〕H12.0 〔底〕H9.0 〔高〕14.2	良	やや不 良	灰	〔口～底〕刷毛ナデ (底)磨ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	30%	
102	39	灰赤漆 高台杯	F30-40 包含層	〔口〕H13.5 〔底〕H9.5 〔高〕13.9	良	やや不 良	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	80%	
102	40	灰赤漆 高台杯	H50 包含層	〔口〕H15.9 〔底〕H11.2 〔高〕14.0	良	漆 跡絶少	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ→磨ナデ	85%	
102	41	灰赤漆 高台杯	F32-150 包含層	〔口〕H16.7 〔高〕14.4	良	漆 跡絶少	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	60%	
102	42	灰赤漆 高台杯	J50 包含層	〔口〕H14.9 〔底〕H4.8 〔高〕14.7	良	やや不 良	灰白	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	80%	
102	43	灰赤漆 杯	143 包含層	〔口〕H14.0 〔底〕H9.0 〔高〕14.5	良	やや不 良	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	30%	
102	44	灰赤漆 瓶	K45 包含層	〔口〕H14.2 〔底〕H6.6 〔高〕15.2	良	漆 跡絶少	内)埋オリーブ 灰 (外)灰	〔口～底〕刷毛ナデ (底)磨ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (体下部)刷毛ナデ→タケツリ	30%	外面一部焼戻
102	45	灰赤漆 杯	G51-150 包含層	〔口〕H13.7 〔底〕H8.0 〔高〕14.3	良	漆 跡絶少	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ→磨ナデ	80%	
102	46	灰赤漆 高台杯	F56 包含層	〔口〕H17.3 〔底〕H10.9 〔高〕16.7	良	やや不 良	内)に灰黄 (外)灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ→磨ナデ	80%	
102	47	灰赤漆 高台杯	H56 包含層	〔口〕H17.0 〔底〕H10.9 〔高〕16.9	良	漆 跡絶少	灰	〔口～底〕刷毛ナデ (底)磨ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	50%	口縁焼戻
102	48	灰赤漆 高台杯	D56 包含層	〔口〕H15.2 〔底〕H10.0 〔高〕15.8	良	やや不 良	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	80%	
102	49	灰赤漆 杯	J44 包含層	〔口〕H16.0 〔底〕H9.0 〔高〕13.7	良	漆 跡絶少	灰	〔口～底〕刷毛ナデ	〔口～底〕刷毛ナデ (底)刷毛ナデ	30%	

第5章 遺物

種別	No.	器種	出土地区	数量(個)	状況	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
102	50	筑志器 高台埴	F57 SX30周溝	(口)16.1 (底)12.4 (高)13.8	良	泥 砂粒多	灰	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転ナデ	30%	
102	51	筑志器 片	147 包含層	(底)16.4 (高)11.30	良	今半泥 砂粒多	(内)増青灰 (外)灰	(底)回転ナデ	(底)回転ナデ, 回転ヘラズリ	不明	
102	52	筑志器 高台埴	H52 包含層	(底)18.6 (高)11.0	良	泥 砂粒多	灰白	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転ヘラズリ	不明	
103	1	筑志器 皿	K45 包含層	(口)15.0 (底)10.6 (高)14.0	良	今半泥 砂粒少	濃い赤褐色	(口～底)回転ナデ (底)ナデ	(口)回転ナデ (底)回転ナデ, 回転ヘラズリ (底)回転ヘラズリ, 板状片痕	50%	
103	2	筑志器 片	F90 包含層	(口)14.4 (底)9.2 (高)12.1	良	今半泥 砂粒少	黄灰	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ	30%	片面一部残灰
103	3	筑志器 皿	145 包含層	(口)14.7 (底)10.6 (高)12.1	良	泥 砂粒多	灰	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転ヘラズリ	不明	
103	4	筑志器 皿	146 包含層	(口)16.0 (底)12.4 (高)12.5	良	泥 砂粒少	灰	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ, 回転ヘラズリ (底)回転ヘラズリ	30%	
103	5	筑志器 片	F81 包含層	(口)16.8 (底)13.6 (高)12.9	良	泥 砂粒多	灰白	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ	20%	
103	6	筑志器 皿	F59 包含層	(口)6.0 (底)1.8 (高)12.1	良	泥 砂粒やや多	黄灰	(口～底)回転ナデ (底)ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転ヘラズリ, 板状片痕	60%	
103	7	筑志器 高台埴	140 包含層	(口)20.6 (底)15.9 (高)12.8	良	泥 砂粒多	灰	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転糸切の摩滅	20%	
103	8	筑志器 坏蓋	148 包含層	(口)15.7 (高)12.5 (底)13.0	良	今半泥 砂粒少	灰	(口～天井)回転ナデ	(口)回転ナデ (天井)回転ヘラズリ	50%	片面残灰
103	9	筑志器 坏蓋	146 包含層	(口)16.2 (高)11.40	良	今半泥 砂粒少	(内)泥 (外)灰オリーブ	(口～天井)回転ナデ	(口～底)回転ナデ, 回転ヘラズリ	40%	
103	10	筑志器 坏蓋	F44 包含層	(口)15.4 (高)11.40	良	今半泥 砂粒少	オリーブ灰	(口～天井)回転ナデ	(口～底)回転ヘラズリ	不明	
103	11	筑志器 坏蓋	F430 包含層	(口)15.4 (高)11.7 (底)12.8	良	今半泥 砂粒少	灰白	(口～天井)回転ナデ (天井)筋ナデ	(口～天井)回転ナデ	20%	片面残灰
103	12	筑志器 坏蓋	F50 包含層	(口)15.4 (高)12.7	良	今半泥 砂粒少	灰	(口～天井)回転ナデ, 筋ナデ	(口)回転ナデ (天井)回転ヘラズリ	50%	
103	13	筑志器 坏蓋	F50-G57 包含層	(口)11.9 (高)11.3 (底)12.3	良	泥 砂粒少	灰	(口～天井)回転ナデ (天井)ヘラズリ	(口)回転ナデ (天井)回転ヘラズリ	30%	
103	14	筑志器 坏蓋	G52 包含層	(口)12.2 (高)12.9	良	今半泥 砂粒少	灰	(口～天井)回転ナデ	(口)回転ナデ (天井)回転ヘラズリ	50%	
103	15	筑志器 坏蓋	F50 包含層	(口)13.4 (高)11.9 (底)11.7	良	泥 砂粒少	灰黄褐色	(口～天井)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (天井)回転ヘラズリ	60%	片面残灰
103	16	筑志器 坏蓋	K46 包含層	(底)12.0	良	泥 砂粒中	灰	(底)回転ナデ	(底)ヘラズリ	70%	
103	17	筑志器 坏蓋	F50 包含層	(高)12.4 (底)12.5	良	泥 砂粒少	(内)増青灰 (外)オリーブ灰	(底～天井)回転ナデ	(底)回転ナデ (天井)回転ヘラズリ	60%	
103	18	筑志器 坏蓋	H-040 包含層	(口)15.6 (高)11.9 (底)12.6	良	今半泥 砂粒多	灰	(口～天井)回転ナデ	(口)回転ナデ (天井)回転ヘラズリ	50%	
103	19	筑志器 坏蓋	H52 SX30周溝	(口)16.1 (高)12.0 (底)12.7	良	泥 砂粒多	(内)泥 (外)灰白	(口～天井)回転ナデ	(口)回転ナデ (天井)回転ヘラズリ	60%	片面残灰

第5節 II区：上層遺物 -補遺-

棟号	No.	器種	出土地区	数量(個)	状況	取土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
103	20	須恵器 坏蓋	F52 包含層	〔口〕H17.5 〔高〕12.6 〔腹〕13.0	瓦 磨蝕少	灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		25%	
103	21	須恵器 坏蓋	F54 包含層	〔口〕17.1 〔高〕11.0	瓦 磨蝕多	内)灰黄 外)灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		不明	
103	22	須恵器 坏蓋	F56-51 包含層	〔口〕21.1 〔高〕12.9 〔腹〕12.7	瓦 磨蝕少	灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ			外面磨滅
103	23	須恵器 坏蓋	包含層	〔口〕17.4 〔高〕12.0	瓦 今今磨蝕少	灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		95%	
103	24	須恵器 坏蓋	F45 包含層	〔口〕16.0 〔高〕12.0	瓦 今今磨蝕多	灰黄	〔口～天井〕同軸ナデ 〔天井〕磨ナデ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		90%	
103	25	須恵器 坏蓋	G54-55 包含層	〔口〕H16.0 〔高〕12.6 〔腹〕12.8	瓦 今今粗磨蝕多	灰白	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		40	外面磨滅
103	26	須恵器 坏蓋	G56-57 包含層	〔口〕15.0 〔高〕12.0	瓦 磨蝕少	灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口～天井〕同軸ナデ		50%	外面磨滅
103	27	須恵器 坏蓋	F57-59 包含層	〔口〕14.0 〔高〕12.0	瓦 磨蝕少	灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		50%	外面一部磨滅
103	28	須恵器 坏蓋	F58-59 包含層	〔口〕12.7 〔高〕12.7 〔腹〕12.5	瓦 磨蝕多	灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		80%	
103	29	須恵器 坏蓋	G51 包含層	〔口〕11.3 〔高〕11.0	瓦 今今磨蝕多	灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		20%	
103	30	須恵器 坏蓋	G53-51 包含層	〔口〕H12.0 〔高〕12.0 〔腹〕12.0	瓦 磨蝕少	内)黄褐 外)灰	〔口～天井〕同軸ナデ、磨ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		60%	一部磨滅
103	31	須恵器 坏蓋	F41 包含層	〔口〕12.3 〔高〕13.3	瓦 磨蝕多	内)灰黄 外)灰白	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕→ラダツテ		70%	
103	32	須恵器 坏蓋	M43 包含層	〔口〕H13.0 〔高〕12.0	瓦 磨蝕多	内)灰黄 外)磨ナダツテ	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		40%	外面磨滅
103	33	須恵器 坏蓋	L42 包含層	〔口〕H12.0 〔高〕12.0	瓦 磨蝕少	内)灰 外)磨ナ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕磨ナデ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		30%	外面磨滅
103	34	須恵器 坏蓋	F32 包含層	〔口〕H12.0 〔高〕12.0	瓦 今今粗磨蝕多	灰白	〔口～体〕同軸ナデ	〔口～体〕同軸ナデ		25%	
103	35	須恵器 坏蓋	M41 包含層	〔口〕H12.0 〔高〕12.0	瓦 磨蝕少	灰	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕磨ナデ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		50%	外面磨滅
103	36	須恵器 坏蓋	F50 包含層	〔口〕H20.3 〔高〕13.8 〔腹〕12.6	瓦 磨蝕多、少	灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		80%	
103	37	須恵器 坏蓋	J49 包含層	〔口〕H9.6 〔高〕4.0 〔腹〕2.5	瓦 磨蝕多	暗青灰	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕磨ナデ	〔口～体〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		90%	
103	38	須恵器 坏蓋	F52-54 包含層	〔口〕H18.0 〔高〕13.9	瓦 磨蝕少	黄灰	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		70%	
103	39	須恵器 坏蓋	F48 包含層	〔口〕H12.0 〔高〕12.0	瓦 磨蝕少	灰白	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕→ラダツテ		70%	
103	40	須恵器 坏蓋	C58-F56 包含層	〔口〕H9.2 〔高〕12.0	瓦 磨蝕多、少	灰黄	〔口～天井〕同軸ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		80%	
103	41	須恵器 坏蓋	F6-51 包含層	〔口〕H17.0 〔高〕13.50 〔腹〕13.2	今今瓦 今今粗磨蝕多	灰	〔口～天井〕同軸ナデ 〔天井〕磨ナデ	〔口〕同軸ナデ 〔天井〕同軸→ラダツテ		70%	

第5章 遺物

種別	No.	器種	出土地区	数量(個)	状態	取土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
103	42	灰志器 坏蓋	F53-G50 包含層	(口)15.8 (高)3.1 腹12.8	良	今午前 砂粒少	灰	(口～天井)回転ナデ	(口)回転ナデ (天井)回転→タケツ	60%	
103	43	灰志器 坏蓋	F50 包含層	(口)16.2 (高)3.0 腹13.3	良	磨 砂粒少	灰	(口～天井)回転ナデ	(口～体)回転ナデ (天井)回転→タケツ	100%	
103	44	灰志器 坏蓋	F56 包含層	(口)12.4 (高)3.2	良	磨 砂粒少	灰	(口～天井)回転ナデ	(口)回転ナデ (天井)回転→タケツ	95%	
103	45	灰志器 坏蓋	F56 包含層	(口)11.9 (高)4.8	良	磨 砂粒少	灰	(口～天井)回転ナデ	(口)回転ナデ (天井)回転→タケツ	90%	
103	46	灰志器 坏蓋	F56 包含層	(口)12.0 (高)3.2	良	磨 砂粒少	灰	(口～体)回転ナデ	(口～体)回転ナデ	10%	
103	47	灰志器 坏身	F56 包含層	(口)16.7 (高)4.2	良	磨 砂粒少	灰	(口～底)回転ナデ	(口～体)回転ナデ (底)回転→タケツ	60%	
103	48	灰志器 坏身	F56 包含層	(口)11.0 (高)3.0	良	磨 砂粒少	灰	(口～体)回転ナデ	(口～体)回転ナデ	10%	
103	49	灰志器 坏身	F58 包含層	(口)10.1 (高)4.7	良	今午前 砂粒少	灰	(口～底)回転ナデ	(口～体)回転ナデ (底)回転→タケツ	90%	2011年度土器出土
103	50	灰志器 埴	M42 包含層	(口)12.2 (底)17.3 (高)14.3	良	磨 砂粒多	灰	(口～底)回転ナデ	(口～体)回転ナデ (底)回転→タケツ	30%	
103	51	灰志器 坏	K46 包含層	(口)11.2 (底)3.9 (高)4.1	良	今午前 砂粒少	灰白	(口～体)回転ナデ (底)滑ナデ	(口～体)回転ナデ (底)回転→タケツ	30%	
103	52	灰志器 坏	N39 包含層	(口)12.0 (底)17.2 (高)13.4	良	磨	オリーブ灰	(口～底)回転ナデ	(口～体)回転ナデ (底)回転→タケツ	30%	
103	53	灰志器 埴	F54 包含層	(口)12.2 (底)16.2 (高)14.2	良	磨 砂粒多	江戸・黄粒	(口～底)回転ナデ	(口～体)回転ナデ (底)ナデ	30%	
103	54	灰志器 坏	J47 包含層	(口)12.2 (底)17.3 (高)12.3	良	磨 砂粒少	灰	(口～底)回転ナデ	(口)回転ナデ (底)回転→タケツ	30%	
103	55	灰志器 坏	N42 包含層	(口)16.2 (底)14.2 (高)14.1	良	磨 砂粒ごく少	灰	(口～底)回転ナデ	(口～体)回転ナデ (底)回転→タケツ	40%	
103	56	灰志器 ハツウ	J44-K45 包含層	(底)1.4 (高)16.3	良	磨 砂粒少	灰	(口～底)回転ナデ	(口～体)回転ナデ、朝実又 (底)回転→タケツ	40%	
103	57	灰志器 平瓶	G45 包含層	(口)16.8 (高)13.4	良	今午前 砂粒ごく少	青灰	(口)回転ナデ	(口)回転ナデ	不明	焼灰
103	58	灰志器 高弁	M41 包含層	(高)15.2	良	磨 砂粒少	灰	(F)回転ナデ	(F)回転ナデ (F下部)回転→タケツ	不明	
103	59	灰志器 鉢	F59 包含層	(口)21.1 (高)4.2	良	磨 砂粒少	(内)灰 (外)焼灰	(口～体)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (体)→タケツ	不明	
103	60	灰志器 壺	J50 包含層	(底)10.2 (高)12.2	良	磨 砂粒少	(内)焼灰 (外)灰	(体～底)回転ナデ	(体)回転ナデ (底)回転→タケツ	45%	外面一部焼灰
103	61	灰志器 壺	N40 包含層	(底)10.4 (高)10.1)	良	磨 砂粒少	灰白	(体～底)回転ナデ	(体)回転ナデ (体下部)回転→タケツ	10%	内面一部焼灰
103	62	灰志器 壺	I52 包含層	(底)4.8 (高)12.1)	良	磨 砂粒少	緑灰	(口～体)回転ナデ	(口～体)回転ナデ (体下部)回転→タケツ	70%	焼灰
103	63	灰志器 平瓶	I43 包含層	(高)16.5)	良	磨 砂粒少	灰	(体)回転ナデ	(体)回転ナデ	不明	

第5節 II区：上層遺物 -補遺-

種別	No.	器種	出土地区	数量(個)	状況	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
103	64	須恵器 小型壺	H46 包含層	(口)10.8 (高)2.6	良	黄	灰	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (体下部)ヘラケツリ	不明	
103	65	須恵器 壺	J46 包含層	(口)17.1 (高)12.3	良 磨耗少	黄	灰	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (体下部)回転ヘラケツリ	40%	
104	1	須恵器 壺	F52 包含層	(口)23.9 (高)17.2	良 今令程 磨耗多	灰	灰	(口～底)横ナデ (体)あて具板	(口～底)横ナデ (体)タタキ	不明	
104	2	須恵器 壺	G52 包含層	(口)22.3 (高)17.2	良 磨耗少	灰	灰白	(口～底)回転ナデ (体)あて具板	(口～底)回転ナデ→底縁2本 (体)タタキ	不明	
104	3	須恵器 壺	H46 包含層	(口)11.8 (高)34.3	良 磨耗少	灰	灰	(口～底)回転ナデ (体)あて具板	(口～底)回転ナデ (体)タタキ	50%	
104	4	須恵器 大壺	H-1-350 包含層	(口)45.1 (高)45.4	良 磨耗少	灰	灰	(口～底)回転ナデ (体～底)あて具板	(口～底)回転ナデ (体～底)タタキ	40%	
104	5	須恵器 短知瓶	J46 包含層	(口)12.2 (高)16.2	良 磨 磨耗ごく少	灰	灰	(口～底)回転ナデ (体)あて具板	(口～底)回転ナデ (体)タタキ	不明	
104	6	須恵器 短瓶	T36-137 包含層	(高)16.1	良 磨 磨耗少	灰	灰	(体)あて具板	(体)タタキ	不明	
104	7	深鉢	K44 包含層	(口)29.6 (高)11.3	良 今令程 磨耗多	内)橙 (外)黄	(内)横ナデ (外)黄	(口)横ナデ (体)タタキ	(口)横ナデ (体)タタキ	10%	
104	8	羽釜	F57 包含層	(口)18.2 (高)9.2	今令程 不良 磨 磨耗少	黄	黄	(口～底)ハケ	(口)横ナデ (体)ハケナゲ	不明	片丸2
104	9	青磁 壺	F57 包含層	(口)16.4 (高)11.5	良	黄	(内)青黄 (外)黄緑灰	(口～底)ナデ	(口)ナデ	20%	
104	10	土師質土 壺	G60 包含層	(口)11.3 (高)3.1	今令程 良 磨 磨耗少	黄	黄	(口～底)横ナデ	(口～底)横ナデ	90%	
104	11	鉢	C90 包含層	(口)27.2 (高)22.4	良 磨 磨耗ごく少	灰	黄	(口～底)ナデ	(口～底)ナデ	40%	中世遺構出土
105	1	灰輪陶器 壺	F90 包含層	(口)12.8 (底)16.4 (高)12.6	良 磨 磨耗ごく少	灰	灰白	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転糸切り	不明	灰輪
105	2	緑輪陶器 壺	G40 包含層	(口)19.6 (底)17.9 (高)5.3	今令程 磨 磨耗ごく少	黄	オリーブ灰	(体～底)回転ナデ	(体)回転ナデ (底)回転糸切り	40%	
105	3	緑輪陶器 壺	H50 包含層	(口)16.3 (底)15.5 (高)14.2	良 磨 磨耗ごく少	黄	緑	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転糸切り	40%	
105	4	灰輪陶器 壺	G60 包含層	(口)19.8 (底)18.4 (高)13.2	良 磨 磨耗少	灰	灰白	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転糸切り(摩滅)	40%	灰輪
105	5	緑輪陶器 壺	F57 包含層	(口)12.8 (底)16.4 (高)14.9	良 磨 磨耗少	黄	緑	(口～底)回転ナデ	(口～底)回転ナデ (底)回転糸切り	30%	
105	6	緑輪陶器 壺	J50 包含層	(底)15.8 (高)12.8	良 磨 磨耗ごく少	黄	(内)緑 (外)黄黄緑	(体～底)回転ナデ	(体)回転ナデ (底)回転糸切り	30%	
105	7	ハツ 白緑土	F57 包含層	(口)11.7 (高)3.2	良 磨 磨耗少	灰	灰白	(口～底)回転ナデ	(口～底)横ナデ	不明	磨灰
105	8	土師器 肥土器(3)	F52 包含層	(口)15.1 (高)18.4	良 今令程 磨耗多	黄	黄	(体)指図(内、外)、ナデ	(体)指図(内、外)、ナデ	不明	
105	9	肥土 器	1～7-07-38 包含層	(口)12.8 (高)3.1	良 今令程 磨耗多	黄	黄	(体)ナデ、指図(内)	(体)ナデ、指図(内)	不明	灰土東側レンテ

第5章 遺物

種別	No.	器種	出土地区	重量(g)	構成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
105-10	土埴	E32 包含罎		〔長〕19.3 幅〕13.4 高〕13.2	瓦	硬砂粒少	浅黄緑	不明	(K)指ナデ	90%	
105-11	土埴	E68 包含罎		〔長〕17.3 幅〕12.8 高〕12.9	瓦	中々粗砂粒多	橙	不明	(K)指ナデ	80%	
105-12	土埴	L45 包含罎		〔長〕17.2 幅〕14.6 高〕13.9	中々瓦	硬砂粒少	浅黄緑	不明	(K)指ナデ、指ナデ	95%	
105-13	土埴	E39 包含罎		〔長〕15.4 幅〕12.8 高〕11.4	瓦	中々粗砂粒少	浅黄緑	-	(K)ナデ	25%	
105-14	土埴	E36 包含罎		〔長〕16.4 幅〕14.1 高〕13.6	瓦	中々粗砂粒少	濃い橙	不明	(K)指ナデ、指ナデ	100%	
105-15	土埴	C67 包含罎		〔長〕16.3 幅〕14.5 高〕13.9	中々不瓦	中々粗砂粒多	浅黄緑	不明	(K)指ナデ	50%	
105-16	土埴	E69 包含罎		〔長〕15.4 幅〕13.8 高〕13.8	瓦	中々粗砂粒少	橙	不明	(K)指ナデ	90%	
105-17	土製品	H59 包含罎		〔長〕15.9 幅〕14.8 高〕14.7	瓦	中々粗砂粒多	濃い橙	不明	(K)指ナデ	100%	
105-18	西州土製品	包含罎		〔長〕18.8 幅〕18.2 高〕12.5	瓦	硬砂粒多	橙	-	(K)指ナデ	80~90%	

第16表 II区出土ガラス玉計測表

種別No.	地区	出土遺構	種別	直径	厚さ	孔径	(単位:cm)		色調	備考	種別No.	地区	出土遺構	種別	直径	厚さ	孔径	重さ(g)	色調	備考
							重さ(g)	色調												
105-19	A-878	包含罎	小玉	0.500	0.255	0.150	0.0860	オレンジ	磨き付	105-31	084	包含罎	小玉	0.430	0.300	0.160	0.1115	靑色	磨き付	
105-20	A-878	包含罎	小玉	0.465	0.260	0.130	0.0825	オレンジ	磨き付	105-32	281	包含罎	小玉	0.430	0.270	0.130	0.0920	半透明	磨き付	
105-21	A79	包含罎	小玉	0.550	0.300	0.130	0.1240	オレンジ	磨き付	105-33	281	包含罎	小玉	0.430	0.240	0.125	0.0890	半透明	磨き付	
105-22	A79	包含罎	小玉	0.500	0.315	0.130	0.0960	オレンジ	磨き付	105-34	281	包含罎	小玉	0.450	0.320	0.120	0.1200	半透明	磨き付	
105-23	A79	包含罎	小玉	0.500	0.275	0.150	0.0915	オレンジ	磨き付	105-35	281	包含罎	小玉	0.475	0.305	0.140	0.1210	半透明	磨き付	
105-24	A79	包含罎	小玉	0.510	0.280	0.140	0.1010	オレンジ	磨き付	105-36	281	包含罎	小玉	0.440	0.270	0.110	0.1035	半透明	磨き付	
105-25	A79	包含罎	小玉	0.400	0.250	0.130	0.0740	ブルー	磨き付	105-37	281	包含罎	小玉	0.410	0.320	0.150	0.1175	半透明	磨き付	
105-26	282	包含罎	小玉	0.410	0.260	0.130	0.0800	ブルー	磨き付	105-38	—	包含罎	小玉	0.460	0.315	0.110	0.1250	半透明	磨き付	
105-27	281	包含罎	小玉	0.400	0.245	0.140	0.0670	ブルー	磨き付	105-39	—	包含罎	小玉	0.420	0.305	0.115	0.0960	半透明	磨き付	
105-28	—	包含罎	小玉	0.415	0.260	0.120	0.0795	ブルー	磨き付	105-40	880	包含罎	丸玉	0.585	0.580	0.110	0.3260	半透明	磨き付	
105-29	281	包含罎	小玉	0.360	0.270	0.135	0.0580	紫色	磨き付	—	281	包含罎	小玉	0.400	0.270	0.150	0.0760	半透明	磨き付	
105-30	281	包含罎	小玉	0.340	0.190	0.130	0.0390	紫色	磨き付	—	A70-71	土埴96	丸玉	0.580	0.640	0.280	0.4850	半透明		

第6章 まとめ

第1節 各調査区のまとめ〔第4・7～11図〕

1 II区：平成10～12年度調査区

当調査区では、いわゆる平地住居や掘立柱建物・井戸などの生活関連遺構を主に検出した。掘立柱建物や井戸がいずれも小規模で、散漫に分布するのに対し、住居および方形区画はいずれも大規模で、地区の南西部に偏って分布する傾向が見て取れる。

出土遺物の時期的傾向については、遺跡の概要でも記したように、II区全体のそれと特に大差はないが、住居1・2では弥生後期後葉を主体とする土器が顕著に出土した。また、直接出土した事例ではないが、住居1・2の範囲内にあたるZ～C81～84区付近で、管玉の完成品および未製品が集中して検出され、特に未製品は穿孔段階以降のものに偏る傾向が認められた。これらの管玉類はその製作技法から、弥生後期に製作されたものと推定される。

以上の状況から、当調査区は集落内の居住域と判断できる。住居1・2の所属時期は弥生後期後葉と推測され、住居3もそれにほぼ近い時期に属するものと考えられる。

また、住居1・2周辺で管玉類が集中出土し、特に未製品が穿孔段階以降のものに偏っていた事実は、当調査区における玉作り作業が、最終加工段階以降に集約されていた実態をうかがわせる。つまり、当時の集落内で、玉作りの分業化が進んでいた状況が想定され、その場合、住居1・2はいわゆる玉作り工房であり、しかも最終加工段階以降に特化していた可能性が高いものと推測される。

こうした住居の性格に、他の生活遺構の希薄さなども考慮すれば、当調査区は恒常的な居住域ではなく、玉作り工房そのものの性格を付与された、一種の作業区域と結論付けられる。

2 II区：平成13～16年度調査区

1) 調査区の性格

当調査区ではそのほぼ全域にわたって、大小様々な周溝墓がほぼ隙間なく密集している状況を検出した。これら周溝墓は弥生中期後葉、および弥生後期後葉から古墳前期後葉にかけて、ほぼ継続して築造され、墓群を形成したと考えられる。とりわけ規模が大きく、他の周溝墓とは異なる形状の墳丘部を有するSX1（前方後方形）やSX23（円形）、またSX1に匹敵する規模を有し、大型の埋葬施設（土坑174）を有するSX35などは、首長墓である可能性が非常に高い。出土遺物については、土器資料が他の遺構出土資料と比して、質・量とも特に優れており、供献土器と見られる資料も数多く得た。

一方、掘立柱建物や土坑・ピット・溝など、墓とは直接関連しないと見られる遺構も、少数ながら検出しており、墓群以外の利用状況も想定できる。まず、掘立柱建物は局地的な分布（E～I47～52区）を示しており、また、それら建物に隣接する土坑162も、小規模ながら堅穴住居に見られる特徴を備えており、II区全体としても他に類例の見られない遺構である。

土器以外の出土遺物については、弥生中期に属すると見られる管玉製作関連資料が、調査区内に散在する傾向を確認した。これは、少なくとも弥生中期後葉段階において、調査区内や近在に居住域が存在した可能性を示唆するものと言える。

以上の状況から、当調査区は集落内で相応の地位にあった、いわゆる首長層の墓域と判断できる。ただし、一時的あるいは散発的にせよ、周辺に居住域が展開していた状況も同時に考慮すべきである。

2) 遺構

本項では当調査区で検出した主要な遺構について、それぞれの性格や所属時期などについて記す。

SX1 当調査区で主体的な位置を占める周溝墓および周溝墓群については、第3節で考察し、ここでは周溝墓の中でも、特に象徴的な存在であるSX1について記す。

SX1は墳丘部の形態や築造時期から、いわゆる前方後方墳に類する周溝墓と認められる。県内における前方後方墳の確認例は、敦賀市明神山1号墳や若狹町松尾谷古墳などが知られるが、いずれも丘陵上や尾根上に造営されており、中角のような平地で検出されたのは、県内でも初めての事例である。また、近隣他県と比較しても、本県の前方後方墳の基数はごくわずかではかなく、この点においても、SX1は貴重な事例と言える。

古墳の墳丘部の基本形態には、前方後円・前方後方・円・方の4つが挙げられるが、これらの形態の意味するところについては、基本的に当時の社会階層の格差を現出しているという点で、おおむね意見の一致を見ている。つまり、前方後円→前方後方→円・方の順位で、墳丘部の形態に社会的・政治的格差が反映されており、特に前方後円と前方後方は上位階層、すなわち地域における有力者に用いられる形、という解釈である。

この解釈を援用すれば、SX1の持つ首長墓としての「格」は集落内にとどまらず、周辺集落にも影響をおよぼしていた可能性が高い。つまり、SX1は当時の中角集落の地域内における社会的・政治的地位を示す指標として、特に重要な意義を有する首長墓と見るべきである。

掘立柱建物群 掘立柱建物はいずれも比較的限定された範囲(E~I47~52区)に集中している。建物4・5は位置が重複し、建物7・8は重複しないが、位置が非常に近接する。建物4~6・8は形態や規模が近似し、建物4・6・8および建物5・7はそれぞれに方位が近似する。

一般に、位置が重複しない複数の遺構が密集し、その方位が一致もしくは近似する場合、それらがある同時期に意図的に築造された可能性を指摘できる。その意味で、方位は遺構の同時性や志向性のある程度反映するものと見なされ、当調査区の場合は建物4・6・8と建物5・7を、それぞれ築造時期の異なる建物群と捉えることができる。

これら建物群の築造時期については、いずれの建物柱穴からも遺物が得られず、建物の構造も単純で特徴に乏しいため、具体的な解答を得ることは非常に難しい。ただ、建物4・5がともにSX37に後行し、さらにSX37がSX35に後行していることを考慮すれば、2群の築造時期が弥生後期後葉を上限としていることは確かである。

ただし、下限については定かでなく、傾斜面の下方に立地することから推測すれば、下層包層および地山層の流土に埋没した上層遺構¹¹⁾である可能性も指摘できる。まして、これらの建物群と弥生・古墳集落との関連性については、物証のきわめて乏しい現状では、全く不明と言わざるを得ない。

土坑162 いわゆる堅穴住居に類似する遺構である。覆土に炭化物や焼土などが混入し、床面に貼床が施された様子も見受けられるものの、その規模は人間一人がようやく居られる程度の面積で、柱穴は見出せず、出土遺物も乏しい。ただ、本例の場合、実用性に疑問が残る点や周溝墓に近接する点を踏まえるならば、居住施設でなく、例えば埋葬儀礼に関わる祭祀施設と仮定することも可能と思える。

記にも記されるように、死者を埋葬する前の一定期間に祭祀をおこなう⁶⁰⁾殯の風習は、かなり古くから存在したと言われている。また、殯の際に遺体を仮に安置する、あるいは遺族が喪に服する目的で、墓の近くに作る一時的な施設、すなわち「喪屋⁶¹⁾」についても、具体的な遺構・遺物の確認事例は決して

多くはないが、その存在自体は広く認知されている。

本遺跡では供献土器と見られる資料も確認しており、埋葬に伴う何らかの祭祀が存在したことに、疑問の余地はない。さらに、土坑162の近接するS X 35は、前述のとおり首長墓と推測され、埋葬にあたっては、その地位相応の祭祀が執りおこなわれたことも想像に難くはない。その意味では、土坑162がS X 35に伴う喪屋であった可能性は、十分に想定し得るものと言える。

ただし、喪屋という施設の性格上、儀礼や祭祀の痕跡が認められなければならないが⁽²⁾、土坑162の場合、竪穴内部で火を扱った様子がかがえるのみで、具体的な物証はほぼ皆無に等しい。県内ではかに類例も見られないことから、現状でこれ以上の推論は難しいが、土坑162が祭祀遺構である可能性については、今後の資料の増加を期待しつつ、引き続き注目していきたい。

3 III区

遺構・遺物内容から見て、当調査区は9～10世紀代の居住域と判断される。同遺跡の同層位調査でありながら、II区下層とは主体時期も性格も根本的に異なり、むしろII区上層に近い内容である。ただ、II区下層でもII区上層に類する内容の遺物が検出されており、両区の内容は全く無関係ではない。

広大かつ密集した墓群を検出した平成13～16年度調査区、すなわちII区-③～⑥における上層遺構調査（平成12～16年度調査）では、9～10世紀代に属すると見られる畑の畝跡を広く検出した。この畝跡が特に密集して展開しているG 47～F 55区は、下層遺構で言うところのS X 35南西側斜面一帯に相当し、周溝墓がほとんど分布しない空白地である。逆に、畝跡以外の土地はおしなべて遺構密度が希薄で、後世に積極的な開発が進められた様子は認められない。つまり、墓群の複雑な起伏地形が後世まで残り⁽³⁾、土地活用がある程度制限された可能性が指摘できる。

III区周辺の自然地形は、自然堤防上の非常に狭長な平坦地（第4図）であり、基本的に不便な土地柄であったと考えられる。まして、弥生・古墳時代当時は広大な墓群が近接しており、あえて開発する必然性もなかったと見られる。その後、遅くとも9～10世紀代までには、II区で前述の斜面が流土で埋没して、ある程度平坦で広範な空白地が現出し、例えば畑地として利用された⁽⁴⁾。それがかつての墓群周辺に放置されていた、狭小な平坦地にも間接的に影響がおよび、徐々に開発が進んだ状況が想定できる。今回のIII区の調査成果は、その開発のごく一画を垣間見たものと言い換えられるのではないか。

4 小結

今回の調査成果の要点は、弥生・古墳時代の大規模な周溝墓群の検出である。

県内の平地においてこれほど大規模な墓群を検出した事例は、敦賀市吉河遺跡（きよがわ）や小浜市府中石田遺跡（ふちゅういしだ）など、実にわずかである。また、この種の墓群は、県内ではこれまで丘陵上や尾根上に造営される例が多く知られてきたが、今回の成果は平野部についても同様に、大規模な周溝墓群の遺存を今後想定すべきという新たな展望を示したとも言える。

墓域が集落本体に付随して構築されるものである以上、今回検出した周溝墓群の状況は、当時の集落の情勢を傍証するものであり、集落全体における事象の側面として捉えるべきものである。つまり、弥生中期後葉以来、途中に中絶期間を挟むものの、II区で周溝墓が築造され続け、墓域が構成された事実は、集落内においても首長層が勢力を維持し、集落が拡大を続けていた実態を立証するものと認められる⁽⁵⁾。そして、S X 1が築造された古墳前期前半ごろまでには、集落内あるいは周辺地域内における社会的・政治的格差がより明確化し、中角集落の社会的地位が格段に向上していたと解釈できる。まさにその時期こそ、弥生・古墳時代における中角集落の最盛期なのである。

第2節 弥生・古墳時代の様相〔第4・7図・付図〕

本節ではⅠ区下層調査の成果も考慮しながら、弥生・古墳時代における中角集落の様相を考察する。なお、Ⅲ区については、当該時期の様相が確認できなかったため、考慮から外す。

1 Ⅰ区下層調査成果の概要

遺構は周溝墓2基、掘立柱建物22棟、井戸5基、溝68条、土坑454基、ピット1,014基（溝・土坑・ピットは遺物を検出したもののみ）をそれぞれ検出した。遺物は土器を主として、そのほか石器類や玉作り関連遺物など、総量で105箱を得た。遺物の帰属時期は弥生後期後葉から古墳前期までの時期幅を有し、特に弥生終末期から古墳前期初頭までの土器が主体を占める。

周溝墓は首長層の墓として築造されたと見られるが、これら周溝墓が墓群を構成して拡大する可能性は認められなかった。その一方で、土坑墓と見られる遺構が多数密集した状況で検出されており、一般民衆層の共同墓地として、土坑墓群が形成されていた状況が推測される。

掘立柱建物はいずれも比較的小規模であるが、これらは複数の建物群を構成し、集落の主体時期を中心として、各々時期を違えて変遷していたと考えられる。また、これらの建物にはいわゆる高床式建物（高倉）の特徴に合致する属性を持つものが多く見受けられた。

建物群・墓群ともその形成・存続時期は明確でないが、周溝墓→建物群という先後関係が判明しており、弥生終末期までには墓域に対する建物群の侵入が始まっていた可能性を指摘できる。

2 中角集落の様相

1) 集落の立地

Ⅰ・Ⅱ両区とも、典型的な居住域の様相は見出せず、いわゆる集落本体は検出し得なかった。中角周辺の自然地形（第4図）を見ると、Ⅰ区北東に隣接する自然堤防地形、すなわち現在の中角町の街地に相当する一帯は、両調査区よりはるかに広範であり、居住地としては絶好の立地と考えられる。当時の集落本体もこの一帯を中心として展開していたと見て間違いないだろう¹⁶⁾。

今はのどかな水田地帯である福井平野も、かつては大小の河川が網の目のように流れる、沼地や湿地の多い地勢であった。まして、中角集落の南を流れ、平野を東西に横断する九頭竜川は、古名「崩河」をその名の由来とされるほどの暴れ川であり、有史以来、人々はこの川と苦闘を重ね、辛くも共生を保ってきた。ところが、今回の調査では、上層・下層いずれにも、流砂・泥流など洪水の痕跡の類は一切検出されなかった。この結果はいかにも不自然だが、ここに自然堤防地形が大きく関係している。

「福井平野の自然堤防は、小規模、かつ、断片的に発達するにとどまっている。これは九頭竜川、足羽川などの搬出する土砂の少ないことによるものであり、拡がりに連続性がなく、比高が低いことは平野部における九頭竜川や足羽川の河道の安定していることを物語るものである。（中略）明治18年4月、明治29年の大洪水及び昭和9年の洪水時には、自然堤防地域においても洪水の氾濫をみたが、低平な平野における比較的高線な微高地であるので、湛水深も浅く、湛水期間も短かく、排水も比較的良好であったと考えられる。自然堤防地域は、破堤による洪水や内水型の氾濫に対しても比較的安全な地域をなしてきたのである。このことは、集落の多くがかかる自然堤防上に立地することによっても推知される」（科学技術庁資源調査所 編1968 46・47頁）。

要するに中角集落は、水害に対して比較的安全な地形に営まれた集落なのである。むしろ、沼や湿地の多い平野の中で、比較的乾いた平坦地である自然堤防上に生活の場を求めるとは、当然の帰結であろう。弥生・古墳時代、中世、そして現在に至るまで、連続と中角集落が存続してきたのは、この地勢の

妙が集落の存続と安寧を永く支えてきた証と言える。

あらためて、両区の自然地形（第4図）を見てみると、現在の中角町の街地とⅠ区が接する付近で、自然堤防の南北の幅が急に狭まってから、しばらくは細長く西方へ伸びる。そして、Ⅱ区の西端に至って、さらに幅は狭まり、下流の網戸瀬町・河合勝見町の街地が立地する、これも広範な自然堤防から、ほとんど分離している。つまり、Ⅰ・Ⅱ両区は東西に細長く、かつ東西両方の広範地からもほぼ孤立した地勢を有していることが判る。両区に純然たる居住域の様相が全く見出せないのも、この孤立した地形に起因していると推測される⁽⁷⁾。しかし、この地形も、集落内で居住域と墓域とを区別するという観点から見れば、墓域を営むに最適の土地でもある。両区に墓域が形成されたのは、当時の集落の有様としては、ごく自然な成り行きであったのかも知れない。

2) 様相の比較と検証

Ⅰ・Ⅱ両区の様相を概観すると、居住域の縁辺部および墓域であるという点では共通している。ただ、Ⅰ区では墓域に対する建物群の本格的侵入が想定されるが、Ⅱ区では一時的・散発的な居住域の展開が想定されるものの、大規模な周溝墓群が長期にわたって存続している点から見て、大勢としての墓域の圧倒的優位は揺るがない。また、Ⅰ区の墓域が基本的に土坑墓主体と推測されるのに対し、Ⅱ区の墓域は一貫して周溝墓主体である点など、細部については一々対照的である。

両区の主体時期が共通する弥生後期後葉から古墳前期について、両区の変遷を比較すると、弥生終末期を一つの転換点と捉えられる。まず、弥生終末期以前のⅠ区では土坑墓群が主に形成され、同じくⅡ区では、中期後葉以来の周溝墓群の拡大が継続していたと推測される。つまり、弥生終末期以前は両区とも墓域であるが、これが弥生終末期以後になると、Ⅰ区では複数の建物群が形成され、墓域に対する本格的侵入が推測される一方、Ⅱ区では古墳前期後葉まで周溝墓群の拡大が、以後も変わらず継続する。

Ⅰ区の建物群は住居にせよ倉庫にせよ、本質的には居住域に含むべき性格の施設である。そうした施設が集落本体ではなく、相応規模の土坑墓群の上に築造された背景には、やはり集落本体の事情が関係していたと考えられる。Ⅰ区の墓域において、建物群が本格的に侵入したのは、拡大傾向にあった集落本体の影響が、本体に最も隣接するⅠ区におよんだ結果と言えるのではないかと。

また、平成10～12年度調査区の弥生後期後葉住居群（住居1～3）も、東西を墓群に挟まれた上、集落本体が別の離れた場所にあるとすれば、恒常的かつ純然たる住居ではなく、やはり一時的な工房施設と見なすべきであろう。つまり、平成10～12年度調査区のように、墓群の狭間にある地区は、その時々々の事情に応じて、様々に利用された余地であり、こうした居住域の展開は、元は集落本体の拡大基調に起因していたものと推測される。その意味では、平成13～16年度調査区（56～72区）において、弥生中期後葉段階に想定される居住域も、玉作りに関連した一時的・散発的な施設であった可能性が高い。

そして、SXⅠは中角集落の到達した、一つの頂点を示す首長墓と言える。すなわち、SXⅠが築造された古墳前期前半までには、集落の拡大基調に伴い、周辺地域内における社会的地位もほぼ頂点に達していたと推測される。SXⅠとは、まさに繁栄の象徴として造営された首長墓なのである。

しかし、Ⅰ・Ⅱ区より広範な土地とは言え、あくまで小規模な自然堤防上の話であり、集落本体においても、地勢的な限界はおのずと存在しよう。集落の情勢が頂点に達した時点で、地勢的状况も飽和に近付き、拡大基調も徐々に衰退に向かいつつあったのではないだろうか。SXⅠの後を受けた首長墓が、規模も格（円形）も劣るSX23であり、これを最後に、弥生・古墳時代集落の痕跡が全く途絶えていることは、非常に示唆的に思える。

第3節 周溝墓の時間的位置および幅〔第106～110図〕

Ⅱ区下層調査においては、計41基の周溝墓を検出した。内訳は墳丘部が方形のもの（SX2～22・24～41）を主体とし、前方後方形のもの（SX1）、円形のもの（SX23）がある。方形のものには、次のバリエーションを認めた。四隅切れ（SX11・14・15・17・18・19・25・26・27・30・31）、一隅切れ（SX4・8・33・36）、全周（SX16・20・24）、一辺の中央切れ（SX3・6・7・9・12・35）、二隅切れ（SX39）の各型である。これらの周溝墓について、遺構の切り合い関係による先後関係や出土土器の所属時期から、同時性の検討をおこなった。

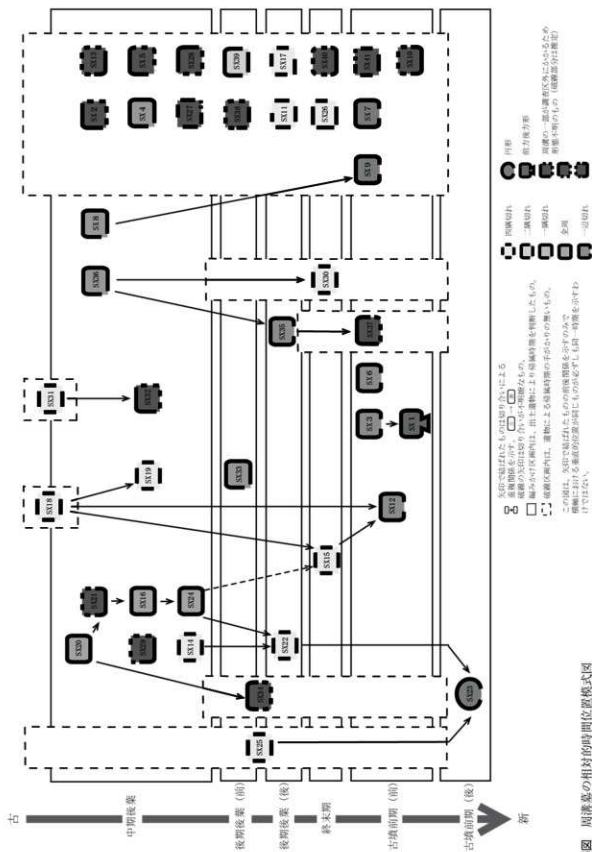
各周溝墓の時間的順序、および一時期に認められる周溝墓のまとまりを、以下の作業により示した。まず、周溝の切り合い関係の把握により、切り合う遺構どうしの先後関係を判断した。また、周溝内出土遺物は、その周溝墓本体に伴うものと仮定し、遺物の先後関係によっても、遺構の同時存在の可否を判断した。

周溝の切り合い関係、および出土土器から判断した一時期の様相を、模式図として示したのが、第108図である。図中の矢印（↓）は切り合い関係を表し（先→後）、矢印で結ばれた遺構どうしは同時に存在しなかったことを示す。先後関係を模式的に図にしたため、横軸については、必ずしも厳密に同時期であることを示さないが、おおむね出土土器によって併行関係を認める。その作業結果として想定される一時期の墓域の景観を、第106・107図に示した。また、参考資料として、周溝内出土土器の出土位置とその個体数を、第109・110図に示した。

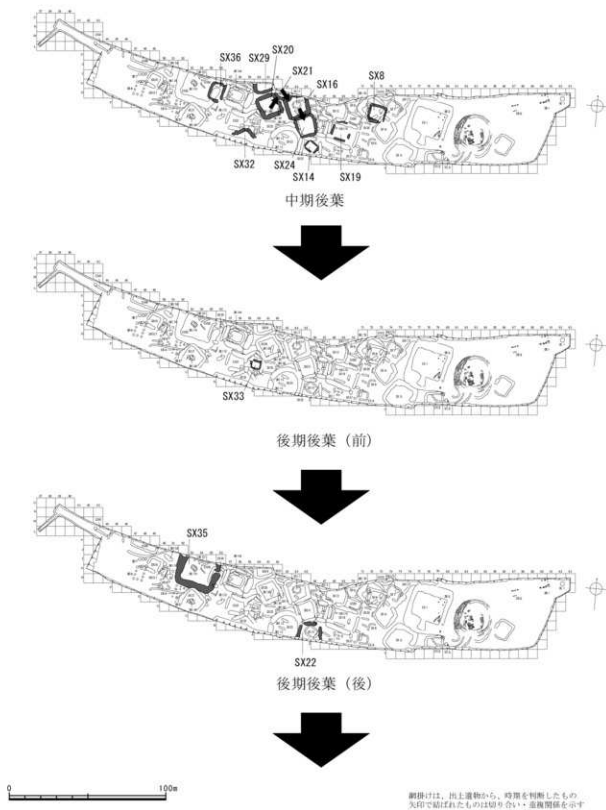
本遺跡においては、出土遺物により時期を判別した周溝墓には、各土器様式と平面形態に一定の傾向が認められる。全周（SX16・20・24）は弥生中期後葉、一隅切れ（SX8・33・36）は弥生中期後葉～後期後葉前半、四隅切れ（SX14・15・18・19・22・25・30・31）は弥生中期後葉～終末期、一辺の中央切れ（SX3・6・12・35）は弥生後期後葉後半～古墳前期前半、前方後方形（SX1）は古墳前期前半、円形（SX23）は古墳前期後半となる。

遺構分布から、47～80区は墓域として意識されていたと判断される。しかし、以上の作業の結果、一時期に認められる周溝墓の少ないことや、周溝墓の切り合いという現象が見られることから、周溝墓の配置において、本遺跡の時間幅を通しての計画性は認めにくい。一方、切り合い関係は有するものの、異なる時期の周溝墓どうしに、周溝部以外（墳丘想定部）の重複の少ないことが指摘できる。つまり、周溝墓の自然埋没が進行しても、完全には平坦にならず、微凸地・微凹地として残存した状況が想定される¹⁸⁾。このことから、先行する周溝墓を避けて、新しい周溝墓を造るという意識が働いていた可能性も考えられる。

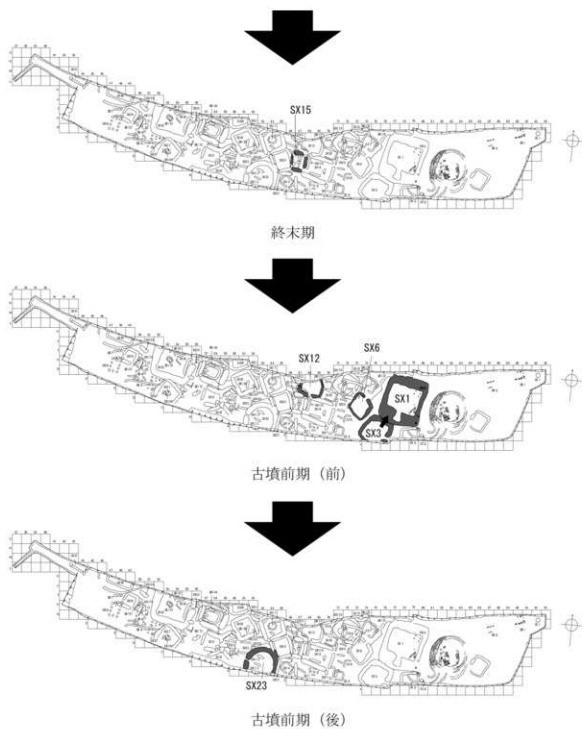
今回の検討は、あくまで本遺跡の調査対象地のみに限定したものであり、上記の傾向は他の遺跡や地域に直ちに適用できるわけではないが、本遺跡における周溝墓の形態や変遷に関する、一つの特徴として留意しておきたい。



第106図 周溝墓の相対的時間位置模式図



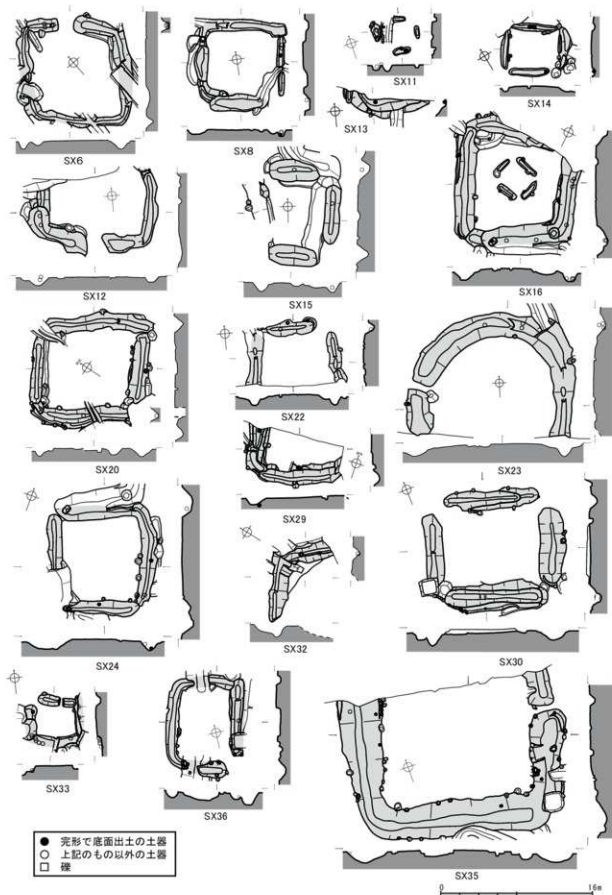
第107図 主要周溝墓変遷図(1) (縮尺1/2,000)



0 100m

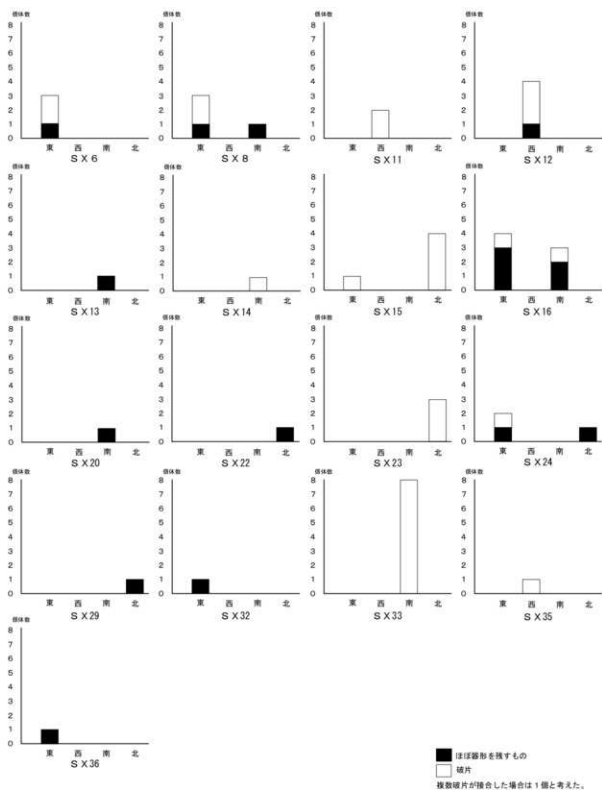
第108図 主要周溝墓変遷図(2) (縮尺1/2,000)

網線は、出土遺物から、時期を判断したものの
矢印で示したものは切り取り・重複箇所を示す



第109図 周溝内遺物出土位置図 (縮尺1/400)

第3節 周溝墓の時間的位置および幅



第110図 周溝内遺物出土位置別個体数グラフ

註

- 1 流土による上層遺構埋没の可能性については、第5章第5節1を参照されたい。
- 2 「考古学上でこの遺構と確認する場合、喪屋そのものあったことを示す確実な建築遺構はもとより供膳や火の痕跡などを明らかにしなければならない」（斎藤1998 428頁）。一例として、深澤敦仁氏は群馬県多田山古墳群六九号墓穴について、機能・焼失・埋没までの過程が短期間であること、柱穴・カマド・貯蔵穴などの屋内施設が全く存在しないこと、床面に散置された白色粘土の存在と粘土直上の炭化材の出土、盾溝金具や鈎状鉄製品の出土といった周辺状況から、「葬送に関する一時的小屋」すなわち「喪屋」である可能性を指摘している（深澤2007）。
- 3 例えば、SX1については、上層調査段階でその墳丘部および周溝の痕跡を検出している（「中角遺跡3」）。
- 4 前述の掘立建物群はこの畑跡と位置が重複しており、層位的には畑跡に先行すると考えられる。しかし、第5章第5節で指摘したように、自然流土に加えて、畑の耕作など人為的な影響も作用して、遺物の混交が進んでいたと考えられ、ゆえに両遺構の時期差を具体的に求めるのは、非常に困難である。
- 5 中絶期間のうちに、集落の構成集団の代替や、あるいは集落自体が全く別物になった可能性も想定できるが、ここでは同じ墓域を利用・維持し続けたという意味合いで、同一集落と捉えておく。
- 6 第2章註1で指摘したように、第4図で現在の中角町の街地の大半が、中角遺跡の範囲から外れているのは、遺跡範囲が今回の現地調査以前に判定されたためである。筆者は今回の調査成果を総合して、現在の街地が弥生・古墳時代における中角集落の中心地と考えられているが、この推測を実際の遺跡範囲に反映させるか否かについては、当然ながら、なお一層の慎重な検討が必要である。
- 7 この点については、中世においても同様の傾向が見取れる（「中角遺跡3」）。
- 8 隈凹地のある風景については、建石徹のある風景に負うところが大きい（建石2000）。埋没過程の溝による凹地が存在する一時期の景観の復元はきわめて困難である。なお、本遺跡の周溝墓で、後世まで隈凹地として残存した一例がSX1である（本章註3）。

参考文献

第1・2節

- 科学技術庁資源調査所 編 1968 「第2章 福井平野の地形と洪水」 「水害地域に関する調査第7部 九頭竜川流域の水害地形と土地利用」 科学技術庁資源調査所資料 第3号
- 斎藤忠 1998 「日本考古学用語辞典」 学生社
- 都出比呂志 1992 「2-1 墳丘の型式」 「古墳時代の研究7 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造」 雄山閣
- 深澤敦仁 2007 「「喪屋」の可能性をもつ墓穴 - 群馬県・多田山古墳群六九号墓穴の検討 -」 「考古学に学ぶ(Ⅲ) 森浩一先生追悼記念論集」 同志社大学考古学シリーズⅨ 松森和人 編
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2007 「府中石田遺跡」 「年報21 平成17年度」
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 「府中石田遺跡」 「年報22 平成18年度」
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 「府中石田遺跡」 「年報23 平成19年度」
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 「坂ノ下遺跡群」 一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書 第1集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008 「中角遺跡1 -Ⅰ区上層編-」 福井県埋蔵文化財調査報告 第100集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 「中角遺跡2 -Ⅰ区下層編-」 福井県埋蔵文化財調査報告 第105集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2010 「中角遺跡3 -Ⅱ・Ⅲ区上層編-」 福井県埋蔵文化財調査報告 第110集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2009 「吉河遺跡」 一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書 第2集
- 若狭三方縄文博物館 2006 「松尾谷古墳 - 前方後墳の発掘調査 -」

第3節

- 加藤晋平・岡崎里美 1987 「Ⅱ 考古学の立場からみた土壌学」 「土壌学と考古学」 博友社
- 立花実 2005 「方形周溝墓の埋まり方と祭祀の段階 - 関東の方形周溝墓研究の再確認 -」 「季刊考古学」 第92号 雄山閣
- 立花実 2007 「南関東地方における方形周溝墓研究の現状」 「周溝墓研究の東西交流」 南山大学人類学博物館オープンサーチセンター 弥生部会シンポジウム資料
- 建石徹・松田隆夫 1998 「凹地のある風景、凸地のある風景 - 遺構覆土の鉱物分析・テフラ分析の結果から -」 「Archaeo-Clio」 第1号 東京学芸大学考古学研究室
- 春成秀嗣 1985 「弥生時代畿内の親族構成」 「国立歴史民俗博物館研究報告第5集」 国立歴史民俗博物館

写 真 图 版



(1) 遺跡遠景 (東より)



(2) 遺跡遠景 (南より)



(1) II区-①・②全景 (南より)



(2) II区-③全景 (南より)



(1) II区-④全景 (南西より)



(2) II区-⑤全景 (南西より)

図版第四
遺跡



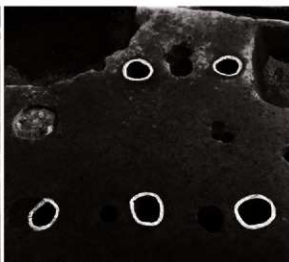
(1) II区-⑥全景 (左:南東より 右:北西より)



(2) III区全景 (南西より)



(1) 建物1 (南西より)



(2) 建物2 (北西より)



(3) 井戸1 (西より)



(4) 井戸1 板出土状況 (西より)



(5) 方形区画 (南西より)



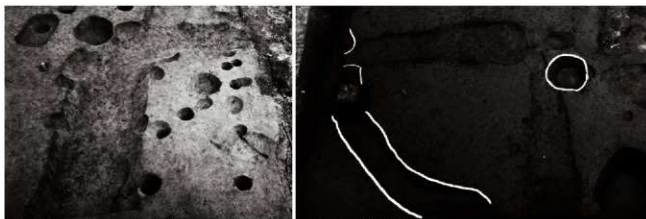
(1) 住居1・2 (南より)



(2) 住居3 (南より)



(1) SX1 (南より)



(2) SX2 (南より 左:平成13・14年度調査 右:平成11・12年度調査)



(3) SX3 (南東より)



(1) SX 4 (北より)



(2) SX 5 (西より)



(3) SX 6 (北東より)



(4) SX 6 土器出土状況
(南東より)



(5) SX 7 (南西より)



(6) 土坑 175 土器出土状況 (北より)

第 20 図 0-0

第 21 図 0-0



(1) SX 8 (北より)



(2) SX 6・8土器出土状況(東より)

第22図F-F



(3) SX 8土器出土状況(北より)

第22図E-E



(4) SX 9 (北西より)



(5) SX 11 (南より)



(6) SX 13土器出土状況(北より)

第27図SX13B-B'



(1) S X12 (北より)



(2) S X12 出土土器 (北より)



(3) S X14 (南西より)



(4) S X14 土器出土状況 (北西より)



(5) S X15 (北より)



(6) S X15 出土土器 (西より)

第26図E-E

第27図SX14E-E

第28図F-F



(1) SX16 (北西より)



(2) SX17 (北より)



(3) 土坑 125 土器出土状況 (西より)

第31図H出



(4) SX16 土器出土状況 (南より)

第31図I-1'



第31図I-1'-1・2



第31図I-1'-3

(5) SX16 出土土器 (左: 東より、右: 北より)



(1) SX16出土土器(北西より)



(2) SX16(右2点)土器出土状況(北東より)



第31図K-K'



第31図J-J'

(3) SX16出土土器
(上:南東より、下:北東より)



(4) SX19(北より)



(5) SX18(北より)



(1) SX20 (北東より) 左:平成13・14年度調査 右:平成15年度調査



第34図 E-E'



第34図 E-E'



第34図 O-O'

(2) SX20 土器出土状況 (北西より)

(3) SX20 出土土器 (北西より)

(4) 土坑126土器出土状況 (北西より)



(5) SX21 (北より)



第37図 E-E'

(6) SX22 出土土器 (東より)



(7) SX22 (南より)



(1) S X23 (南より)



第 39 図 C-C

(2) S X23 土器出土状況(西より)



第 39 図 E-E

(3) S X23 土器出土状況(西より)



第 39 図 B-B

(4) 溝 100 (土坑 113) 出土土器(南東より)



第 39 図 D-D' 1-2

(5) 溝 100 土器出土状況(東より)



第 39 図 D-D' 3~8

(6) 溝 100 土器出土状況(東より)



第 39 図 D-D' 3~8

(7) 溝 100 出土土器(西より)



(1) S X24 (北より)



(2) S X24 土器出土状況 (左:北東より)

第42図E-E'



(3) S X24出土土器 (北東より)

第42図E-E'



(4) S X24 土器出土状況 (西より)

第42図F-F'



(5) S X24 出土土器 (北西より)

第42図F-F'



(6) S X24 土器出土状況 (南より)

第42図G-G'



(7) S X24 出土土器 (東より)

第42図G-G'



(8) S X25 (南より)



(9) S X26 (南より)



(1) S X 27 (北より)



(2) S X 28 (北東より)



(3) S X 29 (北より)



(6) S X 29 出土土器 (南より)



(4) S X 29 土器出土状況 (南より)



(7) S X 32 土器出土状況 (北西より)



(5) S X 32 (北東より)



(8) S X 32 出土土器 (北西より)



(1) S X 30 (西より)



(2) S X 31 (東より)



(4) S X 33 (東より：平成15年度調査)



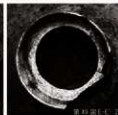
(5) S X 33 土器出土状況(北西より)



(3) S X 34 (西より：平成15年度調査)



(6) S X 33 土器出土状況(上：西より)・
出土土器(下左：北より、下右：西より)





(1) S X35 (南より)



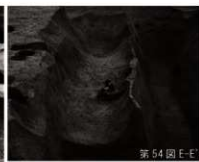
(2) S X38・土坑 151 (北西より)



(3) 土坑 174 (南東より)



(4) S X36 (西より)



第 54 図 F-1'



第 54 図 F-2'

(5) S X36 土器出土状況
(上：南より)・
出土土器 (下：西より)



(1) SX37 (北西より)



(2) SX40・溝133 (南より)



(3) SX39 (北より)



(4) SX41 (南より)



(1) 建物4 (北より)



(2) 建物5 (北より)



(3) 建物6 (北より)



(4) 建物7 (東より)



(5) 建物8 (北より)



(6) 土坑162 (北より)



(1) 住居1 (東より)



(2) Ⅲ区完掘状況 (南西より)



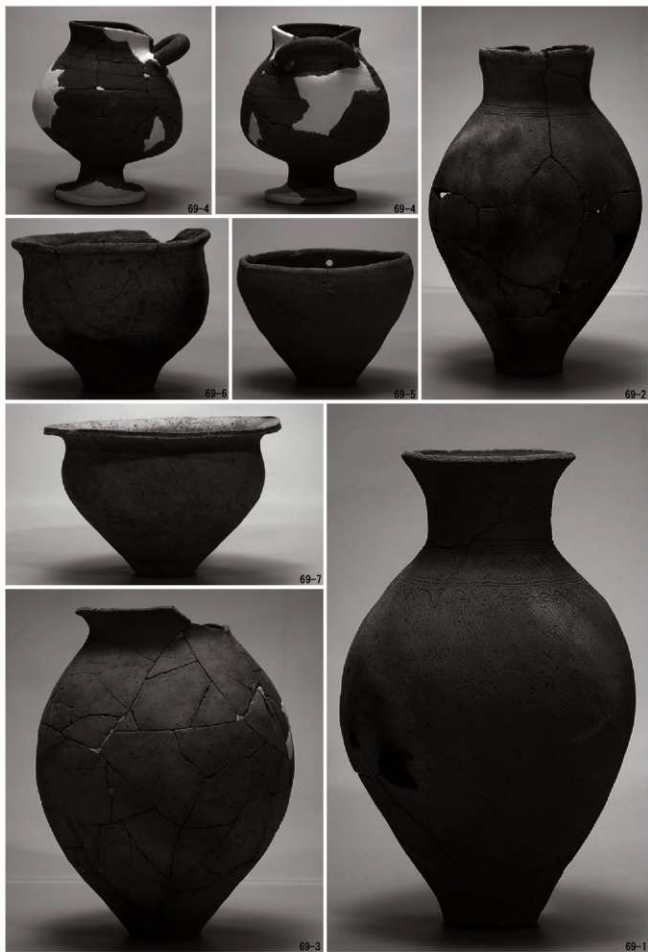
(1) 住居1・2出土土器

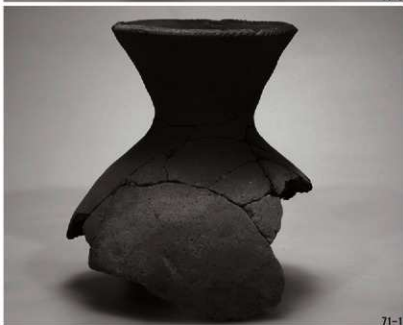


(2) SX1・6・8・9出土土器



S X11 ~ 15・22 出土土器





S X 20 · 23 · 24 · 38 (土坑 151) 出土土器

図版第二六 遺物(Ⅱ区 土器)





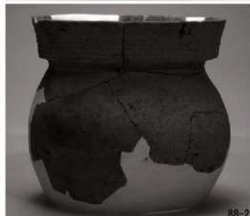
溝 100 出土土器



溝・土坑・ピット出土土器



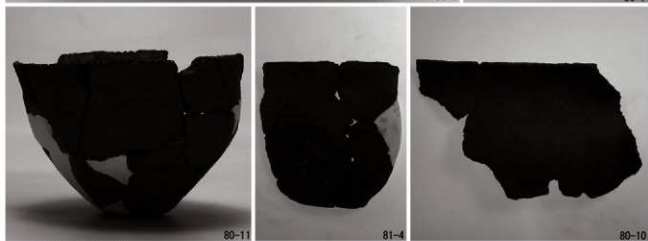
図版第三〇 遺物(Ⅱ区 土器)



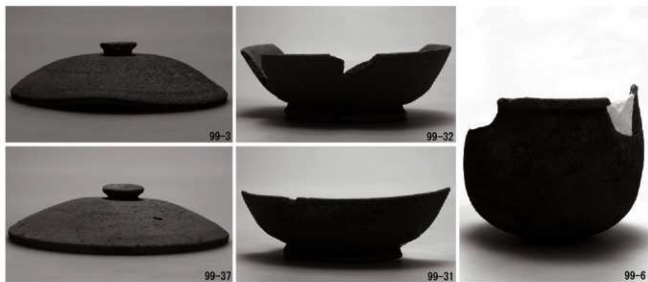


包含層出土土器

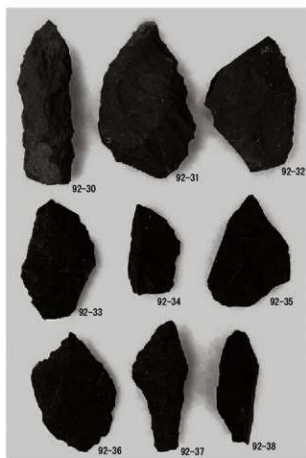
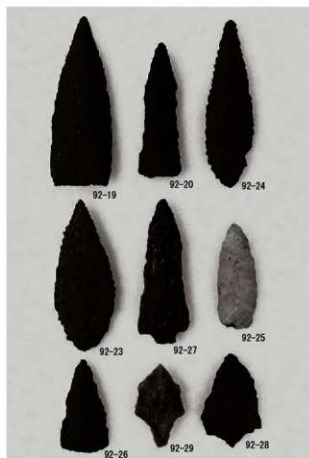
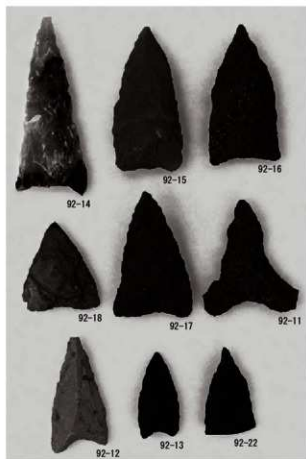
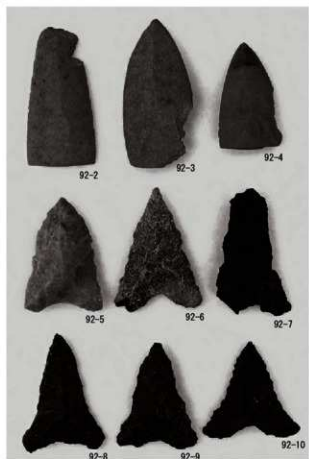
図版第三二 遺物(Ⅱ・Ⅲ区 土器)



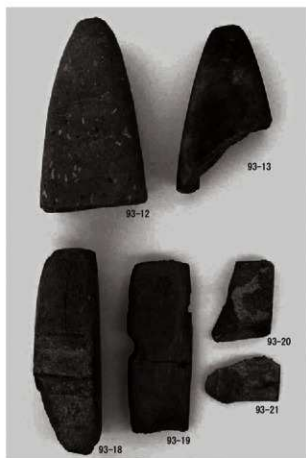
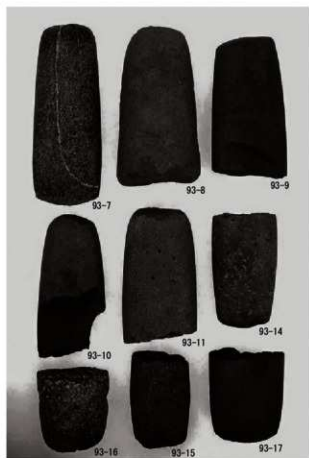
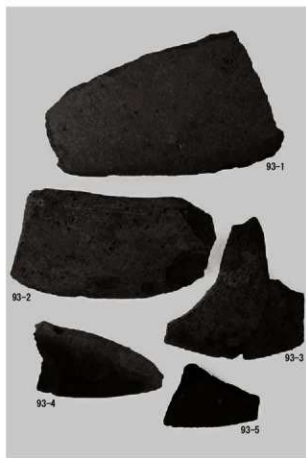
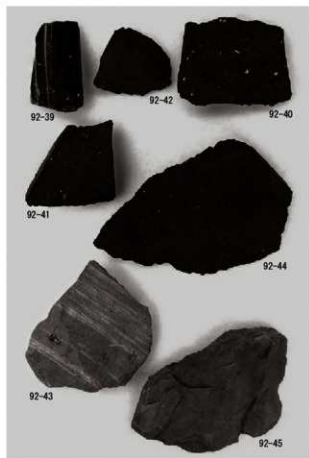
(1) Ⅱ区出土縄文土器

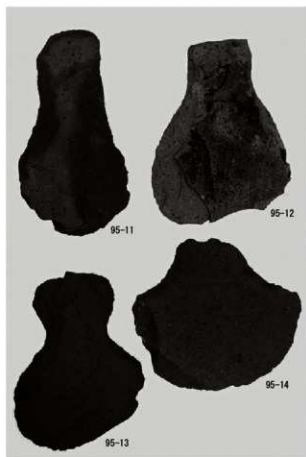
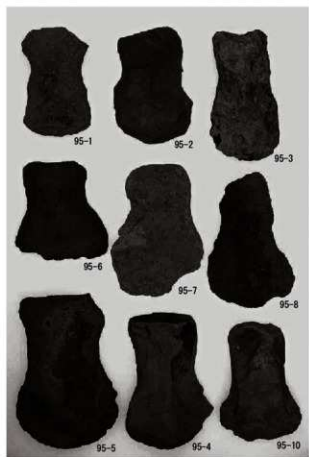
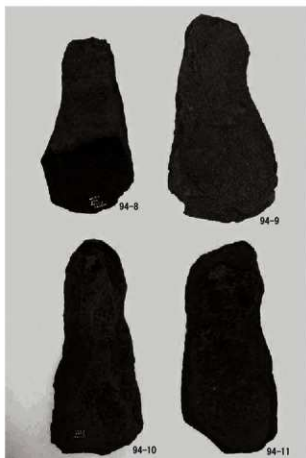
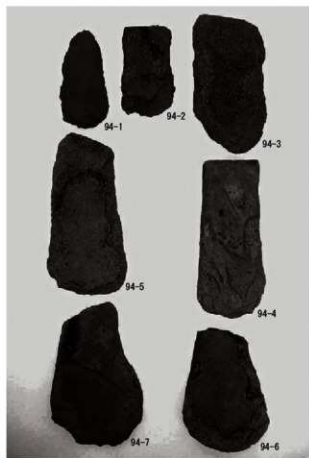


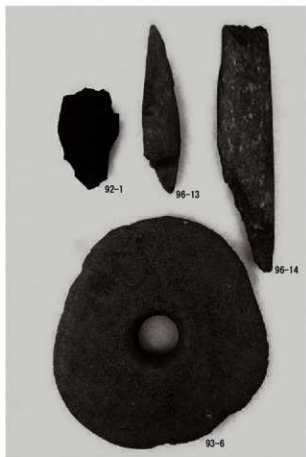
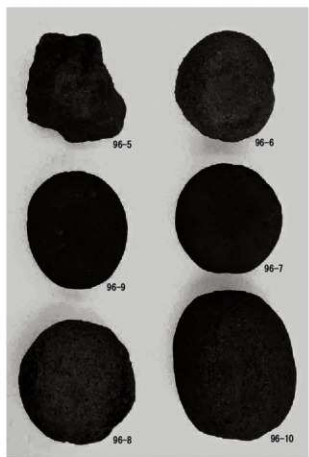
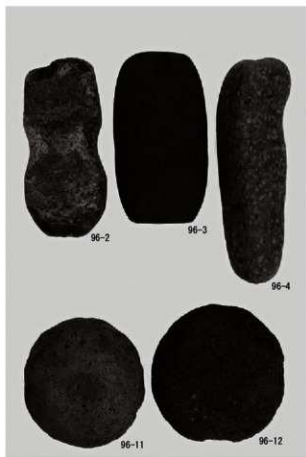
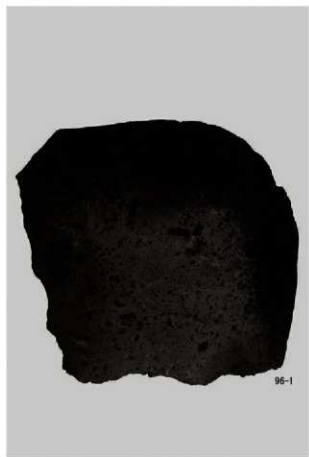
(2) Ⅲ区出土土器



図版第三四 遺物 石器









(1) 翡翠原石・緑色凝灰岩石核



(2) 管玉未製品（荒削品・形削品）



(3) 管玉未製品（角柱状品）



(4) 管玉・管玉未製品（穿孔中品）



(5) 包含層出土白玉



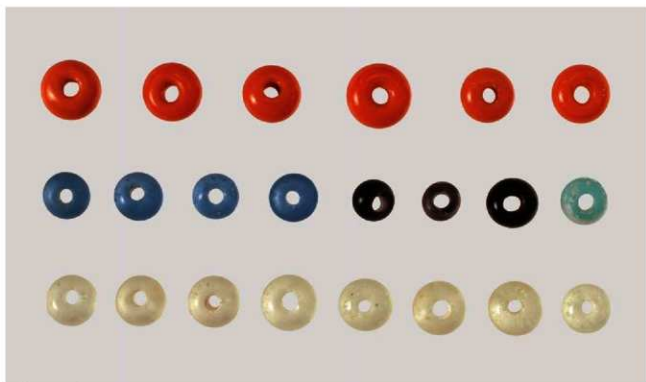
(6) 勾玉



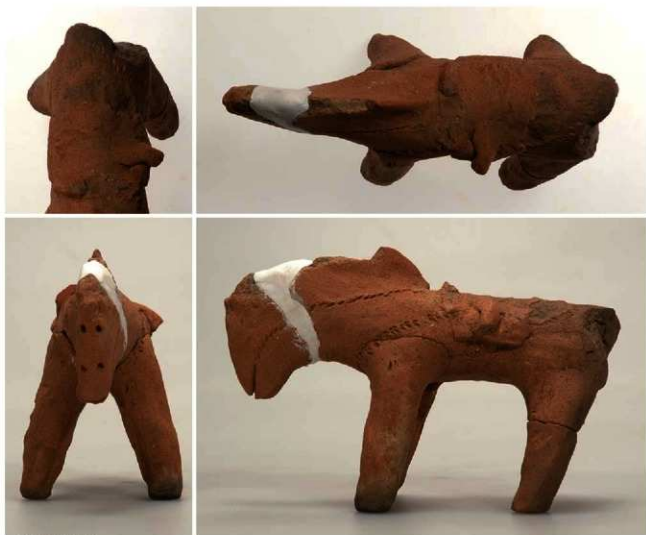
(7) 土坑 139 出土玉類



(8) 玉製作工具（施溝具・石製穿孔具）



(1) ガラス小玉



(2) 馬形土製品

報告書抄録

ふりがな	なかつのいせき							
書名	中角遺跡4							
副書名	Ⅱ・Ⅲ区下層編							
巻次								
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第117集							
編著者名	中森敏晴 白川綾 富山正明 山本孝一 田中勝之 杉山拓己							
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 Tel: 0776-41-3644							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかつのいせき 中角遺跡 (Ⅱ・Ⅲ区下層)	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 なかつのちよう 中角町	18201	01076	36° 06° 03°	136° 12° 18°	19990317 ～ 20041208	7,884㎡	九頭竜川等 河川改修事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中角遺跡 (Ⅱ・Ⅲ区下層)	集落	弥生中期、 弥生後期～ 古墳前期	周溝墓 41基 住居 3棟 (推定) 掘立柱建物 8棟 溝・土坑・ピット多数	土器：弥生土器 石器：石鏃、石斧など 玉類：管玉・勾玉など		当該時期の周溝墓群の 検出事例としては、越前 地域で最大・最多。また、 前方後方墳の平地での 検出例は本県初。		
要約	<p>中角遺跡は奈良・平安時代および中世（上層）と、弥生・古墳時代（下層）の2つの遺構面を持つ。遺跡内に所在する字多知地籍は、中世城館跡「中角館跡」に比定される。</p> <p>Ⅱ区下層調査では、弥生中期後葉および弥生後期後葉から古墳前期後葉にかけて築造された、周溝墓による墓群を検出した。この墓群は中角集落における首長層の墓域と考えられ、前方後方形や円形など首長墓と目される墓も検出した。弥生・古墳時代の周溝墓群としては、越前地域で最大・最多であり、いわゆる前方後方墳の平地での検出例としては本県初の事例である。</p>							

福井県埋蔵文化財調査報告 第117集

中角遺跡 4

— Ⅱ・Ⅲ区下層編 —

— 九頭竜川等河川改修事業に伴う調査 —

平成23年3月16日 印刷

平成23年3月31日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10

印刷 ジェイエイプリント株式会社

〒910-0842 福井県福井市開発5丁目204番地
